

シェールガスのアジア市場進出に対する韓国電力産業の対応

Response of Korea Electric Power Industry to Expansion of Shale Gas into Asia Market

経済学研究科経済学専攻博士後期課程在学

徐 明 玉

Seo MyungOk

I. はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災と原子力発電所の事故により、「脱原発」への要請が国の内外で高まってきた。原発の停止に伴う電力不足の問題を解決するために、最も注目を集めているのが、LNG（液化天然ガス）による火力発電である。天然ガスは温室効果ガスであるCO₂（二酸化炭素）の排出量が、石炭や石油に比べて少なく、硫酸分などの有害物質を除去して利用されているので、比較的環境負荷の少ないエネルギーである。

ここ数年、非在来型天然ガスの開発が米国やカナダで急速に行なわれている。非在来型天然ガスとは、①シェールガス（薄片状にはがれやすい性質をもつ頁岩に含まれている天然ガス）、②タイトサンドガス（浸透性の低い砂岩に含まれている天然ガス）、③炭層メタン（石炭に吸着した形で存在し、石炭層に含まれている天然ガス）などである。この非在来型天然ガスの可採埋蔵量に関して、Holditch（2006）は驚くべきデータを発表した。表1は、世界の地域別の非在来型ガスの埋蔵量を示している。ただし、原文では単位を兆立方フィートで示しているが、ここではメートル法に修正している。シェールガスが456兆m³、タイトサンドガスが210兆m³、炭層メタンが256兆m³であり、世界の非在来型ガスの埋蔵量は922兆m³ということになる。BPのStatistical Review of World Energy 2012によると、2011年の在来型天然ガスの埋蔵量は208兆m³であるから、非在来型天然ガスと合わせると、1130兆m³となる。2011年の世界の天然ガス生産量は年間約3.28兆m³であったことから、在来型天然ガスの可採年数は約63年であり、非在来型天然ガスの可採年数は約281年ということになる。したがって、天然ガス全体の可採年数は約344年となる。特に、北米地域の非在来型天然ガスの埋蔵量は233兆m³と推定され、世界の在来型天然ガスの埋蔵量を上回っている。また、非在来型ガスの中でもシェールガスの埋蔵量は多く、北米地域では実際に開発および生産が行なわれてきた。

表1. 世界の非在来型天然ガスの推定量

地域	(兆m ³)			
	炭層メタン	シェールガス	タイトサンドガス	計
北米	85	109	39	233
中南米	1	60	37	98
西欧州	4	14	10	29
中央・東部欧州	3	1	2	7
旧ソ連	112	18	26	155
中東・北アフリカ	0	72	23	95
サハラ以南アフリカ	1	8	22	31
中央アジア・中国	34	100	10	144
太平洋 (OECD)	13	65	20	99
他のアジア・太平洋	0	9	16	24
南アジア	1	0	6	7
世界	256	456	210	922

(出所) Holditch (2006), 「Tight Gas Sands」

そのシェールガスの供給の増加は、世界的な LNG 価格の値下げの安定化に寄与するかもしれない。また、こうしたシェールガスの開発の進展は、市場の国際化を通じて LNG 契約の価格フォーミュラにも変化をもたらすかもしれない。これらの変化は、天然ガス生産者にとって、競争の場を地域から世界へと規模を変えていくことになる。さらに、全面的に輸入に依存してきた東アジア地域(日本・韓国・台湾)は、これまで東南アジアやオーストラリアからのアジア地域内貿易が中心であったが、最近では地域外からの輸入のシェアも徐々に増えている。

これらの動向から、本稿では、(1) 非在来型天然ガスであるシェールガス生産の開発の進展と増加がアジア地域の LNG 市場の構造をどのように変化させていくのか、(2) 東アジア地域における長期契約ガス価格の形成に構造変化をもたらすのか、さらに、(3) 石油の需要から LNG の需要へのシフトが大幅に行われるのか、(4) シェールガスの進出に伴い、韓国電力産業にどのような影響を与えるのか、これらの4点に関して考察する。

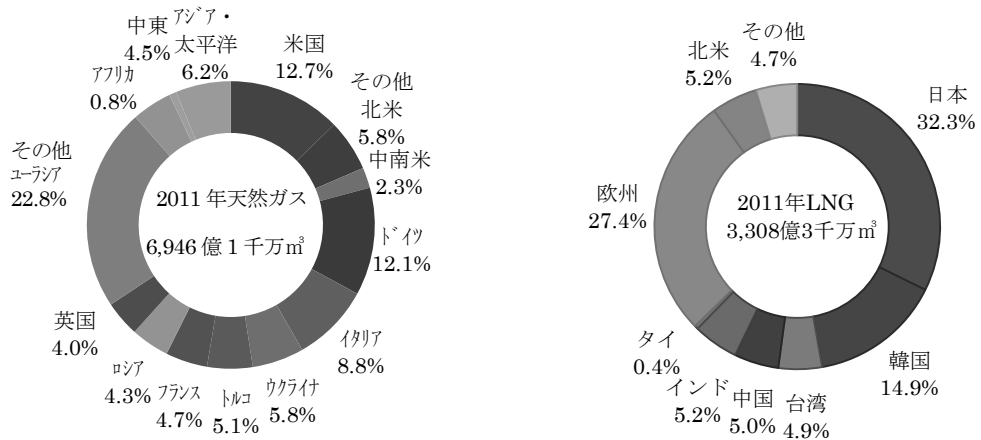
II. 世界の天然ガス市場

世界の天然ガス市場は、北米、欧州、アジアと大きく3地域に分けられる。2011年の世界の天然ガスの総輸入量は1兆254億4千万m³となる。図1は、パイプラインとLNGによる輸入とに分けて国あるいは地域別輸入割合を示している。天然ガスは、他の化石燃料である石油や石炭と比べて輸送や貯蔵が困難であるため、陸域ではパイプライン輸送を行い、海外へは天然ガスの主成分であるメタンをマイナス162℃で液化することによって貯蔵を可能にし、専用のLNGタンカーで輸送される。パイプラインによる世界の天然ガスの輸入量は6,946億1千万m³であり、国別輸入割合が大きい順に、米国12.78%、ドイツ12.1%、イタリア8.8%、ウクライナ5.8%、トルコ5.1%、フランス4.7%、ロシア4.3%、英国4.0%、カナダ3.8%、ベルギー3.3%となる。また、地域別輸入割合が大きい順は、

シェールガスのアジア市場進出に対する韓国電力産業の対応

欧州 53.2%、北米 18.6%、旧ソ連 14.4%、アジア・太平洋 6.2%、中東 4.5%、中南米 2.3%、アフリカ 0.8%となる。世界のLNG輸入量は 3,308 億 3 千万m³ であり、国別輸入割合が大きい順に、日本 32.3%、韓国 14.9%、英国 7.6%、スペイン 7.3%、インド 5.2%、中国 5.0%、台湾 4.9%、フランス 4.4%、米国 3.0%、イタリア 2.6%となっている。また、地域別輸入割合が大きい順は、アジア 62.7%、欧州 27.4%、北米 5.2%、中南米 3.3%、中東 1.4%となる。

図 1. 天然ガス（パイプライン）および LNG の国・地域別輸入割合



(出所) BP, STATISTICAL REVIEW OF WORLD ENERGY 2012 より作成

アフリカ地域にはパイプラインによる輸入国は僅かに存在するが、LNG 輸入国は存在しない。また、中南米地域や中東地域はパイプラインによる輸入量も LNG 輸入量も比較的小さいので、北米、欧州、アジア地域を天然ガスの 3 大市場と呼んでいる。これまでパイプラインによる輸入量も LNG 輸入量も右肩上がりに増加してきた。2002 年における天然ガス全体の貿易量に占めるパイプラインと LNG の割合は、パイプラインが 74.2%、LNG25.8%であったのに対して、2011 年にはパイプライン 67.7%、LNG32.3%となっており、この 10 年間に LNG の輸入割合が大きくなっている。このような傾向は、LNG 市場が地域内市場から国際市場に進展してきていることを物語っている。

まず、北米の LNG 市場では、米国が天然ガスの生産において 2009 年以来ロシアを抜いて世界 1 位になった。米国の最近の天然ガス生産の拡大は、「シェールガス革命」と呼ばれているシェールガス開発の進展を反映したものである。2011 年の生産量と消費量はそれぞれ 6,513 億 m³ と 6,901 億 m³ であり、不足量はパイプラインと LNG で輸入している。この不足量も年々減少してきているので、近い将来に生産余剰が発生し、大幅な輸出への転換が行なわれる可能性が高い。米国エネルギー省は 2012 年 1 月に、米国が 2016 年には LNG の純輸出国になるという予測を発表した。特に、シェール

ガスの生産の輸出先は、欧州・東アジアになることから東アジアの LNG 市場における影響も予想される。増産を背景に米国の天然ガスの市場価格は過去 2 年間で半値以下に急落しており、2012 年 5 月においては 100 万 BTU（英国熱量単位）当たり 2 ドル前後であった。その当時の東アジアの LNG 輸入価格が 16～18 ドルであったことと比べてもかなり安いと言える。

米国の天然ガス価格の決定方式であるが、米国には競争的なガス市場が存在しているため、天然ガス価格は一般的にヘンリー・ハブ（Henry Hub）の市場価格とリンクしている。ヘンリー・ハブとは 17 系統のパイプラインが交差しているルイジアナ州にあるガス集積地の名前であり、そこで天然ガスの売買が行われている。米国全土で行われているガス価格は、ヘンリー・ハブ価格との格差で表示される。ヘンリー・ハブ価格との格差はその時の需要パターンや最終需要者までの輸送距離の遠近によるものが多い。米国への LNG 輸出においては、スポット販売、及び長期契約に基づく販売の 2 種類があるが、LNG はパイプラインガスと競合しているため、LNG 価格はヘンリー・ハブ価格にリンクしている。

次に、欧州の LNG 市場では、パイプラインによる天然ガス輸入が全輸入量の約 84%と極めて高く、LNG は補助的な利用に留まっている。欧州内消費地へはロシア、アルジェリア、オランダ、ノルウェーなどから大型パイプラインにより天然ガスが供給され、LNG は中東やアフリカからの海上輸送といった多様な供給源により市場が形成されている。ただし、パイプラインネットワークがまだ不十分であることから、北米ほどの競争的な統一市場には至っていない。

欧州の天然ガス価格の決定方式は、天然ガスが原油や石油製品と競合しているため、天然ガス価格は石油製品の価格水準を尺度として決められているので、石油価格連動方式ということになる。LNG もヨーロッパ全土に網羅されているパイプラインによる天然ガスと競合しなければならないので、LNG 価格も石油価格連動方式となる。また、欧州にはロンドンの Henry Energy Ltd.社が発表する天然ガス価格の指標である NBP（National Balancing Point）がある。欧州では LNG・天然ガスのスポット価格と石油価格連動方式の長期契約価格の乖離が大きく広がり、需要家を中心に石油価格連動方式の廃止を求める声が起こっている。

Ⅲ. アジアの LNG 市場

2015 年のアジア地域の LNG 輸入量は 2,386 億万 m³ であり、国別輸入割合を見ると、日本 34.9%、韓国 12.9%、中国 7.7%、インド 6.4%、台湾 5.5%、タイ 1.1%である。アジア市場の輸入割合が 70.5%、欧州市場の割合が 16.3%、北米市場は 3.0%であるからアジア LNG 市場は最も高い割合を占めている。アジア LNG 市場の中では、東アジアの日本、韓国、台湾が主要輸入国であるが、これらに加えて、中国やインドの LNG 輸入量が増加傾向にある。さらにシンガポールやタイなど、他のアジア諸国でも今後大きく需要が伸びると予想されている。

主要輸入国である日本と韓国はともに自国でのガス産出量が乏しいことから、東南アジア、オース

トラリア、そして中東から LNG を輸入してきた。そのため、高額な輸送設備を必要とし、その投資債務返済に必要なキャッシュフローを確保するため、長期相対契約が主流となっている。つまり、日本、韓国、台湾は、天然ガスの輸入を全て LNG に依存しているため、基本的には長期契約により安定的に LNG を輸入しており、欧米に比べるとスポット取引は少ない。

アジアにおける LNG 輸入価格は、JCC (Japan Crude Cocktail) という日本向け原油の平均 CIF 価格に連動している。天然ガス価格は、原油価格が比較的安定していた 1980 年代後期から 2004 年までは、天然ガス価格も安定していたが、近年では新興国の需要増加などを背景とした原油価格上昇の影響で高騰している。その結果、需要増加が見込まれる新興国では、日本、韓国、台湾のような長期契約に従わないようにしている。

東南アジア市場では、インドネシアやマレーシアは石油および天然ガスの生産・輸出国であったが、LNG 輸入を僅かではあるが開始している。その原因は、坂本 (2012) によると、①電力需要増加に伴うガス消費量の増加、②ガス生産量の伸び悩みであり、補助金を使う安価なエネルギー価格設定である。

まず、インドネシアは、LNG 輸出量を大幅に減少してガスを国内市場向けに優先する政策をとっている。インドネシア国内市場で供給されるガスの価格は百万 BTU あたり 2 ドルから 6 ドルで、LNG 輸出価格 (百万 BTU あたり 13 ドルから 18 ドル) と比べると極めて安い価格であることがわかる。それ故に、2010 年から 2011 年に LNG 輸出契約数を大幅に削減している。次に、マレーシアも 2012 年に LNG 輸入と国内市場での消費を開始した。LNG の輸入は、人口と経済活動が集中するマレー半島部において、増加する電力需要に対して、主要な発電燃料である天然ガスを供給することを目的にしていると言われている。また、タイ国営石油会社 (PTT) は、2011 年 5 月末に Map ta Phut LNG 受入基地に試運転カーゴを受け入れ、同年 9 月上旬に商業操業を開始した。最後に、シンガポールは、マレーシアとインドネシアから長期契約でパイプラインによる天然ガスを購入している。しかし、マレーシアやインドネシアは自国市場向けガス供給の政策をとっているため、安定的なガス供給のため、2010 年南西部ジュロン地域に LNG 受入基地建設を開始している。

今後、アジア地域の LNG 輸入の増加や非在来型天然ガスの供給量の増加は、LNG 輸入契約期間の短縮や LNG 供給国の多様化といった趨勢を加速化させることになり、アジア LNG 市場の構造変化をもたらすと考えられる。東南アジアの LNG 供給力が低下していることから、オーストラリアがアジア LNG の最大供給地域として台頭する可能性がある。3 つのプロジェクト (NWS、ダーウィン、Pluto) から成るオーストラリアの LNG 供給力は、2015 年から 2020 年にかけて飛躍的に増加し、カタールに取って代わり、世界最大の LNG 供給国になり、さらに 2010 年末から 2020 年代には、北米や東アフリカ地域も新規 LNG 供給国として登場してくると予想される。

IV. 北米シェールガス増産の影響

ここ数年、米国やカナダで非在来型天然ガスの開発や生産が急速に行なわれているが、1970 年代に米国における天然ガス消費量が増加していく中で、将来の天然ガスの需要増加や既存のガス田の減少をカバーするために、非在来型天然ガスが注目されるようになった。この頃から米国では非在来型天然ガスの開発が開始され、それ以降、1980 年代はタイトサンドガス、1990 年代は炭層メタン、2000 年代はシェールガスと、非在来型天然ガスの生産量は増加の一途をたどってきた。非在来型天然ガスは、ガスの流れやすさが劣る岩石に残留または吸着した状態のため、地下に穴を開けた状態で自然に地上に噴き出してくる在来型天然ガスと違って、地下から取り出しにくい弱点がある。しかし、水平掘削・水圧破碎といった技術の進展により、非在来型天然ガスの可採埋蔵量増加につながっていることからシェールガスの生産量が増加するようになった。このようなシェールガスの開発の単価も 2007 年 \$73/千 m^3 から 2010 年には \$31/千 m^3 に下落し、在来型天然ガスの平均開発単価 \$46/千 m^3 よりも低い水準に達成している。

米国におけるシェールガスの生産量を見ると、1998 年の天然ガス生産量のうちシェールガスは 1.9% (2,800 万 m^3) にすぎなかったが、2010 年には 24.1% (4 億 8,000 万 m^3) と急速に成長してきた。EIA (2010) によれば、米国の 2025 年の LNG 輸入量は 2005 年の予想では 1,800 億 m^3 だったが、2010 年の予想では 360 億 m^3 と大幅に下方修正している。このように、米国のシェールガスの開発は米国に天然ガス需給緩和の効果をもたらしたといえる。

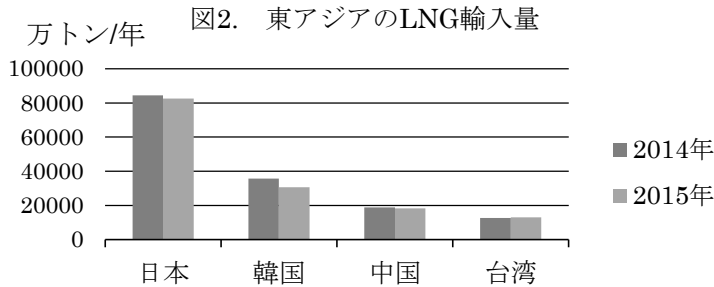
一方、カナダもシェールガスの資源量が豊かで、米国と共にシェールガス開発に必要な技術を保有している国である。シェールガスの可能性は、ブリティッシュコロンビア州北東部、アルバータ・サスカチュワン州、ケベック州、ノバスコシア・ニューブラウンズ州に広がりを見せている。

ロイター (2012 年 5 月 29 日) によると、シェルと中国石油天然ガス (Petro China)、韓国ガス公社 (KOGAS)、三菱商事は 2012 年 5 月、カナダ西海岸に LNG 生産基地を建設する計画を明らかにした。また、読売新聞 (2011 年 7 月 8 日) によると、三菱商事と、東京ガス、大阪ガス、中部電力などが、カナダのペン・ウェスト・エナジー社と共同でカナダの太平洋岸に LNG の大規模プラントを建設する方向で調整に入ったことが分かった。カナダ北西部のブリティッシュ・コロンビア州の内陸部で採取したシェールガスを、1000km 離れた太平洋岸にパイプラインで運び、プラントで液化して輸出する計画である。ガス開発の事業費は約 4000 億円、プラントの建設費は 1 兆円規模に達すると見られ、2010 年代後半から日本などへの輸出開始を目指している。1000 万トン規模の LNG プラントは、日本が関わる最大のエネルギープロジェクトであるロシアの「サハリン 2」に匹敵する大事業である。

V. 東アジアの LNG 市場の構造変化

1. 東アジアへの今後の LNG 供給予測

東アジア全体の LNG の輸入量は増加の一途をたどってきている。しかし、2015 年の国別の前年度比増加率を見ると、台湾 3.3%、日本-2.2%、中国-3.3%、韓国-14.9%である。台湾を除く国は輸入量が減少した。これは、天候・気象の要因と火力発電用としての LNG 需要が急減したことと、景気低迷が原因であると言われている。



(出所) BP統計2014, 2015より作成

世界 1 位の LNG 輸入国である日本は、多くの原発が停止している中、その代替エネルギーである LNG を調達しなければならないという状況である。LNG 輸入の長期契約を結べる新規の供給先を探すことは容易ではなく、不足分はこれまでの輸入先からの増量や欧州や南米などの新たな輸入先からのスポット取引で対処している。また、これまで最大の LNG 供給地であった東南アジア地域の供給率は徐々に減少してきた。このような厳しい需給を反映して価格は高止まりしてきた。2015 年からオーストラリアの新規プロジェクトが順次生産を開始しているため、東アジア向け長期契約供給量が豊富になってスポット価格は欧州水準に近づいていくと考えられる。また、オーストラリアのファーガソン元資源相が言及したように（ロイター、2012 年 5 月 14 日）、シェールガスの探査は最近商業化されたばかりであるが、国内の天然ガス資源の規模を倍増させる潜在性があるとし、世界最大の LNG 輸出国カタールを 2020 年までには追い越すと予想している。この結果、オーストラリアの LNG 供給力は、2015 年から 2020 年にかけて飛躍的に増加すると思われる。

米国からの LNG 輸出に関しては、現在、天然ガスの液化基地がアラスカにしか存在していないので、大量の LNG 輸出を行なうことはできない。米国は 2000 年代前半には将来的に LNG の輸入大国になると見ていたので、米国で整備されたのは液化設備ではなく、輸入 LNG の受入基地であった。AEI のマイケル・マッザとゲイリー・シュミットによる論説（ウォール・ストリート・ジャーナル、2012 年 6 月 10 日）では、米国は、ポスト福島原発停止で大量の天然ガスを輸入せざるを得なくなっている日本に、アラスカ産天然ガスを輸出すべきだが、米国内にはこれを阻む勢力があると述べている。特に、日本のような FTA（自由貿易協定）を締結していない国向けの輸出は政府の許可が義務付けられているので、日本向けの新たな LNG 輸出業者への輸出許可証を出すのは時間がかかると見

られたが、2013 年、米国エネルギー省は「ケース・パイ・ケース」の形で審査した後、承認することを決めた。これにより、同年 11 月、日本は 3 つのプロジェクトの LNG 輸入承認を得た。

米国では、現時点で唯一新規事業として LNG の輸出が認められているのは Cheniere 社だけであり、アジアにおいては、インドの GAIL 社と韓国の KOGAS 社が Cheniere 社と長期契約（20 年間）を締結している。その結果、2017 年にメキシコ湾岸のサビンパス基地からアジアに向けて LNG 供給が開始される予定である。パイプラインの天然ガスを LNG に加工するための液化コストは百万 BTU あたり 3 ドル程度（後述の韓国 KOGAS 向け契約価格）である。輸出が想定されるメキシコ湾から日本や韓国までの LNG 船の輸送コスト（FOB）は百万 BTU あたり 4 ドル程度と想定される。これに LNG 設備までのパイプライン使用料、海上輸送保険料などを加味すると、米国のパイプラインガスを LNG にして日本や韓国に輸出するまでにかかるコストは百万 BTU あたり 8 ドルから 9 ドル程度になるとみられる。

次に、将来の東アジア向け LNG 供給地として注目されているのが、モザンビークやタンザニアなどの東アフリカである。天然ガスの液化事業が計画通り進めば、アフリカ最大の LNG 輸出国であるナイジェリアを上回ることになる。LNG 輸出が始まるのは 2020 年以降と考えられる。

2. 東アジアにおける LNG 価格の予測

これまで東アジアの LNG 価格は原油価格を指標として決定されてきたが、新たな LNG 価格フォーミュラが期待されている。きっかけとなったのは、米国の Cheniere 社がサビンパス基地から東アジア向けに LNG 価格をヘンリー・ハブ市場価格による原料価格に固定タリフを加えたもので長期契約を締結したことによる。

欧州では市場価格によるガス取引比率が上昇しているように、今後東アジアでも市場価格による取引を望む声は大きくなるに違いない。東アジア向け LNG 供給は長期的契約が中心であり、事業採算と価格フォーミュラを確定してからプロジェクトが成立する。2015 年 5 月の時点では、東アジア市場での新規 LNG 契約のほとんどがオーストラリアからの輸入なので、供給形態は、原油価格を指標とする長期契約フォーミュラになる。他の既存 LNG 供給地域（東南アジア、中東）と新規 LNG 供給地域（東アフリカ、カナダ）の供給形態も、基本的には原油価格を指標とする長期契約である。しかし、米国の LNG 輸出価格フォーミュラは、ヘンリー・ハブ市場価格を基本としているので、米国でどれだけの LNG 輸出が認可され、どの程度東アジアへの輸出供給力が確保できるかによって新たな LNG 価格フォーミュラへの変更が可能になるかである。

VI. 韓国電力産業の対応

1. 韓国の LNG 輸入および契約状況

韓国は 1986 年 10 月にインドネシアから LNG を輸入し始めた。2015 年の LNG 輸入量は 31,410 千トンである。具体的には、カタール 12,604 千トン、オマーン 4,090 千トン、マレーシア 3,717 千トン、インドネシア 2,409 千トン、ロシア 2,309 千トン、オーストラリア 1,635 千トン、ブルネイ 1,228 千トン、ナイジェリア 1,058 千トン、赤道ギニア 713 千トン、その他 1,647 千トンである。

LNG の導入期間は 15 年から 20 年以上と長期契約がほとんどである。最近の長期契約はアメリカとの 20 年の LNG 購買契約であり、2037 年から 2038 年に満了する予定である。

KOGAS は Sabine Pass Phase II と 350 万トン/年、SK E&S は Freeport LNG と 220 万トン/年の液化容量契約を締結し、GS EPS は日本の三井を通じ、60 万トン/年を輸入する予定である¹。このように、今までの長期契約から、非在来ガスの開発後は、契約構造や条件などの変化により、柔軟な契約構造に変わってきた。またアメリカの LNG 輸出開始により長期契約への移行が進んでいる。このように非在来ガスの輸入が活性化された場合、輸入先国が変化する可能性もある。例えば、カタールの場合、2024 年に KOGAS (韓国ガス公社)²と約 5 百万トン/年の契約が終了する予定であるが、契約延長の可能性は低いと予想されている。

韓国における LNG 契約期間の状況は、2014 年 1 月の開始であるインドネシアからの 40 万トンは 2 年の短期契約であり、2014 年 4 月の開始であるオーストラリアからの 220 万トンも 3 年の短期契約であるが、その他は長期契約であることがわかる。かつて LNG 契約においてはほとんど長期契約であったが、最近は少しずつ契約の形式が変わってきている。ここで注目すべき点は、インドネシアの 1994 年から 2014 年までの長期契約が延長されずに満了したことである。このようなケースはこれから相次いで発生すると予想される。2016 年のオーストラリア、2017 年のインドネシア、2018 年のマレーシアなどの契約がどのようになるのかも注目に値する。

かつて LNG 取引は硬直的であった。シェールガスの輸入と共に求められるのは、LNG 取引を柔軟にするということである。日本の経済産業省は 2016 年 5 月 2 日に LNG 市場戦略を発表した。その中では、長期契約がほとんどである取引方式を短期契約やスポット取引へと分散すること、また目的地条項などを緩和することの必要性が挙げられている。

2. 韓国電力産業の対応

(1) 韓国電力の状況

2013 年度、韓国の電力におけるエネルギー源別の発電量は 517,148 GWh である。その割合は、火

¹ 李ホム (2015) 『天然ガス市場メガトレンドの波及効果および対応戦略研究：地域内の取引活性化を通じた LNG 取引の改善法案』エネルギー経済研究院、65 頁～66 頁。

² KOGAS (Korea Gas Corporation：韓国ガス公社) は 1986 年 11 月に 発電部門にガス供給を開始し、1987 年 2 月には都市ガス用にガス供給を開始した。現在ガス販売は KOGAS の独占販売である。

力発電の石炭が 200,444 GWh の 38.8% で一番高い割合であり、次は原子力で 138,784 GWh の 26.8%、火力発電の LNG が 127,724 GWh の 24.7%、火力発電の石油が 15,751 GWh の 3.0%、集団が 14,633 GWh の 2.8%、代替エネルギーが 11,267 GWh の 2.2%、水力発電量が 8,543 GWh で 1.7% である。石炭による火力発電量は、2009 年の 44.6% の最高の割合を記録した後、僅かの差であるが、約 40% に近い発電量となったことがわかる。韓国は 2013 年基準で、CO₂ の排出量が 582 百万トンと OECD の内第 7 位であるが、2030 年までに BAU 対比³37% (851 百万トン) 減縮を目標としている。これは温室効果ガス排出量の削減に対する認識が高いことを示しているといえる。この意味からも、CO₂ の排出量が多いエネルギー源を減らす必要があるといえる。

表 3. エネルギー源別の発電量

(単位：GWh)

区分	水力	原子力	集団	代替	火力			合計
					石炭	石油*	LNG	
2012 年	7,652	150,327	13,061	10,563	198,831	15,156	113,984	509,574
	1.5%	29.5%	2.6%	2.1%	39.0%	3.0%	22.4%	100.0%
2013 年	8,543	138,784	14,633	11,267	200,444	15,751	127,724	517,146
	1.7%	26.8%	2.8%	2.2%	38.8%	3.0%	24.7%	100.0%

出所：2015 エネルギー統計年報 注)*石油は重油と軽油の合計である。

石炭は、CO₂ や NO_x (窒素酸化物) や SO_x (硫黄酸化物) などの排出量が多いことから環境に優しくないエネルギー源である。また、2 番目に高い割合のエネルギー源である原子力は、3・11 東日本大震災の経験からもリスクが高いエネルギー源であることがすでに知られているとおり、安全性が高いエネルギー源ではあるとは言いがたい。ここで、安全でありながら環境問題にも考慮したエネルギー源を拡大する必要があると考え、4 つのシナリオを提案したい。

(2) シナリオおよび分析

まず、環境問題に対応するために石炭発電量をどのくらい減らしたほうが良いかについて、シナリオ A とシナリオ B を提案し、続いて、原子力発電による様々なリスクから安全性を確保するためにシナリオ C とシナリオ D を提案する。ここでの提案はどれも現在の主な発電源による電力量を最大 20% 削減することを目標としており、減らした分を補うために LNG による発電量を増やすことを考え、どれだけ LNG 量が必要になるのかを検討する。

— シナリオ —

A. CO₂ 排出量を減らすために、石炭発電量を 10%削減する。

B. CO₂ 排出量を減らすために、石炭発電量を 20%削減する。

³ BAU (Business As Usual) 対比とは特段の対策のない自然ケースに比べての効果をいう。

シェールガスのアジア市場進出に対する韓国電力産業の対応

C. CO₂ を減らすと共に原子力による様々なリスクを最小化するため、石炭発電量を 20%、原子力発電量を 10%削減する。

D. CO₂ を減らすと共に原子力による様々なリスクを最小化するため、石炭発電量を 20%、原子力発電量を 20%削減する。

シナリオ A では、石炭火力発電を 10%削減する。2013 年基準では、石炭の発電量は 200,444GWh であり、全体の 38.8%となっている。この発電量を 10%に削減するのは、全体の 3.8%である 20,444GWh を削減することである。シナリオ B では石炭火力発電を 20%削減するため、全体の 7.7%である 40,088GWh を削減することとなる。シナリオ C は石炭を 20%、原子力を 10%削減する案であるので、石炭の発電量 40,088GWh と原子力の発電量 13,878GWh を削減する。シナリオ D では、石炭を 20%、原子力を 20%削減するものであり、石炭の発電量 40,088GWh と原子力の発電量 27,756GWh を削減することとなる。これらにより削減された発電量は LNG へと移行させることを提案する。4つのシナリオにより、増加すべき LNG 量を算出してみた結果、シナリオ A の場合は 7,434 千トンが必要であり、シナリオ B は 14,577 千トン、シナリオ C は 19,624 千トン、シナリオ D は 24,670 千トンとなった。いずれの場合も、大量の LNG が必要となる。シェールガスの開発により、天然ガスが豊かな資源であるのは間違いない。アジアにおけるシェールガス市場がアメリカやカナダなどのような競争市場になる可能性が高い。この競争により、短期契約などの柔軟な契約形式が増えると予想される。これは市場価格であるスポット価格が適用され、安い価格で天然ガスを輸入することができるということで大きな意味がある。安い価格で LNG が供給され、CO₂ 排出量の削減と共に原子力による様々なリスクを最小化することができるという一石二鳥の結果となる。

一般的に LNG 価格は 5 ヶ月前の原油価格に影響されると言われている。ここで、実際にどの時点になるのかを分析してみた。表 4 は、原油価格と LNG 価格を 2013 年 4 月を基準時に指数化し、それらの相関関係を分析した結果である。同時点 t の両資源の価格の相関係数は 0.92348 であるが、t 時点の LNG 価格と 3 ヶ月前(t-3 時点)の原油価格の相関関係は 0.987326 で一番高いことがわかる。一般的に言われている 5 ヶ月前の原油価格 (t-5 時点) との相関係数は 0.950114 となり、t-3 時点の原油価格との相関係数より低い値となった。この分析から実際に原油価格が LNG 価格に反映されるのは約 3 ヶ月前の価格であることが確かになった。

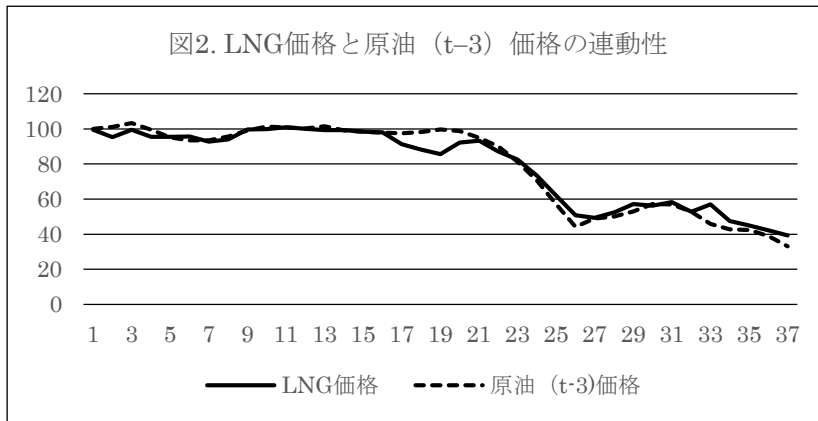
表 4. 原油価格と LNG 価格の相関関係を分析した結果

t	t-1	t-2	t-3	t-4	t-5	t-6
0.92348	0.949133	0.97205	0.987326	0.981468	0.950114	0.900169

注) t は同じ期間を意味する。t-1 は 1 ヶ月前の原油価格を意味する。

t-2 は 2 ヶ月前の原油価格を反映することになる。

それをグラフにして連動性をみると（図2）、LNG 価格の動きと3ヵ月前の原油価格の動きが似ていることがわかり、この時点で連動していることが確かであることがわかった。



以上の分析の結果から LNG 価格は原油価格に連動するが、すぐではなく約3ヵ月遅れて反映される結果となる。

次に、原油価格と LNG 価格の変動性を確認するため、変動係数の分析を行った。変動係数 CV (coefficient of variation) は、標準偏差 s を算術平均 \bar{X} で割ったものであり、100 を掛けると値が求められる。式の以下の通りである。

$$CV = \frac{s}{\bar{X}} \times 100 (\%)$$

s : 標準偏差

\bar{X} : 算術平均

この変動係数により、異なる種類のデータの散らばりの程度を、直接比較することができる。過去3年間の毎月の原油価格と LNG 価格の変動係数を分析した結果、原油価格の変動係数は 37.15% であり、LNG の変動係数は 27.53% となった。一般的に、変動係数が小さいとリスクが小さいと判断される。この分析では、LNG 価格の変動係数が原油価格の変動係数よりも小さいので、原油よりも LNG は価格が安定したエネルギー源であるといえる。

VII. 終わりに

世界中どの国にも電力は必要不可欠なものである。そのため、電力に必要な発電のエネルギーを慎重に選ぶのは最も大事なことである。地球温暖化対策への関心が高まる中、温室効果ガスの排出量が少ない燃料として遜色がない天然ガスは、原子力発電によるリスクも避けられる安全性が高いエネルギー源であるともいえる。この天然ガスの一つであるシェールガスが、その開発により世界中の天然ガス市場に大きい影響を与えているのは間違いない。かつての LNG 貿易は長期契約をはじめ、購入者に不利な様々な条件があったのは事実である。しかし、シェールガスの開発と商業化により、LNG

市場の構造が変わっている今日、今までの発電エネルギー源の割合に変化を起こす必要があると考えられる。したがって、CO₂ 排出量を減らすため、また、原子力による様々なリスクを最小化するため、4つのシナリオを挙げ、どのくらい LNG 量を増やすべきかを検討した。また、一般的に LNG 価格は原油価格に 5 ヶ月遅れで連動していると言われていたが、実際の分析により、3 ヶ月遅れで反映されるという結果を得た。さらに、原油価格と LNG 価格の変動係数の測定した結果、LNG 価格は原油価格よりも変動係数が約 10%小さいことがわかった。これは石油価格が上昇しても LNG 価格に同程度の影響はなく、LNG 価格は比較的安定したエネルギーであることを示す。

ロイター（2016年2月25日）によると、アメリカ産のシェールガスが2017年に本格的に輸入される見込みであるという。韓国はアメリカと FTA を締結しており、それはアメリカ産のシェールガスを輸入するには有利な条件となる。さらに、市場価格が適用されると安い価格で LNG を輸入することができるから、石炭や原子力などを減らした分を、LNG で賄うことが最適であると考えられる。しかし、大量の LNG を輸入する際、貯蔵施設が不足しているという問題があるため、LNG の貯蔵施設を迅速に増設する必要があると思われる。最近、日本で発表された「LNG ハブ」が実現できれば、ガスセキュリティの問題や価格などにも大きい影響が与えられると期待される。これらの変化は、韓国電力産業にとっては明るいニュースであり、環境問題や原子力発電によるリスクも下げられるエネルギー源である LNG が確保できると考えられる。

参考文献

英語文献

- Amagai, H. and Sharma S.(1990), "Future Patterns of Electricity Development in Japan: Implications for ASEAN Hydrocarbon Exports," *ASEAN Economic Bulletin*, Vol.7,No.1,pp.96-105.
- BP Statistical Review of World Energy 2002-2016.
- EAI, Annual Energy Outlook 2010.
- GHIGNL, *The LNG Industry 2014*.
- Gilardoni, A.(2008), *The World Market for Natural Gas*, Springer, Heidelberg, Germany.
- Gkonis Konstantinos G., and Harilaos N. Psaraftis(2009) "The LNG market: a game theoretic approach to competition in LNG shipping." *Maritime Economics & Logistics* 11.2, pp.227-246.
- Holditch, S. (2006), "Tight Gas Sands," *Journal of Petroleum Technology*, 58(6), pp.86-93.
- International Energy Agency(IEA) (2013), *IEA Statistics: Energy Prices and Taxes*, OECD/IEA.
- Kawata, Y and Fujita K. (2001), "Some Predictions of Possible Unconventional Hydrocarbon Availability Until 2100," Paper SPE 68755 prepared for presentation at the SPE Asia Pacific Oil and Gas Conference, Jakarta, 17-19, April.
- Rogner, Hans-Holger. (1997), "An Assessment of World Hydrocarbon Resources," *Annual Review of Energy and the Environment*, Vol .22, pp.217-262.

日本語文献

- 石井彰 (2008) 『天然ガスが日本を救う』日経 BP 社。
- 伊原賢 (2011) 『シェールガス争奪戦』日刊工業新聞社。
- 岩間剛一 (2010) 「アジアをはじめとした世界の天然ガス需要増と中東の天然ガス供給の重要性」『中東協力センターニュース』26 頁～35 頁。
- ウォール・ストリート・ジャーナル (2012 年 6 月 10 日) 「米国発「シェールガス革命」日本の期待と根強い輸出反対論」
- 橘川武郎 (2012) 「なぜ日本の天然ガスの価格は、アメリカの 9 倍も高いのか」PRESIDENT 2012 年 7 月 16 日号。
- 経済産業省 (2011) 『エネルギー白書 2011』経済産業省・資源エネルギー庁。
- 経済産業省 (2016) 『LNG 市場戦略—Strategy for LNG Market Development～流動性の高い LNG 市場と“日本 LNG ハブ”の実現に向けて～』。
- 小山堅 (2011) 「2012 年の国際石油・ガス情勢の展望」『第 408 回定例研究報告会』(財)日本エネルギー経済研究所。
- 坂本茂樹 (2012) 「東南アジアの LNG 輸入開始、東アジア市場向け LNG フローの変化」『アナリシス』第 46 巻、第 4 号、15 頁～30 頁。
- 石油エネルギー技術センター (2012) 「アジア市場めざすカナダの LNG プロジェクト～シェールガス開発計画の進むカナダも新たな LNG 供給国に」『JPEC レポート』第 26 回。
- 読売新聞 (2011 年 7 月 8 日) 「カナダの「シェールガス」、日本に初輸出へ」。
- ロイター (2012 年 5 月 14 日) 「オーストラリア、潜在的なシェールガス資源で国内ガス資源規模倍増も」。
- ロイター (2012 年 5 月 29 日) 「カナダ、LNG 産業の強化を急ぐべき」。
- ロイター (2016 年 2 月 25 日) 「米シェールガス輸出開始へ、2017 年にも日本向け本格化」。

韓国語文献

- 李ホム (2015) 『天然ガス市場メガトレンドの波及効果および対応戦略研究：地域内の取引活性化を通じた LNG 交易の改善法案』エネルギー経済研究院。
- エネルギー経済研究院 (2012) 「国際天然ガスの価格動向および向後展望と示唆点」。
- エネルギー経済研究院 (2012) 「LNG 取引力量の強化法案研究」。
- エネルギー経済研究院 (2015) 『2015 エネルギー統計年報』。
- 都ヒョンジェ (2015) 「アメリカ産 LNG 導入環境と国内ガス市場の波及効果分析」『基本研究報告書 15-16』エネルギー経済研究院。
- 対外経済政策研究院 (2012) 「主要国のシェールガス開発動向と示唆点」『KIEP 今日の世界経済』第 12 巻、第 11 号、1 頁～21 頁。

韓国化粧品産業のFDIの動向

Current Situation of FDI in Korea's Cosmetic Industry

経済学研究科経済学専攻博士後期課程在学

李 賑 培

Lee, Jinbae

はじめに

近年、韓国の化粧品企業は国際市場におけるシェアを高めてきており、日本や欧米諸国の化粧品企業にとって、国際競争上の強力な競合相手となりつつある。産業や企業の国際競争力の議論には、企業の海外進出状況や海外直接投資（Foreign Direct Investment 以下 FDI）の規模、または FDI の成果分析が必要であると思われる。しかし、日本では、韓国化粧品企業の海外進出の推移や現状などについて、十分に検討されていないのが現状である。

本稿では、韓国で「重点育成産業」に位置付けられている化粧品産業の海外進出の動向を、FDI の統計データを基に解明を試みる¹。まず、①既存の先行研究をレビューした上で、②韓国化粧品産業を取り巻く内外の環境の変化を検証する。それから、③韓国企業全体の FDI の動向を 1990 年から整理、検討した後、化粧品企業に限定した FDI の統計データの分析を試みる。これらの分析から④韓国化粧品企業の FDI 特徴などを明らかにしていく。最後に、④韓国化粧品大手であるアモーレ・パシフィックと LG 生活健康の FDI の傾向と現状を比較する。

本稿では、FDI の定義を OECD=IMF 方式の FDI の定義に従い本研究を進める²。なお本稿の FDI 統計データの参照先は、韓国輸出入銀行と保健産業振興院を参照した。

I. FDI の先行研究レビュー

1. 内部化理論

既存の FDI 理論は、第 2 次世界大戦後のアメリカ企業の西ヨーロッパへの投資と、それ以降の先進国の企業による途上国の製造業への投資を説明するために構築されたものであった。産業組織論の Hymer (1976) と Caves (1974) は、企業が、海外進出する際の追加費用を考えると、多国籍企業が現地企業と競争するためには、何らかの独占的企業優位を保有すべきであると述べた。

しかし、企業の優位要素という概念は、ある特定地域のみで成り立っている理由に対する明確な解答を提示していない (Moon, 2002, p3)。そのため、一部の学者らは、いくつかの代案として「立地優位」という変数を用いた分析を試みた。Dunning (1981) も、その一人で、企業優位要素と立地優

位要素を結び付けて FDI を説明した。

Buckley (1983) は、多国籍企業の成長に関する分析には、戦略的な成果の適時性を明確にする必要があると主張した。彼によると、初期の FDI のみならず、海外市場への進出形態の変化（輸出、ライセンス、FDI）、または企業の成長方向までも議論に含まれる。このような観点から、Buckley & Casson(1981)は FDI の適切な時期を予測するための体系的なモデルを提示したといわれている。彼らは、海外進出の 3 つの費用である、①周期的に発生する固定費用と②可変費用、③回収不可能な設立費用を考慮しながら、進出形態の変化に対する簡単な予測モデルを構築した。

2. 多角化理論

国際化は、国内商品の多角化の代案としてよく取り上げられる。Moon (2002) は FDI の既存理論をアプローチ別に区分した。そのアプローチの 1 つである「ハウ・トゥ・アプローチ (How to approach)」は、国内商品の多角化と国際化の選択に焦点を当てていると主張した。Horst (1972) は、この選択に焦点を当てた研究を行い、Wolf (1977) はこの研究を発展させた。Wolf は、規模の経済の代理変数として産業別企業の平均規模を使用した。Wolf は、技術力の代理変数として全雇用者数に対する技術者比率を適用した。Wolf の理論は、元々多角化の方法の選択を説明するためであったが、多国籍企業の成長決定要因と言える 2 つの要素、すなわち、企業の規模と技術力を区別したことで意義があるといわれている。Moon (2002, p7) は、内部化理論と多角化理論の本質は、FDI の選択にあると指摘しながら、企業が海外進出をする際、最大の効果を得る方法を解明するためには、あらゆる選択肢（貿易、ライセンス、FDI など）から同時に費用対収益分析を行う必要があると述べた。Hirsh (1976) は、輸出と FDI 間選択モデルを発表し、Casson (1979) と Rugman (1981) はさらにこのモデルを発展させた。

FDI 実行の時期に関する理論の 1 つに、プロダクト・ライフ・サイクル理論 (product life cycle theory) がある (Vernon, 1966; Wells, 1972)。Dunning は (1981, p77) この理論を、企業が海外市場を利用する際、貿易と FDI を動的 (dynamic) な背景の中で説明しているため、とりわけ重要であると述べた。このプロダクト・ライフ・サイクル理論は、投資対象国の地理的要因の重要性は、製品が新商品段階で最大化し、標準化段階までの時間の経過とともに変化するというものである。したがって、企業の選択も、輸出（貿易）と FDI の間で変化する。

3. その他の先行研究

FDI の類型区分に関する先行研究として、関下 (2002) は、FDI を投資家の内部構造によって 3 つに分類することもできるとした。①「グリーンフィールド」FDI (新規事業設立のための FDI)、②「M&A」、③「合併事業」がそれぞれである。また、畠山 (2010) は、Dunning (2008) を引用しながら、FDI には①天然資源探索型、②市場探索型、③効率探索型、④戦略資産探索型の 4 種類がある

韓国化粧品産業の FDI の動向

とした。畠山は、企業の FDI の目的は、投資先の立地的な優位性により異なると説いている。

本研究の対象は韓国化粧品企業の FDI の動向であるが、韓国化粧品産業の FDI に関する研究は皆無に等しい現状にある³。しかし、化粧品企業以外の企業の FDI の要因や成果、貿易と関連性などを研究した論文は多数存在する。

Kim (2015) は、韓国企業の海外 M&A の比重を分析し、全世界の FDI のうち、韓国企業による M&A 取引金額が 0.78% (2014 年、全世界の M&A 総額は 51.2 兆ウォン) に過ぎないことを取り上げた。同じく Kim (2015) は、韓国の景気沈滞による低成長の解決策として FDI、とりわけ M&A の重要性を説いた。一方、尹 (1999) によると、90 年代の韓国企業の FDI の傾向と推移を分析した上で、韓国企業は「所有優位 (独占的地位)」を有してないまま、海外進出する傾向が強いと述べた。言い換えると、韓国企業の対外 FDI による海外進出は、市場確保、迂回輸出、貿易摩擦などを回避するための手段でしかないと主張し、その効果に関しても否定的であった。

II. 韓国化粧品産業を取り巻く環境の変化

1. 内需市場の限界

韓国統計庁の最新のデータによると、2015 年の韓国の人口は 5,100 万人で、2030 年にピークを迎え (5,200 万人)、2060 年には 4,400 万人まで減る見込みである⁴。このような少子化による人口減少は、日本や中国同様、韓国においても深刻な社会問題となっている。

企業側にとって、人口減少は、市場の縮小を意味する。とりわけ、化粧品を使用する「化粧人口」の減少は、化粧品企業にとって、事業の多角化あるいは、国際化を進める主な要因になりうるため、戦略上大きな課題となっている⁵。このような背景のもとで、韓国化粧品企業の全社戦略は、常に海外市場を主なターゲットに入れたものとなっている。

2. 海外市場の成長 (東南アジア)

韓国の健康保健振興院の 2014 年の報告書によると、2013 年の世界の化粧品市場規模は 2,495 億ドルで前年比 3.9%増加した。アメリカをはじめフランス、イタリア、日本など、いわゆる化粧先進国の成長率は前年比 1%台の微増にとどまった。一方、2013 年の中国化粧品市場の成長率は前年比 9.3%で、GDP 成長率 (7.4%) を大きく上回る数値を記録した。また、インドと韓国の化粧品市場も前年比 12.1%と 4%の成長をそれぞれ記録し、東南アジアでの著しい成長が世界市場の成長に貢献したと言える (2014 化粧品産業報告書)。

とりわけ、中国市場の成長率は群を抜いていて、世界各化粧品企業の主戦場になっている。例えば、資生堂が 2011 年に公表した事業報告書によれば、日本の化粧人口は 5,600 万人、中国の化粧人口は 1.4 億人に上る。資生堂の海外売上比率は、今や 50%を超えていて、その内、中国売上比率は 15%以上を占めている (2014 年時点)。また、2010 年以降、アジア地域での売上比率は、欧米の売上を超え

ていることから、資生堂の海外戦略の柱は、アジア市場であることが伺える。

また、韓国化粧品最大手のアモーレ・パシフィックの事業報告書からも、同社が資生堂同様、中国をはじめとするアジア地域を海外事業の柱として認識している。アモーレ・パシフィックの場合、総売上高に占める海外売上高がまだ 17%に過ぎなく、海外市場、とりわけアジア市場攻略に焦点をあてた戦略を実行している。

3. 韓国の化粧品産業政策

1980 年代までの韓国化粧品企業は、高い輸入関税に守られていたため、内需拡大に伴う企業成長が容易だった。しかし、1990 年代に入って、欧米先進国からの市場開放圧力にさらされるようになり、韓国化粧品産業にとって、技術力とブランド力の向上が生き残りのカギになった。このような外部環境の変化に伴い、韓国政府の政策も外国企業に対する規制緩和だけではなく、これと同時に国内化粧品産業を育成する方向へと変化した。

化粧品は、消費者にとっては毎日消費するものであるため、高い品質が要求される。企業は、この高い品質を提供するために、R&D 投資を増やさなければならない状況に直面した。2007 年に改正された韓国の化粧品法により、政府による R&D 支援が解禁された。この政策の背景には、韓国政府による化粧品産業の競争力の強化の意図があったと考えられる。

4. 資本と技術の蓄積

上述したように、内外の変化に適合するため、企業の戦略と政府の政策も修正を強いられた。その結果、韓国化粧品産業は、2000 年代後半から競争力をつけ始めた。実際、従来貿易赤字であった韓国の化粧品産業は、2012 年から今日まで続く貿易黒字に転換した。また、世界で通用する化粧品企業も 3 社誕生した。それらは、①アモーレ・パシフィック、②LG 生活健康、③ABLE C&C である。

さらに、産・官・学の共同による R&D 振興策により、原料開発と商品開発が進み、特許件数の増加も見られるようになった。韓国政府による化粧品産業への R&D 支援が本格的に実施された 2007 年以降、韓国化粧品産業における R&D の規模は大きく拡大してきた。まず、政府の予算は 2004 年には 30 億ウォンであったが、2007 年 100 億ウォン、2014 年には 130 億ウォンに上った。しかし、政府の予算の増額はあるものの、あくまでも「呼び水」的な位置づけであると考えられる。それから、化粧品大手 3 社の R&D 支出額も着実に伸び、アモーレ・パシフィックは 2004 年の 220 億から 2013 年には約 4 倍増えた 830 億ウォンに、LG 生活健康も、2004 年 250 億ウォンから約 3 倍増えた 630 億ウォンになった。ABLE C&C の場合 2004 年 (28 億ウォン) に比べ、焼く 9 倍増えた 220 億ウォンになった。

Ⅲ. 韓国化粧品産業の対外 FDI の近年の動向

1. 韓国の FDI の概要

韓国化粧品産業の FDI に入る前に、韓国企業全体の FDI の動向に触れる必要がある。1985 年まで、韓国企業による対外 FDI の金額は毎年約 1 億ドルで、海外新規法人設立件数も 50 か所くらいであった。対外 FDI の合計金額は、1986 年に海外投資促進法が制定されて以降増えはじめ、1990 年には 10 億ドルを超えた。また、1994 年の投資規制緩和政策により、韓国企業が行った対外 FDI 金額は、1995 年には 32 億ドル（海外新規法人 1,341 か所）、1996 年には 45 億ドル（海外新規法人 1,475 か所）に達した(Kim 2012)。

韓国の FDI は 2005 年から増えはじめた。2005 年の 70 億ドルから 2010 年の 246 億ドルにまで増加した。新規海外法人数は、2008 年の 4,021 か所をピークに翌年から減少しはじめて、2014 年には 2,768 か所になった。しかし、韓国の経済規模に比べれば、全世界の FDI 総額に占める割合は 2%未満であり、韓国企業の FDI は積極的とは言えない現状である（表 1）。

表 1、韓国の FDI 金額と新規法人数の推移（1990～2014 年）

（単位：百万ドル）

	1990	1995	2000	2005	2010	2011	2012	2013	2014
FDI 金額	1,068	3,215	5,219	7,071	24,638	29,001	28,423	29,799	24,701
新規法人数	346	1,341	2,104	4,425	2,889	2,757	2,536	2,810	2,768

出所：韓国輸出入銀行、海外投資統計を基に筆者作成。

2. 対外 FDI の増加と中国への集中

Ⅱで述べたような環境の変化の下で、韓国化粧品企業は積極的に海外進出を進めてきた。とりわけ、成長著しいアジア市場は韓国化粧品企業にとって重要な市場である。現に、韓国化粧品企業による FDI 総額のうち、対アジア FDI が約 9 割を占めている。表 2 は、韓国化粧品企業が過去 5 年間に実施した化粧品関連の FDI 統計である。アジアへの FDI 総額は、2009 年の 1,232 万ドルから 2013 年の 6,901 万ドルへと、5 倍弱も増加している。それから、対外 FDI 総額に占める対アジア FDI 金額の比率は、2009 年で約 74%から 2013 年には 90%を超えている。

表 2、化粧品企業の化粧品関連地域別 FDI 統計 (単位：千ドル)

	2009	2010	2011	2012	2013
アジア	12,322	21,537	12,159	159,656	69,011
北米	2,410	2,868	3,611	5,386	5,125
EU	755	2,052	623	-	1
その他	1,121	1,162	226	1,902	215
合計	16,608	27,618	16,619	166,944	74,352

出所：保健産業情報センター

http://125.60.29.108:9900/statHtml/stat_html/statHtml.do?orgId=358&tblId=DT_IC_M_3&conn_path=I3、2016 年 5 月 3 日アクセス。

なお、2012 年度にアジアでの FDI 数値が前年対比 10 倍以上伸びた要因は、LG 生活健康が日本で行った化粧品通販会社である銀座ステファニーM&A によるものであると思われる。LG 生活健康は、日本市場での足掛かりとして日本の通販化粧品販売大手の銀座ステファニーの 70%の株式を買収し、残り 30%も 3 年以内に取得することが決まった⁶。この 2012 年の急激な増加を差し引いても、2013 年の対アジア FDI の金額は、2011 年の金額の 5 倍弱に上る。韓国化粧品企業によるアジア市場への FDI の増加の理由としては、化粧品市場の地域別の成長率から最も高い地域がアジア市場であるからである。

表 3 は、韓国企業の対外 FDI の規模と比率を、FDI 先の国別に示したものである。アジア地域の投資先として一番大きい国は中国で、韓国企業の対外 FDI 全体に占める比率は約 50%を占めている。この比率は香港まで含めると 60%以上に達している。アジアで 2 番目に大きい投資先の国は、シンガポールであり、自由貿易や無関税制度を活用したアジア市場への販売拠点確保がその理由であると考えられる。

韓国化粧品産業の FDI の動向

表 3、化粧品企業の国別対外 FDI 統計 (単位：千ドル、%)

国別	2012		2013	
	金額	比率	金額	比率
中国	29,784	17.8	34,941	47
シンガポール	1,000	0.6	15,618	21
香港	2,459	1.5	10,692	14.4
アメリカ	4,981	3	4,825	6.5
インドネシア	1,940	1.2	3,594	4.8
日本	120,469	72.2	1,597	2.1
マカオ	-	-	916	1.2
ベトナム	-	-	585	0.8
モンゴル	640	0.4	300	0.4
カナダ	-	-	300	0.4
マレーシア	1,400	0.8	-	-
フィリピン	1,128	0.7	-	-
ドミニカ	1,000	0.6	-	-

出所：保健産業情報センター

http://125.60.29.108:9900/statHtml/stat_html/statHtml.do?orgId=358&tblId=DT_IC_M_4&connPath=I3、2016年5月3日アクセス。

先進国であるアメリカや日本での投資額が少ないのは、これらの先進国市場においては韓国化粧品の浸透が進んでいないためであると思われる。韓国化粧品産業が急速にそのブランド力や品質水準を高めてきたことは事実であるが、まだ化粧品先進国であるアメリカや日本の市場に通用するほどではない。例えば、アモーレ・パシフィックは2006年から日本市場にプレステージ化粧品を投入したが、日本の消費者に受け入れられず2010年には撤退を強いられた。現在、日本におけるアモーレ・パシフィックの事業展開は、中低価格化粧品（ETUDE HOUSE）店舗展開とテレビ通販（IOPE）のみに限られている。

3. 韓国化粧品企業の対外 FDI の特徴

韓国化粧品企業による対外 FDI には、「現地市場進出」に特化しているという傾向が見られる。表 4 は、2009 年から 2013 年にかけての韓国化粧品企業の化粧品関連の対外直接投資の目的別に区分した推移を示したものである。韓国化粧品企業の化粧品関連の対外直接投資総額は、2009 年の 1,661

万ドルから 2013 年の 7,435 万ドルへと大きく増加している。特に、現地市場進出を目的とする対外直接投資は、金額・比率ともに大きく増加している。LG 生活健康による銀座ステファニーの M&A も現地市場開拓の一環であると考えられる。

表 4、韓国化粧品業界の目的別 FDI 統計

(金額の単位：千ドル、比率の単位：%)

		2009	2010	2011	2012	2013
現地市場進出	金額	11,241	20,592	12,381	163,758	69,665
	比率					93.7
輸出促進	金額	3,212	4,389	2,617	2,317	4,275
	比率					5.7
資源開発	金額	0	0	0	1,000	0
	比率					
低賃金活用	金額	1,347	906	370	270	232
	比率					0.3
第 3 国への進出	金額	0	4,050	100	0	180
	比率					0.2
保護貿易迂回	金額	0	1,530	0	0	0
	比率					
先進技術導入	金額	806	602	0	0	0
	比率					
合計		16,606	32,069	15,468	167,345	74,352

出所：保健産業情報センター

http://125.60.29.108:9900/statHtml/stat_html/statHtml.do?orgId=358&tblId=DT_IC_M_5&connPath=I3, 2016 年 5 月 3 日アクセス。

また、2010 年まで「先進技術導入」を目的とする対外 FDI が行われてきたものの、2011 年以降は行われていない。これは、韓国企業が自前の技術開発及び技術の活用に特化しようとしたことのためであると思われる。「低賃金活用」を目的にした FDI は、主に工場などの生産拠点を構築するものであるが、韓国化粧品企業の海外で生産工場設立している国は中国のみである。したがって、「低賃金活用」の大半は、中国への FDI で占められているといえる。

本節の分析より、韓国化粧品企業の FDI は 2009 年に比べ約 5 倍弱伸びている。また 3 つの特徴が確認できた。まず、第 1 の特徴は、韓国化粧品企業の FDI 先はアジア地域に集中していて、そのうち、

9 割以上の FDI が中国に集中していることである。次に、第 2 の特徴は、M&A よりグリーンフィールド投資が多いということである。そして、第 3 の特徴は、グリーンフィールド投資のうち、「現地市場進出」を目的とした投資が 9 割を超えていることである。

IV. 主な韓国化粧品企業の海外進出戦略

1. アモーレ・パシフィック

アモーレ・パシフィックは、40 年以上に渡り国内シェアがトップの企業である。同社は、国内における事業拡大の際、M&A より自前主義をとることで知られている。海外進出においても、M&A は、必要最小限度に抑えられている。すなわち、韓国化粧品企業のなかで、アモーレ・パシフィック社は、海外市場に進出する際に、生産拠点、販売拠点、さらには研究開発拠点など、あらゆる事業活動の拠点を、可能な限り、M&A ではなくグリーンフィールド投資によって設立してきた経緯がある⁷⁾。

たとえば、日本市場への進出において、LG 生活健康は、先述した銀座ステファニーの買収のほか健康食品の「皇潤」で知られている通信販売会社であるエバーライフの買収など、M&A を積極的に行ってきた。これに対し、アモーレ・パシフィックは、合弁事業や買収などの手法を用いず、自社の経営資源だけを用いて、2005 年に日本現地子会社アモーレ・パシフィック・ジャパンを設立した。LG 生活健康の現地企業の買収の主な目的の 1 つは、現地企業の持つ流通・販売網を積極的に活用することにあつたが、これに対して、アモーレ・パシフィックは、日本のどの企業とも業務提携を行っていない。

2. LG 生活健康

LG 生活健康は、化粧品の韓国国内市場シェアが 2 位（約 15%）の企業である。同社は、化粧品、生活用品、飲料の事業カテゴリーを有している会社である。LG 生活健康はアモーレ・パシフィックとは違い、国内外で M&A、合弁、事業提携を積極的に行う企業である。表 6 で示したように、LG 生活健康は、国内の M&A では、化粧品専門販売店最大手であるザ・フェイスショップ（THEFACESHOP）の買収によって販売店の強化を図ったほか、色物化粧品ブランドであるバイオレットドリームを買収し製品カテゴリーの拡大のための事例がある（表 5）。

海外の M&A では、日本企業を対象にしたケースが 2 つあり、両ケースとも販売網の確保が目的であった。シンガポールの M&A のケースでは、その主な目的は対東南アジア向けの貿易拠点の確保であった。表 6 は、LG 生活健康が事業拡大の手段として、M&A だけではなく合弁会社設立や資本提携にも積極的に取り組んできたことを表している。

表5、LG生活健康のM&A現況

(単位：億ウォン)

会社名	時期	出資比率	投資金額	事業分野
コカ・コーラ	2007年10月	90%	3,251	飲料
ダイヤモンド水	2009年10月	100%	112	飲料
ザ・フェイスショップ	2010年1月	100%	3,889	化粧品
韓国飲料	2010年3月	100%	143	飲料
ヘテ飲料	2011年1月	100%	0	飲料
バイオレットドリーム	2012年2月	100%	550	化粧品
銀座ステファニー	2013年2月	70%	1,319	化粧品
エバーライフ	2013年1月	100%	3,300	健康食品
TFS シンガポール	2013年3月	100%	172	貿易

出所：韓経 Business 2013年 第912号

表6、LG生活健康の合併・提携の現況

会社名	時期	出資比率	区分	目的
ユニチャム	2006年2月	49%	合併	技術提携
ダノン	2009年4月	-	提携	乳製品提携
クリーンソウル	2012年6月	50%	合併	-
コティ	2012年7月	49.5%	合併	販売強化
XIBAO	2013年1月	60%	合併	中国内陸拠点
SANITA	2013年3月	55%	合併	中東地域拠点
K&I	2013年3月	40%	持株投資	原料版權確保

出所：韓経 Business 2013年 第912号

おわりに

本研究は、近年、国際競争力を高めている韓国化粧品企業の海外進出戦略を明らかにするための、マクロデータと化粧品産業の統計を取り入れた予備的な研究である。韓国化粧品企業のFDI総額は、2009年から2013年にかけて約5倍増加した。このようなFDI総額増加の背景には、国内市場の成長の限界と政府の政策、資本と技術の蓄積、東南アジアの経済成長などの要因があったと考えられる。国内外の統計データからは、韓国化粧品企業のFDIがアジア、とりわけ中国に集中していることが明らかになった。また、韓国化粧品企業のFDIの目的を調べた結果、「現地市場進出のため」が90%以上を占めていた。

韓国化粧品産業の FDI の動向

韓国企業全体の FDI データからは、従来の韓国企業が好む FDI は M&A よりグリーンフィールド投資であったが、LG 生活健康は例外的に、むしろ M&A や合併事業に積極的であった。一方、韓国化粧品業界の最大手のアモーレ・パシフィックは、自前主義を一貫して貫いているのがわかった。

しかしながら、今回の研究では、韓国化粧品企業の海外進出と企業の競争力との相関関係まで明らかにすることができなかった。言い換えると、競争優位があるから海外市場の開拓をするため FDI をするのか、競争優位を獲得するため FDI をするのかが明らかではない。また、先行研究で取り上げた内部化理論との整合性があるのか否かも十分な検証ができなかった。今後の課題として取り組むたい。

注

1 「重点育成産業」とは、韓国政府が選定、予算を一定期間集中的に割り当てる産業のことである。発展の見込みがある特定の産業を積極的に支援することで、政府は、輸出競争力の向上や雇用の創出といった経済上の効果を得ることを目指している。

2 OECD=IMF での FDI 定義は、「ある国に居住する法人または自然人のうち、別の国において永続的な活動を目的に行われる投資」である（関下 2002、94 頁）。

3 化粧品企業に関する FDI の研究が少ない理由としては、全産業の規模や GDP に占める比重の低さがあると考えられる。

4 韓国統計庁報道資料 <http://www.kostat.go.kr>, 2016 年 5 月 8 日アクセス。

5 化粧品人口に関する学術的な定義は定かではない。化粧品人口という概念は資生堂が初めて提示したとされる。資生堂は中国における化粧品人口の定義を、①都市部居住、②20 歳以上、③年収 3 万元以上としている。

6 銀座ステファニーウェブサイト「銀座ステファニー化粧品株式会社の株式譲渡に関するお知らせ」
<https://www.ginza-stefany.com/news/428>, 2016 年 10 月 3 日アクセス。

7 例外的に、アモーレ・パシフィック社は海外事業開始後、初めてフランスの香水ブランドである Anninck Goutal 社の M&A を行った。Financial Times web 版 <http://www.ft.com/cms/s/2/6af6c6a2-1439-11e1-b07b-00144feabdc0.html#axzz4DhHniQy6>. 2016 年 6 月 3 日アクセス。

参考文献

<日本語文献>

尹錫彦（1999）「韓国企業の海外直接投資：その推移と M&A 経験」『国際研究フォーラム』11、167 頁～183 頁。

関下稔（2002）「海外直接投資の概念規定に関する一考察-OECD Benchmark Definition of Foreign Direct Investment, Third Edition を中心にして-」立命館国際研究 14-4、March、91 頁～116 頁。

畠山俊宏（2010）「海外研究開発拠点の地域特性-理知特殊優位性の視点から-」『社会システム研究』第 21 号、185 頁～208 頁。

< 英語文献 >

- Buckley, P. 1983. "New theories of international business: Some unsolved issues." In M. Casson, ed. *The Growth of International Business*. London: George Allen & Unwin.
- Buckley and M. Casson, 1981. "Optimal timing of a foreign direct investment." *Economic Journal* 91. pp.75-87
- Casson, M. 1979. *Alternatives to the Multinational Enterprise*. London: Macmillan.
- Caves, R. 1974. "The causes of direct investment: Foreign firms shares in Canadian and UK manufacturing industries." *Review of Economics and Statistics* 56. pp. 279-293.
- Dunning, J. 1981. *International Production and the Multinational Enterprise*. London: George Allen & Unwin.
- Hirsh, S. 1976. "An international trade and investment theory of the firm." *Oxford Economic Papers* 28. pp. 258-270.
- Horst, T. 1972. "Firm and industry determinants of the decision to invest abroad: An empirical study." *Review of Economics and statistics* 54. pp. 258-266.
- Hymer, S. 1976. *The International Operations of National Firms: A Study of Direct Foreign Investment*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Rugman, A. 1981. *Inside the Multinationals*. London: Croom Helm.
- Vernon, R. 1966. "International investment and international trade in the product cycle." *Quarterly Journal of Economics* 80, pp. 190-207.
- Wells, L. 1972. *The Product Life Cycle and International Trade*. Cambridge, Mass: Harvard University Press.
- Wolf, B. 1977. "Industrial diversification and internationalization: Some empirical evidence." *Journal of Industrial Economics* 26. pp. 177-91.

< 韓国文献 >

- 韓経ビジネス 2013 年 第 912 号、韓国経済新聞社。
- Kim, Hyok-hwang (2012) 『最近の国内企業による M&A の主な特徴』 対外経済研究院。
- Kim, Soo-yoen (2015) 「海外 M&A 現状及びその課題」 韓国経済研究院 KERI Brief. pp.15-20.
- 徐健錫編 (2015) 『2014 年化粧品産業報告書』、韓国保健産業振興院。
- Moon, H.C.(2002) 「海外直接投資の動機、グローバル調整及び進入累計を説明する新しい理論：韓国企業の実証分析の為の不均衡理論」 国際・地域研究 11 巻 4 号、pp. 1-20.

< Internet Sources >

- OECD FDI Statistics: <https://www.oecd.org>
- 韓国保健産業振興院、保健情報センター <https://www.khidi.or.kr>
- 韓国輸出入銀行: <https://www.koreaexim.go.kr>
- Financial Times : <http://www.ft.com>

「環境配慮型設備投資のキャッシュフロー分析 —中国中小鉄鋼企業A社のケース—」

「Cash flow analysis of the environment-conscious capital investment —Case of Chinese small and medium size steel company A—」

経済学研究科経済学専攻博士後期課程在学

蒙 雪 超

MENG XUECHAO

はじめに

近年中国の環境問題は日々深刻化している。環境汚染は地域社会経済の持続的発展にとり甚大な制約要因となり、一般大衆の健康を脅かすようになった。環境汚染の原因を探ると、数多くの重汚染企業の存在はその中の一つ重要な原因であった。2006年から「持続的可能な社会」を構築するために、中国政府は重汚染企業に対する改善を促し始めた。鉄鋼業、化学業なども主な改善すべき業界になった。政府は企業の設備更新や廃棄物処理設備の購入などを促しはじめた。改善すれば、政府から一部の補助金をもらえ、もし改善しなければ、生産の停止が命じられる。このような状況下で、環境負荷の削減及びコストの削減のために、多くの中国中小企業も環境配慮型設備投資を行ってきた。

蒙（2015）では、マテリアルフローコスト会計（以下 MFCA と略す）による中国中小鉄鋼企業 A 社の環境配慮型設備投資の環境性効果を明らかにした。本研究は続いて中国中小鉄鋼企業 A 社を対象とし、キャッシュフローベースで環境配慮型設備投資の経済性効果を分析する。環境保全できると同時に経済面で設備投資の効果を考察する。それによって、中国中小企業の環境配慮型設備投資を促す。中小企業は中国に数多く存在しているので、根本的に中国の環境問題を改善するために、中小企業の環境問題も重視しなければならない。それも本稿を研究する意義になる。

本稿の構成は以下のとおりである。第1節では、環境配慮型設備投資に関する先行研究を紹介する。第2節では、A社2014年~2015年における環境配慮型設備投資の詳細を紹介する。第3節では、費用分解によって年間現金支出原価節約額を計算する。第4節では、A社年間のP/L、B/Sから得られるキャッシュフロー・データを参考に、内部利益率（Internal Rate Return, 以下IRRと略す）及び正味現在価値（Net Present Value, 以下NPVと略す）によって環境配慮型設備投資効果を含む全社的経済性分析をする。最後では、本稿の結論と残された課題を論じる。

I. 先行研究

1. 環境配慮型設備投資の位置づけ

企業活動に伴う副産物として発生する、排気ガス、廃液、廃棄物、あるいは廃熱などの環境負荷物を適切に管理して、そのまま地球環境に放出しないことは環境マネジメントの基本である。このような環境負荷物をコントロールするため、それぞれの目的に合わせた設備投資を行うことが環境配慮型設備投資（Capital Investments for Environment, 以下 CifE と略す）である（國部, 2004）。

企業は環境マネジメントの一環として、企業活動を遂行する過程で排出される環境負荷をいかに削減するかに腐心している。日々の環境改善活動でそれらの負荷量を小さくすることも可能であるが、設備投資により、根本的あるいは改善活動と比して大きな環境負荷削減効果を期待することができる（小倉, 2004）。

企業活動に伴って発生する環境負荷物を削減し、環境を保護するという環境マネジメントの目的を達成するためには、環境に配慮した設備投資が果たす役割は重要である。設備の新設、取り替え、追加などを伴わない改善努力だけで環境負荷の引き下げを実現できる範囲には限界があるからである（小倉, 2004）。

2. CifE の分類

設備投資案の相互関係による分類すると、以下のような関係を持っている。

(1) 独立投資案：各投資案が相互に無関係であり、採否の評価は各投資案別に行われる。

(2) 従属投資案

①相互排他的投資：どちらかを採用すれば他方は棄却されるような投資案

②補完投資：両案を採用することで相乗効果が期待できるような投資案

③前提投資：ある投資案の採否を前提に他の投資案が存在する場合

なお、CifE は中長期的な環境目標を達成するための1つの手段である。このため、環境設備投資を一般の設備投資から区分する基準は、中長期的な観点から環境目標の実現手段として設備投資のことである。このような環境設備投資には、次の2種類がある。1つは環境負荷物を管理するため、業務用の設備から排出される排気や排水から有害物質を取り除く設備で、エンド・オブ・パイプ型環境設備投資と呼ばれる。もう1つは環境負荷物を消費しないものにプロセス全体（または一部）を替えてゆく場合、インプロセス型環境設備投資と呼ぶ（西澤, 2010）。

3. CifE の経済性計算

CifE の経済性評価の手法には主に、回収期間法、投資利益率法、正味現在価値法、内部利益率法、投資効率指数法がある。これらの計算方法の多くは割引キャッシュフロー法を応用した計算を行っている。したがって、これらの方法を実行するためには、将来のキャッシュフローの予測を行うとともに

「環境配慮型設備投資のキャッシュフロー分析—中国中小鉄鋼企業 A 社のケース—」

に、割引率のもととなる資本コストの水準を決めなければならない。

また、外部からのキャッシュインフローだけではなく、コストの削減も利益になることに注意すべきである。特に、環境配慮型設備の場合には、その設備の運用によって収入が発生したり、増加したりすることは少ない。多くの場合、消費エネルギーの節約や廃棄物の削減による廃棄費用の節約など、コスト削減による利益向上の効果が大きいので、コスト削減の大きさを金額で把握することが大切である（経済産業省、2002）。

本研究は内部利益率法と正味現在価値法を用いて A 社の環境配慮型設備投資効果を含む全社的経済性効果を分析するために、ここに IRR 法と NPV 法について紹介する。

（1）内部利益率法（IRR 法）

内部利益率法とは、投資案の耐用年数にわたって発生する現金流入額の現在価値合計と投資額を等しくする割引率（IRR）を内部利益とし、それが必要収益率よりも大きければその投資案を採用する方法である。すなわち、次の関係を満たす割引率が内部利益率である。

（2）正味現在価値法（NPV 法）

正味現在価値法とは、投資案の耐用年数における現金流入額を一定の割引率（資本コストまたは最低必要収益率と呼ぶ）で割引いて現金流入額の現在価値を計算し、そこから投資案の支出総額を差し引いて正味現在価値（NPV）を求め、それを投資の判断基準とする方法である。正味現在価値がプラスならばその投資案は採用に値し、それがマイナスならば採用に値しないと判断する技法である。

II. A 社 2014 年～2015 年における環境配慮型設備投資の詳細

A 社は中国河北省における、主に凹形鋼を生産して、従業員数約 200 人、資本金約 6 億円の中小鉄鋼企業である。鉄鋼企業として、石炭の使用量が多く、廃ガス・すすなど廃棄物の発生も伴う。そこで、これらの環境負荷およびコスト削減のために、2014 年～2015 年における、設備投資を行った（表 1 参照）。

表 1 設備投資案の内容

投資年月	投資項目	投資目的
2014年 8 月	ガス発生炉	石炭の使用量を減らすこと
2014年 8 月	加熱炉	エネルギーの使用効率を高めること
2014年 8 月	冷却ベッド	廃棄物などマテリアルロスを減らすこと，完成品の比率を上げること
2014年 8 月	天井クレーン	生産量増加の要求を満たすこと
2014年 12 月	脱硫設備	二酸化硫黄を除去すること
2014年 12 月	オンラインモニター設備	脱硫量及びダストの除去量はネットでモニターすること
2015年 8 月	二段式ガス発生炉	効率的に石炭を利用すること，ダストを除去すること

注：環境保護局 1 に申し込んで，脱硫設備及びオンラインモニター設備の投資額の 20%～30%の補助金をもらえる。

表 1 では 2014 年～2015 年における行った設備投資項目，投資年月，投資目的を明らかにした。その上，表 2 に各設備投資の取得原価を明確した。次に，表 3 に設備投資の関連支出を明らかにする。さらに，表 2 の各設備の取得原価と表 3 の設備投資の関連支出を合わせて，表 4 に 2014 年～2015 年における環境配慮型設備投資の総コストを総計する。

表 2 各設備の取得原価

投資年月	投資項目	購入/改善	金額(元)
2014年 8 月	ガス発生炉	1 台購入	481,219.40
2014年 8 月	加熱炉	1 台購入	110,936.10
2014年 8 月	冷却ベッド	6 メートル延長	139,840.50
2014年 8 月	天井クレーン	1 台購入	184,167.00
2014年 12 月	オンライン監視	1 台購入	98,000.00
2014年 12 月	脱硫設備	1 台購入	522,820.00
2015年 8 月	二段ガス発生炉	従来のガス発生炉の改善	619,878.00
計			2,156,861.00

表 3 設備投資関連支出

投資年月	名称	金額 (元)
2014年 8 月	人件費	100,000.00
2014年 8 月	補助材料	133,833.00
2014年 8 月	機械分解費	11,000.00
2014年 12 月	建設費	162,000.00
計		406,833.00

表 4 2014 年～2015 年における環境配慮型設備投資の総コスト

項目	金額 (元)
設備取得原価	2,156,861.00
設備関連支出	406,833.00
計	2,563,694.00

Ⅲ. 費用分解に基づく年間現金支出原価節約額の計算

キャッシュフローにおける環境配慮型設備投資の経済性効果を分析するために、設備投資前のデータを用いて、費用分解を行う。それによって設備投資前の毎月の固定費と単位あたりの変動費を推測する。さらに設備投資後 1 年間の生産量に応じて、年間の製造原価を予測する。そのうえで、実際の年間の製造原価と比較し、年間現金支出原価節約額を計算することができる。

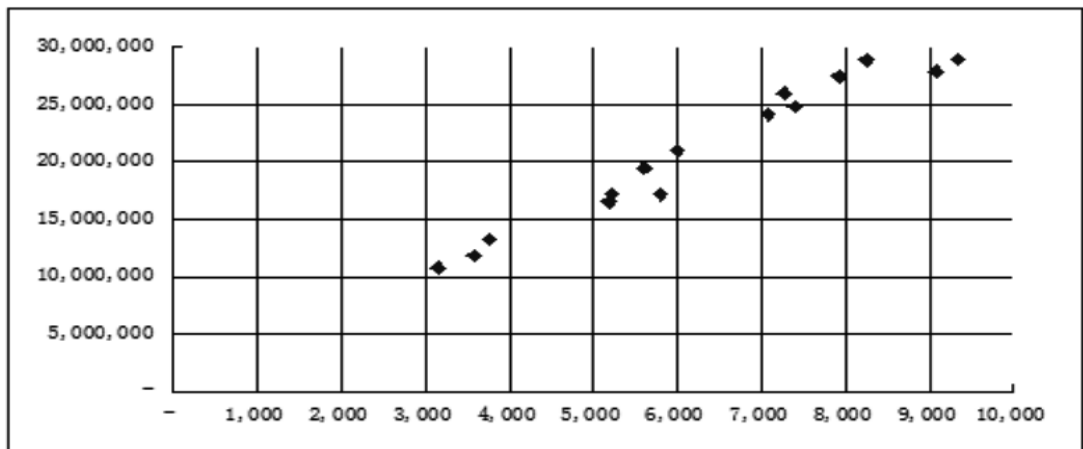
まず、設備投資前の 15 ヶ月分の製造原価データを収集した (表 5 参照)。A 社は 2012 年 9 月に 1 回目の設備投資を行った。2014 年 7 月に 2 回目の設備投資を行った。本研究は 2014 年 7 月の設備投資の効果を分析するために、2012 年 10 月から 2014 年 6 月までの 15 ヶ月分のデータは設備投資前のデータとして収集した。なお、そのうち生産停止月のデータは除いた。次に、月次の生産量と製造原価を散布図で表示した (図 1 参照)。X 軸は生産量で、単位トンであり、Y 軸は製造原価で、単位元である。

表5 設備投資前15ヶ月生産量及び生産原価

月次	生産量 (t)	製造原価(元)
2012年10月	3,761	13,269,341
2012年11月	7,918	27,472,944
2013年1月	5,599	19,479,506
2013年3月	7,271	25,956,115
2013年4月	8,250	28,901,122
2013年5月	5,997	20,943,378
2013年9月	7,078	24,134,018
2013年10月	3,575	11,840,068
2013年11月	5,220	17,236,496
2013年12月	7,393	24,803,424
2014年1月	3,148	10,776,458
2014年3月	9,079	27,900,418
2014年4月	9,331	28,948,010
2014年5月	5,188	16,507,610
2014年6月	5,796	17,186,493

注：設備前の毎月の製造原価は減価償却費を除いた。

図1 設備投資前の各月の生産量と製造原価の散布図



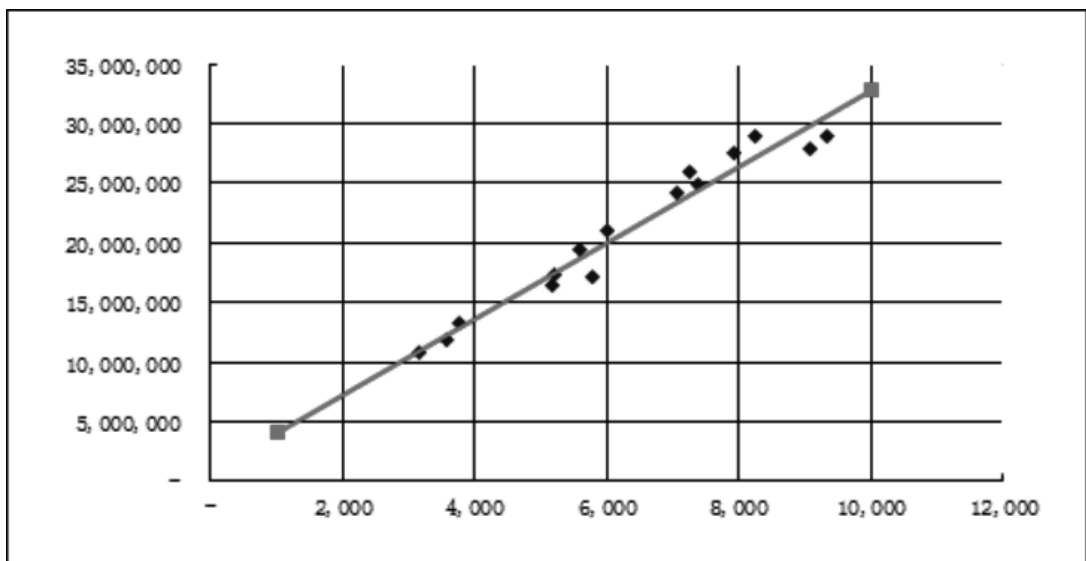
「環境配慮型設備投資のキャッシュフロー分析—中国中小鉄鋼企業 A 社のケース—」

図 1 から設備投資前の毎月の生産量と製造原価は一定の関係を持っていることが予測される。その関係を明らかにするために、最小二乗法²を用いて、単位当たりの変動製造原価と製造固定費を推定する。15 個の観測数の重相関係数は 0.98 になるため³、毎月の生産量と製造原価は関係性を持っていることが予測できる。それによって、推定式は次のようになる。

$$Y = 3190X + 906747$$

X は生産量(トン)である、Y は製造原価(元)である(図 2 参照)。つまり、1 t あたり変動製造原価は 3,190 元と推定され、毎月の固定製造原価は 906,747 元と推定された。図 2 の直線は最小二乗法による回帰式で、点は実際値である。

図 2 設備投資前の毎月の生産量に応じた製造原価の予測値



さらに設備投資後 1 年間の生産量(表 6 参照)に応じて、年間の製造原価を予測する。そのうえで、実際の年間の製造原価(表 6 参照)と比較し、年間現金支出原価節約額を計算することができる。

つまり、設備投資後の年間製造原価推定値から実際の年間製造原価(減価償却費を除く)を差し引いて、年間現金支出原価節約額を計算する(計算式は以下の枠内になる)。A 社は 2014 年~2015 年の設備投資を通じて、年間 86,539,900 元の現金支出原価の節約額があった。これがキャッシュフローにおける環境配慮型設備投資の経済性効果である。

表 6 設備投資後の年間の生産量及び各月の実際製造原価

月次	生産量 (トン)	製造原価 (元)	(内減価償却費)
2014年 9 月	6,440	18,417,227	19,125
2014年 10 月	8,662	23,413,835	192,027
2014年 11 月	9,309	24,421,347	138,675
2014年 12 月	6,743	16,350,388	131,027
2015年 1 月	2,780	6,949,620	131,027
2015年 2 月	0	0	0
2015年 3 月	11,130	25,505,417	262,054
2015年 4 月	13,765	30,428,277	0
2015年 5 月	13,682	30,719,966	185,725
2015年 6 月	7,899	16,701,154	185,725
2015年 7 月	0	0	0
2015年 8 月	0	0	0
2015年 9 月	8,610	16,836,912	185,725
計	89,019	209,744,143	1,431,110

設備投資しなかったとする場合の年間製造原価推定値

$$= 3,190 \times \text{年間生産量} + 906,747 \times 12 \text{ ヶ月}$$

$$= 3,190 \times 89,019 + 906,747 \times 12$$

$$= 294,852,933 \text{ 元}$$

年間現金支出原価節約額

$$= \text{年間製造原価推定値} - (\text{設備投資後の年間実際製造原価} - \text{減価償却費})$$

$$= 294,852,933 - (209,744,143 - 1,431,110)$$

$$= 86,539,900 \text{ 元}$$

IV. IRR 法と NPV 法による環境配慮型設備投資効果を含む全社的経済性分析

CiFe の経済性効果を分析するために、内部利益率法 (IRR 法)、正味現在価値法 (NPV 法)、回収期間法などがあるが、本研究は IRR 法、NPV 法で A 社の環境配慮型設備投資効果を含む全社的経済性効果を評価するために、A 社年間の P/L、B/S から得られるキャッシュフロー・データを参考に、まず A 社 2014 年 8 月 31 日時点における投資の現在価値を計算する。次に、1 年後の 2015 年 8 月 31

「環境配慮型設備投資のキャッシュフロー分析—中国中小鉄鋼企業 A 社のケース—」

日時点のキャッシュフロー（以下 CF と略す）の現在価値を計算する。最後に、エクセルで 2015 年 8 月末時点の CF の現在価値と同額が今後 10 年間の CF として確保できると仮定する場合の A 社 2014 年 8 月 31 日時点における投資の IRR 及び NPV を計算する。それで、キャッシュフロー上で、環境配慮型設備投資も含む全社の投資の採算性を明らかにする。

1. A 社 2014 年 8 月 31 日時点における投資の現在価値の計算

A 社 2014 年 8 月、2014 年 12 月、2015 年 8 月における設備投資を行ったため、2014 年 8 月 31 日時点の投資の現在価値を計算するために、2014 年 8 月 31 日時点の投下資本と 2014 年 12 月 31 日時点の投下資本増加分の 2014 年 8 月 31 日時点の現在価値と 2015 年 8 月 31 日時点の投下資本増加分の 2014 年 8 月 31 日時点の現在価値の合計を計算する。以下は計算式になる。

A 社の 2014 年 8 月 31 日時点における投資の現在価値

= 2014 年 8 月 31 日時点の投下資本

+ 2014 年 12 月 31 日時点の投下資本増加分の 2014 年 8 月 31 日時点の現在価値

+ 2015 年 8 月 31 日時点の投下資本増加分の 2014 年 8 月 31 日時点の現在価値

表 7 A 社 2014 年 8 月、12 月および 2015 年 12 月の月次の貸借対照表

貸借対照表							
資産の部				負債の部			
	2014年8月	2014年12月	2015年8月		2014年8月	2014年12月	2015年8月
I 流動資産：				I 流動負債			
現金預金	2,730,525	8,826,894	10,490,268.43	短期借入金	15,952,800	17,408,800	12,511,480.00
その他貨幣資金	109,120	0	-	買掛金	566,950	1,692,437	977,436.13
売掛金	149,959	799,697	188,810.39	前受金	1,527	1,527	1,526.80
前渡金	7,600	7,469	-146,760.00	未払給料	288,724	903,393	458,846.00
その他売掛金	2,867,015	2,867,015	2,861,190.80	未払費用	894,614	758,225	843,574.60
製品	485,518	4,457,271	768,151.52	流動負債合計	17,704,614	20,764,381	14,792,864
前払費用	172,500	435,582	477,282.86	II 固定負債			
原材料	10,153,011	4,090,644	6,284,408.13	固定負債合計	0.00	0.00	0.00
包装物	115,457	75,257	12,070.45	純資産の部			
低額消耗品	246,180	381,653	300,257.49	払込資本金	17,800,000	17,800,000	17,800,000.00
流動資産合計	17,036,884	21,941,481	21,235,680	未処分利益	-2,359,621	-2,359,621	-2,865,416.47
II 固定資産：				当期利益	-2,235,783	-505,796	5,288,174.63
固定資産原価	13,106,164	13,136,664	13,173,663.62	純資産の合計	13,204,596	14,934,584	20,222,758
建設仮勘定	766,163	620,820	606,278.00				
固定資産合計：	13,872,327	13,757,484	13,779,942				
資産合計	30,909,210	35,698,965	35,015,622	負債及び純資産の合計	30,909,210	35,698,965	35,015,622

注：単位元である。

なお、A社2014年8月の貸借対照表(表7)を参考に、2014年8月31時点の投下資本はその時点の短期借入金と純資産の総計になる。以下は計算式になる。

$$\begin{aligned}
 & \text{2014年8月31日時点の投下資本} \\
 & = \text{2014年8月31日時点の短期借入金} + \text{純資産} \\
 & = 15,952,800 + 13,204,596 \\
 & = 29,157,396 \text{ 元}
 \end{aligned}$$

そして、2014年12月31日時点の投下資本の増加分の2014年8月31日時点の現在価値を計算するために、年間資本コストは10%⁴にして、2014年9月から12月までの4ヶ月間の投下資本増加分(表7参照)とその期間の減価償却費(表6参照)を年間資本コストの1/4と考えて現在価値を計算する。以下は計算式になる。

$$\begin{aligned}
 & \text{2014年12月31日時点の投下資本増加分の2014年8月31日時点の現在価値} \\
 & = (\text{投下資本増加分}^5 + \text{2014年9月} \sim \text{12月までの減価償却費}) / \\
 & \quad (1 + \text{年間資本コスト} \times 1/4)^1 \\
 & = (3,185,988 + 480,854) / (1 + 0.1 \times 1/4)^1 \\
 & = 3,666,842 / 1.025 \\
 & \approx 3,577,407 \text{ 元}
 \end{aligned}$$

最後に、2015年8月31日時点の投下資本増加分の2014年8月31日時点の現在価値を計算するために、2015年1月から8月までの間の投下資本の増加分(表7参照)とその期間の減価償却費(表6参照)を年間資本コスト10%と考えるときの現在価値を計算する。以下は計算式になる。

$$\begin{aligned}
 & \text{2015年8月31日時点の投下資本増加分の2014年8月31日時点の現在価値} \\
 & = (\text{投下資本増加分} + \text{2015年1月} \sim \text{2015年8月までの減価償却費}) / \\
 & \quad (1 + 0.1)^1 \\
 & = (390,855 + 764,531) / 1.1 \\
 & = 1,155,386 / 1.1 \\
 & \approx 1,050,351 \text{ 元}
 \end{aligned}$$

以上の計算を通して、A社の2014年8月31日時点における投資額の現在価値は総計33,785,154元になった。以下は計算式になる。

$$\begin{aligned}
 & \text{A社の2014年8月31日時点における投資の現在価値} \\
 & = 29,157,396 \text{ 元} + 3,577,407 \text{ 元} + 1,050,351 \text{ 元} \\
 & = 33,785,154 \text{ 元}
 \end{aligned}$$

2. 1年後の2015年8月31日時点におけるCFの現在価値の計算

2014年8月31日時点における投資の現在価値を計算した上に、1年後の2015年8月31日時点におけるCFの現在価値を計算するために、以下のような式になる。つまり、2014年9月～15年8月までのCF合計と15年9月6のCFの15年8月末時点での現在価値の合計になる。

$\begin{aligned} & \text{2015年8月末時点のCFの現在価値} \\ & = \text{2014年9月～15年8月までのCF合計} \\ & \quad + \text{15年9月のCFの15年8月末時点での現在価値} \end{aligned}$
--

なお、2014年9月～15年8月までのCFを計算するために、月次の「損益計算表」（40頁）を参考し、まず2014年9月から15年8月までの税引後の営業利益を計算する。しかし、減価償却費も含まれるので、その部分は法人税率をかけて戻す。以下は計算式になる。

$$\begin{aligned} & \text{2014年9月～15年8月までのCF} \\ & = \text{2014年9月～15年8月までの税引後営業利益} \\ & \quad + \text{2014年9月～15年8月までの減価償却費} \times \text{法人税率} 7 \\ & = \text{2014年9月～15年8月までの営業利益} 8 \times (1 - 0.25) \\ & \quad + \text{2014年9月～15年8月までの減価償却費} \times 0.25 \\ & = 6,885,032 \times (1 - 0.25) + 1,245,386 \times 0.25 \\ & = 5,475,121 \text{ 元} \end{aligned}$$

その後、2015年9月のCFの15年8月末時点での現在価値を計算するために、2015年9月末時点のCFで年間資本コストの1/12をかける。以下は計算式になる。

$$\begin{aligned} & \text{2015年9月のCFの15年8月末時点での現在価値} \\ & = (\text{2015年9月の税引後営業利益} + \text{2015年9月の減価償却費} \times \text{法人税率}) / (1 + \text{資本コスト} \div 12 \text{ヶ月}) \\ & = \{188,908 \times (1 - 0.25) + 185,725 \times 0.25\} / (1 + 0.1 \div 12) \\ & \approx 186,619 \text{ 元} \end{aligned}$$

以上の計算を通して、2015年8月末時点のCFの現在価値は約5,661,740元になった。

3. エクセルによるA社のIRR及びNPVの計算

2015年8月末時点のCFの現在価値と同額が今後10年間のCFとして確保できると仮定すると、 $33,785,154 \text{ 元} = 5,661,740 \times 10$ 年の年金現価係数を満たす内部利益率が資本コストの10%を上回るとき、この投資は採算性を確保できることになる。それではエクセルでA社のIRR及びNPVを計算する（表8参照）。

表8からA社のIRRは10.7%であるため、資本コスト(10%)を超えた。そして、NPVも1,003,787元であり、プラスになった。そのため、IRR法とNPV法によって、直近のCFが10年間確保できると仮定した場合、この企業への投下資本は採算性を確保できるといえる。つまり、キャッシュフローベースの複数年の環境配慮型設備投資の経済性効果を考察することができるようになった。

表8 A社のIRRとNPV

初年度の投資額	-33,785,154	初年度の投資額	-33,785,154
1年目のCF	5,661,740	1年目のNPV	5,147,036.36
2年目のCF	5,661,740	2年目のNPV	4,679,123.97
3年目のCF	5,661,740	3年目のNPV	4,253,749.06
4年目のCF	5,661,740	4年目のNPV	3,867,044.6
5年目のCF	5,661,740	5年目のNPV	3,515,495.09
6年目のCF	5,661,740	6年目のNPV	3,195,904.63
7年目のCF	5,661,740	7年目のNPV	2,905,367.84
8年目のCF	5,661,740	8年目のNPV	2,641,243.49
9年目のCF	5,661,740	9年目のNPV	2,401,130.45
10年目のCF	5,661,740	10年目のNPV	2,182,845.86
IRR=	10.7%	NPV=	1,003,787

おわりに

本研究の目的は、キャッシュフローベースで中国中小鉄鋼企業 A 社の環境配慮型設備投資の経済性効果を分析する。まず、費用分解を用いて推定した固定費と単位あたりの変動費によって、設備投資をしなかったと想定した場合の年間の製造原価を予測する。次に、これと実際の設備投資後の年間製造原価とを比較し現金支出原価節約額を見積る。これによって、キャッシュフロー上に設備投資後の経済性効果を見る。その後、年間の P/L、B/S から得られるキャッシュフロー・データを参考に、内部利益率法及び正味現在価値法によって環境配慮型設備投資効果を含む全社的経済性分析をする。それで、蒙（2015）の研究で解決できなかったキャッシュフローベースの経済性分析を行った。

そして、以上の分析を通して、A 社は 2014 年～2015 年の設備投資を通じて、年間 86,539,900 元の現金支出原価の節約額があった。なお、2015 年 8 月末時点の CF の現在価値と同額が今後 10 年間の CF として確保できると仮定する場合の IRR は 10.7%であるため、資本コスト（10%）を超えた。そのため、NPV も 1,003,787 元となり、プラスになった。よって、直近の CF が 10 年間確保できると仮定した場合、この企業への投下資本は採算性を確保できるといえる。

なお、中国の環境保護局に申し込んで、2014 年 12 月に行った脱硫設備及びオンラインモニター設備の投資額の 20%～30%までの補助金をもらえる。しかし、現時点でまだ申し込み中で、具体的な金額を確認できないため、引き続き A 社にインタビューする予定がある。本稿は年間現金支出原価節約額の計算及び IRR と NPV の計算だけで、環境配慮型設備投資効果を含む全社的経済性分析をしたが、今後補助金を確認すると同時に、A 社の環境配慮型設備投資を含む全社の投資の回収期間も計算してみたいと考えている。

注

注 1：環境保護局とは中国国務院の付属機関の一つである。主要業務は国家環境保護の政策と法規の決定、環境測定、統計、情報業務などに関する事務である。

注 2：最小二乗法とは測定で得られた数値の値を、適当なモデルから想定される 1 次関数、対数曲線など特定の関数を用いて近似する時に、想定する関数が測定値に対してよい近似となるように、残差の二乗和を最小とするような係数を決定する方法、あるいはそのような方法によって近似を行うことである。

注 3：四捨五入による。

注 4：資本コストとは企業が資本を調達・維持するために必要なコストのことである。通常はパーセンテージで表される。自己資本に関しては株式に対する配当金やキャピタル・ゲイン、他人資本に関しては借入金に対する支払利息が代表的である。資本コストは企業が最低限あげなければならない資本利益率、すなわち投資家による最低要求利益率である。A 社の短期借入金の年間利率は 10%であるため、本研究は A 社の資本コストも 10%と考えている。

注 5：投下資本増加分 = (2014 年 12 月の短期借入金 + 2014 年 12 月の純資産) - (2014 年 8 月の短期借入金 + 2014 年 8 月の純資産)

注 6：今回 A 社の 2014 年 9 月から 2015 年 9 月までの損益計算表（次頁参照）を収集したから、本研究は 2015 年 9 月の CF の 15 年 8 月末時点での現在価値も計算して入れた。

注 7：A 社の法人税率は 25%である。

注 8：2014 年 9 月～15 年 8 月までの営業利益 = 2014 年 9 月～15 年 8 月までの各月の営業利益の総計 = -479,783 + 174,373 + 764,079 + 1,238,803 - 1,681,703 - 45,436 + 1,102,777 + 6,395,493 + 1,346,836 - 78,675 - 1,125,121 - 726,613 = 6,885,032 元。

損益計算表

	2014年9月	2014年10月	2014年11月	2014年12月	2015年1月	2015年2月	2015年3月	2015年4月	2015年5月	2015年6月	2015年7月	2015年8月	2015年9月
I 主要業務収入	12,986,176	25,552,383	24,163,637	21,154,120	9,845,548	0	26,766,760	34,631,361	27,761,940	17,178,573	6,365,415	1,176,891	8,109,696
減: 主要業務原価	13,451,343	25,042,204	23,423,597	20,892,803	10,519,862	0	23,888,014	29,911,683	26,152,918	17,097,583	6,593,089	1,183,418	7,916,094
営業費用	36,791	71,399	76,375	39,253	123,616	7,500	27,534	94,961	79,872	107,907	58,563	14,997	51,106
主要業務税金及び付加	16,044	54,591	54,153	46,365	242,866	10,105	19,188	43,429	93,879	59,631	34,764	28,246	27,298
II 主要業務利益	-517,001	384,190	609,513	175,700	-1,040,796	-17,605	2,882,024	4,581,287	1,435,271	-86,548	-321,001	-49,770	125,199
加: その他業務利益	294,898	102,770	384,607	1,351,010	-316,523	119,962	-1,509,626	2,252,193	213,563	392,733	-605,934	-183,089	369,024
減: 管理費用	162,688	149,488	127,624	276,057	158,718	57,541	151,690	312,082	166,072	264,166	93,944	391,359	207,324
財務費用	94,992	163,099	102,416	11,849	165,666	90,252	117,931	125,906	135,925	120,694	104,242	102,394	97,991
III 営業利益	-479,783	174,373	764,079	1,238,803	-1,681,703	-45,436	1,102,777	6,395,493	1,346,836	-78,675	-1,125,121	-726,613	188,908
加: 営業外収入	4,220	12,000	16,240	12,175	9,078	0	12,090	20,320	31,094	19,780	9,120		12,430
減: 営業外支出	0	0	12,120	0	0	0	0	0	0	0	0		0
IV 利益総額	-475,563	186,373	768,199	1,250,978	-1,672,625	-45,436	1,114,867	6,415,813	1,377,930	-58,895	-1,116,001	-726,613	201,338
減: 所得税													
V 当期純利益	-475,563	186,373	768,199	1,250,978	-1,672,625	-45,436	1,114,867	6,415,813	1,377,930	-58,895	-1,116,001	-726,613	201,338

参考文献

- ・天野明広・國部克彦・松村寛一郎・玄場公規（2006）『環境経営のイノベーション』生産性出版
- ・平岡秀福（2008）『現代の会計と財務諸表分析』創成社
- ・岡本清（2000）『原価計算（6訂版）』国元書房
- ・國部克彦（2004）『環境管理会計入門』産業環境管理協会
- ・國部克彦（2011）『環境経営意思決定を支援する会計システム』中央経済社
- ・門田安弘（2008）『管理会計レクチャー』税務経理協会
- ・マーティン・ベネット&ピーター・ジェイムズ著・國部克彦監修・海野みづえ訳（2000）『緑の利益—環境管理会計の展開』産業環境管理協会
- ・マッテオ・バルトロメオ&マーチン・ベネット&ヤン・ヤープ・ボウマ&ピーター・ハイドキャンプ&ピーター・ジェイムズ&フォッペ・デ・ワレ&テン・ウォルターズ著・阿保栄司・矢澤秀雄・青木章通訳『環境管理会計』生産性出版
- ・西澤脩（2005）『企業価値の会計と管理—価値創造経営への途』白桃書房
- ・西澤脩（2007）『原価・管理会計論』中央経済社
- ・西澤脩（2010）『環境保全の会計と管理』東京リーガルマインド
- ・矢澤秀雄・湯田雅夫（2004）『環境管理会計概論』税務経理協会
- ・山田庫平・吉村聡（2006）『経営管理会計の基礎』東京経済情報出版
- ・山本浩二・小倉昇・尾畑裕・小菅正伸・中村博之『管理会計論』中央経済社
- ・西村明（2006）『アジアにおける企業経営・管理会計』中央経済社
- ・武田安弘（2001）『管理会計要説』創成社
- ・平岡秀福（2010）『企業と事業の財務的評価に関する研究』創成社
- ・浅田孝幸・頼誠・鈴木研一・中川優・佐々木郁子（2011）『管理会計・入門第3版』有斐閣
- ・渡辺康夫（2014）『図解 管理会計入門』東洋経済新報社
- ・桜井通晴・伊藤和憲（2007）『企業価値創造の管理会計』同文館出版
- ・高田直芳（2008）『「管理会計」入門』日本実業出版社
- ・建部宏明・山浦裕幸・長屋信義（2011）『基本管理会計』同文館出版
- ・谷武幸（2013）『エッセンシャル管理会計 第3版』中央経済社
- ・環境省（2005）『環境会計ガイドライン 2005年版』環境省
- ・経済産業省（2002）『環境管理会計手法ワークブック』経済産業省
- ・小倉昇（2004）「環境配慮型設備投資：手法の展開と企業事例」『環境ビジネス発展促進等調査研究報告書』社団法人産業環境管理協会，98-129頁
- ・蒙雪超（2014）「MFCA 手法の中国中小鉄鋼企業への適用」『創価大学大学院紀要』第36集 2014年12月発刊
- ・蒙雪超（2015）「中国中小鉄鋼企業の環境配慮型設備投資の効果分析」環境経営学会 2015年度年次大会個別研究発表報告の配布資料 発表日：2015年5月23日

インド鉄道における官民パートナーシップ(PPP)と 高速鉄道の展望

Public Private Partnership(PPP) in Indian Railways and Prospects of HSR

経済学研究科経済学専攻博士後期課程在学

フヤル モハン

Phuyal Mohan

はじめに

インフラ事業は、国において国民福祉の向上と国民経済の発展に必要な公共施設の整備事業のことである。現在、発展途上国や新興国の急速な経済発展に伴い世界各国にインフラ投資の維持需要が拡大しており、インフラ関連市場は大きな成長分野として注目を集めている。

本研究では、インド鉄道の歴史を振り返り、その後、インド政府の野心的なプロジェクトである高速鉄道 (High Speed Railway) の展望の現状について考察する。インド鉄道は、国民移動の第一位の交通手段であり、国内交通の 35% を占めている。インド鉄道によって独占的に営まれてきた鉄道である。インド鉄道が創業したのはイギリスの植民地時代、1853 年のことである。現在は、路線総延長約 6 万 3 千キロの路線網を有し、1 日に約 1 万 4 千本の列車を運行している [赤塚 山村 直史, 2009]。近年の人口増大の中、インドにおける鉄道利用数は年間 58 億人を超えている (Travel Latte, 2015)。また、140 万人以上の鉄道事業員を抱えるインド鉄道業界は世界第 5 位の規模ともいわれている。

一方、インド経済と社会インフラを比較するとインフラ整備、インフラ投資ビジネスなどが貧弱なものとなっている。インド鉄道はインド GDP に約 1% しか貢献できていないもののインド経済に欠かすことができない。従来インド鉄道の国有化はインド鉄道網拡大、法律改革はインド全体の経済発展に十分に貢献できていない、このことから近年インド政府は、インド鉄道を発展するためにインド鉄道省は 2009 年に設立した (India, 2015)。173 年の長い歴史を持っているインドの鉄道は、近年の過少投資を背景に、質の低いサービス、安全性、運行時間の不規則さといった深刻な問題に直面している。このような中でインド政府は、1991 年の外貨危機を契機に社会主義的統制経済からの脱却を目指し、経済の自由化を打ち出した [久野康成, 2012]。経済自由化以降、インド政府はインドの鉄道網を拡大するために海外直接投資の認可を内閣に求める方針を取ってきた。だが、インドの歴代政権は、国内鉄道網の近代化を目指してきたものの、低賃金や雇用の維持を求める声があがるなど、改革に対する国民の不満は、十分に解消されてこなかった。このような中で、2014/2015 年度にナレンドラ・

モディ政権は、民間資金の活用を打ち出し、2014/2015 年度だけで約 654 億ルピー約（109 億 500 ドル）を鉄道事業に支出する計画を明らかにした。

本稿では日本において十分に解明されていない、インド鉄道事業の課題の解消に官民パートナーシップ（Public Private Partnership 略称 PPP）が果たしうる役割について考察する。なお、PPP の定義は論者によって様々なものが存在するが、本稿では、インドにおける PPP の発展の背景を検討した上で、PPP を「事業の展開における官と民の協力」と定義する。

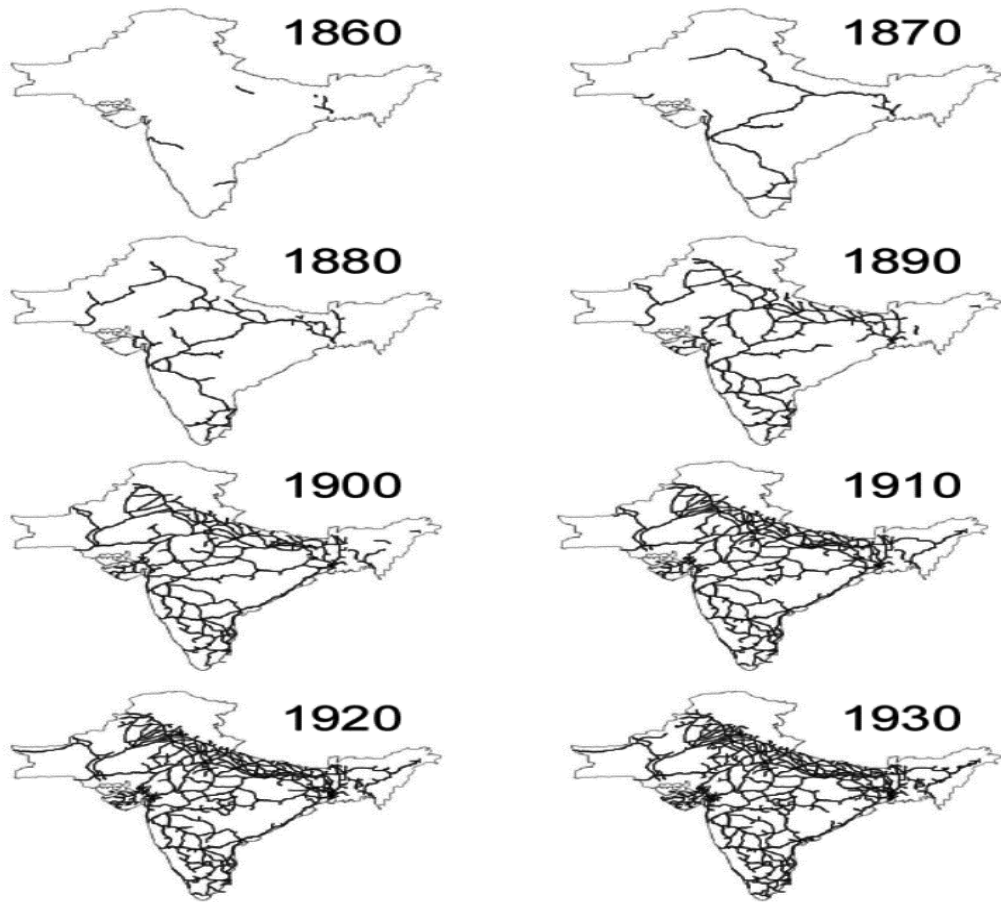
I. インド国鉄の歴史

1. 植民地とインド鉄道の由来

18 世紀半ばに産業革命が発生して以降、イギリスでは、植民地国から資源を調達し、本国で加工したものを国外へ輸出する加工貿易が発展していった。産業革命で貿易により蓄積された巨額の資本は、イギリス政府の保証による鉄道建設のような安全で恒久的な投資を求めている【日本近代史, 2015】。このような中で、当時イギリスの植民地であったインドにおいても、イギリスへの効率的な資源供給が目指されることとなった。当時のインド国内の交通の状況は、輸送のための道路が整備されていなかったために、人力・牛・馬などでわずかに国内を移動していただけのものであった。1840 年代にはイギリスの綿花の輸入の約 80% はアメリカに依存していた。だが、アメリカ南部での綿花不作での輸入価格高騰などを回壁のために、イギリスはアメリカによる供給地としてのインドの産業発展を必要とし、インドの内陸部への鉄道建設に取り組むようになった【日本の歴史, 2015】。このような背景の下で、東インド鉄道会社(1845 年)と大インド半島鉄道(1849 年)が設立された。また、インド亜大陸大手貿易会社であった、イギリスと東インド会社は、インド政府と契約交わし、イギリスの投資、技術により、鉄道網整備が急ピッチで進められた。そして、1853 年 4 月 16 日に、ボンベイ（現在ムンバイ）のポリ・ブンダーという波止場からターネという町までの約 34 キロをインド初の列車が走行した。1853 年の覚書では、インドにおける鉄道建設の主な目的として、以下のものが挙げられている【藤田, 2015】。

- 1) インド帝国のあらゆる点に対し、軍事力を高めること。
- 2) イギリスの企業と資本をインドへ運ぶこと。
- 3) インドの商業的および、社会的有用性を向上させること。
- 4) 世界各国から生産物を求めて、ヨーロッパの商品を広く送り込むことである。

図1、インド鉄道網発展過程 (1860-1930)



出所：(Donaldson, 2015)

図1は1860年から1930年にかけてのインド鉄道網の発展過程を示している。インド鉄道の発展過程は、第1期(1850-1868年)、第2期(1869-1882年)、第3期(1882-1902年)の3つの時期に分けられる。三輪吉郎によると当時の鉄道は、建設資金の利益保証を政府が行い、私的会社と政府の所有保証会社により建設され経営された。だが、1869年以降はインド政府の財政的窮乏と飢饉のために、鉄道事業の促進が遅れた結果、私的会社の建設が解禁された【吉郎 三輪, 1962】。

当時、インドでは、鉄道網の拡大による問題も複数存在していた。独立以降19世紀においてインド鉄道は混乱した政策から次第に統一的な政策へと転換していた。1951年にはインド鉄道業界は国有化され、インド全体の鉄道事業を営む会社はインド国有鉄道1社になりインド鉄道省の下に管理された。そのため、鉄道は28州と7直轄地をカバーし、国内数カ所に機関車と貨車の生産工場を保有していた。しかし、数多くの鉄道会社を統合したため、レールの建設からゲージ技術にも統一が見られ

ないといったさまざまな問題を抱え、結果として鉄道の延伸がなかなか進まなかった。さらにインド鉄道の運営は政策の混乱の中で、非効率な経営が長く続いた。

2. 1990年代以降のインド鉄道

1991年の経済改革の開始以降、インドの経済成長は急速に加速していく。州政府と中央政府が独自の規制を定め、過去に禁止されたインド国有鉄道事業でも外国投資と民間企業参入制度に関する規制が緩和された。鉄道網の拡大、先端の技術導入、安全な交通サービスの提供を目的として、インド政府は2009年に鉄道改革についての「インド鉄道ビジョン2020年」を策定する。

小島によると、基幹産業分野での公共部門独占体制が撤回されるとともに、民間企業の活動を制約していた産業許認可制度が撤廃されたという [小島眞, 2006]。海外直接投資に関する政策では、鉄道輸送分野の外国からの直接投資が禁止されたため、インド鉄道の質が下がり収益率も上がらなかった。このことを受けインド政府は、インフラ・セクターに対する外国投資と、民間投資を促すために外国直接投資に関する政策を見直した。この見直しの結果、鉄道事業における建設、運営、維持管理について、100%までの Foreign Direct Investment(FDI)、又は、民間セクターの参加が自動承認ルートでも認められることになった。直接投資に限らず、鉄道事業への全ての外国からの投資には、インド鉄道省による承認が必要である (KPMG, 2015)。

以下は現在、民間セクターの (PPP) 参加者に開放されている事業である。

- (ア) 官民パートナーシップ (PPP) による郊外大動脈事業
- (イ) 高速鉄道事業
- (ウ) 貨物専用事業
- (エ) 電源設備事業
- (オ) 工業団地インフラ事業

II. PPPの定義と世界の動向

近年、世界各国の政府が、従来の典型的な方法による、インフラに関する課題への対処の難しさを認識している。とりわけ、政府によるインフラ事業に対してのノウハウの蓄積および、資金獲得が重要な課題となっている。そのため、先進国であるカナダ、アメリカ、日本、オーストラリア等の国々に続いて、発展途上国である、インド、中国、台湾も PPP について定めた法律制定し、従来の民間セクターに委託し、一定の施設やサービスを提供する場合に、PPP の有効活用に積極的に取り組んでいる。

PPP の定義は PPP を実施している国によって異なっている。例えば、カナダの定義では PPP とは、政府と 1 社または複数の民間企業が連携して資金を拠出し運営する政府サービスまたは民間事業のことを指す。一方、イギリスでは 1992 年に発展した PFI (Private Finance Initiative) の思考が強く

インド鉄道における官民パートナーシップ(PPP)と高速鉄道の展望

民間資金を活用した社会資本整備と類した考え方だが事業の企画段階から民間が参入しより広い範囲を民間に任せるといった特徴がある。

PPP の概念は、1980 年代から 2000 年代にかけて段階的に発展してきた。国により導入の背景や概念は異なるものの、PPP の理念、各国で共通している。すなわち、PPP は公共サービスの提供において、公的セクターの管理の下で、官民で強みと専門性を最適に組み合わせて、質の高い公共サービスの提供や効率的な運営を目指していく仕組みとして解される [中野 宏幸, 2015]。PPP の成果は、1980 年代後半から世界各国で大きく注目されるようになった。これらの国々の狙いは、公共部門単独で提供するのが難しいインフラ整備を、より容易に行えるようにすることにある。PPP は各国の社会資本である学校、病院、道路、鉄道といった形のインフラ整備を促進すると同時に、民間部門の参画による費用対効果の改善という成果利益を期待できるものでもある。だが、2008 年の金融危機とその後のユーロ危機で、欧州における PPP の取引は減少した。

表 1、PPP 実施国の包括的な概観

主要国（地域）	PPP を導入したインフラ部門の状況
カナダ	経済行動計画 2013 年
欧州連合（EU）	2020 年までの EU のインフラ投資 2 兆ユーロ（264 兆円）
インド	2007-2012 におけるインフラプロジェクトの 36%（US \$ 186 億円）の PPP アカウント
日本	1999 年に、PFI 法を設立 2003 年に地方自治体を改正,PPP 構造改革と市場化テストのため立法措置も検討されつつある
台湾	2008-2015 間にインフラ方針設定
イギリス	2011 年から 2015 年に向けインフラ部門で投資分散計画
アメリカ	カリフォルニア州は 2009 年に法的な PPP 可能法律を制定

出所：（Jui-Sheng Chou & Tserng, 2015）基に筆者作成

表 1 を考察すると、近年の世界各国における PPP 事業の取り組みの状況が把握できる。先進国ならびに発展途上国も従来の公共事業として建設、運営・維持・管理が行われてきたインフラ事業に、官民の適切な役割分担の下、民間活力を導入し、さらに高い効果と効率性を目指す PPP 形態での実施の動きが拡大している。

Ⅲ. インドのインフラと PPP の定義

1. インドにおけるインフラの需要

インドには運送、農業、水道管理、通信、電力、天然ガス、住宅供給、などのインフラ産業が存在する。この中でも特に、空港、鉄道、道路、などが最重要と位置づけられてきた。インド政府のインフラ開発政策によるとインフラ産業はインドの工業産業の 26.7%を占めている (JETRO, 2015)。第 11 次 5 年計画では 2011 年までは、インド経済成長率の国民 GDP8.37%を達成する見込みであったが、世界銀行 (2011 年) によると 6.6%以上を上回ることができなかった (World Bank, 2015)。また、インド政府は第 12 次 5 年計画 (2012-2017 年) を策定し、GDP 成長率の目標を 10%に設定している。インド経済研究家や、アナリストたちによると、政府による目標達成にはより多くの雇用機会と貧困層の生活環境の改善が必要である。そのためには 2011 年時点で 8%の経済成長が必要であるとされる (JETRO, 2015)。結果として、インド政府は今後の持続的な経済成長の実現に、向け各州で PPP が積極的に実施されるようになっている。

2. インド PPP の定義とインフラの現状

PPP は途上国のインフラ向上プロジェクトに資金を供与する最大の方法とも言われる。インド政府によると、今後のインドが目標としている持続的な GDP、8-10%の成長を達成するためには、インフラ事業の改善が重要とされている。そのため、近年インド政府は、インフラ・セクターを活性化させるための投資に対しての投資戦略として主に、公共投資 (中央・州政府) の民間参画、独立型民間投資のコンビネーションによる投資を推進してきた。また、その後数多くの法律を定めインフラ部門に外国投資を活用させるための参入規制緩和が行われた。政府インフラ委員会 (COI: Committee on Infrastructure, 2004 年) 年に政府インフラ小委員会 (Empowered Sub-committee of the Committee on Infrastructure, 2005 年)、PPP 認定委員会 (PPPAC: Public Private Partnership Appraisal Committee) を設立し、数多くの法律を定め、インフラ部門に外国投資を活用させるために参入規制の緩和を行った。

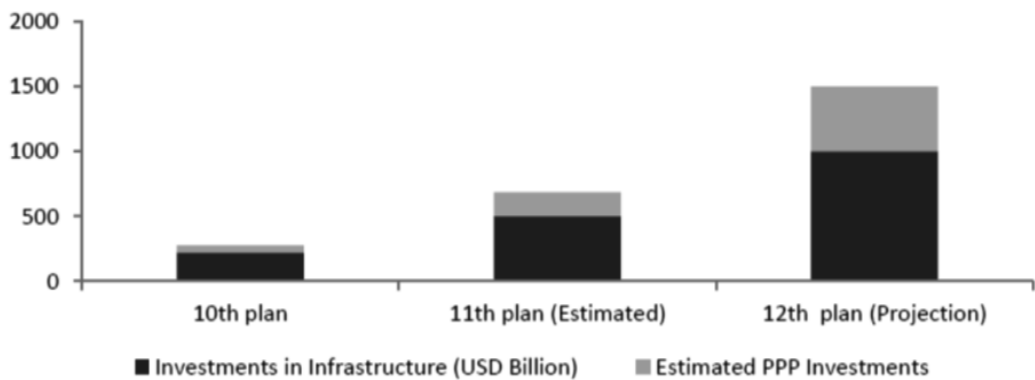
PPP の定義は国によって様々であるが、インドの場合は事業契約以上の合意に基づき、民間セクター (支配の 51%以上が民間側で行われる法人のこと) により公共産業およびサービスが提供され、民間セクターによって投資やマネジメントが行われる有期の事業である。また、PPP は官民の明確なリスク分担の下で、公共主体によって定められた性能規定に準拠して、パフォーマンスに応じた収入が民間セクターに支払われるもの [JICA, 2015] として定義されている。特に、インドの場合は、連邦政府の計画委員会のインフラ担当が中心になり、高速道路、都市開発、交通、航空、鉄道、電力等の分野で PPP が進められており VGF¹ (Viability Gap Funding) が導入されている。

以下の図 2 は、インドのインフラ部門における PPP のシェアを示している。これによるとインドでは、第 12 次 5 年計画では第 11 次 5 年計画よりも強くインフラ開発にコミットして始まっている

インド鉄道における官民パートナーシップ(PPP)と高速鉄道の展望

ことから、公共セクターの発展における PPP に対するの重要性が伺える。インド政府は、これらのインフラプロジェクトへの参加には3つのフェーズがあるとしている。それらは、①投資前のフェーズ、②投資中のフェーズ、③投資後のフェーズである。第1の、投資前のフェーズでは、プロジェクトへの検討、プロジェクトの準備、実現可能性、資金調達、プロジェクトの承認、資金調達等といったステップが含まれる。第2の投資のフェーズでは、事業の設計及び工事が行われる。最後に、第3のフェーズでは、事業のモニタリング、及び投資の評価が行われる。

図2、インフラ部門における PPP の シェア



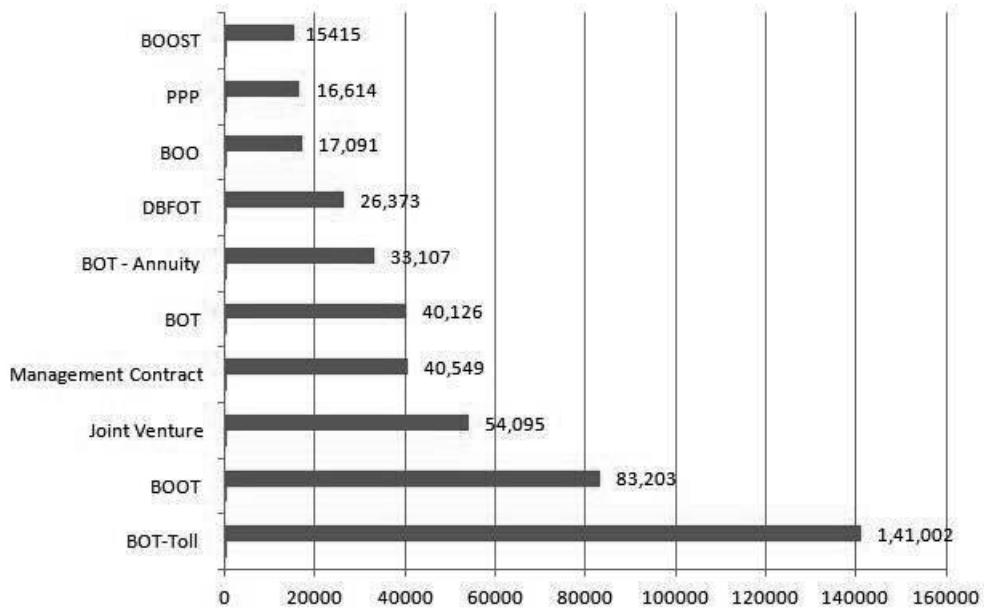
出所：(Debiprasanna & Swain, 2015)

3. インドの PPP 方式

インドにおいて PPP 方式でインフラ整備を行うには、財務省内の PPP 審査委員会で承認を得る必要がある。そのためプロジェクト承認件数が申請件数に追いつかない状況にある。採算性の低い PPP プロジェクト等に対しては補助金や低利での融資を行う制度が存在する。だが、こうした審査についても、政府の能力不足により手続きが遅延する状況にある。

こうした中で、インドには PPP の様々な事業方式が存在する。現在主に採用されている PPP の方式として①BOT (建設・運営・移転) 方式、②DBO (Design Build Operate 設計、建設、運営) 方式、③パフォーマンス・ベース (Performance Based) などがある。第1の BOT 方式は、民間が建設資金の調達や施設の設計・建設を行い、施設を所有し続ける方式である。この方式の下では、契約に従い運営管理は民間が行い、事業終了後に施設は公共に譲渡される。次に、第2の DBO 方式は公共が建設資金の調達を行い仕様やノウハウを提示し、民間が建設設計を行うことにより効率的なリスクシェアリングと品質向上を達成できる方式である。そして、第3のパフォーマンス・ベース方式は、効率を改善するために経営資源(投資資金)の利用可能性によって制限された環境で推奨されている。

図 3、現在インドで導入されている PPP の方式（2011 年時点）



出所（PPP in India , 2015）

4. インドの PPP 関連ルールの現状

2015 年時点において、インド全体のインフラ・セクターには統一されたルールは存在していない。この包括的な PPP 制度についてはインド中央政府のガイドラインに従って各州が PPP ユニットを設置する権利がある。現在、インドの各州政府が PPP のルールに対して独自のルールを設定している。

表2：インド各州のPPPルール

州名	法制度	政策	支援スキーム	統括機関
グジャラート	法的枠組みあり	インフラ統括機関による包括的なPPP インフラ枠組み	規定なし	インド国内で有数の州政府によるPPP インフラ事業実績あり
マハラシュトラ	ルールなし	個別案件指導型でのPPP インフラ開発	PPP インフラに関する統一的な枠組みは未整備	州政府として統一的なPPP インフラ枠組み整備を進行中
カルナータカ	PPP インフラ開発を行う統括機関の設置	インフラ開発にPPP 方式をまず検討州政府から明確なコミットメント	急速にPPP 推奨政策を整備中	2011年11月、インフラ整備促進に向けて新たな制定
タミル・ナド	インフラ統括機関の整備は発展途上	産業インフラ開発を数多く実施	人口増加により早くから工業化促進	PPP 水道インフラ整備を推進
ハリヤーナ	デリー周辺早くから各数のインフラ整備が進行	他州と比べてPPPの実績・体制が乏しい	DMIC ² 構造を背景として、産業開発計画の見直しそれに更にインフラ整備の推進 [秀明, 2015]	PPP cell と Policy の確立

出所：(www.pwc.com, 2015) 基に筆者作成

5. インドPPPの発展過程

インドでは17世紀から欧米、イギリス、オーストラリアなどの国々によってPPPが実施されてきたが1853年のグレート半島鉄道会社の設立がその最初であった。主にインフラ部門では、民間企業の資本が活用された。19世紀からインドでは、外国民間企業と連携し事業を行っていた。だが、インド政治が混乱し、規制緩和が遅れ事業は活発に進んでいなかった。1990年に渡り、インドでは外国投資やPPP式の投資が活発になっている。表3ではインドのPPP事業の進化過程を示したものである。

表 3 インド (PPP) 進化の過程

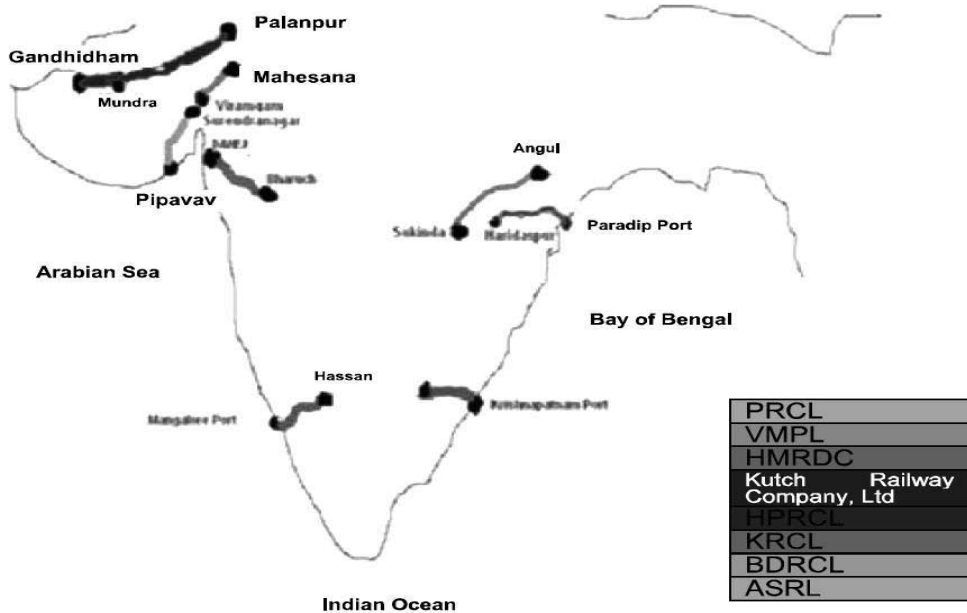
Phase I (19 世紀—1990)	Phase II (1991—2006)	Phase III (2006 年以降)
1853 年に、インドで PPP が初めて実施され、グレート半島鉄道会社設立 (Bell, 1894)。	世界銀行 2005 年によると 86 件のプロジェクトは、2004 年までに受注	PPP 政策改革と革新的な PPP の受け入れが増加
ボンベイ路面電車開始 (1874 年)	橋と道路インフラプロジェクトの推薦が大方	2009 年までに、450 の PPP 方式プロジェクトを実施
20 世紀初頭にムンバイ、カルカッタで発電や交通の分野でも実施された		2011 年に、758 の PPP 方式プロジェクトを実施

出所：www.PPPindiadatabase.com を基に筆者作成

IV. インド鉄道における PPP の現状

現在、インドの交通市場では、鉄道を利用する人口が増え、鉄道に対する満足度と鉄道技術を向上させるための資金、人的資源が不足しており、多くの鉄道利用者に影響を与えている。鉄道に対しての不満を認識したインド政府は、鉄道業界の発展に外国資本を活用するために、FDI や PPP の発展を大きな課題としている。2014 年以降の新モディ政権は鉄道改革を行い、インド鉄道への外国からの投資の増加に積極的に取り組んでいる [純子, 2015]。インド鉄道省によると第 11 次 5 年計画の中で、民間資金と経営ノウハウを鉄道事業に活用するために、新たな政策を作りインド各州政府と中央政府の連携のもと、インド全国の鉄道で PPP を重視することを挙げている。現在のインド鉄道業界では、インド全体で 11 カ所もの鉄道関連の PPP プロジェクトが展開されている (図 4)。特にインド鉄道分野においては収支採算性が非常に困難な状況であることから、インド鉄道への低利での融資や補助金の提供などの活用が求められている。

図4、インドにおいて展開されている鉄道関連の PPP 事業 (2015 年時点)



出所：(India P. i., 2015)

1. PPP を介した鉄道プロジェクトにおける資金調達方法

(ア) 国内機関への貸出

近年、インド鉄道プロジェクトの資金ニーズが高まっているにもかかわらず、国内の金融市場も PPP 方式になってきている。交通手段である、自動車、飛行機より比較的良好な条件で資金貸出を行っている。政府は、PPP 方式にて実施される鉄道やインフラプロジェクトへの貸出制限を緩和するため、インドインフラ金融公社 (IIFCL³) を 2006 年に設立し、民間金融機関の貸出を維持している。

(イ) 国際機関への貸出

インドのインフラは近年世界各国からの投資に注目が集まる中、世界銀行 (The World Bank) がインドのインフラ開発に対する支援を高めている。世界銀行と国際金融公社 (IFC) が、特にインドの道路開発、地方インフラ、投資開発などに係わる PPP の支援を行い、成功している。2009 年から 2012 年にかけて、インドにおけるインフラへの貸出は総額 140 億米ドルを超えている [JETRO, 2015]。特に世界銀行と IFC は、IIFCL によって提案された計画に基づいて、長期的な貸出にも取り組んでいる。

インドは、アジア開発銀行 (ADB) の創立メンバーでもあり、2011 年時点では 4 番目の株主国でもある。アジア開発銀行からの各プロジェクトへの資金提供には貸出、出資、部分的信用保証が含まれる。こうした中でインドは ADB からの各プロジェクトに対し限度総額 25%あるいは 5,000 万米ド

ルに制限している。こうした中、資金調達に対して規制緩和を行い支援戦略策定しインドインフラ事業に対して、2009年までに2億米ドルの支援で行った。

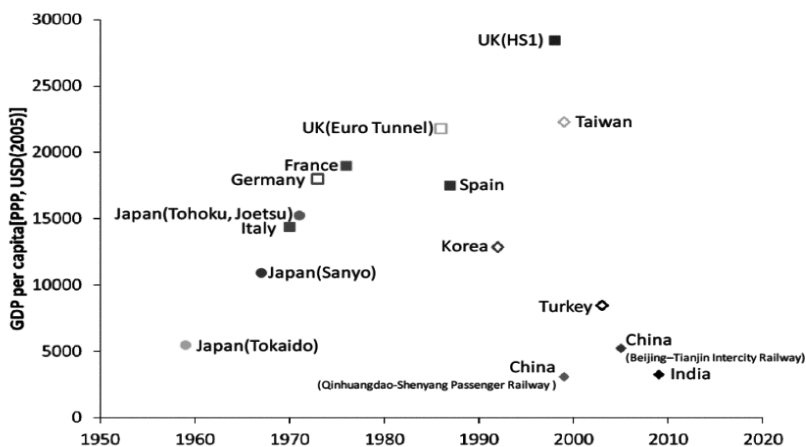
V. インド高速鉄道と今後の展望

国際鉄道連合（UIC⁴）によれば、高速鉄道とは、最高時速 250km/hr.以上で走行する列車のことを言う。例として、日本の新幹線、フランスの TGV、ドイツの ICE などがこれに当てはまる。インドでは、2015年時点では、高速鉄道として分類可能な鉄道は建設されていない。しかし、現在の急速な経済成長に伴い、人やモノの輸送量が急増し、インドでは、高速鉄道の建設が大きな課題となっている。各州とインド政府の取り組みとしては、2009年12月に「インド鉄道ビジョン2020年」が策定されている。日本の JICA と共同調査することを決定し、「インド鉄道ビジョン2020年」では、インド全体の鉄道に対してのインクルーシブ開発、地理的で、社会的な国民統合の強化、雇用の創造、環境の持続可能性などを主な内容としている。本節では、インドにおける高速鉄道導入の判断基準について解明するために、先進国での高速鉄道導入時の経済発展段階や人口密度を考察する。

1) 人口密度の関係

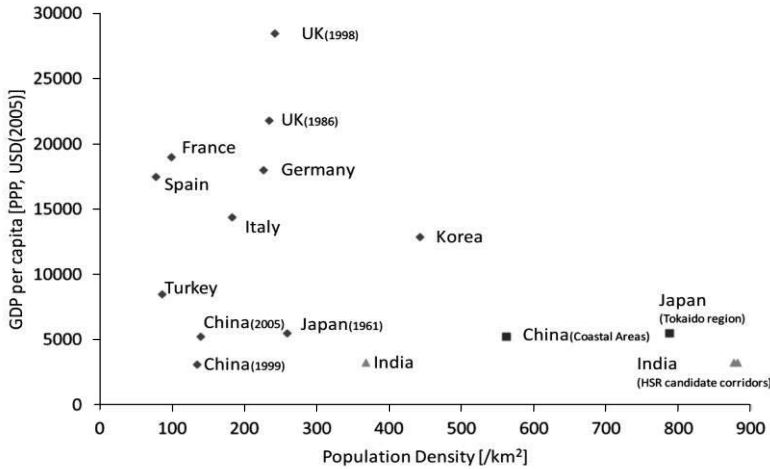
高速鉄道の導入はインドの経済発展を大きく後押しするものと思われる。図表5を考察すると、日本では、国民一人当たり GDP が 5000 ドルの頃に、そして、中国でも国民一人当たり GDP が 3000 ドルの頃に、国内初の高速鉄道の建設が開始されている。従来インド国民の GDP も上昇が予想され、インドでも、高速鉄道導入が不可欠になるとと思われる。

図5、高速鉄道建設開始年における1人当たりGDP



出所：[竹下 博之, 2015a]

図 6、 高速鉄道と国ベース人口密度 GDP の関係



出所： [竹下 博之, 2015b]

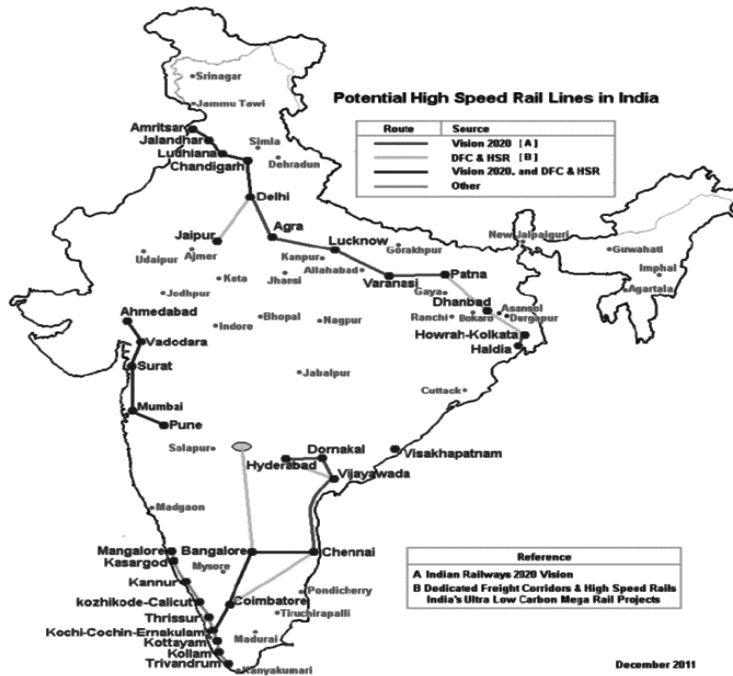
2) 一人当たり GDP

図 5 において一人当たり GDP が 5000USD 程度でも、高速鉄道を導入した国として、日本・中国があった。これらの国が経済発展の初期段階において高速鉄道の導入を可能にした理由として、需要の基となる人口が、他国と比べて多かったことが考えられる。国単位で考察した場合、インドも実質 GDP 成長率が 8%で続いていくと予想すると、2015-2020 年の間に 5000 ドルを超えることになる。

インドでは、1980 年代から、高速鉄道の導入事業が、最大の課題となっている。しかし、当時の鉄道建設の調査では、建設費が草大になること及び在来線と比較して乗客が負担できないほどの高額な運賃を徴収する必要があることを理由にして高速鉄道の作業が、実現できないとされてきた。その後、1990 年に経済改革が行われ、新たな政策が導入されたことをきっかけに、国有鉄道に対しても民間参加及び、外国投資ができるようになった。

インド政府が、近年における新たな高速鉄道計画フィージビリティスタディを行うために、世界各国の鉄道会社の参画を促している。その中で、高速鉄道導入のために、インド高速鉄道会社 (High Speed Rail Corporation of India LTD,HSRC) が設立された。今日では、インド政府が、すべてのインド鉄道や高速鉄道は PPP 優先にするとしている。すべての高速鉄道は官民連携の BOT 方式で建設される見込みである。

図7、インド高速旅客鉄道計画プロジェクト（2015年時点）



出所：(Mohan, 2015)

表4、インド高速旅客鉄道計画

地域	計画距離 (KM)
デリー＝チャンディガル＝アムリツシャル	480
デリー＝アグラ＝カンプール＝ラクノウ＝ウオラアナシーバトナ	1000
コルコタ（ハウラー）＝ハルディア	140
アメダバード＝ムンバイ＝ブネー	680
ハイデラバード＝チェンナイ	780
チェンナイ＝バンガロール＝コインバートル＝エルナクラム（コーチン）	800

出所：[剛山田, 2015]を基に筆者作成

おわりに

本稿では、インド国有鉄道の歴史と背景などを分析し、インドの鉄道事業の課題の解消に向けて、PPP が果たしうる役割について考察した。インドは約 200 年間イギリスの統治下にあった、ためイギリス式の鉄道が設置されていた。1947 年の独立後には国家の介入によって経済を復興しようとしたが、多くの規制が存在していた。しかし、1991 年の経済危機を契機に、多くの規制緩和を伴う金融セクターも含めた経済改革が行われた。

本稿では、インド鉄道の歴史を考察し、インドの鉄道網拡大の段階を考察した。さらに、鉄道業界は国有化の影響で発展が遅れたことや、インド政府は鉄道インフラ改善のために新たな政策を導入したことなどを明らかにした。世界中で利用されている PPP を活用したインフラ投資はインドで非常に高い利用可能性持っていることが理解できる。

近年、インド政府は、インド鉄道の改善に対して新たな政策を策定し、過去の外国投資 (FDI Policy) と公共サービスセクターにも民間投資の規制緩和を行った。インドのインフラ・セクターで最も規模が大きい鉄道業界に PPP は、政府以外を出資者とする投資方法としてインド経済に大きな影響を支えると思われる。

注：

¹ VGF とは、収益者負担だけでは採算が合わないようなインフラプロジェクトに対して、一定の収益を政府が補てんすることで残りの収益見合いのリスクを民間に取らせ、プロジェクトを成り立たせるスキームのことである。

² DMIC (Delhi-Mumbai Industrial Corridor) デリムンバイ産業大動脈 (首都デリーとインド最大の商業都市ムンバイを結ぶ貨物専用鉄道建設計画)

³ IIFC India Infrastructure Finance Company Limited 2006

⁴ 世界鉄道連合 (UIC) International Union of Railways

参考文献

- (2015年10月26日). 参照先: 日本近代史の歴史認識:
http://hinode.8718.jp/colony_india's_railway_construction.html
- (2015, 10 2). Retrieved from Government of Canada:
http://www.cccj.or.jp/sites/default/files/events/files/ppp_2014_background_japanese.pdf
- (2015年9月10日). 参照先: KPMG:
<http://www.kpmg.com/Jp/ja/knowledge/article/Documents/kpmg-flash-news-october-2014.pdf>
- (2015, 11 3). Retrieved from HM-Treasury :
https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/221558/hmt_annual_report_2012.pdf
- Bell, H. (1894). *RAILWAY POLICY IN INDIA*. KING STREET, CONVENT GARDEN LONDON:
 RIVINGTON, PERCIVAL AND Co.
- BTMU. (2015, 11 3). Retrieved from 三菱銀行 UFJ: <http://www.bk.mufg.jp/report/insemeaa/BW20140509.pdf>
- Canada, G. o. (2015, 11 3). Retrieved from Budget 2015:
<http://www.budget.gc.ca/2015/docs/plan/ch3-4-eng.html>
- Debiprasanna, D., & Swain, S. (2015, 11 12). *www.ijbmi.org volume 3*. Retrieved from
[http://www.ijbmi.org/papers/Vol\(3\)6/Version-2/C0362021025.pdf](http://www.ijbmi.org/papers/Vol(3)6/Version-2/C0362021025.pdf)
- Donaldson, D. (2015, 10 9). *Railroads & the Raj: Estimating the economic impact of transportation Infrastructure*. United Kingdom : London School of Economics . Retrieved from
<https://www.ucl.ac.uk/economics/seminarpapers/october08/oct08-seminar-papers-donaldson.pdf>
- Hiroyuki, T. (2012). *Criteria For High Speed Railway Introdution and Application In India*. Japan :
 Institution for Transport Policy Studies .
- India, G. o. (2015, 11 2). *Minsitry of Indian Railway*. Retrieved from
http://www.indianrailways.gov.in/railwayboard/uploads/directorate/infra/downloads/VISION_2020_Eng_SUBMITTED_TO_PARLIAMENT.pdf
- JETRO. (2015, 11 05). Retrieved from https://www.jetro.go.jp/ext_images/jfile/report/07000815/report.pdf
- JETRO. (2015年11月2日). 参照先: https://www.jetro.go.jp/ext_images/jfile/report/07000815/report.pdf
- JETRO. (2015, 11 1). A study of Infrastructure Finance India . *Cygnus*, 3. Retrieved from JETRO :
https://www.jetro.go.jp/ext_images/jfile/report/07000815/report.pdf
- JICA. (2015年9月10日). インド国 PPP インフラ事業への外国投資の促進に関する基礎情報収集調査ワークショップ. 参照先: www.pwc.com:
[http://gwwweb.jica.go.jp/km/FSubject9999.nsf/3b8a2d403517ae4549256f2d002e1dcc/812ff432fae84f1e492579600012a483/\\$FILE/WS%20Presentation_111129_Final.pdf](http://gwwweb.jica.go.jp/km/FSubject9999.nsf/3b8a2d403517ae4549256f2d002e1dcc/812ff432fae84f1e492579600012a483/$FILE/WS%20Presentation_111129_Final.pdf)
- Jui-sheng chou, & Tserng, H. P. (2015, 10 18). *www.elsevier.com/locate/cities*. Retrieved from Science Journal :
http://ac.els-cdn.com/S0264275114001115/1-s2.0-S0264275114001115-main.pdf?_tid=fa82f870-8b88-11e5-9eba-00000aacb360&acdnat=1447585794_e0ea4f2ff61b58be0f711058b290541d
- Mohan, p. (2015). *Role of Public Private Partnership in Indian railway and Feasibility of High Speed Railway*.
 Tokyo Hachioji: Soka university.
- PPP in India . (2015, 10 8). Retrieved from www.bathudun.com:
http://www.ifimbschool.com/management_review/downloads/ppp_projects_in_India.pdf
- PPP projects in India . (2015, 10 8). Retrieved from
http://www.ifimbschool.com/management_review/downloads/ppp_projects_in_India.pdf
- Public Private Partnership Projects in India* . (2015, 10 8). Retrieved from
http://www.ifimbschool.com/management_review/downloads/ppp_projects_in_India.pdf
- Railway, P. i. (2015, 10 15). *Report of the Comptroller and Auditor General of India* . Retrieved from
http://www.saiindia.gov.in/english/home/Our_Products/Audit_Report/Government_Wise/union_audit/recent_reports/union_performance/2014/Railway/Report_3/chap_1.pdf
- Travel Latte . (2015, 11 7). Retrieved from インド鉄道地下鉄情報:

インド鉄道における官民パートナーシップ(PPP)と高速鉄道の展望

- https://latte.la/travel/place/india/traffic_train
World Bank. (2015, 11 10). Retrieved from <http://data.worldbank.org/indicator/NY.GDP.MKTP.KD.ZG>
www.pwc.com. (2015, 11 8). Retrieved from JAICA:
[http://gwwweb.jica.go.jp/km/FSubject9999.nsf/3b8a2d403517ae4549256f2d002e1dcc/812ff432fae84f1e492579600012a483/\\$FILE/WS%20Presentation_111129_Final.pdf](http://gwwweb.jica.go.jp/km/FSubject9999.nsf/3b8a2d403517ae4549256f2d002e1dcc/812ff432fae84f1e492579600012a483/$FILE/WS%20Presentation_111129_Final.pdf)
- 吉郎 三輪. (1962). インド鉄道の近代化. 日本, 長崎: 長崎大学学術研究成果リポジトリ.
久野康成. (2012). インド投資・M&A・会社法・会計税務・労務. 東京: 東京コンサルティングファーム KS International.
- 経済産業省. (2015 年 10 月 2 日). 参照先: アジア PPP 研究会:
https://www.fasid.or.jp/_files/library/kaigou/handout42_1.doc
- 剛山田. (2015 年 11 月 23 日). SHINKANSEN がインドを走る日. 参照先: 公益社団法人 日本経済研究センター:
<http://www.jcer.or.jp/international/pdf/insideindia20110310.pdf>
- 秀明堂道. (2015 年 11 月 12 日). 参照先: Japan India Flagships projects :
<http://www.japan-india.com/pdf/forum/53-1.pdf>
- 純子ニルマラ帝羽. (2015 年 10 月 21 日). 参照先: 東洋経済: <http://toyokeizai.net/articles/-/42869>
- 小島眞. (2006 年 11 月 2 日). グローバリゼーション下におけるインド経済の頭頭: IT 産業中心に. 東京都 港区: 慶應義塾大学. 参照先:
http://jica-ri.jica.go.jp/IFIC_and_JBICI-Studies/jica-ri/research/archives/jbic/pdf/glb/05.pdf
- 赤塚 山村 直史. (2009). インド幹線鉄道貨物輸送力強化調査を 事例とした巨大鉄道建設プロジェクトのフイ
ージビリティ評価手法開発. 東洋大学学術情報リポジトリ, 141-172.
- 竹下 博之. (2015a 年 11 月 2 日). 参照先: http://library.jsce.or.jp/jsce/open/00039/201206_no45/pdf/325.pdf
- 竹下 博之. (2015b 年 11 月 2 日). 参照先: http://library.jsce.or.jp/jsce/open/00039/201206_no45/pdf/325.pdf
- 中野 宏幸. (2015 年 11 月 25 日). アジア及び中南米諸国における交通関係 PPP プロジェクトの動向と今後の展
開. 参照先: <http://www.jterc.or.jp/kenkyusyo/product/tpsrbn/pdf/no46-02.pdf>
- 藤田暁男. (2015 年 11 月 3 日). イギリス資本主義経済の変動と植民地インドの鉄道建設 1844 年-1879 年. 参照先:
NAOSITEhttp://naosite.lb.nagasaki-u.ac.jp/dspace/bitstream/10069/26405/1/toasia00_15_02.pdf
- 日本の歴史. (2015 年 10 月 16 日). 参照先: http://hinode.8718.jp/colony_india's_railway_construction.html
- 日本近代史. (2015 年 10 月 26 日). 参照先: イギリス資本によるインドの鉄道建設:
http://hinode.8718.jp/colony_india's_railway_construction.html

ネパールへの外国直接投資の可能性および問題点

Possibilities and Problems of Foreign Direct Investment in Nepal

経済学研究科経済学専攻博士後期課程在学

ガウタム・プラカシュ

Gautam, Prakash

I. はじめに

ネパールは、豊富な観光資源や天然資源を有しているものの、物価はいまだに安く、労働者の収入も低い。また、若年層は意欲と知識があるものの、国の技術力が低く、労働集約的な仕事に魅力を感じることができず、外国へ移動してしまうことが多いのが現実である。本研究の目的は、ビジネスとして成長の可能性がある分野への外国人投資家および大規模企業からの対内 FDI の増加に向けてのネパールの課題の究明にある。外国人投資家やグローバル化を考えている日本企業がネパールでの雇用を拡大することができれば、ネパールの経済発展や貧困削減につながるのではないかと考える。このような視点で、研究を進める。

本研究では、外国直接投資 (Foreign Direct Investment、略称 FDI) の定義として、国際通貨基金 (International Monetary Fund、略称 IMF) の定義を採用する。IMF は、「居住者による、非居住者企業 (子会社、関連企業等) に対する永続的権益の取得を目的とする国際投資、そして株式等の取得を通じた出資については、出資比率が 10%以上を直接投資¹⁾」としている。

FDI では、資本、経営、技術、技術的な知識のパッケージがホスト国へと転送される。また、FDI は、一般的には長期的な国際資本移動の形がとられる。そして、FDI は、生産活動を目的に実施され、外国企業の経営管理への参加を伴うものである。

FDI は、マクロ的な視点から見れば、国際間の長期資本移動の一形態である。すなわち、国際的長期資本移動は、直接投資と間接投資の 2 つに分けられる。また、企業レベルで捉えると、FDI は、投資先の企業を継続的に支配することを狙いとする出資である。FDI の主な形態には、海外子会社の立ち上げ、既存外国企業の買収や投資、経営参加のほか、これらの企業に対する長期の貸付けなどがある。現在では、ネパールにおいて対内 FDI が認められている分野は農業、水力発電、観光、保険サービス、軽工業、鉱物、ビジネスや経営コンサルティング、会計、エンジニアリング、法務サービス、廃棄物管理、アルコールなどである。

外国からの投資を受ける際の問題点としては、政治倫理の向上、税制の透明性、社会的インフラの

¹ International Monetary Fund [2003], "Foreign Direct Investment Trends and Statistics" pp.6-7.

整備などが考えられる。一方で、投資を誘致する提案としては、FDI 政策の緩和、滞在許可の緩和、投資家の権利の保護、企業進出手続きの簡素化などが考えられる。

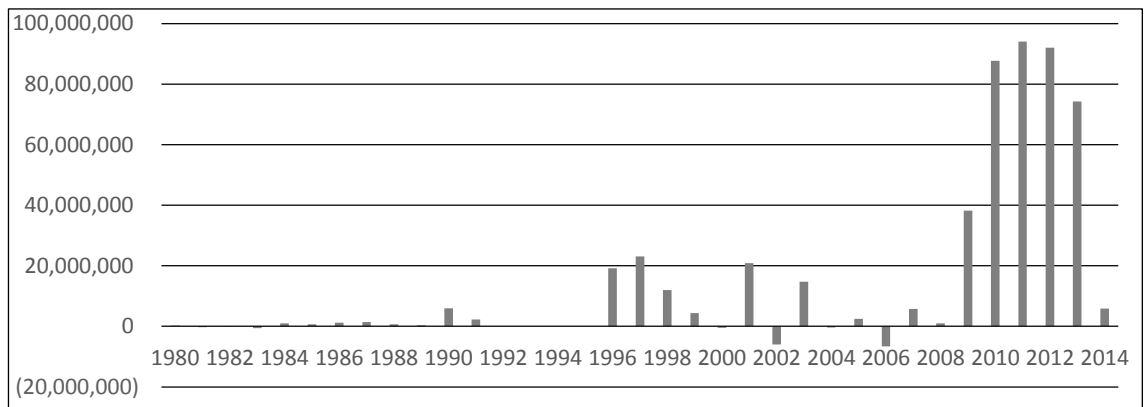
II. ネパールの FDI の現状

ネパールの FDI 政策は 1980 年から導入され、1982 年、1992 年、1996 年、2008 年にわたって少しずつ規制が緩和されながら、国外からの投資が誘致されてきた。特に 2008 年の緩和では、産業と投資のセキュリティを保証された²。

表 1 は、1980 年から 2014 年にかけての対内 FDI の合計金額の推移を示したものである。表 1 より、対内 FDI の合計金額は、10 年前に比べて上昇している。

表 1：ネパールの FDI の流入額

単位：ドル



出所：World Development Indicators (Last Updated: 06/14/2016)

ネパールへの FDI を行っている国は、78 カ国あるが、その金額が最も大きい国は、インド、中国、韓国、米国である。エネルギー部門は FDI の最大の投資先であるほか、水力発電部門への外資の導入も政府は積極的に促している。政府高官は、ネパールへの FDI が上昇したことを受け、より容易に外国人投資家がネパールへ投資できるようになることの必要性を強調している。

2014 年 2 月に首相オフィスで開催された会議によれば、2013 年から 2014 年にかけての対内 FDI の金額は上昇傾向にある。対内 FDI の増加のために、ネパールのコイララ首相は、ネパール国内での業界登録、企業登録、ビザの手続き、外国為替業務などの手続きの促進（簡素化、明確化、円滑化など）を実施した。

FDI が可能な分野、さらには 100 パーセントの出資が可能な分野の規制が緩和された。

たとえば、通話通信などの独占権を持っていたネパール・テレコムカンパニー・リミテッドは、他

² Pant, Bhubanesh, "Enhancing FDI Flows to Nepal during the Period of Post-conflict Transition and Global Recession" pp.30

社との競争によって値下げを実施した。このようなネパールへの対内 FDI の規制緩和により、国民が直接関係するサービスも上昇していると言える。さらなる緩和が必要とされる分野はあり、その分野でも緩和を実現できれば現地の人の生活水準が上がり、FDI の規模の拡大も実現できると考えられる。

Ⅲ. 投資可能な分野

1. 農業

ネパールの経済は農業によって支えられている。農業はネパールの GDP の 3 分の 1 に寄与し、約 3 分の 2 の労働力が農業に関与している。農業従事者の大多数は貧しい生活をしているが、農業は現在のところ依然として開発セクターの貧困緩和と開発のための重要な手段となっている。紅茶、コーヒー、カルダモン、ターメリック、新鮮な野菜、エキゾチックな花、唐辛子、マッシュルームなどは国内消費および輸出のための重要な作物である。ネパールの気候とユニークな地形は薬草栽培に非常に適しており、ネパールは理想的な薬草栽培国となっている。

しかし、肉や牛乳のような畜産品の半分以上は、輸入に頼らざるを得ない状況にある。屠殺場、ストレージ、低温貯蔵施設が不足しているため、野菜や果物の収穫後の損失は 25 パーセントから 50 パーセントにも及ぶ。

図 1：ネパールの地理マップ



出所：http://www.seenepal.com/nepal_geography.php (平成 28 年 6 月 23 日アクセス)

図 1 のように、ネパールの国土は大きく 3 つの地域に別れている。それらは、①ヒマラヤンベルト、②ヒリーベルト、③テライベルトの 3 つの地域である。それぞれのベルトは、気温がそれぞれ異なっており、生産できる作物もまたそれぞれ異なる。

まず、第 1 のヒマラヤンベルトでは、冬虫夏草のような漢方の生薬がとれ、大麦、小麦、じゃがいもが栽培されている。そして、果物は寒い所で育てたりんごがメインである。畜産は自然の草を食べて自然に育てられたヒマラヤンヤギ、牛、馬などが有名であり、肉も薬として信じられている。

次に、第 2 のヒリーベルトでは森林が多く、畑地は少ない。農作物は米、小麦、とうもろこし、マ

スタードのほかに、多くの種類の豆がある。サトウキビの栽培も盛んであり、果物は柑橘類、パイナップル、ライチ、ジャックフルーツ、マンゴー、バナナなどがある。そして、茶やコーヒーの栽培にも適している。コーヒー生産量の 65%は外国に輸出され、ドイツ、日本、アメリカ、中国、韓国などの外国へ輸出されている³。

そして、第 3 のテライベルトは、とても広い田畑がある。その、主な天然資源は森林である。木材だけでなく、薬草なども栽培されている。米、小麦、とうもろこし、マスタードの生産量も多い。気温が高いため、果物も暑い所でとれるものはほとんど栽培できる。草花の栽培にも適している。豊富な労働力および適切な土壌のために、最近特に花の栽培が主要な産業の 1 つとなっている。定期的かつ組織的な輸出が十分に確立されていないにもかかわらず、日本、クウェート、カタール、インド、など多くの国々へと輸出されている。

トラクターを利用できる国土は限られており、第 1 のヒマラヤンベルトでは、ほとんどの田畑において、その敷地が狭いためトラクターを利用することが不可能となっている。21 世紀でも小作人を使った農家の生産性は低く、今の上流社会の人口に頼ることもできない現状にある。このような状況の中、日本の小型トラクターを適切な値段で買って利用できる環境を整えば、ヒマラヤンベルトの人々の生活水準は向上していくだろう。

また、政府は農業を保護する制度を導入していないわけではないものの、農業のための機材の価格の割引やローンなどのサービスが十分ではないことは明らかである。ハイブリッドの種、新型農業機械の導入、そして自給自足ではなく販売を目指して農業に投資するのであれば、適切な気候に合った農業をすれば、気候は問題ではなく、むしろ機会へと変わっていくと思われる。FDI によって資金を集め、現地での雇用の増加を実現できれば、投資家にも生産者にも成功のチャンスはあると考える。

2. 観光産業

観光産業はネパールの国家収入の最も重要な分野の 1 つである。国の GDP の推定 2.4~4%を占めている⁴。観光産業は主要な雇用ジェネレーターであり、全雇用者数の約 7.6%を占めている。ネパールは、世界で最も高い山であるエベレストがあり、エベレストおよびその周辺地域は、登山や冒険旅行、エコツーリズムなどの、訪問者のための重要な観光スポットとなっている。世界遺産であるルンビニ（釈迦の生誕地）は、ネパールの南部に位置しており、観光資源であるばかりでなく、仏教徒にとっての重要な巡礼地となっている。

政府もリベラルな観光開発政策を実施しており、2018 年に、ネパールへの入国観光客数を 100 万人にまで増加させることを目指している。そのために、政府は国内で行われる祭りやツアーなどを積

³ 「I Guide Nepal An investment guide to Nepal」 Economy and production
<http://www.theiguide.org/public-docs/guides/nepal> (平成 28 年 6 月 23 日アクセス)

⁴ Kadhka, Krishna Bahadur[2012], 「ネパール観光産業の現状と問題点」日本国際観光学会論文集(第 19 号) pp.13

ネパールへの外国直接投資の可能性および問題点

極的に支援している。観光地は、国内の観光客の間で人気となってから国外へと知られる傾向がある。そのため、近年、ネパール政府は国民による国内観光の充実化にも力を入れている。そして、政府は外国人観光客の平均滞在期間を延ばし、多くの外貨をネパール国内で使用して欲しいため、「訪問ネパール 2018 年」をスローガンにしている。

ネパールに存在する国際的なホテル・チェーン、ホリデイイン、ハイアット、ラディソン、エベレストなどはネパールの投資家との合弁事業を展開している。これらの合弁会社は、観光客に安心感と質の高いサービスを提供している。トレッキングやラフティング、登山などは、ますます人気が高まっている観光アトラクションである。世界には海拔 8000 メートルを超える山が 10 峰あるが、そのうちの 8 峰は、ネパールにある。そして、6000 メートル以上の山の数は 200 を超えている。肥沃な緑の谷、トラヤサイといった野生動物の生態を観察できる森林、鳥や花も、重要な観光資源であるといえる。さらに、ネパールの最大の観光資源は、歴史の古い彫刻や神社、寺院、宮殿といった歴史的遺産と自然の美しさの調和であるといえよう。

既存の観光産業は、カトマンズの谷、ポカラヤチトワンに集中している。これらの地域では、文化観光、自然観光、医療ツーリズム、冒険旅行、コンベンション観光などが発展する可能性がある。世界中から訪れる仏教徒やヒンズー教徒を対象とした観光商品は、ルンビニに重点を置いて開発され、発展させることができると考えられる。

ネパールの観光産業の発展に向けて設立された組織として、1998 年に、ネパール観光局 (The Nepal Tourism Board、略称 NTB) も設立された。NTB は観光分野での情報提供の拡大などの活動を行っている。ネパール・ホテル協会 (The Hotel Association of Nepal、略称 HAN)、ネパール旅行代理店協会 (The Nepal Association of Travel Agents、略称 NATA)、ネパール・ツアー・オペレーター協会 (The Nepal Association of Tour Operators、略称 NATO) なども、詳細な観光情報を提供できる民間団体である。

国連貿易開発会議が発表した資料によると、世界のほとんどの国の観光産業では、ホテルを含めた幅広い分野の事業で 100%の対内 FDI が許されている。だが、旅行やトレッキング代理店では、ネパールの政府が対内 FDI にいくつかの規制を課している。例えば、外資の出資比率は最大 49%までに制限されており、外資系企業が支配権を獲得できないようにされている。

これまでの動向を振りかえてみると、1996 年 4 月にネパール政府は、訪問者のための特別な観光地としてのイメージを高めるために、観光産業の育成に向けた初めての政府スローガンとして「訪問ネパール'98」を作成した。世界の人々にネパールのことを知らせるために「訪問ネパール'98」と書かれた貨幣や切手なども発行された。「訪問ネパール'98」が成功した後、政府は続けて「訪問ネパール 2007」、「訪問ネパール 2011」も発表して観光業の発展を支援した。2002 年には、ネパールの政局が混乱したために、一時期ネパールへの観光客数は減っていた。だが、これらの観光産業支援政策の成果もあり、ネパールへの観光客数はその後続々と回復している。

3. 製薬業

製薬業は外国からの投資の成長が見込める、もう一つの潜在的な領域である。現時点では、Mishra, Abhishek (2015)によれば、この業界に属する企業は、44 社しか存在しない⁵。ネパールの全ての製薬会社は、ジェネリック医薬品のみを生産している。ネパールで販売されている特許薬は、全てインドの製薬会社が生産した製品を輸入したものである。ネパール製品は、国内の医薬品市場の 40%前後を占めている。ネパール政府は、国民のために必須医薬品の生産に、自給自足を推進してきた。ネパール製薬企業である Hokum 医薬品のネパール製薬研究室の製品は、インドでの診療使用が認められるようになった。ネパールからインドへのブランド医薬品の輸出も登場し始めている。だが、ネパールからインドへ輸出される医薬品のほとんどは付加価値が低い、処方調剤のために加工包装されていない薬材である。

ネパールの生物多様性は薬剤の広い範囲を網羅しており、ネパールはハーブを磨り潰したアーユルヴェーダ製剤およびその他の漢方薬の生産のための供給源となっている。アーユルヴェーダ製剤を使用するアーユルヴェーダ治療法は、インドの伝統的な医療法である。アーユルヴェーダ製剤のインドの主要な生産会社である Dabur 株式会社は、ネパールでアーユルヴェーダ製剤に利用できるハーブを処理するために、ネパールのアーユルヴェーダ製剤の生産量の過半数を生産する子会社を設立している。

ネパールで、製薬に携わる会社を設立する際には、事前にネパール政府の医薬品局 (Department of Drug Administration) の許可を取得する必要がある。製薬業への対内 FDI は、100 パーセントの外資の出資が許されている。だが、ネパールの製薬業界への FDI に関しては、特に著しい進展はなく、遅れている。

4. 電気部品製造業

電気部品は、ネパールの主な海外輸出品の一つである。マイクロトランスなどの軽工業製品を造る産業は、外国人投資家からの大規模な投資を呼び集めている。1990 年にタイの会社 Ekarat Engineering が、ネパールで Nepal Ekarat Engineering Co. Pvt Ltd という合弁会社を設立した。同社は、電気の変圧器を製造し、その変圧器は水力発電プロジェクト、小水力発電、病院、ショッピング施設などに供給されている。品質マネジメントシステム ISO 9001 認定企業になっているため、トランス製品の海外輸出もしやすくなっている。主な輸出先国は、インド、バングラデシュ、アフリカ諸国である。

⁵ Mishra, Abhishek [2015], "A STUDY ON PHARMACEUTICAL INDUSTRY OF NEPAL" CMS Business School (Jain University) pp.06

5. 天然資源産業

大理石、マグネサイト、タルク、ガーネット、水晶、カイヤナイト、トルマリン、ベリル、コランダム（ルビー）、天然骨材（川岩、砂利や砂）などは、ネパールで豊富にとれる天然資源である。これらの鉱物は、主にインド、そして複数のアジアの国々へと輸出されている。工業用石灰、農業石灰、マグネサイト、紙、石鹼と大理石などは、建設材料（セメント）の産業に原料として使用される。国連貿易開発会議の発表によれば、ネパールのセメントの総需要のわずかに約 30～35%だけが国内で生産されたものである。そのため、既存のセメントの石灰岩を活用することができれば、ネパールでセメント関連産業を発展させることが可能になると思われる。

レッサーヒマラヤには、識別された石灰岩の鉱床の周り 12.5 億トンのセメントグレード、化学グレードの石灰岩、ドロマイト、マグネサイト、燐灰土が埋蔵されている。鉱物省の地質研究調査によると、そのほかにも 50 億トン以上ものセメントが埋蔵されている⁶。そして、ガネーシュヒマール地域内の鉛及び亜鉛鉱床は、経済的に低い採掘費用で採掘することができる。

6. 水力発電

2010 年のデータからみると、ネパールの統合電源システムは、約 700 MW の総設備容量を持っていた。そのうち、水力発電によるものは、650 MW だった。ネパール政府は、約 44,000 MW の総設備容量を経済的に低い採掘費用で実現可能であると考えているが、実際には 83,000 MW もの発電量を確保することができると言われている。

だが、ネパールでは、水力発電所の建設が遅れているため、水資源のほんの一部しか利用できていない状況にある。加えて、国内の電力供給量の多くは、火力発電所、多種燃料工場、およびインドからの輸入電力に頼っている状況にある。World Data Bank のデータによれば、2011 年時点で、ネパール国民の 76.3%しか、電気を利用できていないという。国の技術の進歩の欠如、熟練した労働力と国の大きな投資の欠如のため、国内でより多くの電力を生産する欲求は、まだ十分に満たされていない現状にある。水力発電の発電量は毎年上昇しているものの、現状としてネパールの国民は、1 日 11 時間以上の停電を経験している。

表 2 は、ネパールの首都カトマンズの停電の時間帯を、首都を 7 つの地域に区分して、曜日毎に示したものである。雨季は水量が豊富であるため停電時間は短縮される。一方、乾季では渇水のため停電時間は大幅に伸びることになり、停電時間は夜間の 7 時から早朝の 5 時となる。なお、水力発電事業には、100 パーセント出資の FDI が許可されている。

⁶ Government of Nepal Ministry of Industry Department of Mines and Geology により。

表 2：ネパールの首都カトマンズの停電表

(平成 28 年 4 月 24 日)

Day/ Group	Sunday.	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday	Saturday
Group 1	06:00 - 14:00 17:00 - 21:00	10:00 - 17:00 20:00 - 23:00	09:00 - 16:00 19:00 - 22:30	05:00 - 12:00 16:00 - 20:00	07:00 - 15:00 18:00 - 21:30	04:00 - 09:00 12:00 - 18:00	04:00 - 10:00 14:00 - 19:00
Group 2	04:00 - 10:00 14:00 - 19:00	06:00 - 14:00 17:00 - 21:00	10:00 - 17:00 20:00 - 23:00	09:00 - 16:00 19:00 - 22:30	05:00 - 12:00 16:00 - 20:00	07:00 - 15:00 18:00 - 21:30	04:00 - 09:00 12:00 - 18:00
Group 3	04:00 - 09:00 12:00 - 18:00	04:00 - 10:00 14:00 - 19:00	06:00 - 14:00 17:00 - 21:00	10:00 - 17:00 20:00 - 23:00	09:00 - 16:00 19:00 - 22:30	05:00 - 12:00 16:00 - 20:00	07:00 - 15:00 18:00 - 21:30
Group 4	07:00 - 15:00 18:00 - 21:30	04:00 - 09:00 12:00 - 18:00	04:00 - 10:00 14:00 - 19:00	06:00 - 14:00 17:00 - 21:00	10:00 - 17:00 20:00 - 23:00	09:00 - 16:00 19:00 - 22:30	05:00 - 12:00 16:00 - 20:00
Group 5	05:00 - 12:00 16:00 - 20:00	07:00 - 15:00 18:00 - 21:30	04:00 - 09:00 12:00 - 18:00	04:00 - 10:00 14:00 - 19:00	06:00 - 14:00 17:00 - 21:00	10:00 - 17:00 20:00 - 23:00	09:00 - 16:00 19:00 - 22:30
Group 6	09:00 - 16:00 19:00 - 22:30	05:00 - 12:00 16:00 - 20:00	07:00 - 15:00 18:00 - 21:30	04:00 - 09:00 12:00 - 18:00	04:00 - 10:00 14:00 - 19:00	06:00 - 14:00 17:00 - 21:00	10:00 - 17:00 20:00 - 23:00
Group 7	10:00 - 17:00 20:00 - 23:00	09:00 - 16:00 19:00 - 22:30	05:00 - 12:00 16:00 - 20:00	07:00 - 15:00 18:00 - 21:30	04:00 - 09:00 12:00 - 18:00	04:00 - 10:00 14:00 - 19:00	06:00 - 14:00 17:00 - 21:00

出所：「Latest load shedding schedule in Kathmandu」

Nepal<http://www.yalamandu.com/2011/12/latest-loadshedding-schedule-in.html>

7. 医療

ネパール国民の平均寿命は約 68 歳である⁷。1976 年から 1996 年の 20 年の間で 13.5 歳伸びたが、依然としてネパールは、南アジアの中で平均寿命が最も短い国である。ネパールでその深刻化が懸念されている感染症は、マラリア、カラアザール、日本脳炎、結核、赤痢、A 型肝炎、HIV/エイズである。健康状態が最も悪いのは、5 歳未満の子ども（特に女子）と妊娠中の女性である。国民の罹患率の大半は、感染症および栄養障害によるものである。また、早期結婚の多さのほか、社会的インフラや保健サービスの欠如などにより、妊産婦死亡率が高くなっている。自宅から通院する時間が 30 分以内の人は、約 41 パーセントである。国民のうち 37 パーセントの人しか上水道のサービスを受けられない⁸。上記のデータは World Data Bank, UNICEF Nepal, World Health Organization のデータから引用したものである。

汚染された水の飲用がコレラや腸チフスのような病気の大きな原因となっているため、水質はヘルスケアに直接かかわる問題になっている。ネパール政府は、プライマリー・ヘルス・ケアに集中できるように、専門的な保健サービスへの民間部門の投資を奨励している。その結果、民間の保健センターの数が増加している。ネパールでかなりの外国人が医療に従事し、それにはいくつかの形がある。外国人の参加は、実習病院において特に重要である。ネパール政府はすでに専門病院、保健センターや教育機関を設立するために、民間部門の投資家に長期リースで土地を提供する方針を発表した。

しかしながら、世界保健機関 (World Health Organization) は、まだしばらく何年もこの問題は

⁷ UNICEF Nepal Basic Indicators

http://www.unicef.org/infobycountry/nepal_nepal_statistics.html#0 (平成 28 年 6 月 19 日アクセス)

⁸ 「World Health Organization Nepal」 Achieving communicable diseases control targets

http://www.searo.who.int/nepal/areas/Strategic_Priority_1/en/ (平成 28 年 6 月 19 日アクセス)

続くと予測している。

保健サービスの分野では、100%出資の FDI が許されている。病院の設立に当たっては、保健福祉省やその地方事務所からの追加承認が、事前に必要である。

IV. 外国投資を受ける際の問題点

1. 政治的安定性の維持

インドと中国の間にあるネパールは、過去の政治的緊張を克服するのに苦勞している。マオイスト(Maoist、毛沢東主義者)が 1996 年から始めた内戦は、2006 年まで続いた。2006 年 11 月に、マオイストを含めた 7 つの政党間で和平合意が締結された。この和平協定では、国の暫定憲法の策定が宣言されたものの、国内戦争のため発展の面から見ればとても遅れていた。2008 年 4 月に選挙で、憲法議会が発足し、その後ネパール共和国の初代大統領として Dr.Ram Baran Yadav が選出された。2008 年から、多くの新議員が誕生し政権も変わった。ネパール軍とマオイスト軍の統合は、和平プロセスの最大の成果であった。

政治不安と政治家の交代により、工場におけるストライキ、デモなどが頻繁に起こり、また、長期に渡る内戦によって、外国為替、観光産業、および他の国内開発活動は悪影響を被った。多くの投資家は良い投資環境と政治的安定を希望しているため、良い投資環境の整備が外国の資本を引き付ける。

2. 税制の透明性

ネパールの主な税には、所得税、関税、物品税、付加価値税、ビジネス税などがある。ネパールでは、いくつかの二重課税条約が存在する⁹。ビジネス税は、ネパールへの FDI の誘致において、重大な障害となっている。基本税率は、合理的であると思われるが、アカウントの管理がずさんであったりして、従業員に代わっての法定の支払いによって課せられる追加の負担が考慮されている場合もある。

輸出財の製造に使用される原材料に関する納税義務の緩和は、返金システムを介して行われる。2001 年から 2002 年にかけての国家予算の政府発表において、ネパール政府は払い戻しの遅れがあることを認めた。政府は、迅速な支払いの代わりに 5 年間の社債を発行することを決定した。輸出業者は、これらを金融会社で換金することができたが、その払い戻し金額はあくまで額面の 50%に限るとされた。

3. 社会的インフラの整備

ネパールでは現在 39 社の公営企業があり、いくつかの分野で対外直接投資が禁止または抑制されている。民営化法が整備されたほか、様々なプログラムも実施されてきたが、これらに従って民営化

⁹ UNITED NATIONS[2003],“Investment Policy Review Nepal” New York and Geneva,pp.20-22

されたのは16社にとどまるといわれている。

未だ民営化されていない23社の公営企業のうち、以下の4社は、社会的インフラ事業の寡占的提供が法律で認められた企業である¹⁰。

- ①ネパール石油公社（精製石油燃料の輸入を独占している）
- ②ネパールドリンキング・ウォーター・コーポレーション（上水道を独占している）
- ③ネパール・テレコム株式会社（100%ではないが、通信、電話などの産業を独占している）
- ④ネパール電力庁（電力を独占している）

これらの企業は外資からの出資を受けており、またいくつかの民間企業への出資も許されている。外国人投資家は、電気そして通話通信におけるネットワークサービスを操作することができるようになってきている。また、ネパール電力庁も民間投資を優先し、寡占市場の下で限られた範囲内で民間の発電事業を奨励している。送電および配電は、ネパール電力庁によって運営されている。上水道の整備と衛生管理は自治体が主に提供するサービスであるが、民間事業者にそれらを委託することも可能である。

4. 陸上交通

アジアの中でも開発と発展が遅れているネパールでは、インフラやサービスなどでさえも、そのほとんどが国内の少数の都市部にのみに集中している。たとえば、道路密度は、1,000人あたりわずか0.65キロメートルに過ぎない¹¹。土地面積の100平方キロメートル当たりの道路も6キロメートルだけである。

ネパールの道路の総距離は約20,096キロメートルに上るが、そのうち舗装されているのは、6,669キロメートルだけである。そのため、モンスーンの季節の間は、洪水によって多くの道路が通行不能になる。道路を丘や山に建設する必要があるため、より大規模な陸上交通網を築く可能性は非常に限られている。ネパールの戦略的道路網の88%は、丘陵地域に位置しているため、経済的利益はかなり低くなる。

5. 航空輸送

ネパールは、1つの国際空港（トリブバン国際空港）しかなく、それもほぼキャパシティー・オーバーの状態になっている。トリブバン空港の周辺地域は、空港の建設に適した土地がないためネパール政府は、同空港の施設を拡充することができない。そこで政府は観光やビジネス旅行を促進する目的で、ヒリーベルトのポカラで第2の空港の建設に着工し、さらにテライベルトでも第3の国際空港の建設をはじめている。飛行場も大幅に増やしているほか、これら3つ以外の新たな空港も丘陵地域

¹⁰ UNITED NATIONS[2003],“Investment Policy Review Nepal” New York and Geneva,pp.13-14

¹¹ Nepal Government[2001],“Nepal Country Paper”

で建設中である。

6. 上水道

カトマンズ盆地における水の供給量は不十分である。年間中上水供給タイムスケジュールに基づいて、上水が供給されている。カトマンズは乾季の間、上水の供給量は普段の約半分にまで低下する。市民は井戸の地下水を利用しなければならないが、この地下水は地中深くから出たものではないため衛生的ではない。カトマンズ以外の都市でもきれいな上水の供給量は不足している。そのため、先述したように、汚染された水を飲用したことによる病気が流行している。

7. 電気

2015年時点で、ネパール人口の76.3パーセントしか、電気を利用できていない¹²。現在でも、主に首都圏を中心に電気が供給されている。政府は、民間セクターのエネルギー開発部門を開設しているが、その数は少なく、ほとんどがまだ開発中である。最近改訂された水力発電政策は、現在供給のない地域への供給を促進することを目的に、電力部門の活動、送電、配電のすべての分野において、民間セクターの参加を可能にした。しかし、未だ多くの困難が存在し、ネパールの水力発電の可能性を最大限に実現することができるまでには、まだしばらく時間がかかると思われる。

8. 通話／通信

2004年頃までは、国内で通話および通信事業の独占権を持っていた国営企業ネパール・テレコムが、主に首都圏を中心に通話および通信のサービスを提供していた。ネパール・テレコムは、電話回線を需要よりはるかに少ない量しか供給できていなかった。同社は、当時25万人以上の電話回線の申込書のバックログを持っていたと言われていた。一般の人は電話回線を利用することが難しく、またその利用料も高かった。2004年頃は、電話回線が引かれている村役場の数も、全体の半分ぐらいだった。だが、近年になってからは、通話通信部門での規制が緩和され、民営化が進められている。民間部門にも通話通信のビジネスの権利が与えられた後は、その他の携帯電話会社がサービスを提供するようになった。競争が激しくなった結果、料金もだんだん安くなり、簡単にサービスを利用できるようになって来ている。もっとも、ネパール・テレコムがまだ固定電話回線を独占している状況には変わりはない。ネパールでは、携帯電話のサービスは1999年に開始された。だが、ネパール・テレコムは、携帯電話サービスの独占権も握っており、また既に固定電話回線で利益を多く享受していたことなどから、携帯電話の普及もとても遅れていた。

¹² The World Bank Data [Access to electricity % of population]
<http://data.worldbank.org/indicator/EG.ELC.ACCS.ZS> (平成28年6月23日アクセス)

4. ビジネス環境の問題

1. 国営企業

ネパールのサービス業においては、法律で独占的な事業運営を認められた国営企業はほとんど存在しない。例えば、ロイヤルネパール航空が独占していた国内便は民間企業または外国人投資家の投資によって、今は国内の飛行サービスは他社の飛行会社も参加しサービスを提供している。

だが、一方、ネパールの製造業においては、このような独占を認められた国営企業が数多く存在し、多くの分野で外資の参入が規制されている。たとえば、2000 人以上の労働者を雇用している経営の苦しい三つの国営セメント会社がある。

2. 金融市場

金融市場や資本市場の発展が遅れているものの、近年金融機関が増加している。だが、すべての金融セクターで企業が増加しているわけではない。金融セクターにおける主な制約は、商業機関や財源ではなく、制度的な弱点とガバナンスの不足でもない。2 大国有銀行は不良債権を抱えており、多くの小規模銀行は、バランスシートの不均衡に悩まされている。コーポレート・ガバナンスの問題に加えて、商業銀行も零細企業への強制的な融資の影響を受けている。商業銀行は、市場金利を下回る金利を伴うこれらのローンに融資額の 12 パーセントを供出しなければならない。このような強制的な融資は、数年以内に段階的に廃止されることが期待されている。

外資企業はネパール証券取引所 (Nepal Stock Exchange、略称 NSE) に上場が許可されているが、ネパールで登録する必要がある。外国企業は最大 25 パーセントの株の購入が許可されている。より高度に発達した証券取引所は、買収によって、より FDI のための機会を得ることができると思う。

3. 人材開発

教育、人材育成、地域のサプライヤー機能についてネパールの FDI は、さらに、労働力の質が低いために、現地企業の能力に限界が生じている。2000 年の国連開発計画によると、ネパールは人材開発では 174 カ国のうち 144 番目にランク付けられている。貧困のため、学校に子どもを送ることができず、多くの親は、人材開発を促進するための努力を損なっている。2011 年では 5 歳以上の子供の識字率は平均 65.9 パーセントである (男性 75.1 パーセント、女性 57.4 パーセント)。ネパールの労働力は、多くは技能と教育に欠けている。職業技術訓練も不十分である。取引先になる可能性のあるネパールの企業は、能力と教育水準が低いので、外国人投資家が経営する大企業と競争することは困難である。

4. 腐敗

不正の問題に関しては、何かの事務手続きをする際、人事昇格、訴訟の判決、海外からの援助金、

ネパールへの外国直接投資の可能性および問題点

関税の徴収、国家発展のための資金、税金などのような側面で不正が起きている。トランスペアレンシー・インターナショナル（Transparency International、略称 TI）¹³、世界的な反腐敗ウォッチドッグは、世界で最も腐敗した国の1つとしてネパールを挙げている。ネパールはその腐敗認識指数で上位の27国のランクに入っている。トランスペアレンシー・インターナショナルは、裁判所の判決における政府関係者や研究機関及び貨物の輸出と輸入の公共部門における汚職、権威による政的、政治的虐待、贈収賄、脱税などを指摘している。

トランスペアレンシー・インターナショナルのネパール事務所の会長 Bishnu Bahadur KC はカトマンズの汚職レポートにおいて「私たちは非常に腐敗した国の中にいる。腐敗の抑制において評価できる進展が見られなかった」と、述べている¹⁴。2014年の World Development Indicators の腐敗がおきている国の比較データによると、1～6ランクの中でネパールは3ランクにランク付けされている。

V. おわりに

国境を越えて移動する資金の中で、経営参加を目的とした企業の海外進出の結果生じる資金移動は、FDI と呼ばれる。世界の FDI フローの額は 1990 年から 2010 年にかけて一貫して上昇傾向にある。これは、やはり開発途上国及び市場経済化を目指す国が FDI の積極的誘致に乗り出したためと考えられる。国の政策は FDI を制限し、自国産業の育成を図ってきた 1960 から 1970 年代までの開発戦略とは異なり、貿易や FDI の自由化や規制緩和を通じた経済成長戦略、いわゆる外資主導工業化に大きく転換した。FDI は、資金フローという面で依然として重要であり、そして雇用創出効果もある。ネパールのような開発途上国において、特に失業者が多数存在するこのような状況は外国人投資家および、外国直接投資受け入れ国どちらもウィン・ウィンの状態になると考えられる。

ここで最後に FDI の誘致における政府の役割を考えると、開発途上国の政府は何をすれば良いのだろうか。まず、政府は、多国籍企業の動きを見定め、適切な政策を速やかに誘致する投資環境を整備し、積極的に自国のアピールを世界中にすることが肝要である。FDI による経済成長戦略（外資主導工業化）が ASEAN 原加盟国や中国で成功を収めたが、ただ単純に外資規制緩和をするだけで、外資が大量に流入してくるとは思えない。FDI に関連する広い分野において、適切な制度および政策を講じていく必要がある。

¹³ トランスペアレンシー・インターナショナル（Transparency International）腐敗、特に汚職に対して取り組む国際的な非政府組織である。

¹⁴ 「The Kathmandu Post」 Nepal one of most corrupt countries: TI report

<http://kathmandupost.ekantipur.com/news/2012-12-05/nepal-one-of-most-corrupt-countries-ti-report.html>

（平成 28 年 6 月 23 日アクセス）

参考文献・資料

I. 著書・論文

- 藤田輔（2013）『開発途上国への外国直接投資の実態カンボジアの経済成長の経験』ブイツーソリューション
経済企画庁調整局（1990）『日本と世界を変える海外直接投資—海外直接投資の増大が国際的な産業・貿易構造等に及ぼす影響調査報告書』大蔵省印刷局
大野幸一・岡本由美子（1995）『EC・NAFTA・東アジアと外国直接投資—発展途上国への影響—』アジア経済研究所
丸屋豊二郎（2000）『アジア国際分業再編と外国直接投資の役割』日本貿易振興会、アジア経済研究所
Ghimire, Ramesh（2004）*Economic Policy Analysis*, New Hira Books Enterprises
Niti Bhasin（2012）*Foreign Direct Investment(FDI)in India*, New Century Publication

II. ウェブサイト

2011 Investment Climate Statement - Nepal

1) <http://www.state.gov/e/eb/rls/othr/ics/2011/157332.html> (January 22, 2014)

Government of Nepal Ministry of Industry Department of Mines and Geology

2) <http://www.dmgnepal.gov.np/> (June 4, 2014)

Government of Nepal National Planning Commission Secretariat Central Bureau of Statistics

3) <http://cbs.gov.np/> (May 25, 2014)

I Guide Nepal An investment guide to Nepal

4) <http://www.theiguide.org/public-docs/guides/nepal> (June 4, 2014)

Office of the Investment Board Government of Nepal

5) <http://www.investmentboard.gov.np/> (January 22, 2014)

World Data Bank World Development Indicators

6) <http://databank.worldbank.org/data/home.aspx> (June 4, 2014)

Drama Technique of Tennessee Williams

—*A Streetcar Named Desire*—

文学研究科英文学専攻博士後期課程在学

木下律子

Ritsuko Kinoshita

Abstract

Tennessee Williams used various drama techniques in *A Streetcar Named Desire*. Williams, however, had four other titles in mind when he wrote the play, and his favorite one was *The Poker Night*. *The Poker Night*, after he decided the title of the play as *A Streetcar Named Desire*, remained in the play as the title of Scene Three. In this thesis, therefore, I would like to analyze *A Streetcar Named Desire* from a viewpoint of poker game tactics and clarify the efforts and survival technique of Blanche Dubois to sustain living in New Orleans. In addition, with respect to the unique techniques used by Williams, I would like to analyze the reason why Williams was particular about *The Poker Night*.

Introduction

The life of Blanche Dubois reminds me of Mary Tyrone, one of the characters in *Long Day's Journey into Night* by O'Neill. Though they live in different places, times and circumstances, they have a similar destiny. First of all, I would like to compare Blanche's life with Mary's to clarify how Tennessee Williams used the drama techniques to express and reveal the deep psyche of Blanche.

Blanche grows up on a large farm in a southern state of America in an upper-class family. Her beloved husband's sudden death by committing suicide curtains up her tragic life. She loses her job and property and most of her family members pass away. She visits her sister, Stella, in New Orleans (her only family left). In New Orleans, Blanche starts a new life hoping she can find a man to spend the rest of her life and live as happily as ever. Stanley (Stella's husband), however, corners her at the edge of a cliff, falling down into the hell of adversities.

Blanche creates a world of illusion to escape from the harsh reality. In the play, Williams often used various drama techniques to describe her delusions. As the play progresses towards the ending scene, the frequency of the fantasy increases with intensity. The illusion is not just

about a relief from her difficulties. Williams used delusions to express Blanche's conflict within her mind. Blanche never thinks that she can overcome her problems with her fantasy world. Her efforts to survive in the real world create the illusion. It is the result of her struggle for existence. Without understanding her struggle, it is difficult for us to dig the true meaning of her last line, "Whoever you are –I have always depended on the kindness of strangers." (Williams, *Desire*, 418) This line represents the life of Blanche Dubois that reveals her solitude and sufferings.

Mary Tyrone is a character in *Long Day's Journey into Night* who makes a strong impression on the audience. This play is an autobiographical play of O'Neill that revealed a true confession of his family. As the title, *Long Day's Journey into Night*, suggests, each member of the Tyrone family reveals the hidden darkness inside his/her heart gradually as the scene approaches a night. This play, however, is not just a simple tragedy. The performance enables the audience to experience the sufferings and pain of the tragic ending, but there is something more. O'Neill and his family has a lot of troubles. At the end of the play, Mary (O'Neill's mother) drowns herself in the fantasy world of her past in relief from her family's troubles. Like Blanche she is controlled by loneliness and sufferings. Mary's second son dies and when Mary gives birth to her third son, the doctors administer morphine without consideration of the consequence in an unprofessional manner causing the drug addiction. Mary does not accept the reality of her serious condition. She drowns herself in the world of her shining past in remembrance of her happiness, forgetting her unfaithful husband and Edmund's tuberculosis.

Each of O'Neill's family members had a trouble, especially his mother, Mary. Her problem was serious. Nobody was able to comfort her. One reason is her father who died with tuberculosis. She lives in dread of losing her son with tuberculosis. Sinking herself in the past world of her glory is not just an escape from the reality. Without knowing the process of her action it is difficult for us to understand the essences her last line of the play. At the end of the play, Mary touches on the happy days during her school days. She no longer hears her family in the real world.

The confrontations and solitudes of Blanche and Mary are condensed in the world of illusions and memories. The author's genius shines in the brilliant use of drama techniques.

Blanche takes a streetcar named Desire and visits New Orleans. Her first lines in the play is "They hold me to take a street-car named Desire, and then transfer to one called Cemeteries and ride six blocks and get off at –Elysian Fields!" (Williams, *Desire*, 246) Professor Yasuo Kimura refers to the images of a train in his article saying that her first lines in the play represent a journey of life, the journey from life (earthly desire) to death (graveyard) and this journey is the

Drama Technique of Tennessee Williams—*A Streetcar Named Desire*—

natural phenomenon that all living beings pass. He refers to it as the law of the universe. He points out that “Heaven” where the dead people live shuts out Blanche. According to him, the images of “life” and “death” coexist in “heaven” and Blanche symbolizes death. The fact that a streetcar named Desire carries Blanche to the death land called “Heaven (paradise)” may reflect that a train is the symbol of “mortality.”

The common elements found in Blanche and Mary are that they both live a life of solitude, they struggle to live in pursuit of happiness and that “death” symbolizes the world of “illusions” and “memories.”

In addition to image of illusion and a train, Williams used various drama techniques in *A Streetcar Named Desire*. The symbol is also presented in the title. Williams, however, had four other titles in mind when he wrote the play:

He says in *Memoirs* that the play began as *Blanche’s Chair in the Moon*, of which he had written only a single scene during the winter of 1944-5. ...Williams stopped work on the play because he “became mysteriously depressed and debilitated” while writing it (M86). ...He sent Audrey Wood a scenario on March 23, 1945, writing that he intended it for Katherine Cornell and suggesting as possible titles “The Moth,” “The Poker Night,” “The Primary Colors,” or “Blanche’s Chair in the Moon.”¹

He decided not to use *Blanche’s Chair in the Moon* immediately after but out of the other three, his favorite one was “The Poker Night.”

Then, as a final act of restoration, I settled for a while at Chapala to work on a play called “The Poker Night,” which later became “A Streetcar Named Desire.”²

The title *A Streetcar Named Desire* first appeared in a letter to Audrey Wood on January 15, 1946, but Williams favored *The Poker Night* right up until the last revisions.³

“The Poker Night,” after he decided the title of the play as *A Streetcar Named Desire*, remained in the play as the title of Scene Three. He did not use the other titles for scenes in this play. Most of the important drama techniques (music, colors, a paper lantern etc.) are condensed in the scene “The Poker Night.” The title was of special importance to Williams as evidenced by these facts.

Regarding the “poker,” Professor Kimura points out that “Poker Game” is the symbol of human destiny and the struggle to live in the world of survival of the fittest where “only the

¹ Murphy, Brenda. Tennessee *Williams and Elia Kazan: A Collaboration in the Theatre*. 1992. New York: Cambridge University Press, reprinted 1996, p.20.

² Williams, Tennessee. *The New York Times*. Drama Section, 1947.11.3.

³ Murphy, Brenda. *op. cit.*, p.20.

strongest survive,” the world where people attempt to win the competition over the weakness of the others. His point can be witnessed in the relation between Blanche and Stanley. Stanley takes advantage of her vulnerability to force her out of New Orleans and Blanche tries to counter-attack in maintaining her living. The battle between the two characters represents “the law of the jungle” and “the struggle for existence.”

Kimura further analyzes the conflict between Blanche and Stanley in the following note: Stanley questions Blanche’s past and when he hears Blanche calling him ‘animal’ and ‘ape-like,’ he decides to investigate her past (her true character). He finds out and reveals her past (her past love life with other men due to her desperate urge to escape from despair). In Scene Ten, he reads the mind of Blanche and takes an action in advance to violate her and wins the victory in the game of survival with Blanche. Scene Four is the turning point of the competition between these two characters that changes the situations of the game. Kimura categorize Stanley as the winner and Blanche as the loser. When we take the life of Blanche and the behaviors or attitudes of other characters toward Blanche in the final scene into consideration, we cannot say Stanley is the victor and Blanche is the loser.

In the letter to Audrey Wood, Williams wrote that he prepared three possible endings for the play. All the endings focus on Blanche:

One, Blanche simply leaves –with no destination.

Two, goes mad.

Three, throws herself in front of a train in the freight-yards, the roar of which has been an ominous under-tone throughout the play.⁴

These endings differ from those of the released version. Considering the processes leading to the conclusion using various techniques of expressionism, the author tried to reveal the confrontation of Blanche to the audience.

In this thesis, therefore, I would like to analyze *A Streetcar Named Desire* from a viewpoint of poker game tactics and clarify the efforts and survival technique of Blanche to sustain living in New Orleans. In addition, with respect to the unique techniques used by Williams, I would like to analyze the reason why Williams was particular about “The Poker Night.”

Chapter I: Drama Techniques in *A Streetcar Named Desire*

i . The Poker Night

In Scene Three, “The Poker Night,” the major events that change the life of Blanche take

⁴ *Ibid.*, p.20.

Drama Technique of Tennessee Williams—*A Streetcar Named Desire*—

place. First, I would like to point out what a victory is for Blanche and what is her tactics to achieve the goal. In order to realize her dream, there are a few obstacles to clear. Technically, Blanche not only has to overcome her guilty conscience against Alan but also has to get a stable life both mentally and economically. In “The Poker Night” a man called Mitch, the candidate for her future husband, appears. She is attracted by him and approaches him in an effort to get him but Stanley stands in front of her as a hard wall. Williams intelligently used his drama techniques to elaborate and illustrate the characters’ precise feelings and their intentions behind their attitudes and his plots are reflected in the use of background colors and music.

Williams used the raw colors of childhood’s spectrum for the clothes of men and the background as he has specifically instructed in the following stage direction:

There is a picture of Van Gogh’s of a billiard –parlor at night. The kitchen now suggests that sort of lurid nocturnal brilliance, the raw colors of childhood’s spectrum. Over the yellow linoleum of the kitchen table hangs an electric bulb with a vivid green glass shade. The poker players –Stanley, Steve, Mitch and Pablo –wear colored shirts, solid blues, a purple, a red-and-white check, a light green, and they are men at the peak of their physical manhood, as coarse and direct and powerful as the primary colors. There are vivid slices of watermelon on the table, whiskey bottles and glasses.⁵

“A picture of Van Gogh’s of a billiard –parlor at night” is “Le Cafe de nuit” which Gogh painted in September, 1888. He said about the colors in the following letter to his younger brother that he used red and green to express human emotions. In the same letter, about the use of a bar as the main site of the play, he mentioned that he wanted a place where people get mad and even commit crimes to contrast soft rose and red to express the image of blood by using the red wine and Louis XV and Veronese style soft green as well as strong yellow-green and blue-green. About positioning of the colors on one location, he revealed his intention to express the atmosphere of pale and sulfurous crucible of hell to represent the dark power in a bar.

The letter above explicitly describes the author’s image of a cafe. The genius of Williams enabled the use of raw colors such as red, green, yellow and blue. He wrote that the poker players “are men at the peak of their physical manhood, as coarse and direct and powerful as the primary colors” in the stage direction. The room where the male characters play poker in colored shirts (solid blues, purple, red-and-white check and light green) has the image of disaster, madness and crime. These colors do not represent Blanche but she enlarges her dream in the scene “The Poker Night” and her challenge starts. “Madness” in “The Poker Night” reflects the future of Blanche,

⁵ Williams, Tennessee. *The Theatre of Tennessee Williams, Volume the first*. New York: A New Directions Book. 1971, p.286.

and at the same time it harbingers the coming “insanity” at the end of the story.

ii . The Encounter with Mitch

Blanche is attracted by Mitch who is kind and warm-hearted to Blanche. Unlike other players he is gentle and nice. They find out that they share a common past. Blanche’s husband commits suicide and Mitch’s girlfriend dies from illness. She shows her sympathy straight-forwardly to Mitch after knowing his girlfriend’s death as she knows the sorrow of losing the loved ones referring to her late husband, Alan. Her deep suffering synchronizes with Mitch’s pain of losing his girlfriend. Blanche’s heavy-hearted experience enables her to understand his feeling deep inside his psyche. She asks Mitch to put a paper lantern on a light bulb with the intent to tag him over to her side. Her behavior tests Mitch whether he stands by her to support her life or not which is her intention to get him.

When Blanche talks about her past in Laurel with Stella, she also touches on her sadness of living without the help of others. She mentions that she cannot be an indomitable woman who lives a life of solitude and also says that “When people are soft –soft people have got to shimmer and glow.” (Williams, *Desire*, 332) Moreover, she explains that for getting someone’s help she has to be noticed by attracting others. Blanche knows that she is a soft woman and worries about her future in New Orleans. She points out, “they’ve got to put on soft colors, the colors of butterfly wings, and put a –paper lantern over the light....It isn’t enough to be soft. You’ve got to be soft *and attractive*.” (Williams, *Desire*, 332). The light represents “soft people.” The paper lantern symbolizes the charm men want to have.

In short, the paper lantern reminds Blanche of the hardships of her past life such as the loss of her husband and the fall of her family. However, the act of putting the paper lantern on the naked light frees her from her sufferings of the past. She asks Mitch to take the action hiding her intention to secure the stable living in New Orleans.

In the conversation with Mitch, Blanche never tells the truth of losing her teaching job due to her drinking habit in the past. She calls her students Romeo and Juliet and continues to talk on the subject of literature to impress Mitch about her educational level. She wants Mitch to have a good impression on her. The stage and lines enable the audience to witness the plot behind her action with ease. With the background music, the author reveals her emotions to Mitch.

[...Blanche rises and crosses leisurely to a small white radio and turns it on.]...

[Rumba music comes over the radio. Mitch rises at the table.]

STANLEY: Who turned that on in there?

Drama Technique of Tennessee Williams—*A Streetcar Named Desire*—

BLANCHE: I did. Do you mind?

STANLEY: Turn it off!...

STEVE: Sounds like Xavier Cugat!

[*Stanley jumps up and, crossing to the radio, turns it off. He stops short at the sight of Blanche in the chair. She returns his look without flinching. Then he sits again at the poker table.*]...

[*Mitch rises as Stanley returns to his seat.*]⁶

Music from the radio is probably “Miami Beach Rumba” by Xavier Cugat orchestra. In 1946 (the year before the publication of *A Streetcar Named Desire*), the rumba composed by Irving Fields was one of the big-hit popular music by Xavier Cugat orchestra. The lyrics of the song describe Miami. Blanche mentions that she ran into Mr. Shep Huntleigh in Miami and that he was her boyfriend. She continues, “I took the trip as an investment, thinking I’d meet someone with a million dollars.” (Williams, *Desire*, 316) Her appeal and expectations to rely for her future on him and that she wants him to help her life is quite evident. From the facts she mentioned it is quite apparent that in Miami Blanche once lived a life with hope under the protection of the others. When Mitch hears the rumba, he immediately stands up and approaches Blanche. This means that she has succeeded in seducing Mitch with her charm and with rumba music. Rumba represents her feelings to Mitch, her desperate urge to get him as her boyfriend to support her life. The stage effect clearly reveals her intention and plot behind her attitude in an easy-to-understand manner. The audience is able to understand the main character’s ambition and technique of winning. Waltz, as well as rumba, is used to express her feelings to Mitch as follows:

[*She turns the knobs on the radio and it begins to play “Wien, Wien nur du allein.” Blanche waltzes to the music with romantic gestures. Mitch is delighted and moves in awkward imitation like a dancing bear.*

[*Stanley stalks fiercely through the portieres into the bedroom. He crosses to the small white radio and snatches it off the table. With a shouted oath, he tosses the instrument out the window.*]⁷

The theme of “Wien, Wien nur du allein” is love for a hometown. Through this song she thinks of her hometown and a life at Belle Reve as she dances with Mitch.

In both songs Blanche recollects her love life of the past and she charms Mitch with the music which is her technique to magnetize this man, her plot to achieve her victory with her experienced skill. When waltz from the radio ends, Stanley is raged at Blanche’s behavior and his anger is directed to the radio as he throws it out of the window and breaks it. His hostile attitude against

⁶ *Ibid*, p.294.

⁷ *Ibid*, p.302.

Blanche opens the fire of confrontation between them.

iii. Desire of Stanley and Stella

In “The Poker Night,” Stanley and Stella’s sexual desire are represented by the music. Stanley’s violence to Stella after his aggression against Blanche forces Stella to escape from him. In this scene, Stella is hurt but her attitude suddenly changes as she hears him calling her name. She eventually forgives him, which signifies that they are controlled by their sexual urge and this is their way of making love.

STANLEY [*with heaven-splitting violence*]: STELL·LAHHHHH!

[*The low-tone clarinet moans. The door upstairs opens again. Stella slips down the rickety stairs in her robe....They stare at each other. Then they come together with low, animal moans....He snatches the screen door open and lifts her off her feet and bears her into the dark flat....*

[*The music fades away....*]⁸

Their desire is expressed with the dissonant brass, low-tone clarinet and “blue piano.” The music begins with the appearance of Stanley and Stella. The music is effectively used to reveal their surging emotions. Their feelings are aroused with the increase of the volume of music. With the disappearance of these two characters, the music fades out. Williams often used this technique of using music after “The Poker Night” scene. In Scene Four, for example, the music represents Stanley’s control over Stella in the sense that she is emotionally ruled by her husband. The use of audio sound impacts the audience to know the mind of the characters.

STANLEY: Hey! Hey, Stella!

STELLA [*who has listened gravely to Blanche*]: Stanley!

BLANCHE: Stella, I—

[*But Stella has gone to the front door. Stanley enters casually with his packages.*]

STANLEY: Hiyuh, Stella. Blanche back?

STELLA: Yes, she’s back.

STANLEY: Hiyuh, Blanche. [*He grins at her.*]...

[*Stella has embraced him with both arms, fiercely, and full in the view of Blanche. He laughs and clasps her head to him. Over her head he grins through the curtains at Blanche.*

[*As the lights fade away, with a lingering brightness on their embrace, the music of the “blue piano” and trumpet and drums is heard.*]⁹

⁸ *Ibid.*, p.307.

⁹ *Ibid.*, p.324.

In “The Poker Night,” Stella is the target of Stanley’s violence and runs to Blanche to seek help but eventually when she hears Stanley, she rushes out of the room without listening to Blanche’s advice. In Scene Four, as well as “The Poker Night,” Blanche advises Stella to live separately from Stanley but she ignores her sister and returns to him when he comes home. In both scenes, Williams used “blue piano.” Stella in fact escapes from Laurel and she finally finds her place and starts her new life with Stanley and the people in New Orleans.

In the 1940s, jazz music called “bebop” was popular. Bebop artists played the music using the brass such as a trumpet and a saxhorn. Some of the artists called “piano trio” mainly used piano, bass guitar and trumpet. Williams used these sounds. He wrote the play while listening to the jazz, the sounds of brass, drum and piano.

As evident in the above, major drama techniques are condensed in the scene, “The Poker Night.”

Chapter II: Plot of Blanche

i . Tactics against Stella

In the introduction, I have pointed out on the relationship between “death” and “train” which can be evidenced in Scene One. In the first lines of Blanche: “[*with faintly hysterical humor*] They told me to take a street-car named Desire, and then transfer to one called Cemeteries and ride six blocks and get off at –Elysian Fields!” (Williams, *Desire*, 246), the audience recognizes that she doesn’t think New Orleans is an “Elysian Fields” and she mentions on the L&N tracks: “Out there I suppose is the ghoulish-woodland of Weir!” (Williams, *Desire*, 252) There are words associated with the image of “death” such as “ghoul” and “haunted woodland.” “Death” is also represented in her soliloquy at the end of the conversation with Stella.

[...*The music of the “blue piano” grows louder....*]...

BLANCHE: I, I, I took the blows in my face and my body! All of those deaths! The long parade to the graveyard!...You didn’t dream, but I saw! *Saw! Saw!* And now you sit there telling me with your eyes that I let the place go! ...Why, the Grim Reaper had put up his tent on our doorstep!...Stella. Belle Reve was his headquarters! ...That was all, Stella! And I with my pitiful salary at the school. Yes, accuse me! Sit there and stare at me, thinking I let the place go! *I let the place go? Where were you!* In bed with your –Polack!¹⁰

Blanche tells Stella that she suffered the pain of “death” in Laurel and nothing eased her sorrow. She hopes to overcome the fear of death in New Orleans, however, as the matter of

¹⁰ *Ibid.*, p.261.

consequence, the new land of hope happens to be “the ghoulish-woodland of weir” where the shadows of death wait, implying she has visited the land of cadaver where she smells the walking of death towards her. Her soliloquy maybe the clue to the third ending? “throws herself in front of a train in the freight-yards.” (Murphy, *Williams*, 20)

Blanche, then, blames her sister that a part of the reason why she had to visit New Orleans is because Stella did not help her when she was in deep despair about the death of their family. To this, Stella does not have any words and cries. Blanche’s tactic succeeds to secure a living in New Orleans.

The “blue piano” in stage direction is not about “desire” like Scene Three. In “The Poker Night” this music was used to express “desire” of Stanley and Stella. In Scene One “blue piano,” however, has difficult meanings from that of “The Poker Night.” Elia Kazan analyzes the symbolism of “blue piano” in the following passage:

Why does the ‘blues’ music fit the play? The Blues is an expression of the loneliness and rejection, the exclusion and isolation of the Negro and their (opposite) longing for love and connection. Blanche too is ‘looking for a home,’ abandoned, friendless. ‘I don’t know where I’m going, but I’m going.’ Thus the Blue Piano catches the soul of Blanche, the miserable unusual human side of the girl which is beneath her frenetic duplicity, her trickery, lies, etc. It tells, it emotionally reminds you what all the fireworks are caused by.¹¹

The volume of “blue piano” increases just before Blanche talks about her loneliness and the death of her family in Laurel. The use of crescendo represents not only the desire of Stanley and Stella but the solitude of Blanche.

In “The Poker Night,” Blanche is shocked by Stanley and Stella’s hedonistic way of living. In her effort to change her sister’s life style, back to that of Belle Reve, Blanche reveals her real intentions taking the dangerous risk. Her challenge to take back Stella from Stanley starts. First, Blanche tries to persuade Stella that her way of life is absurd and of vulgar taste. She preaches Stella, intelligently, leading her to remember the life of Belle Reve gradually, implying the break up with Stanley. The interesting point here is Blanche’s unswerving determination and power to open her new life without delving into a life controlled by earthly desires.

BLANCHE: Pull yourself together and face the facts....

BLANCHE: What you are talking about is brutal desire –just –desire! –the name of that rattle-trap streetcar that bangs through the Quarter, up one old narrow street and down another...

STELLA: Haven’t you ever ridden on that streetcar?

¹¹ Williams, Tennessee. *A Streetcar Named Desire*. 浅田寛厚 編. 東京: 金星堂, 1979, p.140.

Drama Technique of Tennessee Williams—*A Streetcar Named Desire*—

BLANCHE: It brought me here. —Where I'm not wanted and where I'm ashamed to be...

BLANCHE: He acts like an animal, has an animal's habits! ...Yes, something —ape-like about him, like one of those pictures I've seen in —anthropological studies! ...*Don't —don't hang back with the brutes!*¹²

From these lines, the audiences are aware of the conflict deep inside Blanche that she tries to refuse her sexual urge, evoked by the hedonistic life of “desire” of her sister and Stanley in New Orleans, while preaching to Stella. Her resistance is triggered by the “defense mechanism” (Freud, A) and an expression of “self—actualization” (Maslow, A. H.).

Since Blanche has experienced and is very well aware of the fear of “desire,” Stanley appeared to her to be the “survivor of the Stone Age” (Williams, *Desire*, 323) who will ruin her sister's life into the misery.

In the lines mentioned above, she reveals her hatred towards the streetcar named “Desire.” To Blanche, “Elysian Fields” where the streetcar brought her is not a paradise. New Orleans is the city of earthly desires, opposite and a completely different world from what Blanche hopes to live. She persuades Stella to live a decent life apart from “desire” which implies the separation from Stanley as she determines to win her inner conflict with her sexual urges and earthly desires.

Stella seems to agree with Blanche but Stanley becomes the wall of obstacle. After listening to Blanche's preaches, he calls Stella out loud intentionally. Stella leaves Blanche immediately she hears the voice of Stanley.

Stella's attitudes are best explained by “the need to belong” theory (to New Orleans) by Leary and Baumeister. Her behavior shocks Blanche but Stella is accustomed to the situation and it is a very natural reaction for her sister. At the end of the scene, Stanley smiles deliberately at Blanche with the background music of “blue piano,” “trumpet” and “drums” are played slowly. “Blue piano” symbolizes desire of Stanley and Stella. The manly power of Stanley showing his dominance over her sister defeats Blanche and her plot fails.

ii . **Tactics against Mitch**

After failing in getting Stella back, Blanche's first challenge to date with Mitch begins, knowing that Stanley has started to dig out her life in Laurel. The final goal is, of course, to get married to Mitch and secure a peaceful and stable living in New Orleans. In Scene Six Blanche aims to attract his attention and win his heart. Her final goal is to get married and secure her

¹² Williams, Tennessee. *The Theatre of Tennessee Williams, Volume the first*. New York: A New Directions Book. 1971, p.323.

stable and peaceful life in New Orleans. In order to achieve her goal, she first attempts to get him at her side and use the man as a final card to win the game with Stanley. With Mitch on her hand, her advantage over Stanley is evident.

Her efforts in getting her future husband begins first by trying to get the information from Mitch, how much he knows about her past in Laurel because she is skeptical of whether Stanley already knows her past life or not, which may become the main obstacle to her future marriage. In order to secure her position over Stanley, she wants Mitch to think that Stanley's slanderous information about her past deeds is a misleading rumor fabricated by her bother-in-law resulting from his envy towards Blanche in case Stanley is successful in his investigation and has shared the information with Mitch. Her desperate efforts from the fear that her sister's husband may ruin her new life in the city of Elysian Fields forced her to acquire the information she needs. She wants to win the trust from her future lover and avoid any oppositional information against her. The leak by Stanley may be the major hindrance to achieving her goal. She approaches Mitch and successfully leads the conversation to make him talk on the topic of marriage.

Blanche is anxious and eager but clever enough to maintain her patience and hides her intent. She controls the conversation and tries to lead the dialogue maintaining her tone and attitude in an ordinary manner. She successfully changes the topic to Alan's death with her intent to win the sympathy from Mitch in order to win his attraction. In "The Poker Night," she finds out the death of Mitch's girlfriend due to an illness. In Scene Six she also discovers that he worries about his mother's health how long she can live. Without knowing her intent, Mitch sympathizes with her and succeeds in getting his trust. As she and her future husband share the solitude and sorrow, she achieves her goal of getting him on her side.

BLANCHE: He was a boy, just a boy, when I was a very young girl. When I was sixteen, I made the discovery –love. All at once and much, much too completely. It was like you suddenly turned a blinding light on something that had always been half in shadow, that's how it struck the world for me...[*Polka music sounds, in a minor key faint with distance.*]

We danced the Varsouviana! Suddenly in the middle of the dance the boy I had married broke away from me and ran out of the casino. A few moments later –a shot! [*The polka stops abruptly.*]

[*Blanche rises stiffly. Then, the polka resumes in a major key.*]...

It was because –on the dance floor –unable to stop myself –I'd suddenly said –“I saw! I know! You disgust me...” And then the searchlight which had been turned on the world was turned off again and never for one moment since has there been any light that's stronger than this –kitchen –candle...[*The polka music increases. Mitch stands beside her.*]

Drama Technique of Tennessee Williams—*A Streetcar Named Desire*—

MITCH [*drawing her slowly into his arms*]: You need somebody. And I need somebody, too. Could it be —you and me, Blanche? [...*The Polka tune fades out...*]¹³

In her lines when she reveals her past experience which represents the self-disclosure of her love life, polka music is played in her heart reflecting her complex feelings towards Alan. The music reverberates in her mind in remembrance of her affection at the same time as her guilty conscience to Alan. Her love towards her late husband revives during the playing of polka at the same time as she is gripped by panic, seized with pain and agony. In her consciousness, the confrontation of opposing emotions of love and guilt, happiness and sadness squeezing her heart corners her to the edge of a cliff looking down into the hell. She delves herself into the world of her illusional sufferings but the light of hope shines in the darkness of her negativity. The existence of Mitch, however, torches her freezing world of loneliness and empty life with warmth and hope. In other words, polka is the music that represents her emotional transition, describing the changes in Blanche's life of alienation to the life of love. As the music fades out, the light of hope intensifies in her heart with compassion and warmth. The effective use of music reveals the changes of the character's feelings in a precise and detailed manner. The stage effects enable the audience to witness and experience how Blanche evolves from her sufferings and finds the hope. The music functions as a vehicle to transport the emotions to the audience who synchronizes with the main character.

In the following conversation, Blanche behavior to the “train” reflects the negative attitude towards the carrier:

BLANCHE: ...How will you get home?

MITCH: I'll walk over to Bourbon and catch an awl-car.

BLANCHE [*laughing grimly*]: Is that streetcar named Desire still grinding along the tracks at this hour?¹⁴

In the same scene, a train appears again in the middle of Blanche's soliloquy about death of her late husband.

[*A locomotive is heard approaching outside. She claps her hands to her ears and crouches over. The headlight of the locomotive glares into the room as it thunders past. As the noise recedes she straightens slowly and continues speaking.*]

Afterward we pretended that nothing had been discovered. Yes, the three of us drove out to Moon Lake Casino, very drunk and laughing all the way.

¹³ *Ibid.*, p.354.

¹⁴ *Ibid.*, p.340.

[*Polka music sounds, in a minor key faint with distance.*]¹⁵

In the play, the sound of a locomotive is used frequently and effectively in the same way as the music of polka which is played in her remembrance of Alan's death. The author maintains to symbolize death with a streetcar. In these lines of the heroin as well as the sounds and the train suicide committed by Blanche in her mind, all represent death and it is the third ending planned by Williams: "throws herself in front of a train in the freight-yards." (Murphy, *Williams*, 20)

The tactics against Mitch comes to an end in Scene Nine. Blanche who drinks to forget the past waits for Mitch. She was desperate to run away from her misery of the past and alcohol has been the only means to Lethean oblivion, the anodyne to assuage her pain and sufferings. Only hope left for her is Mitch. At the beginning of the stage direction, Williams had specified the music of polka to be heard in the mind of Blanche. The author used the technique intelligently with the use of action and lines on the stage to express the heroin's inner mind. The tune in her heart which represents her escape from the harsh reality of her past adversities is played as the background at the same time "*she seems to whisper the words of the song.*" (Williams, *Desire*, 379) Before this scene, she is not able to stand the sound. In other words, in the earlier scenes, she cannot stand the music and tries to avoid polka, however, in Scene Nine, where she is cornered to the edge of her life, the extreme situation she cannot bear, she seems to whisper the song.

Polka stops at the arrival of Mitch, which is the light of hope, a signal beam that rainbows her darkness and clear the cloud of the past misery. To Blanche, Mitch is a man that opens the dawn of her new life. The adverse shadow of the past remembrance, however, darkens her heart and drowns Blanche into the world of her illusion. The music is the trigger that opens the past. The time with Mitch is the only moment she returns to a reality. A playback of the music pulls her back in the world of illusion. She travels between the world of reality and illusion. The music is used to express the difference between these two realms, a hope of happiness (present or real world) and a painful life of sufferings (past or a world of illusion). When polka is played in her consciousness, the past memory is played in her mind.

BLANCHE: Something's the matter tonight, but never mind. I won't cross-examine the witness. I'll just—
[*She touches her forehead vaguely. The polka tune starts up again.*] —pretend I don't notice anything different about you! That —music again...

MITCH: What music?

BLANCHE: The "Varsouviana"! The polka tune they were playing when Allan— Wait!

[*A distant revolver shot is heard. Blanche seems relieved.*]

¹⁵ *Ibid.*, p.354.

Drama Technique of Tennessee Williams—*A Streetcar Named Desire*—

There now, the shot! It always stops after that.

[*The polka music dies out again.*]

Yes, now it's stopped.¹⁶

She never tells the secret of polka music in her mind to any other characters. The virtual world of her illusion is locked up in a chamber of the unbearable truth she encountered in the past. In other words, with polka the last love memory with her husband revives but her guilty conscience also emerges with sorrow and self-destructive accusation. She cannot or does not want to touch on the music and tries to avoid the topic in her conversation. She confronts with the playing of music and the sound of a single shot that took her husband's life in her hidden memory deep inside her mind, covered by beautiful images of the past fantasy. While accepting her agony, she tries to kill the past and maintains herself or pretends to be a sincere and pure, educated lady, she calmly approaches Mitch, which is the reason why she is called a "grotesque beauty" (her grotesque beauty is also described in Scene Eleven). The ugly truth under the illusion of the past beauty suggests her madness deep inside her heart. The conflicts inside her tear her apart. Its consequence is quite evident. Her lies and vanity corners Blanche towards the end of the play. Mitch, after all, decides to test Blanche, wanting to hear the words of truth from her and take action against the heroin. He wants to eradicate the rumors by Stanley. He tears the paper lantern off the light bulb in order to see how she reacts and know the truth of Stella's sister. In the scene, "The Poker Night," Blanche asks Mitch to put the lantern over the light bulb with her intent to magnet him on her side. She succeeds in winning his heart as he puts on the paper cover. Tearing the lantern off in Scene Nine, however, signifies that he completely deserts her. This suggests that she has lost the strongest card she had. She emphasizes by the following lines:

BLANCHE: I don't want realism. I want magic! [*Mitch laughs*] Yes, yes, magic! I try to give that to people.

I misrepresent things to them. I don't tell truth, I tell what *ought* to be truth. And if that is sinful, then let me be damned for it! —*Don't turn the light on!*¹⁷

The story she tells Mitch, as the lyrics of the song "Paper Moon" in Scene Seven suggests, is not the truth but her hopes. She tries to avoid a naked bulb because the light activates the past memory of her adverse life of pain in Laurel. "What *ought* to be truth" (Williams, *Desire*, 385) means that she fulfills the empty space brought by death of Alan and tries to detach from her earthly desires by marrying Mitch to lead a youthful, beautiful life but the reality is full of the obstacles to her success —such as Stanley who tries to interrupt her from achieving the goal —and

¹⁶ *Ibid.*, p.381.

¹⁷ *Ibid.*, p.385.

the fact is that she is no longer young and cannot maintain her living in New Orleans without Mitch. She is very well aware of the severe situation she is in and this is the truth of her current position. Consequently, she endeavors to win the heart of Mitch and Stella to overcome these obstacles (which is the function of “defense mechanism” by Freud. A), however, she fails on achieving her dream. When all her efforts end in vain, the castle of her dream is destroyed from the foundation leading to her breakdown. The only way left for her in order to survive is to “escape” (by Freud. A) into the world of her illusion. Her “escape” is reflected in the following lines, “I don’t want realism. I want magic!” (Williams, *Desire*, 385) In other words, “escape” is the method of defense used by Blanche Dubois. Professor Muto points out that the eradication of her past life of misery and adversities and the urge to live a happy life is the manifestation of “repression” triggered by her “defense mechanism.”

Mitch’s disappointment against Blanche blinds him and he cannot see the truth in her or understand her agony she suffered in her past life of misery. Her attitudes just frustrate Mitch. He thinks she is just trying to look young by avoiding the light and despises her lies and vanity. When she understands that the odds are against her, she is determined to tell the truth about her life in Laurel.

During the soliloquy in the following scene where Blanche reveals her past, Williams used three types of music to express her regrets, sadness, sufferings and solitude.

[A Vendor comes around the corner. She is a blind Mexican woman in a dark shawl, carrying bunches of those gaudy tin flowers that lower-class Mexican display at funerals and other festive occasions. She is calling barely audibly. Her figure is only faintly visible outside the building.]

MEXICAN WOMAN: Flores. Flores. Flores para los muertos. Flores. Flores....

BLANCHE [*frightened*]: No, no! Not now! Not now!...

[*The polka tune fades in.*]...

MEXICAN WOMAN: Flores.

BLANCHE: Death –I used to sit here and she used to sit over there and death was as close as you are....We didn’t dare even admit we had ever heard of it!

MEXICAN WOMAN: Flores para los muertos, flores –flores...¹⁸

At the beginning of this scene, the audience hears the voice of a blind Mexican woman carrying bunches of the gaudy tin flowers that lower Mexican display at funerals and other festive occasions and the music of polka is played. The color of her dark shawl symbolizes despair and anxiety. It is also associated with darkness, fear, dismay, and loneliness. The melody of polka and

¹⁸ *Ibid.*, p.378.

Drama Technique of Tennessee Williams—*A Streetcar Named Desire*—

the voice of the blind Mexican woman reflect a fear in Blanche, a fear for “death.” While she discloses the painful memory of the death of her families, the voice of the Mexican woman repeatedly echoes on the stage effectively. The remembrance of the deceased flashes in her mind and the shock of losing the loved ones returns as a misery and despair. The sound of polka reminds her of the death of her late husband, all of these recollections bring her into the world of her illusion. The combination of polka music and the lady’s voice make the audience aware that a fear of death forces Blanche to dive into the world of illusion and drown herself.

Mitch abuses Blanche knowing her past which drops her into the incessant solitude world of darkness.

BLANCHE: The opposite is desire. So do you wonder? How could you possibly wonder!...

[The Mexican woman turns slowly and drifts back off with her soft mournful cries. Blanche goes to the dresser and leans forward on it. After a moment, Mitch rises and follows her purposefully. The polka music fades away....]

MITCH: I don’t think I want to marry you any more....

MITCH *[dropping his hands from her waist]*: You’re not clean enough to bring in the house with my mother....*[With a startled gasp, Mitch turns and goes out the outer door, clatters awkwardly down the steps and around the corner of the building. Blanche staggers back from the window and falls to her knees. The distant piano is slow and blue.]*¹⁹

In the stage direction, Williams had given a specific instruction: “*The distant piano is slow and blue.*” (Williams, *Desire*, 390) The music and the voice gradually fade out. Blanche’s plot and tactics against Mitch end up in a failure. The loss of Mitch meant losing the means of living in New Orleans. The sound of a piano represents solitude of losing Mitch, the same as the “blue piano” in Scene One.

Blanche’s line, “The opposite is desire.” (Williams, *Desire*, 389), represents her past life of having affairs with numerous men to ease her pain of losing the loved ones and her guilty conscience against Alan. Her behavior is driven by her fear. It was an essential to satisfy her thirst and fulfill her empty space. The satisfaction of her “sexual urge” was required to defend or protect her from the breakdown. She had lost not only her love but also a love support or emotional backup as she was embraced with the love of a husband. Her “need of love” intensified as her thirst gets stronger. To her it was a required action to survive. She needed love. Unfortunately, she was not able to completely satisfy her thirst as no true love was found in Laurel. No one was able to fulfill her emptiness and comfort her solitude and eradicate her

¹⁹ *Ibid.*, p.389.

anxiety. Her journey in pursuit of true love began. Yet, in New Orleans, her pride and tactics ironically ends up against her because she makes the same mistake as she did in Laurel.

Mitch calls Blanche “not clean enough” and tells her straight-forwardly that he has no intention of getting married to her. In addition, he, intentionally, reveals his brutality that the motifs of his action is based on his earthly desires similar to that of Stanley and corners Blanche to the edge detonating the madness inside the main character.

In Scene Six, the music of polka pinpoints to the death of Alan and Blanche’s guilty conscience. However, in Scene Nine, Williams used the same melody in combination with the voice of Mexican woman to represent death of Blanche’s husband and her family as well as her fear against losing the loved ones. At the end of the scene, a piano is played to reveal her loneliness. With these three sounds, the author hints to the audiences at the ending breakdown of the main character, Blanche Dubois.

iii. Tactics against Stanley

Stanley is a realistic, stereotyped manly man who acts as “a king” of the house. He is the only character who tries to prevent Blanche from achieving her goal. He is the major obstacle to Blanche’s new life in New Orleans. Her attempts and tactics fail because of his destructive character. He is disgusted with her self-centered behavior. He is the greatest enemy of Blanche. He takes away Mitch who is the final card Blanche needs to win the victory from her as he reveals her intention behind her attitudes. His victory is to maintain his position as “a king” to keep his kingdom. The triumph over Blanche signifies the destruction of her illusion.

Stanley’s “Realism” is depicted in the Scene Two where Stanley and Stella quarrels while Blanche takes a bath. When he hears about Blanche losing the property of Belle Reve, he recognizes Blanche as an enemy threatening his life and decides to reveal her past in an intention to unfold her plot. At the mentioning of the topic of a property, he does not lose the chance to attack her. He instantly talks eloquently on “the Napoleonic code” and coerces Stella using his power as “a king” and reveals his distrust on Blanche.

In Scene Two, Blanche does not meet with Mitch, yet. She intends to manage the living by herself in the real world whereas Stanley corners her excessively. Blanche, however, succeeds in her tactics against Mitch during the date in Scene Six. Her feat is quite evident and her final goal seems to be near. The songs in Scenes Two and Seven represents her emotional transition before/after the date with him. In both scenes, the realism of Stanley and romanticism of Blanche are contrasted using the expressionism technique with various stage effects as in the following

lines:

STELLA: Stan, we've —lost Belle Reve!...

STANLEY: How?

STELLA [*vaguely*]: Oh, it had to be —sacrificed or something....

BLANCHE [*singing in the bathroom*]: “From the land of the sky blue water,
They brought a captive maid!”...

STANLEY: Yeah. I get the idea. Now let's skip back a little to where you said the country place was disposed of....

STELLA: It's best not to talk much about it until she's calmed down.

STANLEY: So that's the deal, huh? Sister Blanche cannot be annoyed with business details right now!²⁰

The song sung by Blanche is effectively and intelligently used in the scene during the time when the dialogue between Stanley and Blanche ceases to contrast Stanley who is eager to find out the reason of losing Belle Reve and Blanche who enjoys the singing in remembrance of her past prosperity. Stanley's obsessed commitment in investigating her past and her ignorance are distinctive and suggestive.

The song in Scene Two explains that Blanche has left Laurel where she experienced the death of her families but now she is “a captive maid” in New Orleans. The author used the song to describe the past of Blanche as well as the present situation without any action. In other words, the lyrics of the song reveals her sorrow and her empty heart, her solitude in an opera technique. It is the monologue that sings the opera of her life.

In Scene Seven, Blanche uses the tactics against Mitch where she sings a song of happiness as she enjoys the delightful dialogue with Mitch, talking about the marriage. On the other hand, Stanley and Stella are secretly talking about her past. Her lies are revealed by Stanley and exposed under the sun.

[*Blanche is singing in the bathroom a saccharine popular ballad which is used contrapuntally with Stanley's speech*]....

BLANCHE [*singing blithely*]: “Say, it's only a paper moon, Sailing over a cardboard sea —But it wouldn't be make-believe If you believed in me!”...

STANLEY:... In fact I am willing to bet you that she never had no idea of returning to Laurel!... They kicked her out of that high school before the spring term ended —and I hate to tell you the reason that step was taken! A seventeen-year-old boy — she'd gotten mixed up with!

BLANCHE: “It's a Barnum and Bailey world, Just as phony as it can be —”

²⁰ *Ibid.*, p.270.

[*In the bathroom the water goes on loud; little breathless cries and peals of laughter are heard as if a child were frolicking in the tub.*]²¹

According to the stage direction, her song “is used contrapuntally with Stanley’s speech” (Williams, *Desire*, 359) and the more delightful and cheerful she becomes, the more secrets are disclosed and the gravity of the unfolded lies becomes powerful. The use of music arouses the feelings of audience and enables them to realize her stratagem becomes worse.

Both in Scene Two and Seven, Blanche sings the song that unveils her inner feelings in the bathroom while the hidden talks progresses between Stanley and Stella. The author used the same method repeatedly to effectively show the audience the emotional changes of the main character in between the dialogues of her sister and her husband on the harsh reality of Blanche. The contrast between the temporary happiness Blanche appreciates and the progression of the plot by Stanley who whispers the unrevealed secrets of her sister to Stella impacts the audience effectively with the use of music. These effects leave a strong impact of what is going inside Blanche’s consciousness and audience is also aware of the changing situation of Blanche. The positively or the bright side of Blanche and the negativity for the dark reality of her past life unfolded by her sister’s husband represents the changes in the psychology of Blanche. The audience notices the difference between the enjoyment and seriousness through the switching of the setting in one scene. Interestingly, as the play progresses, Blanche’s psychological transition becomes more evident and her past is unveiled until she is naked.

In Scene Eight, Blanche, Stanley and Stella appear on the stage where jazz and polka are played alternately during their conversation. With the effects of music, audience is readily made aware of the superiority. In this scene, when Blanche starts to talk, the blue piano played from Scene Seven stops. At this point, Blanche is dominating the conversation and the jazz that represents the power of Stanley ceases. However, when his anger exceeds his tolerance, Stanley explodes and takes action against the attitude of Blanche and Stella. He counter attacks the opponents. When his dominant position as a king is being threatened and he uses his power of violence, he breaks the radio in “The Poker Night.” In the following scene, when his position becomes predominant after the enforcement of his power, the jazz is played at the background once again. Stanley attempts to corner Blanche but she stands up to talk back using her talent of speech. The piano, then, stops.

STANLEY: Goddamn, it’s hot in here with the steam from the bathroom.

BLANCHE: I’ve said I was sorry three times. [*The piano fades out.*] I take hot baths for my nerves.

²¹ *Ibid.*, p.359.

Drama Technique of Tennessee Williams—*A Streetcar Named Desire*—

Hydrotherapy, they call it. You healthy Polack, without a nerve in your body, of course you don't know what anxiety feels like!²²

Before this scene, their positions are balanced but the incidence that changes the situation occurs. Stanley gives Blanche the ticket to go back to Laurel. The shocking event offsets the insanity in Blanche's psyche.

STANLEY: Ticket! Back to Laurel! On the Greyhound! Tuesday!

[The Varsouviana music steals in softly and continues playing. Stella rises abruptly and turns her back. Blanches tries to smile. Then she tries to laugh. Then she gives both up and springs from the table and runs into the next room.]

Well!²³

According to the first edition of *A Streetcar Named Desire*, after the lines above the Varsouviana is played loudly and rapidly. Even Stella who understands the character of Blanche is helpless. She has abandoned the life in Belle Reve and has chosen to live in New Orleans as living with Stanley has been more valuable to Stella. Stanley's way of living based on "desire" has influenced her and she too has agreed. In Blanche's mind the music of polka is played louder and louder and with the ticket to Laurel, her desire to escape intensifies as her loneliness is aroused. There is nowhere in the world of reality for her to go. To go back to Laurel meant a life of distress and despair, the confrontation with "death" and "loneliness." There is no future for her and the only place for her to escape is the world of illusion created in her mind, the world that comforts her and heals her excruciating pain and sorry.

In Scene Ten, the tactical war between Blanche and Stanley comes to an end. Losing Mitch and the ticket to Laurel forced by Stanley meant the absolute defeat of Blanche which has taken all of her hopes in the real world. Her tactics and plots no longer are useful. According to the begging of the stage direction in Scene Ten, illusion of Blanche is represented with her dresses, behaviors and speeches. Williams expressed her sufferings using these stage effects to create the vivid image of her inner mind.

As the drinking and packing went on, a mood of hysterical exhilaration came into her and she has decked herself out in a somewhat soiled and crumpled white satin evening gown and a pair of scuffed silver slippers with brilliants set in their heels.

Now she is placing the rhinestone tiara on her head before the mirror of the dressing-table and murmuring excitedly as if to a group of spectral admirers....

²² *Ibid.*, p.374.

²³ *Ibid.*, p.376.

*[Stanley appears around the corner of the building. He still has on the vivid green silk bowling shirt. As he rounds the corner the honky-tonk music is heard. It continues softly throughout the scene.]*²⁴

The color of her dress is “white” the same as that of Scene One. The color represents “purity” and “refreshing.” In Scene One, her white dress symbolizes her elegance but in Scene Ten the dress as well as her accessories emphasizes the inner world of her illusion. Her out-of-place garments in both scenes do not match with the atmosphere of New Orleans. “The vivid green silk bowling shirt” emphasizes the rude, barbaric and violent character of Stanley in the same way as “The Poker Night” and “the honky-tonk music” represents his lust and arrogant attitude. In other words, Stanley’s personality is opposite to Blanche’s fantasy (the telegram from Mr. Shep Huntleigh and a visit from Mitch). Her tactics to win the victory (such as perfume, dresses, the light bulb with a paper lantern, etc.) are all rejected by Stanley who corners Blanche. In Scene Nine she starts to lose her self-esteem.

Blanche and her fantasies are all denied by Stanley. His superiority over the heroin as well as the increasing intensity of his emotions and desire is expressed using various methods.

[Lurid reflections appear on the walls around Blanche. The shadows are of a grotesque and menacing form. She catches her breath, crosses to the phone and jiggles the hook. Stanley goes into the bathroom and closes the door.]...[She sets the phone down and crosses warily into the kitchen. The night is filled with inhuman voices like cries in a jungle....

*[Blanche presses her knuckles to her lips and returns slowly to the phone. She speaks in a hoarse whisper.]...[The bathroom door is thrown open and Stanley comes out in the brilliant silk pyjamas. He grins at her as he knots the tasseled sash about his waist. She gasps and backs away from the phone. He stares at her for a count of ten. Then a clicking becomes audible from the telephone, steady and rasping.]...[He crosses to it deliberately and sets it back on the hook.]*²⁵

The stage direction above emphasizes the “desire” in Stanley and loneliness in Blanche. Emphasis on these opposites is further created by the contrast of these two characters such as the inhumane screaming of the animal-like voice, “menacing” shadow and “lurid” reflections on the wall represents Blanche’s fear against Stanley’s dominant power and arrogance, his lust for power. He is a dreadful nightmare to her. Her trepidation is described in her telegram. The audience hears the hang-up sound from the phone, sees Stanley put the phone on the hook and recognizes that Blanche has nowhere to escape. She is now at the dead end. He drops her into the black hole of despair where nobody waits. She is in a complete darkness alone.

²⁴ *Ibid.*, p.391.

²⁵ *Ibid.*, p.398.

Drama Technique of Tennessee Williams—*A Streetcar Named Desire*—

[The barely audible “blue piano” begins to drum up louder. The sound of it turns into the roar of an approaching locomotive. Blanche crouches, pressing her fists to her ears until it has gone by.]...

[The “blue piano” goes softly. She turns confusedly and makes a faint gesture. The inhuman jungle voices rise up. He takes a step toward her, biting his tongue which protrudes between his lips.]...

STANLEY: Oh! So you want some roughhouse! All right, let’s have some roughhouse!

[He springs toward her, overturning the table. She cries out and strikes at him with the bottle top but he catches her wrist.]

Tiger –tiger! Drop the bottle-top! Drop it! We’ve had this date with each other from the beginning!

[She moans. The bottle-top falls. She sinks to her knees: He picks up her inert figure and carries her to the bed. The hot trumpet and drums from the Four Deuces sound loudly.]²⁶

Williams’s drama technique of using the music is impressive and fascinating. The technique and skill of the drama genius synchronize the character and audience. The same or similar emotional feelings of the actors and actresses are experienced by the audience. In this scene, the “blue piano,” “the roar of an approaching locomotive,” “inhuman voices like cries in a jungle,” and “the hot trumpet and drums from the Four Deuces,” all of these sounds are the representations of the characters inner mind. The audio effects together with the action describe their emotional transitions. The music of a piano and the Four Deuces express Stanley’s lust for his dominance and power and loneliness of Blanche at the same time. On the other hand, the shifting of the music from that of the blue piano to the roaring sound of a locomotive illustrates the image of “death,” signifying that Blanche is walking towards death. Her lonesome circumstance is now shadowed by the darkness of death. The combination of these four sounds realistically expresses her terror against Stanley’s dreadful lust for dominance. The audio effects panic the audience. The implication of the scene is quite evident and descriptive. The whole scene points to the complete defeat of the main character. In other words, Blanche has lost the living means to survive in New Orleans. She has lost the war against Stanley in both tactics and plots. Her failure meant the losing of all hopes she expected. With sounds and music, the audience recognizes the defeat of the heroin.

Stanley mentions in the following lines to Blanche: “We’ve had this date with each other from the beginning!” (Williams, *Desire*, 402), implying that there is nothing Blanche can do to change her situation, to forfeit the battle and back off to where she came from. She takes his words as “repetition compulsion.” The term is defined as a psychological phenomenon in which a person repeats a traumatic event or its circumstances over and over again. In Freudian viewpoint, it is

²⁶ *Ibid.*, p.400.

“the desire to return to an earlier state of things.” The main cause of the problem resides in the personal relationships during the early stages of his/her life. According to Freud, a person instinctively attempts to analyze the origins of the issues. A person who is enslaved by repetition compulsion tends to seek a happy result; nevertheless, he/she repeats a painful event as before unconsciously because his current situation differs from the past experience of conflict, frustration, and guilty conscience to the problem encountered. To analyze the play from Freudian viewpoint, I have picked up Scene Ten. In the scene, the event happened in Laurel is repeated once again in New Orleans. A question arises at this point. As there are various suggestive messages that hints at the emergence of sexual urges of Blanche towards Stanley. In other words, Blanche may have wished to have sexual affairs with Stanley. Her attitudes and behaviors may have shown her inner instinct as a consequence of defeat. However, from the circumstances, it is not possible or difficult to think Blanche willingly approaches him. It is Stanley who has forced “desire” by showing his absolute power with his violence and manly approach. In other words, she is compelled to act based on her sexual urge or physical desires. Her behavior is completely the opposite from that of Laurel. From these evidences, the concept of repetition compulsion was used in designing the character of Blanche which can be observed from the lines of Stanley through this does not imply that she simply and willingly tried to acquire Stanley to satisfy her earthly desires.

Scene Eleven, which is the ending of the play, is one of the most significant and important parts. The author used various numerous techniques in this one scene. Furthermore, the scene overlaps with “The Poker Night.” In other words, it is the rearrangement of “The Poker Night.” The author intelligently used the same scene (rearranged) with an intent to elicit the changes in the characters.

The major drama techniques used in “The Poker Night” are colors, a paper lantern and the music. The primary colors used in the scene represent each poker game player whereas Rumba and Waltz are used to show the emotional intensity in Mitch and the blue piano represents the desires of Stanley and Stella.

Drama techniques in Scene Eleven are also primary colors, a paper lantern and the music (Varsouviana, sounds of the jungle, drums, trumpet and the blue piano) connotes the solitude of Blanche and her terror of “death” and “desire.” In addition, the poker players resume their routine activities and return to their daily lives, back to where it all began in the scene, “The Poker Night.” Blanche’s last lines in “The Poker Night” is “Thank you for being so kind! I need kindness now.” (Williams, *Desire*, 309), and her last lines in Scene Eleven is “Whoever you are –I

Drama Technique of Tennessee Williams—*A Streetcar Named Desire*—

have always depended on the kindness of strangers.” (Williams, *Desire*, 418) Both of them are emblematic and represent her wretched life which needs the kindness of strangers.

In Scene Eleven, although the similarities of the techniques used, scene settings, location and the characters, the events that took place during the play impacts each individual. These elements are scattered in the scene and distinctively expressed to show the difference. The author used various techniques to elicit the unquestionably different situations. The major difference is the mind of each character. In “The Poker Night,” Williams used the poker game to express a rude primitive and violent behavior as well as the hidden “desires” or “greed” of the people of New Orleans. Blanche lives in the same world controlled by her inner “desire.” At the time, Stella is governed by her husband and never pays attention to Blanche. In Scene Eleven, however, Blanche escapes from Stanley who priorities his “desires” and dives into the world of her illusion where he cannot possibly enter. Her insanity is very well expressed through her attitude and behavior when she is in her fantasy which is shutoff from the outside world of reality. The use of drama techniques and stage effects emphasizes her madness.

EUNICE [returning, brightly]: Someone is calling for Blanche.

BLANCHE: It is for me, then! [*She looks fearfully from one to the other and then to the portieres. The “Varsouviana” faintly plays*] It is the gentleman I was expecting from Dallas?²⁷

STANLEY: Did you forget something?...

[*She rushes past him into the bedroom. Lurid reflections appear on the walls in odd, sinuous shapes. The “Varsouviana” is filtered into a weird distortion, accompanied by the cries and noises of the jungle. Blanche seizes the back of a chair as if to defend herself.*]...

STANLEY: You left nothing here but split talcum and old empty perfume bottles –unless it’s the paper lantern you want to take with you. You want the lantern?

[*He crosses to dressing table and seizes the paper lantern, tearing it off the light bulb, and extends it toward her. She cries out as if the lantern was herself.*²⁸

The music of Varsouviana and the illusory dream of Blanche where she believes the arrival of Shep Huntleigh signify that she is captured in the world of her illusion. Her madness is triggered by Stanley who destroys the paper lantern and stabs her throat with the reality. Her situation in this scene suggests the endings: “two, goes mad” and “the roar of which has been an ominous under-tone throughout the play.” (Murphy, *Williams*, 20) On the other hand, Stella and Mitch

²⁷ *Ibid.*, p.411.

²⁸ *Ibid.*, p.414.

regret what they have done to Blanche and cries.

STELLA: I don't know if I did the right thing....

STELLA: I couldn't believe her story and go on living with Stanley....

STELLA: What have I done to my sister? Oh, God, what have I done to my sister?²⁹

(Mitch has started towards the bedroom. Stanley crosses to block him.)

MITCH (*wildly*). You! You done this, all o' your God damn interfering with things you –

STANLEY. Quit the blubber! (*He pushes him aside.*)

MITCH: I'll kill you! (*He lunges and strikes at Stanley.*)

STANLEY: Hold this bone-headed cry-baby!...

(Mitch collapses at the table, sobbing.)³⁰

Stella and Mitch with guilty conscience regrets their behavior and send Blanche off to the asylum. At the end of the scene, the volume of the blue piano and trumpet increases. The play comes to end with the lines of Steve, "This game is seven-card stud." (Williams, *Desire*, 419) The final sound of the blue piano absorbs the luxurious sobbing of Stella and the sensual murmur of Stanley. The music represents not their desires but the solitude of Blanche. With the lines of Steve, their daily lives of New Orleans and loneliness of Blanche are contrasted.

In the letter to Kazan, Williams wrote "I know you're used to clearly stated themes, but this play should not be loaded one way or the other. Don't try to simplify things." (Kazan, *A LIFE*, 346) In this letter, the author emphasized that there are no right or wrong and no one is a winner or loser.

By using the same situation as Scene Three, "The Poker Night," Blanche's emotional transitions and the life of the people in New Orleans where the earthly desire prevails are contrasted vividly and distinctly. The techniques used by the author enable the audience to recognize the character's way of living. At the end of the final scene, Williams paints the life of Blanche in a picturesque manner. The author's effort to illustrate her life in detail reflects his intention to massage the audience that winning or losing the game is not the main objective. In Scene Ten, Blanche is forcefully pulled into the world of desire by Stanley which results in her insanity. If the play ends in Scene Ten, Blanche's tactical defeat is evident and Stanley becomes a winner since Blanche's efforts in getting Mitch fails which signifies the losing of life partner as well as the financial support in New Orleans. Yet, when we consider the attitudes and behaviors or actions of other characters in the ending scene, it is difficult to identify the winner or loser. In

²⁹ *Ibid.*, p.405.

³⁰ Williams, Tennessee. *A Streetcar Named Desire*. Stuttgart: Reclam. 2012, p.158.

the final scene, Blanche's figure is different from other people in New Orleans, and by "entering into illusion" she exists in a place which is away from desire. In Scene Eleven, Mitch has guilty conscience toward Blanche and in turn he confronts Stanley but he is also helpless. In addition, Stella regrets what she did for Blanche but she cannot help as she obeys Stanley. When we consider the attitudes of other characters, we no longer have any expectations for Blanche to win the victory in this scene. In Williams' notes, the author mentions that at this stage we no longer are able to distinguish a winner or a loser. The audience knows that Stanley is a winner in tactics. The Scene Eleven is the ending which rises above the victory or defeat of the poker game.

Additionally, Williams simulates, as mentioned earlier, the scene "The Poker Night" in Scene Eleven to express the changes of the main character. With this scene, the people of New Orleans are able to return to the daily living based on their earthly desires.

In "The Poker Night," Williams used primary colors and music as well as the poker game which is the main axis of the story line of the play. Considering the fact that all of the drama techniques are concentrated into this one scene, we can assume that Williams placed the vital importance on "The Poker Night."

Conclusion

Considering the fact that the author titled the play originally as "The Poker Night," "The Poker Night" scene is the most important part of the play. Tennessee Williams has created the scene with meticulous detail using various numerous techniques as well as the stage effects. The "tactics of Blanche" is scattered throughout the scene. In addition to the actions of the characters, Williams used as many drama techniques as possible in "The Poker Night." Primary colors, music and paper lantern are used to express the relationships and emotions of the characters. These props and stage effects precisely illustrates the inner minds and personalities of the characters as well. Until the very end of the scene, the play background and settings are used to reflect the psychological movement. The colors represent masculinity of the men who are at the peak of manliness. The tough and rough, rude and careless manhood are described as the traits of the characters in the scene. Rumba and waltz were used to approach and seduce Mitch. It is the Blanche's technique to appeal her femininity. The blue piano playing the New Orleans music represents the "desire" of Stanley and Stella.

Blanche attempts to win her sister's heart in order to survive in New Orleans. She uses her eloquent speech technique to control the conversation and to persuade her sister to desert her husband, Stanley and live with her. Stella, however, is already dominated by Stanley and she

cannot help Blanche until the end of the play.

In “The Poker Night,” she starts to win the affections of his close friend Mitch with the intent to sustain her living in the city. In Scene Six, Blanche discloses her sufferings, death of Alan and her guilty conscience against him which is also her tactics to win Mitch’s heart. She succeeds and Mitch sympathizes with her resulting in his determination to marry Blanche. Polka is used to represent her complex guilty feelings towards Alan. When Mitch approaches her, polka stops. The audience then realizes that the light of hope is shone upon Blanche and expects the happy ending or her victory. In addition to the sound effects, Williams used the roaring sound of locomotive as a symbol of death, the same representation as the music of polka that reminds her death of her late husband. All of these sound effects consequently suggest the third ending, “Three, throws herself in front of a train in the freight-yards.” (*Murphy, Williams, 20*)

In Scene Two and Scene Seven, the music except polka is used to express the heart of Blanche. In Scene Two her reality is reflected in the lyrics of her song: “From the land of the sky blue water, They brought a captive maid!” (Williams, *Desire, 270*) On the other hand, in Scene Seven, Blanche sings, “Say, it’s only a paper moon, Sailing over a cardboard sea –But it wouldn’t be make-believe If you believe in me!” (Williams, *Desire, 360*) which implies her intention not to accept the reality and believe her fantasy or illusion.

Although she seems to win the victory over Stanley in terms of tactics, she is cornered gradually. When he gains the control and the situation is turned against the heroin, the blue piano, trumpets, and drums are played to describe his superiority. These techniques, the audience is aware of the winning of Stanley. The sound and music is effectively used. In the play, the blue piano is used to represent the desire of Stanley and Stella as well as Stanley’s predominance. In Scene One and Scene Eleven, however, it is used to express of the loneliness of Blanche. In the above (Chapter II) I have discussed on the effects of this music by quoting Elia Kazan. Williams used music, colors and sound techniques to express the communication skill or negotiation tactics of the characters as well as their minds.

Williams simulated or arranged “The Poker Night” in Scene Eleven where numerous drama techniques and stage effects are used effectively to express the emotional transition of the characters and to draw the attention of the audience by contrasting the two scenes, thereby, ending the play with shocking conclusion. The use of the same scene signifies the author’s intent and his enthusiasm on using “The Poker Night,” which is the core of the play in terms of the plot and story development of the play.

Why, then, did Williams who was fascinated in using the title “The Poker Night” changed to

A Streetcar Named Desire?

As mentioned in the above Introduction, when he called this play “The Poker Night” there were three endings. The final version, however, combined these three endings into one conclusion to spotlight the main character, Blanche. I have studied the play thoroughly and concluded that all of these three endings are expressed in the heroin, her attitude, action and lines in the last scene.

The first ending, “One, Blanche simply leaves –with no destination” (Murphy, *Williams*, 20) is equivalent to Scene Eleven: “*Blanche walks on without turning, followed by the Doctor and the Matron. They go around the corner of the building.*” (Williams, *Desire*, 418)

The second ending, “Two, goes mad” (Murphy, *Williams*, 20) is represented in the playing of Varsouviana in Scene Eleven and the following stage direction explain the similarity of the conclusion: “*Lurid reflections appear on the walls in odd, sinuous shapes. The “Varsouviana” is filtered into a weird distortion, accompanied by the cries and noises of the jungle.*” (Williams, *Desire*, 414) These sounds are played only in her mind.

Finally, the third ending, “Three, throws herself in front of a train in the freight-yards” (Murphy, *Williams*, 20) is represented in the sounds of a locomotive (with the image of “death”) which appears in the play quite frequently. Furthermore, the third ending, “the roar of which has been an ominous under-tone throughout the play” (Murphy, *Williams*, 20), is also demonstrated with the music and Blanche’s action in Scene Eleven. “The roar” corresponds to the sound of drums, her panicking voice and the cries and noises of the jungle. The dialogue between Stanley and Matron echoes in her mind which becomes a threatening dagger to arouse the fear in Blanche’s psyche.

With these drama techniques used in Scene Eleven, the author integrated all of these three endings into one shocking conclusion the heroin ended up.

If Williams titled this play, “The Poker Night,” the audience probably expected the winning or losing and viewed the characters from the aspect of competing relationships. These three endings, however, are assembled into one conclusion, all of which are concentrated in Scene Eleven. This final scene focuses on the life of Blanche and the conclusion is beyond the victory or defeat of a game. I would like to conclude that the intent of the author behind the play was to express the journey of Blanche Dubois’s life on the stage and this is the main reason of the title *A Streetcar Named Desire*.

Bibliography

- Bloom, Harold. Editor. *Tennessee Williams*. New York: Chelsea House, 1987.
- Davidson, Annette. *Alex North's A Streetcar Named Desire: A Film Score Guide*. Lanham: The Scarecrow Press, 2009.
- Du, Juan and Zhang, Lu. "Poetic Realism" in *A Streetcar Named Desire*. *International Journal of Arts and Sciences* 3(16), 2010.
- Furuki, Keiko. *Tennessee Williams: Victimization, Sexuality, and Artistic Vision*. Osaka: Osaka Kyoiku Tosho, 2007.
- Kazan, Elia. *A Life*. Boston: Da Capo Press, 1997.
- Kolin, Philip C. *Williams: A Streetcar Named Desire*. Cambridge: Cambridge University Press, 2000.
- Murphy, Brenda. *Tennessee Williams and Elia Kazan: A Collaboration in the Theatre*. 1992. New York: Cambridge University Press, reprinted 1996.
- Tennessee Williams: A Guide to Research and Performance*. Edited by Philip C. Kolin. London: Greenwood Press, 1998.
- Williams, Tennessee. *A Streetcar Named Desire*. Stuttgart: Reclam, 2012.
- Williams, Tennessee. *A Streetcar Named Desire*. 浅田寛厚 編. 東京: 金星堂, 1979.
- Williams, Tennessee. *The New York Times*. Drama Section, 1947.11.3.
- Williams, Tennessee. *The Theatre of Tennessee Williams, Volume the first*. New York: A New Directions Book, 1971.
- 雨宮 栄一. 「スタンレイ点描 —テネシー・ウィリアムズ『欲望という名の電車』断想—」. 大東文化大学英文学論叢 25, 1994.
- ウィリアムズ, テネシー. 『テネシー・ウィリアムズ 回想録』. 鳴海四朗 訳. 東京: 白水社, 1978.
- ウィリアムズ, テネシー. 『テネシー・ウィリアムズ II 地獄のオルフェウス』. 広田敦郎 訳. 東京: 早川書房, 2015.
- ウィリアムズ, テネシー. 『欲望という名の電車』. 小田島雄志 訳. 東京: 新潮社, 1988.
- 大井 浩二. 『アメリカのジャンヌ・ダルクたち: 南北戦争とジェンダー』. 東京: 英宝社, 2005.
- カーン, マイケル. 『セラピストとクライアント フロイト、ロジャーズ、ギル、コフートの統合』. 園田雅代 訳. 誠信書房, 2000.
- カザン, エリア. 『エリア・カザン 自伝(上)』 佐々田英則, 村川英 訳. 東京: 朝日出版社, 1999.
- カザン, エリア. 『エリア・カザン 自伝(下)』 佐々田英則, 村川英 訳. 東京: 朝日出版社, 1999.
- 河合 隼雄. 『ユング心理学入門』. 東京: 培風館, 1967.
- 木村 康男. 「『欲望という名の電車』におけるシンボリズムとイメジャリー」. 国際商科大学論叢 24, 1981.
- 清田 幾生. 「戯曲の作法 —『欲望という名の電車』の場合—」. 長崎大学教養部紀要(人文学篇) 38, 1997.
- 圀府 寺司. 「ファン・ゴッホとロシア文学:<夜のカフェ>, <アルルの病室>とトルストイ, ドストエフスキー」. 待兼山論叢. 美学篇 31, 1997.
- ゴッホ, ファン. 『ファン・ゴッホの手紙』. 二見史郎 編訳. 圀府寺司 訳. 東京: みすず書房, 2001.
- 清水 義和. 「チェーホフ、ショー、ウィリアムズの啓示の主題 —『桜の園』『傷心の家』『欲望という名の電車』—」. 愛知学院大学教養部紀要 41(1), 1993.
- スポトー, ドナルド. 『テネシー・ウィリアムズの光と闇』. 土井仁 訳. 東京: 英宝社, 2000.
- 高島 邦子. 『20世紀アメリカ演劇 アメリカ神話の解剖』. 東京: 国書刊行会, 1993.
- 中田 崇. 「物語る女たち —テネシー・ウィリアムズ作品に見る言語行為のジェンダー力学—」. 実践英文学 55, 2003.
- 中村 英一. 『アメリカ演劇研究』. 東京: 英宝社, 1994.
- 中村 七重. 「叙情詩人 テネシー・ウィリアムズ」. 聖徳大学研究紀要人文学部第9号, 1998.
- 仁木 久恵. 「『欲望という名の電車』 —ランチのコミュニケーション行動—」. 明海大学外国語学部論叢 6, 1994.
- 早瀬 博範. 『アメリカ文学と狂気』. 東京: 英宝社, 2000.
- フロイト, ジームクント. 『精神分析入門 下巻』. 高橋義孝, 下坂幸三 訳. 東京: 新潮社, 2010.
- フロイト, ジームクント. 『フロイト全集 17』. 新宮一成 編. 東京: 岩波書店, 2006.

Drama Technique of Tennessee Williams—*A Streetcar Named Desire*—

- ヘイマン, ロナルド. 『テネシー・ウィリアムズ がけっぷちの人生』. 東京: 平凡社, 1995.
- 増井 由紀美. *A Reading of A Streetcar Named Desire: Tennessee Williams's Realism Through Ambiguity*. 敬愛大学国際研究 15, 2005.
- 松田 隆夫. 高橋 晋也. 宮田 久美子. 松田 博子. 『色と色彩の心理学』. 東京: 培風館, 2014.
- 丸田 明生. 「テネシー・ウィリアムズ: その作品の中の自画像 —『ガラスの動物園』『欲望という名の電車』の場合—」. 下関市立大学論叢 30(2), 1986.
- 丸山 茂雄. 『ジャズ・マンとその時代—アフリカン・アメリカンの苦難の歴史と音楽—』. 東京: 弘文堂, 2006.
- 無藤 隆. 森敏昭. 遠藤 由美. 玉瀬 耕治. 「心理学 *Psychology: science of Heart and Mind*」. 東京: 有斐閣, 2004.
- 山田 富貴. 「テネシー・ウィリアムズと南部的背景(1)」. 岐阜経済大学論叢 22(4), 1989.
- 依田 義丸. 「リアリズム演劇は何を失ったのか —*A Streetcar Named Desire* の第6場の二つの長台詞を手掛かりにして」. 英文学評論(2012) 84, 2012.
- 若山 浩. 「晩年のテネシー・ウィリアムズ」. 愛知学院大学語研紀要 27(1), 2002.

ADHDあるいはその疑いのある成人女性の生活上の困難と その背景にあるもの —聞き取り調査を通して—

Investigations on difficulties of female with ADHD and suspected ADHD in their daily lives

文学研究科教育学専攻博士前期課程修了

白 潟 博 子

Hiroko Shirakata

I. 問題と目的

1. ADHD（注意欠如・多動症）について

ADHD は不注意・多動性・衝動性などの行動特徴をもつ障害である。DSM5 (American Psychiatric Association 編, 2014) によれば「不注意は、課題から気がそれること、忍耐の欠如、集中し続けることの困難、およびまとまりのないこと」、「多動性は、不適切な場面での（走り回る子どもといった）過剰な運動活動性、過剰にそわそわすること、過剰に落ち着きないこと」、「衝動性とは事前に見通しを立てることなく即座に行われる、および自分に害となる可能性の高い性急な行動（例：注意せず道に飛び出す）のこと」である。

ADHD は 1960 年までは病因として脳の器質的損傷が存在するという仮説に基づいて、微細脳機能障害、などの名称で記載され、児童期までに限られた障害として一般的に認知されていた（朝倉・松本, 2005）。しかし、樋口・齊藤（2014）は、“小児の ADHD の有病率は 8～12%と報告されているが、小児期に ADHD 症状を呈する患者の 50%以上で成人期まで何らかの症状が継続することが示され、約 35%は成人 ADHD の診断基準をも満たすとする報告がある”と述べている。このことから青年や成人においても ADHD 症状は残存し、学業、業績不振、対人関係、情緒的問題、自尊心の低下などさまざまな社会生活上の問題を引き起こしていることが明らかにされた（Barkley, 1998; 金澤, 2013）。

ここで発達障害における子どもの教育環境を概観したい。

平成 19 年 4 月に施行された改正学校教育法により、すべての学校において特別支援教育を推進することが法律上も明確に規定された。これにより、通常の学級における指導だけではその能力を十分に伸ばすことが困難な子どもたちについては、一人一人の障害の種類・程度等に応じ、特別な配慮の下に、特別支援学校や小学校・中学校の特別支援学級、あるいは「通級による指導」において適切な

教育が行われるようになった（文部科学省，2015）。

その一方で，成人の ADHD においては，樋口，齊藤（2014）は“本人は「疾患」という認識を十分もっておらず，自分自身の特性や性格として感じているケースも多い。そのため，彼らは治療に至らないことが多く，二次的に気分障害や不安障害を併発することで，初めて病院を訪れて治療を受けることもすくなくない上，精神科においても ADHD を見逃すこともたびたび報告されている”と述べている。

また田中（2011）は，青年期・成人期の ADHD の特徴として，“大学生活や就職先で躓くこと，また日常生活では仕事が長く続かない，精神的な不調感を訴えやすい，アルコールその他の薬物を乱用しやすい，整理整頓ができない，忘れっぽい，計画自体を失敗しやすい，物をなくしやすい，計画の変更ができない，時間の管理ができない”などの困難さをあげ、さらに“当事者のなかにある不具合さ，躓きからの痛みを目を向けていく必要がある”と述べている。

2. 成人女性の ADHD の問題点

成人女性の ADHD に焦点をあてる理由として，第一に成人女性の ADHD の研究が少ないということがあげられる。先行研究を渉猟したが，これまでに筆者は女性に特化した先行研究を見つけることができなかった。

ADHD の性差の比較では，DSM-5 によれば一般人口において女性より男性に多く，小児期で 2:1，成人期で 1.6:1 であり，女性は男性よりも，主に不注意の特徴を示す傾向があるようだ。金澤（2013），岡野（2002）によればこれは女兒に破壊的な行動を行うものや学習障害を併存する者が男児と比較して少ないことが原因として挙げられており，その結果，女兒は ADHD を見逃されている可能性が高くなると述べている。そのため女兒の場合は特性による困難を抱え続けることが予想され，成長後，社会生活，結婚生活などに不都合が起こることは容易に想像される。

以上のことから成人で ADHD のある人々や ADHD と診断されていないが発達特性として ADHD 傾向がある人々への理解や支援はいまだ不十分であると言えるだろう。

3. 本研究の目的

ADHD がある場合，様々な生活上の困難を伴うという特徴が見られることから，本研究では，成人後に ADHD と診断を受けた，あるいは疑いを持った女性に焦点をあて，診断を受けるまでに生活上で生じた困難や心理面への影響，診断を受けるに至った経緯，診断後の変化などを半構造化された聞き取り調査を行い M-GTA による質的分析を行うことで明らかにする。

二点目として，その困難さの背景にあるものや自己認知のあり方に影響を与える要因を探索的に探ることで，ADHD と診断を受けた，あるいは疑いを持ったことで生じる内的変化が自己認知や自尊感情にどのような影響を与えているのかを明らかにする。

ADHD あるいはその疑いのある成人女性の生活上の困難とその背景にあるもの

これらの結果から成人後に ADHD と診断を受けた、あるいは疑いを持った女性たちへの有効な支援のあり方を探っていききたい。

II. 方 法

1. 研究協力者

(1) 予備調査

2015 年 2 月に予備調査を行った。予備調査は都内大学院に通う女子大学院生 1 名に対し、授業の空き時間を利用して実施した。予備調査の目的は、「整理整頓が苦手」傾向にある成人女性に対して、その困り感を探る半構造化面接の質問項目を作成するためである。あらかじめ用意した項目にそって、約 30 分のインタビューを実施した。

予備調査の結果、整理整頓が苦手傾向にあることに特化した質問のみをすることで、日常における困り感の広がりを得ることはできなかった。よって、調査対象者を「整理整頓が苦手傾向にある成人女性」から「ADHD と診断を受けた成人女性と ADHD の疑いのある成人女性」に変更した。

(2) 本調査

参加者の募集 1 として筆者がネット販売をしているバッグ製作型紙の購入者に対して研究内容の概略を周知し、協力者を募集した。その募集に対し、研究調査に協力を申し出てくれた成人女性にインタビューでの調査協力を依頼した。

参加者の募集 2 としてインターネットで ADHD 研究のためのブログを立ち上げた。「大人の ADHD」カテゴリーでランキングに参加し、同じくランキングに参加しているブロガーの中からすでに ADHD の診断を受けている女性に調査協力の依頼をした。募集 1, 2 を合わせて 5 人の研究協力者が得られた。協力者の属性は表 1 に示した。

表1 研究協力者属性

Info.	年 代	職 業	診断の有無	性別	最終学歴
Info.1	40代	自営業	有	女性	大学
Info.2	30代	自営業	有	女性	専門学校中退
Info.3	30代	公務員	有	女性	大学
Info.4	40代	パート	無	女性	大学
Info.5	50代	会社員	無	女性	大学

2. 調査手続き

調査は 2015 年 3～9 月に実施した。研究協力者の希望に沿って面接日時と場所、面接方法を設定した。その際、プライバシーが守られるように静かな個室であることを合意の上で、大学近郊の協力者

2名は大学内の心理教育相談室で、遠方に在住の協力者3名はそれぞれの自宅で落ち着いて話すことができる時間を双方で確認の上決定した。自宅での面接の方法は、2名がSkypeで、1名が電話であった。

開始に先立ち調査目的の説明を行った。調査の概要説明の書面を、直接面接の場合は面接時に手渡し、Skypeおよび電話での面接の場合は事前に郵送した。同時に、目的以外にデータを使用しないこと、プライバシーに十分配慮すること、参加、不参加はいつでも選択することができ途中でやめることができる等インフォームド・コンセントを行った。面談、郵送ともに2枚の同意書に署名をいただき実施者、協力者の双方で保管した。

属性等はフェイスシートに記入をしてもらい、半構造化された質問項目に沿ってインタビューを行った。質問内容は、診断(気づき)の時期、きっかけ、その時の気持ち、診断を受けて(気づいて)良かったこと、変化である。また、幼少時やここ数年を振り返ってADHDが絡んでいると思われるエピソード、他を自由に話してもらった。協力者の了解を得て、面接をICレコーダーに録音した。終了後、直接面接者には交通費と謝礼を渡した。

録音をもとに後日、逐語記録を作成した。

3. 分析の手続き

M-GTAはプロセス的特性をもっている研究に適しておりとくに人間を対象に、ある“うごき”を説明する理論を生成する方法である(木下, 2007)。本研究は、成人してからADHDの診断を受けた、あるいは特性に気づいた女性を対象に診断を受けるに至った経緯、幼少時から診断を受けるまでの具体的な生活上あるいは社会場面での困り感をインタビューを通して語ってもらうこと、その語りの中から一定程度説明可能な理論を抽出すること、その結果を踏まえてヒューマン・サービス領域としての立場でどのような支援が可能であるかを検討することを目的としている。プロセスや“うごき”を重視して分析を行うことが必要であることから、M-GTAが本研究に適切な分析方法であると判断した。

概念の生成に先立ち分析テーマと分析焦点者を以下のように設定した。

分析テーマ 「無自覚に積み上げられた自尊感情の低下と自己受容へのプロセス」

分析焦点者 「成人してからADHDと診断された、あるいは疑いを持った女性」

以上に沿い、木下の提示した分析手順を踏襲して分析を進めた。

Ⅲ. 結果

1. 概念生成

5人の調査協力者の中から最もディテールが豊富なInfo.1から概念の生成を開始した。Info.1が理論的飽和化になった時点で次にディテールが豊富だと思うInfo.2のデータから概念抽出を行い、5人

ADHD あるいはその疑いのある成人女性の生活上の困難とその背景にあるもの

全員のデータからの概念抽出を行った。

このような作業を経て最終的に 26 個の概念が抽出された。さらにこれらの概念から 2 個のサブカテゴリー、4 個のカテゴリー、2 個のコアカテゴリーが抽出された。抽出された概念、カテゴリーからストーリーラインを作り、さらにそれらの関係を表 2 に示した。

2. ストーリーライン

成人になってから ADHD の診断を受けた、もしくは疑いを持った女性は【物ごとがスムーズに運ばない】という工作上、生活上の不都合を多く経験している。具体的には〈順序立てができなく効率が悪い〉〈家事が苦手〉である、他者とのコミュニケーション場面などにおいて〈相手の意図が読めない〉ことや〈言ってはいけないことを言う〉、また他者との会話場面や思考場面で考えが次々に新しいことに〈分岐〉してしまうことなどが散見された。

それらの不都合は ADHD という〈特性に対する自覚の無さ〉により〈本人〉や〈重要他者〉のさまざまな〈困難〉を生むことになるのだが、幼少時や学童期、結婚前までの原家族との生活においては、養育者などの〈周囲がサポート〉することなどで特性が表面化することはないようであった。そのため本人は自らが ADHD 症状で〈困る〉という経験をさほどはせずに成人することになる。また、〈周囲のサポート〉を得る前に本人が非常に困るという経験をする中で、比較的幼少の頃から〈セルフマネジメント〉を身につけることもあった。

成人後は仕事、生活上でつまづくことが多く、それらが〈二次障害〉の発症や〈受診のきっかけ〉となっていた。そういった中でも本人や養育者は漠然と自分が〈なぜできないのか疑問に感じている〉場面が多く見られた。

〈幼少時〉に受容的な〈養育環境〉で育った人は嫌なことを避け自分にとって好ましい方向を選択する能力があり〈「もういいや」「まあいっか」〉と〈諦めが早くスパッと物事を決めることができていた。そして〈感情、感性が損得、社会的な論理性よりも上回っており〉何かあっても〈楽観的に物事を受けとめることができ〉自由にのびのびと〈好きなことに夢中で取り組む〉生活を選択していた。

一方で〈幼少時〉に非受容的な〈養育環境〉に育った人は〈自己否定感〉が強く、〈諦めきれない執着心に囚われる〉自分をコントロールすることが厳しかったり、苦手とすることにいつまでも取り組む様子が伺えた。

幼少時の養育環境がどのようなものであっても、成人になってから ADHD と診断された、あるいは疑いを持った女性に共通した問題点は自尊感情の低下であり、それはできるはずなのにできないという〈自分への期待と不信感〉に苛まれ続けることや、〈困難の理由がわからないままできない原因を自分に帰属する〉ことからくると思われる自己有用感の持ちづらさ、また〈対、人における接触のなかで理由のわからない対処不全感がある〉ことなどが浮き彫りとなった。

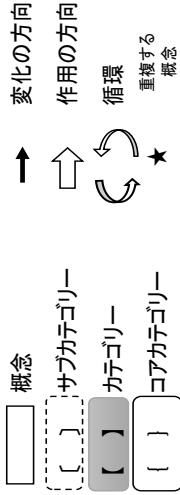
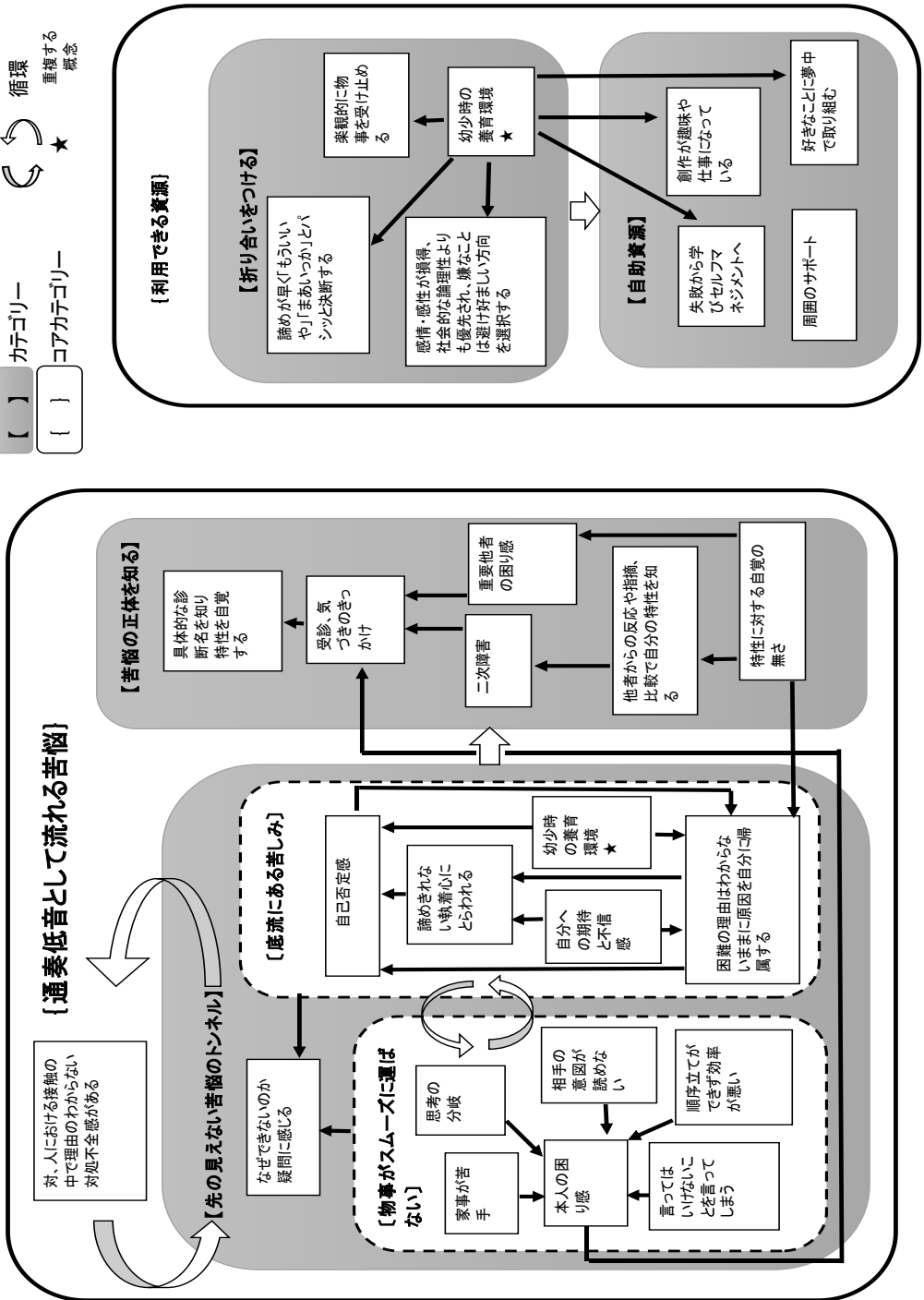


表2 カテゴリー図



3. 結果と考察

分析の結果得られた 26 概念、2 サブカテゴリー、4 カテゴリー、2 コアカテゴリーについてそれぞれにプロセスの様相を詳述する。

以下、文章中の表示方法は表 3 に記す。

表 3

表示方法	意味
「 」	具体例からの引用
『 』	引用の中の会話
《 》	筆者加筆
…	文章の省略
()	事例名称 表1の名称と対応
{ }	コアカテゴリー
【 】	カテゴリー
[]	サブカテゴリー
< >	概念
★	複数のカテゴリーにまたがる概念

(1) [物事がスムーズに運ばない]

このサブカテゴリーは ADHD を持つ、あるいは疑いのある女性たちがこれまで家庭、職場、対人コミュニケーション場面においてどのような困り感を抱えてきたのかを説明しており、〈順序立てができず効率が悪い〉〈本人の困り感〉〈思考の分岐〉〈相手の意図が読めない〉〈言ってはいけないことを言ってしまう〉〈家事が苦手〉の 6 個の概念から構成される。

以下に概念別に具体例を示し、説明する。

①〈順序立てができず効率が悪い〉とは、「自分の中であれもしてこれもしてこれもしてって思いながら行」っても「3 つくらいのうち 1 つくらいは忘れ(Info.3)」てしまうことなどである。この概念は 3 人の協力者から 10 例のヴァリエーションが抽出された。

②〈本人の困り感〉としては、「仕事がうまくいなくて。すごく残業が多かったり組み立てがすごく下手で・・・(Info.3)」という切実な困り感が発生している。この概念は 5 人全員の協力者から 40 例のヴァリエーションが抽出された。

③〈言ってはいけないことを言ってしまう〉とは、「大人だったらあえて口にしないようなことを言ってしまうようなことがたまにポツと(Info.2)」あるということである。この概念は 3 人の協力者から 5 例のヴァリエーションが抽出された。

④〈家事が苦手〉とは、「どうも家の中をうまく回せないっていうのをすごく責められて (Info.1)」などがあり精神疾患だけではなく身体疾患につながる例もあった。この概念は 5 人全員の協力者から 16 例のヴァリエーションが抽出された。

⑤〈思考の分岐〉とは《服薬治療を受けて》「初めて、目をこうパッとみた時に頭が切り替わっていきつつというのが自分で自覚ができた。あ、今こっちに気が行っちゃった。でももう戻せない。ああ！これか！これ、普通の人にはないんだ！って思って。(Info.1)」などであり、結果として対話や思考が

成立しにくいということである。

この概念は 4 人の協力者から 7 例のヴァリエーションが抽出された。

⑥〈相手の意図が読めない〉とは、「相手の気持ち、共感とか、そのどう思っている？っていうのが取れない」ため「途中から主人に入ってもらい（Info.1）」というように他者の力を借りなければ仕事がかまかま運ばない状況を生んでいた。この概念は 2 人の協力者から 5 例のヴァリエーションが抽出された。

（2）〔底流にある苦しみ〕

このサブカテゴリーは、ADHD を持つ、あるいは疑いのある女性たちが ADHD 特性によって生じた困難を今日までどのように捉えてきたのかを説明しており、〈困難の理由はわからないままに原因を自分に帰属する〉〈自分への期待と不信感〉〈幼少時の養育環境〉〈諦めきれない執着心にとらわれる〉〈自己否定感〉の 5 つの概念から構成される。

以下に概念別に具体例を示し、説明する。

①〈困難の理由はわからないままに原因を自分に帰属する〉とは、「《離婚について》私ができるだけそうすることはしないでしょうから。（Info.1）」というように離婚という 1 人では成り立たない決定に対して自分のせいだと感じている。この概念は 3 人の協力者から 6 例のヴァリエーションが抽出された。

②〈自分への期待と不信感〉とは、「自分を諦めきれないところと・・・自分に過剰な期待をしてしまふところ、そのギャップが大きかった。なんか自分にがっかりしちゃうんですね。（Info.3）」など自分自身からの裏切られ感、不信感のことである。この概念は 4 人の協力者から 12 例のヴァリエーションが抽出された。

③〈幼少時の養育環境 ★〉とは、幼少時の養育環境がネグレクトや叱責などが中心の親に養育されたのか、本人の自覚や意思、決定を尊重する養育態度の親に養育されたのかということである。

ネグレクトの例としては「放任されたんですよ。妹がちょっと大変だったので、『あなたは勉強もできるし』ってできる子で育ったんです。」

叱責の例としては、「ええと、その叱られてばかりいたっていうか、親にね。たとえばよく父親が映画連れて行ってくれたんですよ。私がストーリーが全然わかんないんですよ。弟の方はちゃんとわかるんですよ。それで、『お前はバカだ』っていうようなことを言われていたんですよ。（Info.4）」このように、日常的に ADHD 特性と思われる症状に対して両親からの叱責、他の兄弟との比較があり、それを避けるために孤独な生活をしている様子が語られた。

本人の自覚や意思、決定を尊重する環境としては「私、小学校から中学 1 年くらいまでいたって普通の人生送っていたんですよ。なんでかって言うと、親が待てないタイプなんで、なんでも手伝っちゃう。困らなかったんです。（Info.2）」などである。

ADHD あるいはその疑いのある成人女性の生活上の困難とその背景にあるもの

④〈諦めきれない執着心にとらわれる〉は、執着心に囚われている例として「苦手なところは諦め・・・自分を諦めきれないところと・・・自分に過剰な期待をしてしまう。(Info.3)」など、諦めることができない苦しみが語られた。

また執着心に気づくこともできずに苦手なことに挑戦し続ける例としては「ADD でも頑張れば苦手な経理の簿記なんか合格しちゃうんよっていうなんか、自信が欲しいっていうか。やればできるんだ！私でもっていう何かを、あえて苦手な部門でやってやろうじゃないかって感じで」(Info.4)である。この概念は2人の協力者から3例のヴァリエーションが抽出された。

⑤〈自己否定感〉とは、根底に自己否定感があり、自己有用感の低さが卑屈さとなって対人関係にも影響を及ぼすということである。「なんで私ダメ人間なんだろう？なんでみんなみたいにできないんだろう？(Info.2)」などが語られた。この概念は3人の協力者から6例のヴァリエーションが抽出された。

(3) 【先の見えない苦悩のトンネル】

このカテゴリーは、[物事がスムーズに運ばない]という困難が幼少時から続き、そのために長年[底流に苦しみ]を抱えてきた人たちが、〈なぜできないのか疑問に感じ〉ながらも【先の見えない苦悩のトンネル】から抜け出せないことを説明しており、[物事がスムーズに運ばない][底流にある苦しみ]の2つのサブカテゴリー、〈なぜできないのか疑問に感じる〉の1つの概念で構成される。

以下に概念別に具体例を示し、説明する。

①〈なぜできないのか疑問に感じる〉は、「『なんでこの子はこうなんだろう？』って思ってたうちの母親がどうやら保健所に相談に行ったらしいんですよ。(Info.2)」のように周囲の重要他者が疑問に感じて保健所に相談に行っていた。しかしこの段階ではADHDの存在には気づいていない。この概念は4人の協力者から14例のヴァリエーションが抽出された。

(4) 【苦悩の正体を知る】

このカテゴリーは、これまでの困難は自分のせいだと感じてきた人たちが、その困難がピークに達することをきっかけとして、本やインターネットで調べたり相談センターなどを利用することで【苦悩の正体を知る】までの経過を説明しており、〈特性に対する自覚の無さ〉〈他者からの反応や指摘、比較で自分の特性を知る〉〈二次障害〉〈重要他者の困り感〉〈受診、気づきのきっかけ〉〈具体的な診断名を知り特性を自覚する〉の7つの概念から構成される。

以下に概念別に具体例を示し、説明する。

①〈特性に対する自覚の無さ〉は「私自身はぜんぜん自覚が無かったんですね。ADHDとかその発達障害に関する自覚がなくて、こんなもんだと思ってた(Info.1)」ということが多く、自己卑下につながる要素を秘めていた。この概念は5人全員の協力者から11例のヴァリエーションが抽出された。

②〈他者からの反応や指摘，比較で自分の特性を知る〉は，『改善してもらおう。こういうところ，こことこを改善してくれないと離婚になります。うちはやっていけません』で話はずっとされてる(Info.1)」など，自分では普通と感じていたことを他者からは指摘を受けたり，離婚を迫られたりすることで徐々に他者や社会から見た自分像の理解が進んでいた。この概念は4人の協力者から23例のヴァリエーションが抽出された。

③〈二次障害〉はADHDと診断を受けている3人の協力者から医師より診断を仰いだ二次障害と思われる病名が5例「うつ病，過食，抜毛症，解離性障害，腎臓病」が語られた。

『できない』って『やっぱりお前はダメな人間だ』っていうのを結構言われて，それで病気になっていった(Info.1)などである。

④〈重要他者の困り感〉は，「今うちにはお金がないよという状態のときでも欲しいものを買ってみたりとか，払わなきゃいけないことっていうのが後回しになったりとか，自分が優先になったりとかして，(Info.1)」など既婚者であれば伴侶が，また原家族であれば養育者が違和感を持ち，なんらかの対応を考えようと思索したり，誰かに相談に行くという状況が生まれている。この概念は2人の協力者から15例のヴァリエーションが抽出された。

⑤〈受診，気づきのきっかけ〉は，「なんかいっぱいいっぱいになってしまって，要はよく言われるのはメモリー不足状態(Info.2)」「その頃，極端な話，2週間置きにやかん焦がしていたんで。(Info.2)」という状態が続きネットなどでADHDに行き着き受診に至っている。

⑥〈具体的な診断名を知り特性を自覚する〉とは，「私自身はやっぱりあの，自分に言い訳が立ってなあって・・・人よりも怠けているというかですね。やる気が無い。そういうふうに映る場面が多いだろうなっていうことがあるってこと・・・すっかりしました。(Info.1)」と診断を受容している様子があった。

一方「やっぱりショックはあったかな？違うといいなと思ってて，だけど安心感もあって(Info.3)」という両価的な受け止め方もあった。さらに否定的な受け止め方として幼少時より家族から叱責されてきた場合では，「もし自分でADDだということを受け入れられれば，たぶんなんかすごい楽になる気がする。(Info.5)」と理解できるものの中にはそれができない，などの語りがあった。

(5) {通奏低音として流れる苦悩}

このコアカテゴリーは，【苦悩の正体を知る】ことで治療なども始まり理解と受容も格段に進むものの，表面にはあらわれないが一貫して流れる{通奏低音}のように{苦悩}は続いていることを説明しており，【先の見えない苦悩のトンネル】，【苦悩の正体を知る】の2つのカテゴリーと，[物事がスムーズに運ばない]，[底流にある苦しみ]の2つのサブカテゴリー，さらに〈対，人における接触の中で理由のわからない対処不全感がある〉の1つの概念から構成される。

以下に概念別に具体例を示し，説明する。

ADHD あるいはその疑いのある成人女性の生活上の困難とその背景にあるもの

①〈対、人における接触の中で理由のわからない対処不全感がある〉は、「人以上に相手の気持ち、共感とか、そのどう思っている？っていうのが取れないっていうのが自分でなんとなく感じてはいるんですよ(Info.1)」であり、自分にどのような具体的な行動や言動における問題があったがためにそのような状況を生んだのか、という理由や原因、今後の対処の仕方を学習していけるとは思えない不全感が浮かび上がってくる。

(6) 【折り合いをつける】

このカテゴリーは、これまで臨床場面などで語られてきた「すぐに諦める」「飽きやすい」「好きなことしかしない」などの ADHD 症状が、実は症状との【折り合いをつける】力として生かされているということを説明しており、〈諦めが早く「もういいや」「まあいっか」とスパッと決断する〉〈感情、感性が損得、社会的な論理性よりも優先され、嫌なことは避け好ましい方向を選択する〉〈楽観的に物事を受け止める〉〈幼少時の養育環境★〉の4つの概念から構成される。

以下に概念別に具体例を示し、説明する。

①〈諦めが早く「もういいや」「まあいっか」とスパッと決断する〉は「私止める時にあんまり何事もためらわないし、スパッと切る時には切るし、人間関係でもそういう面があるんで。(Info.2)」である。このように、これまで積み上げてきたものや連続性などを重視せず決断が早い。この概念は4人の協力者から11例のヴァリエーションが抽出された。

②〈感情、感性が損得、社会的な論理性よりも優先され、嫌なことは避け好ましい方向を選択する〉は、『もう幼稚園の実習行きたくない。幼稚園の先生になる気も端から無いから免許も要らないでしょう』って言って。で(母親と)真っ向から対峙して、で母はもう、『大学まで行ったのにそれも取れるのになんでそうせんとか?』みたいにまあ、ケンカになってですね。(Info.1)というように教員養成系学部にいながら子どもが苦手なので免許を取得しないという選択をするなど比較的簡単にその時の感情、感性で方向性を決めるなどである。

この概念は4人の協力者から9例のヴァリエーションが抽出された。

③〈楽観的に物事を受け止める〉は「合理化がすごく激しくて、その例えば思ってたところと違う道に行ったとしても、これはきっと自分にとって必要だったんだって思ってしまうえば楽になる。(Info.1)」などである。

④〈幼少時の養育環境★〉は、(2) [底流にある苦しみ] にて説明があるので割愛する。

(7) 【自助資源】

このカテゴリーは、ADHD を持つ、あるいは疑いのある人たちが自分の特性を生かしながら果敢に日々挑戦している様子を説明しており、〈失敗から学びセルフマネジメントへ〉〈創作が趣味や仕事になっている〉〈好きなことに夢中で取り組む〉〈周囲のサポート〉の4つの概念から構成される。

以下に概念別に具体例を示し、説明する。

①〈失敗から学びセルフマネジメントへ〉は、「金庫に大事なものを取りに行くときは、ほんともう1回ずつ、取って。もう一回開けて。笑。『何してんの?』って言われるんですけど。爆笑。何言われようと、1分2分なんて惜しくないの、っていうところに拒否反応が無くなった(Info.3)」など、大変な工夫をこらしている様子が伺えた。この概念は3人の協力者から11例のヴァリエーションが抽出された。

②〈創作が趣味や仕事になっている〉は、「アイデアを形にしていってというのが。すごく好きだったんですよ。・・・結局選んだのはイラストレーターだった(Info.1)」などである。

この概念は4人の協力者から9例のヴァリエーションが抽出された。

③〈好きなことに夢中で取り組む〉は、「小学校の時の図画工作がやっぱりすごい好きで、ずっと考えているんですね。こうしたいあしたいっていうのが。」(Info.1)『これだ!』って思っただけでスピードで突き進む、それはすごいんですよ。その時のエネルギーって。(Info.5)」など、この概念は4人の協力者から9例のヴァリエーションが抽出された。

④〈周囲のサポート〉は、「家のことはもちろん母が全部してましたし、で、私は手伝いすらもしてなかった」など、特に幼少、学童期ではこのサポートがあるために本人は困るという経験をあまりしない。この概念は4人の協力者から7例のヴァリエーションが抽出された。

(8) {利用できる資源}

このコアカテゴリーは、ADHDを持つ、あるいは疑いのある女性たちの【折り合いをつける】力と、すでに持っている力、特性としての力、困難から導き出された力、〈周囲のサポート〉などの【自助資源】が{利用できる資源}と成り得ることを説明しており、【折り合いをつける】、【自助資源】の2つのカテゴリーから構成される。

説明は、(5)【折り合いをつける】(6)【自助資源】を参照されたい。

IV. 総合的考察

本章ではインタビュー調査の結果をもとに〈幼少時の養育環境〉が心理面へ与える影響とヒューマン・サービスとしての今後の支援のあり方を総合的に考察していく。

1. 〈幼少時の養育環境〉が心理面へ与える影響

成人後にADHDと診断を受けた、あるいは気づいた成人女性たちは、診断を受けるまでに様々な困難を経験しており、その困難への対処の仕方は〈幼少時の養育環境〉により相違が見られた。

〈幼少時の養育環境〉が本人の自覚や意思、決定を尊重する親による受容的な養育環境であった場合(以下受容的養育環境と記する)は、子どものADHD特性を親がサポートをすることによって、

ADHD あるいはその疑いのある成人女性の生活上の困難とその背景にあるもの

その特性ゆえに本人が困るという経験はあまりしていなかった。

そしてこのような養育環境で育った人たちは社会に出たり結婚をすることで〈他者からの反応や指摘で自分の特性を知る〉という経験を重ねる。こうした経験の積み重ねから〈二次障害〉が生じるなどのプロセスを経て〈困り感〉がピークに達して診断、気づきに至るのだが、診断、気づきに対する受容はスムーズであった。とはいえ、星野（2013）が“社会人となると、学生時代とは比べ物にならないほど高度で複雑な社会性やコミュニケーション能力を求められる。これは発達障害者にとって大変な難題であるため、多くの場合、社会に出ると仕事や人間関係で悩みを抱えたり不適応状態となる”と述べているように、本研究においても同様の状態がみられた。

さらに樋口、齊藤（2013）によればエビデンスはないが、とした上で不注意症状は成人になっても続く事実から、“不注意優勢型は女子に多く、低年齢では ADHD の存在に気づかれないが、成人になり社会生活や家庭生活のなかで不適応が目立って気づく例が多いという仮説が存在している”としている。それは本研究においても一部支持されたと言える。

また長じてからは〈楽観的に物事を受け止める〉様子が語られた。物を無くしてしまうストレスを回避するためにあらかじめ複数の予備を購入しておく、という工夫もあり、それに対してあとからたくさん出てきたときにはどうするのかという筆者の質問には、「いいのいいの・・・消しゴムとかでもたくさん出てきても最終的に余れば誰かにあげればいいじゃない。っていう。それよりも自分が無いことに対してイライラすることをなんとかしてでも整理をしようかな、って方に走りますよね。寛容になることがまず大切ですよ。（Info.4）」などである。

また、〈諦めが早く「もういいや」「まあいっか」とバシッと決断する）ことも多く〈感情・感性が損得、社会的な論理性よりも優先され、嫌なことは避け好ましい方向を選択する〉様子が語られ、ストレスの少ない状況を自ら選択していた。

「なんかたいがいもう全部覚えたからもういいや的な感じでそこは中退して。（Info.2）」など、それらはこれまでの臨床場面では、「すぐに諦める」「飽きやすい」など、ADHD 特性のマイナスのイメージで語られてきた感が否めないが、本人たちの語りからは自分ができないことに対して早く見切りをつけてストレスをためないようにするという【折り合いをつける】力として作用しているようであった。

そして、このように【折り合いをつける】力を持った人たちは、「好きなことしかしない」という表現で語られてきた ADHD 特性が、〈好きなことに夢中で取り組む〉姿勢として現れ、〈創作が趣味や仕事に〉なっている人が多かった。

一方で、幼少時の養育環境が親によるネグレクトや日常的な厳しい叱責など、非受容的な養育環境であった場合（以下、非受容的養育環境と記す）、本人の困り感は大きく、さらに〈困難の理由はわからないままに原因を自分に帰属する〉ことが多く、それが自己否定感につながっていた。

自己評価の低さについて田中（2008）は、“日常生活において度重なる失敗と叱責を経験し続ける

子どもたちは、次第に自己評価や自己価値観が低くなり、無気力、抑うつといった二次性併存障害を呈することがある”と述べている。

また、客観的に見ても、十分に頑張っていると感じられる場合においても、「負けても頑張っていないから悔しくないし、でも勝つてもがんばっていないからそんなにうれしくない(Info.3)」と語る。この自己否定感の強さは日常的な〈物事がスムーズに運ばない〉という困難さと循環しながら【先の見えない苦悩のトンネル】となり苦しみは続くというサイクルから抜け出せない様子であった。

そして、この人たちは長じてからも自己否定感が強いまであり、ADHD 症状に対して【折り合いをつける】力が培われているとは言えなかった。さらに〈諦めきれない執着心にとらわれる〉傾向にあり、「ADHD でも頑張れば苦手な経理の簿記なんか合格しちゃうんだよっていうなんか、自信が欲しいっていうか。やれば出来るんだ！私でもっていう何かを、あえて苦手な部門でやってやろうじゃないかって感じで。(Info.5)」と、ある一面ではやる気の表れのように捉えられるが、いつまでも苦手なことに挑戦し続けており、どのように頑張ってもそこから自己肯定感を得ることは難しい様子であった。

彼女たちは、〈好きなことに夢中で取り組む〉経験はあるものの、それよりは苦手なことに挑戦することで周囲から評価を得ることに気持ちが向いているようであった。この人たちも社会に出ることなどをきっかけにして困り感がピークに達し受診に至るのだが、診断を受容することには戸惑いがあるようだった。「違うといいなと思って、だけど安心感もあって(Info.3)」や、受診はしたが診断を仰がなかった例では診断名をご家族に知られることに対して「それがね、たぶん1番怖いんだと思います。(Info.5)」と語られ、受容できない様子であった。

以上のように、成人後に ADHD と診断を受けたあるいは気づいた成人女性たちが診断を受ける、あるいは気づくまでに生活上で生じる困難は数多く抽出されたが、それらによる心理面への影響は、幼少時の養育環境に大きく左右されるということが示唆された。

〈幼少時の養育環境〉が受容的養育環境であった場合、ADHD 特性の一部は【折り合いをつける】力として作用し、それが仕事などに結びついてしたが、非受容的養育環境であった場合は、〈自己否定感〉が強く ADHD 特性や診断をなかなか受容できず、【折り合いをつける】というよりは、克服しようとするかのような方向性が見て取れた。

これまでの失敗の数々が自らの性格や怠惰によるものではなかったということを知ることによる内的変化が自己認知や自尊感情に与える影響と幼少時の養育環境との関係について以下のような示唆が得られた。〈幼少時の養育環境〉が受容的養育環境であった人たちは、ADHD という診断を自己認知の材料としての的確に受け止め服薬治療や重要他者への周知により生活改善へ踏み出していた。認知による自尊心の低下も見受けられず、むしろそれを寛容に自分を受け入れる方向へ向かう力としていた。

一方で、非受容的養育環境で育った人たちは、診断あるいは疑いを持つに至る以前にすでに自己認知に歪みが見受けられ、診断あるいは疑いに対しては、両価的、もしくは拒否的であり恐怖心すら抱

ADHD あるいはその疑いのある成人女性の生活上の困難とその背景にあるもの

いていた。また、生活改善への努力はみられるものの、それにより自尊心の高まりを期待できるものではなかった。

これらのことから、「幼少時の養育環境」は、ADHD を持つ人たちにとって成人期における自己評価や自己受容に大きくかかわる要因であることが示唆された。

以上の結果を踏まえ、今後の支援のあり方を次節で考察する。

2. 支援のあり方

本節では、成人後に ADHD と診断を受けた、あるいは気づいた成人女性たちへの今後の支援のあり方を、通奏低音という考え方をを用いて考察する。

(1) 二次的問題への支援

ここまで〈幼少時の養育環境〉が子どもの人格形成や成人後の ADHD 特性の受容の仕方にも影響を及ぼしていることを述べてきた。Humphreys (2013) らは、ADHD から後の抑うつを予想する研究で、分析の結果子ども時代の注意の問題が成人の抑うつに直接関連することではなく、親子問題を經由して間接的に影響を与えることを示した。さらに松岡ら (2011) の研究結果を受けて、山下 (2013) は ADHD の早期発見には困難が伴うが、乳幼児期から丁寧な子育てを行うことが、早期対応の最良の策のように考えられると述べている。

本研究では、非受容的な養育環境への支援がないままに幼少期を過ごすことによって、成人後に低い自己評価に苦しむケースがあることが示された。

このように自己否定感が強く自尊感情が低下している人には、非受容的養育環境で育ったことによる誤った自己認知を改善するような支援が必要となるだろう。山下 (2013) の言葉を借りれば“丁寧な子育て”が行われてこなかったことで生じたと思われる認知の歪みや心の痛みを、面接やカウンセリングを施行することで少しでも取り戻すことが大切になるだろう。

ニキ (2002) は、障害の受容において、小児期から障害と診断 (判断) され自覚があった場合と、中途に生じた障害を受けとめる場合と、先天的に障害がありながらもその存在を証明する診断が人生の中途に起きた場合の3つのパターンを検討した。そして田中 (2013) は、“この場合人生の中途まで、本来症状として認められるべき言動が、本人の資質と判断され、言うことが聞けなく、我が強い、わがまま、自分勝手と揶揄され、不注意、せっかち、落ちつきの無さは、頻回に注意され叱責され続けてきた。本人は、終始追いつめられ自己評価を落としてきたのである。こうした誤解を説明できる名前 (診断名) を手に入れることは、大きい”と述べている。

しかし、自分への他者からの誤解を説明できる名前を手に入れることを決心するかどうか、という点においても〈幼少時の養育環境〉が影響していたことが本研究で示唆された。この根幹の部分丁寧な面接者が聞き取り受容し共感しながら共に寄り添って歩むカウンセリングの施行は二次的問題の

解決に有用であるだろう。

(2) 「生きづらさ」を生きる

姜 (2013) は ADHD を持つ成人を、自分の特性は十分に自覚しており、“わかっているけどどうしたらうまくいくのかわからない” 心理状態であると述べている。

このように、わかっているけどどうしたらうまくいくのかわからないということは、本研究の協力者たちからも語られたことである。特に子どもと違い成人となると単に忘れ物をするというような苦悩だけではなく。「相手の気持ち・・・そのどう思っている？っていうのが取れないっていうのが自分でなんとなく感じてはいる (Info.1)」とあるように、「自分が感じ取れない」ということを「なんとなく」理解はできる、ということがわかるだけなのである。わからないことがわかるだけでは生活上、仕事上のスキルとしていくことはできない。ADHD を持つ人たち、とりわけ本研究の協力者たちは何度同じ場面を経験しても、自分はわからないということがわかるだけであり、それがスキルアップにはなっていなかった。その困難のためにこの協力者は仕事の打ち合わせの度に夫に同席を頼み、依頼内容を確認してもらうという工夫をしていた。

萩原 (2015) は、社会適応の 1 つのスタイルとして“定型発達のふり”をすることを挙げている。しかし、この方法によって得られた社会適応では、自分なりの自立につながらないと述べている。さらに市川 (2013) は、ADHD そのものが問題なのではなく、その存在によりもたらされる“社会不適応”や“生きにくさ”が問題なのであると述べている。この生きにくさを抱えて生きていくために必要な支援が今後求められるだろう。

(3) 通奏低音としての ADHD 特性への支援

ここまで述べてきた社会適応、生きにくさを通奏低音としてとらえ、ADHD 特性のある、あるいは疑いのある成人女性への支援を考える。通奏低音とは、本来音楽用語であるが大辞林第三版によれば、比喩的に表面にはあらわれないが一貫してその物事に影響を及ぼし続けている要素を表す表現として使われる。本研究では、この比喩的な意味で用いる。

① 通奏低音として ADHD を理解する

筆者は、ADHD を持つあるいは疑いのある女性たちへの支援を考えるために、ADHD 特性は一種の通奏低音のような在りようで存在していると仮定したい。前述したように通奏低音が一貫してその物事に影響を及ぼし続けている要素であるならば、それはどこまでいっても変わらないのである。変わらない以上、ADHD 特性に対して行われている支援、例えば「忘れ物をしてはいけない」「話をきちんと聞く」ためのスキルアップトレーニングなどは、“定型発達のふり”をしていることになりはしないだろうか。そして“定型発達のふり”は、知能が高い人ほど可能であるだろう。本研究における

ADHD あるいはその疑いのある成人女性の生活上の困難とその背景にあるもの

協力者たちも全員が高学歴であることから一定以上の知能を有している人たちであると捉えることができ、実際に生活上、有効なセルフマネジメントを身に付けている様子が語られた。

ここで本研究におけるセルフマネジメントの具体例をあげる。具体例は二極化された。1つは ADHD 特性の一部を【折り合いをつける】力としていた人たちから得た例である。「失くすだろうなって思うことに関しては・・・2つ揃えるとか3つ揃えておく (Info.4)」このように自分の持つ ADHD 特性とされている、物を失くす、忘れやすい、何かができないという事象、つまりは通奏低音のような在りようを「自分の在りようである」と受容した上でのセルフマネジメントであり、このようなセルフマネジメントを身に付けた人たちには自己否定感は見られなかった。

もう一方は、ADHD 特性の一部を【折り合いをつける】力とはしていなかった人たちである。「やらなきゃいけないタスクリスト・・・線で消えていくのが快感 (Info.3)」「一応会社では・・・自制して、頭の中はあちこち飛んでいるんだけど、実際手を止めるのは昼休みとかって自分で決めてます (Info.5)」。このように忘れやすい、思考が分岐するという ADHD 特性を受容はせずに「定型発達のふり」をする、もしくは近づこうとする努力をしており、通奏低音として流れる自分の在りように抗うようなセルフマネジメントを身に付けていた。このような人たちは自己否定感が強くどんなにがんばっても自己肯定感を持つことはできなかった。

この両者の差から筆者は支援やセルフマネジメントを考えるとときには、前者のように ADHD 特性をその人の在りようとして自他ともに受容できることが第一であると考え。特性を否定するのではなく、他のありように変えてしまうのでもなく、在りようをそのまま認めその上に乗せていくようなものとするのが大切なのではないだろうか。

② 特性を生かす支援

ここからは個々人が持っているそれぞれの特性を生かす支援を考察する。

ADHD 特性を通奏低音として流れる自分の在りようとして認め、【自助資源】として活用することは少なくとも本研究の協力者の1部はすでに実行している。しかし、その【自助資源】を仕事に生かしてはいるものの、十分に生かしきれない理由の1つに自尊感情の低下がある。例をあげると仕事の依頼者との細やかなコミュニケーションが十分に取れないためにプロとしては失格だと感じてしまうことである。

このような ADHD 特性によるつまずき自体は誰かに依頼するなど代替案で可能だが、「定型発達者」のようにできなければいけないかのように感じている、もしくはそこを目標にしていることによって自尊感情を低下させてはいないだろうか。そしてその部分への意識改革が支援となるのではないかと筆者は考える。

金澤 (2013) は、成人期の支援目標としては、患者の潜在能力を最大限発揮できるように補助することとしている。また星野 (2013) は、“彼らの特定の分野へのこだわり、興味限局傾向とひらめき

を有効に生かせば、水を得た魚のように才能を開花させる可能性がある。この点で ADHD や AS などの「発達アンバランス症候群」は、まさに「磨かれていない原石」と言える”と述べている。さらに White&Shah (2001) は、ADHD 特性をもつ学生は創造性に優れており、自分の興味のあることに関して ADHD 特性が消失したかのように没頭し成果をだせるという研究結果を報告している。

このように「通奏低音として流れる自己の在りよう」という視点から見たその人なりの特性を支援者とともに見つけ出し、“定型発達のふり”をすることのないセルフマネジメントを身に付けることができるよう見守りながら、田中 (2013) が述べるように“常にテーラーメイドとしての支援”をしていくことが大切だろう。

3. 本研究における成果、課題、限界

ADHD のある、あるいは疑いのある成人女性を扱った研究が少ない中で本研究から得られたヒューマン・サービスへの支援としての提案はひとつの成果であると考えられる。さらに研究協力者らがインタビュー終了後に語った「ADHD を持つ苦しみをこれまで話す機会がなかったためうれしかった」等の感想は、「語る」ことの意義を改めて認識でき大きな成果であると考えられる。

本研究の限界として研究協力者募集の困難があった。すでに診断を受けている人たちを探すことに限界があり、5名という少ない数での研究となった。そのため、果たしてデータに偏りがなかったか、結果に普遍性があるのか、また具体例が少なく削除せざるをえなかった概念の中にも重要な抽出があったのではないかな等の課題が残った。今後は、データを数多く収集し、分析を深めていくことが求められる。

引用文献

- American Psychiatric Association 編、高橋三郎監訳・大野裕監訳・染矢俊幸訳・神庭重信訳・尾崎紀夫訳・三村將訳・村井俊哉訳・日本精神神経学会日本語版用語監修。(2014) DSM5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院
- 朝倉新・松本英夫 (2005). Adult AD/HD に対する治療的アプローチの検討—薬物療法を中心に 精神医学 47(9),963-972,
- Barkley,R.A.,Anastopoulos,A.D.,Guevremont,D.G.,&Fletcher,K.F.(1991):Adolescents with attentiondeficit hyperactivity disorder:Patterns of behavioral adjustment,academic functioning,and treatment utilization. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*.30, pp 752-761
- Barkley,R.A. (1998). *Attention deficit hyperactivity disorder:A handbook for diagnosis and treatment*.2nd ed.New York:Guilford Press.
- 遠矢浩一 (2002). 不注意、多動性、衝動性傾向を認識する青年の真理・社会的不適応感 必要な心理サポートとは何か? 心理学研究 Vol.20 No.4, pp372-383
- 本田秀夫 (2013). 自閉症スペクトラム-10人に1人が抱える「生きづらさ」の正体 ソフトバンククリエイティブ
- 星野仁彦 (2013). 大人になって初めて事例化する ADHD の臨床的特徴 精神科治療学 28(2):171-177.
- 樋口輝彦・齊藤万比古 (2014). 成人期 ADHD 診療ガイドブック 株式会社じほう p22,p97
- Humphreys, K.L., Katz, S.J., Lee, S.S., Hammen, C., Brennan, P.A., and Najman, J.M. (2013) The association of ADHD and Depression: mediation by peer problems and parent-child difficulties in two complementary samples. *Journal of Abnormal Psychology*, 122, 3, 854-867.
- 石戸教嗣 (2007). リスクとしての教育—システム論的接近—世界思想社
- 金澤潤一郎 (2013). 成人期の ADHD 患者に対する補償方略の獲得をターゲットとした心理療法の検討 北海道医療大学博士論文
- 木村康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 弘文堂
- 木村康仁 (2005). 分野別実践編グラウンデッド・セオリー・アプローチ 弘文堂
- 木村康仁 (2007). ライブ講義 M-GTA 一線の質的研究法 弘文堂
- 姜 昌勲 (2013). おとなの ADHD の治療は、どう進めるか? 精神科治療学 28(3):267-272
- 松岡弥玲・岡田涼・谷伊織・大西将史・中島俊思・辻井正次 (2011). 養育スタイル尺度の作成:発達の変化と ADHD 傾向との関連から. 発達心理学研究, 22,2, 179-188
- メアリー・ファウラー (1999). 手のつけられない子、それは ADHD のせいだった 扶桑社
文部科学省 特別支援教育について
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/001.htm (2015年6月11日)
- 松村明 (2006). 大辞林 三省堂編修所編 三省堂
- 長村和美 (2007). ADHD 傾向をもつ大学生に関する心理学的研究 —女性の ADHD 傾向と対人恐怖心性、および孤独感に注目して— 福岡女学院大学修士論文
- ニキ・リンコ (2002). 所属変更あるいは汚名返上としての中途診断—一人が自らラベルを求めるとき— 石川准、倉本智明編 (2002) 障害学の主張 明石書店
- 萩原拓 (2015). 発達障害のある子の自立に向けた支援 金子書房
- Okada, A. and Tsujii, N. 2013 Diagnostic problems of childhood-onset bipolar disorder morbid with attention- deficit hyperactivity disorder: three-year follow-up study six cases. *Acta Medica Kinki University*, 38, 1, 57-60.
- 岡野高明 (2002). 成人女性の注意欠陥/多動性障害 現代のエスプリ No.414, pp 84-92
- 田中康雄 (2004). 成人における ADHD—現状と課題— 精神科治療学 19(4):415-424.
- 田中康雄 (2006). ADHD の理解と指導 コミュニケーション障害学 23,207-214
- 田中康雄 (2008). AD/HD の二次的障害への対応 小児科臨床 Vol.61 No.12 2008 pp 2511-2516
- 田中康雄 (2011). 幼児期から青年期までの ADHD 症状の年齢による変化 精神神経学雑誌 VOL. 114, ss 447-454
- 田中康雄 (2012). 「主たる精神医学的問題が ADHD の特徴だけをもつ成人」の生きづらさ 精神科治療学 27(5):571-577
- 田中康雄 (2013). 生活障害の視点からみた成人期の ADHD 精神科治療学 28(3):295-265.

渡部京太 (2011). ADHD の子どもと思春期の発達 児童青年精神医学とその近接領域 Vol.52 No. 4, pp 16-23
White, H.A. & Shah, P. (2001). Creative style and achievement in adults with attention-deficit/hyperactivity disorder. *Personality and Individual Differences*, 50/673-677

山下京子 (2013). 大学生 ADHD への臨床心理学的アプローチに関する一考察 広島女学院大学人間生活学部紀要 創刊号

謝 辞

本論文の作成にあたり、常に全力のご指導をくださいました本学大学院、高野久美子教授に心から御礼申し上げます。また、調査にご協力いただきました5名の研究協力者の皆様、大変にありがとうございました。

後輩を援助する大学生のストレスについての研究

Research about the stress of college students who help younger students

文学研究科教育学専攻博士前期課程修了

長谷川 聡 士

Satoshi hasegawa

I. 問題と目的

1. はじめに

本研究は、クラブ・サークルや寮などで後輩の援助をする学生を対象にし、彼らが抱えるストレスの一端を明らかにすると共に、彼らに対してどのような援助が可能か検討する。ここでいう「援助」とは、「学生寮などにおいて先輩が後輩の日常生活のサポートをしたり、クラブ・サークルで先輩が技術的な面で後輩を指導すること」である。本研究では、クラブ・サークルや寮で後輩の援助をする学生を「援助提供学生」と名付けた。

例として、筆者が在学していた A 大学の例を挙げる。A 大学では、1 年生の頃に寮に住んでいた学生の一部が、次に寮に入ってくる 1 年生の面倒を見て、寮の運営を行うために「残寮生」として寮に住んでいる。また、2～3 年生の学生の多くはクラブ・サークルにおいて中心となって組織を運営し、後輩の面倒を見ることが多いようである。このような学生が、援助提供学生の例として挙げられる。

在学中の筆者の周囲にも、援助提供学生は数多くおり、彼らの多くは後輩の援助をするというその役割に、大きな喜びや自己の成長を感じていた。しかし中には、その役割を担う中でストレスや負担を感じる者や、中には抑うつ状態になってしまう者もいた。鶴田 (2001) は、クラブ・サークルで「これまで、自分のことだけで精一杯だった人が、他人の世話をするという課題に直面する」「人が自分についてきてくれないというような経験をする」と述べている。このような自分の経験や先行研究から、後輩の援助をする学生には、ストレスとうまく付き合うことへのサポートが必要なのではないかというのが、筆者の問題意識である。

2. ストレスについて

(1) ストレスの定義

ストレスという専門用語を最初に用いたのは Selye, H. (1988) であり、「ひずみ」を表す言葉として物理学から導入された。ストレスの定義には専門家の間にもさまざまな考え方があがるが、中野

(2005)によると、一般的には以下の4つの考え方があるという。1つ目は、ストレスはその状態を引き起こす出来事であるという考え方で、専門的にそれはストレッサーと呼ばれている。2つ目は、ストレスは反応であるという考え方である。例えば、頭痛、腹痛などの身体的な症状、あるいは不安、抑うつなどの精神的な症状がストレスであるとする。3つ目は、ストレッサーに対する個人の認知および価値観を重視し、個人がその出来事をストレスと受け止めるために身体的・精神的なストレス反応が生じるとする考え方である。4つ目の考え方は、ストレスを全体的な現象と捉え、1つの出来事や状況がストレスの原因になるのではなく、環境や生活様式、社会適応などさまざまな要因がストレスに影響を及ぼしているとするものである。さらに、この4つの考え方をまとめ、ストレスを「総合的ストレス過程」と定義するのが最近の傾向だという (Cooper,2004)。中野 (2005)によると、「総合的ストレス過程」とは「ある出来事をプレッシャーと感じ、そのために精神的あるいは身体的ストレス反応が起きるといった一連の過程をストレスとする考え方」である。

(2) ソーシャルサポートについて

ストレッサーの悪影響を緩和する要因として、ソーシャルサポート (社会的支援) が挙げられる。嶋 (1992)によると、ソーシャルサポートとは、Caplan,G.により概念化されたものであり、「家族や友人、隣人など、ある個人を取り巻くさまざまな人からの有形・無形の援助を指す」ものとされる。久田 (2005)によると、「自分の周囲の人々 (家族、友人、同僚など) から適切な支援を受けられる人は、高度のストレス状況でも病気になりにくい」という。

3. 援助要請について

園田 (2011) はストレス反応に影響を与える要因の1つとして「社会的支援 (ソーシャルサポート) を挙げており、近年、他者に助けを求める力「対人援助要請力」が注目されていると述べている。「援助要請」とは、自分の力で解決できない困難な場面や問題に直面した個人が、他者に援助を求めることである (中村・高木,1987)。日本における、大学生の援助要請に関する研究の例として、與久田・太田・高木 (2011) が挙げられる。彼らは女子大学生を対象に、どんな内容のことを、誰に、どのくらいの頻度で相談するかを調査した。その結果、「授業・学業」、「サークル・課外活動」、「対人関係」、「性格・容姿」の4領域は友人、家族の順で援助要請の頻度が高く、「心身の健康」、「進学・就職・将来」の2領域では家族、友人の順で援助要請の頻度が高かった。教員・専門家への援助要請は、どの領域でも低かったという。友人や家族が、大学生にとって身近な援助提供者となっていることが窺える。

4. 完全主義について

「完全主義 (Perfectionism)」とは、達成状況や評価場面において、自己 (あるいは周囲) に対し

て完全を求める考え方や振る舞いの傾向をいう（大谷,2010）。彼によると、完全主義という言葉は、一切の妥協なくストイックに高みを目指していくという意味で、個人を称賛する言葉として使われることもあるが、過度に完全主義を求めすぎることがメンタルヘルスに悪影響を与えるという主張もあるという。

完全主義に関する先行研究として、完全主義は適応的なものか不適応的なものかという研究がある。現在では、完全主義には適応的な面と不適応的な面の2つの側面があるということが、広く受け入れられている。Frost et al (1990) は女子大生を対象にした研究から、「ミスを過度に気にすること (Concern over Mistakes)」と「自分の行動に漠然とした疑いをもつこと (Doubting of Actions)」という完全主義の側面はうつ状態と正の関連がある不適応的な因子で、「高い目標を課すること (Personal Standard)」はうつ状態とは関連を示さないことを確認した。

5. 本研究の目的と仮説

本研究の仮説は、以下のように設定する。

仮説 1 援助提供学生における完全主義とストレスの間には関連があるだろう。また、援助提供学生は非援助提供学生よりも、完全主義の不適応的な側面とストレスの関連が強いだろう。

仮説 2 援助要請をする傾向のある援助提供学生は、援助要請をしない傾向の援助提供学生よりも、ストレスは低いだろう。

仮説 3 援助提供学生は、非援助提供学生よりもストレスは高いだろう。また、援助提供の活動時間が長い援助提供学生は、活動時間が短い援助提供学生よりもストレスが高いだろう。

仮説 4 活動に充実感を多く感じている援助提供学生は、そうでない援助提供学生よりもストレスは低いだろう。

続いて、このような仮説を設定した理由について述べる。完全主義とストレスや抑うつなど、不適応的な側面との関連は Frost,R.O.et al (1990) など、これまでの研究で既に述べられている。本研究における援助提供学生においても同様の関連があると思われる。本研究ではさらに、援助提供学生は後輩の援助をするという責任感から、援助提供学生ではない学生（以下、非援助提供学生）よりも完全主義の不適応的な側面とストレスとの関連が強いのではないかという仮説を立てた（仮説1）。

さらに本研究では、援助提供学生の援助要請についても扱う。田村・石隈（2002）は自ら援助要請を行うことはソーシャルサポートを得るための重要な手段であると示唆している。永井（2013）によると、これまでの先行研究から、援助要請は基本的に個人の適応にとってよいものであるということが確かめられてきている。しかしながら、本研究における援助提供学生というような、「後輩の世話をしたり援助をしたりする大学生」というような対象にフォーカスした研究はあまり見られないように

思われる。このことから筆者は、援助提供学生が行う援助要請とストレスの関係を調査したいと考えた。これまでの研究から、援助提供学生においても、援助要請をする方が彼らのストレスは低減されることが予想される。よって仮説2では、援助要請をする傾向の援助提供学生は、援助要請をしない傾向の援助提供学生よりもストレスが低いだろうという仮説を立てた。

仮説3では、援助提供学生が感じるストレスの程度と非援助提供学生が感じるストレスの程度について比較する。さらに援助提供学生の活動時間とストレスの程度の関連について検討する。後輩の援助をするという、責任の重い役割のある援助提供学生のストレスは、そのような役割のない非援助提供学生よりも高くなる可能性が考えられる。同様に、活動時間の長い援助提供学生は活動時間の短い援助提供学生よりもストレスが高くなると予想される。

仮説4においては、援助提供学生が感じる充実感とストレスの関連を検討する。マイナビ(2013)は社会人を対象に、仕事におけるストレスの有無と充実感の関連について調査した。それによると、ストレスがないと回答した者は、ストレスがあると回答した者よりも仕事に充実感を感じていると答えた者が10%ほど多いという結果であった。逆に言えば、仕事に充実感を感じている者は充実感を感じていないものよりもストレスの程度が低いといえる可能性がある。本研究における援助提供学生は社会人ではないが、特に残寮生においては1日の時間の多くを後輩と関わる時間に割かれるということもあり、充実感を感じないで後輩と関わるということはストレスになりうると考えられる。このことから、活動に充実感を多く感じている援助提供学生は、そうでない援助提供学生よりも、ストレスの程度は低いだろうという仮説を立てた。

これらの仮説を、統計的手法を用いて検証することにより、援助提供学生のストレスに影響を与える要因について、その一端を明らかにしたい(研究I)。さらに、援助提供学生が、自身が後輩と関わることにどう考えているのか、またどのような支援が必要なのか、生の声を聞きたいと考え、インタビュー調査を実施する(研究II)。これらから得られた情報が、援助提供学生を理解し支援を考える際の参考の一つとなれば幸いである。

II. 研究I : 質問紙調査

1. 方法

(1) 調査対象者

本学の1~4年生の学生338名を調査対象とした。記入漏れや記入ミスのある50名を無効として取り除き、288名を有効回答とした(有効回答率85.20%)。年齢は、18~25歳、平均年齢19.26歳、標準偏差1.097であった。性別内訳は男性143名、女性145名であった。

(2) 調査時期

2015年5月~7月

(3) 実施手続き

学部の授業時間内及び学生課を経由して、残寮生に質問紙を届ける方法で実施した。授業においては、何名かの教員に許可を得て授業時間の一部を使い調査を実施し、質問紙の説明も含め 15 分程度で実施した。

また、筆者が面識のある教員は学部一年生の授業を担当している方が多かったため、援助提供学生が十分な数まで集まらなかった。そのため学生課に協力を依頼し、学生課を経由して残寮生に質問紙を配布し、調査を実施した。

(4) 質問紙の構成

質問紙 A：フェイスシート

対象者の年齢、性別、学部、学年、援助提供学生かどうかの判別、活動時間と充実感を問う。

質問紙 B：自己志向的完全主義尺度（Multidimensional Self-oriented Perfectionism Scale:MSPS）

桜井・大谷（1997）が自己志向的完全主義にポジティブな面とネガティブな面があると想定して作成した尺度。「完全欲求（Desire for Perfection:DP）」、「高目標設定（Personal Standard:PS）」、「失敗過敏(Concern for Mistakes:CM)」、「行動疑念（Doubting of Actions:D）」の 4 下位尺度からなる。「非常にあてはまる」～「全くあてはまらない」の 6 件法で回答を求める。

質問紙 C：援助要請スタイル尺度

永井（2013）が、援助要請の実行に至る過程に注目し作成した、援助要請のスタイルを 3 つに分類する尺度。まず自力での問題解決を試み、どうしても解決困難な場合に援助を求める「援助要請自立型」、十分な自助努力を行わずに安易に援助を求める「援助要請過剰型」、困難な問題を抱えても、一貫して援助を回避する「援助要請回避型」、の 3 つのスタイルである。「非常によくあてはまる」～「全くあてはまらない」の 7 件法で回答を求める。

質問紙 D：SRS-18（Stress Response Scale-18）

鈴木他（1997）によって作成された、心理的ストレス反応を測定する尺度。鈴木他（1997）は心理的ストレス反応を、「日常体験するさまざまなストレッサーによって引き起こされる情動的、認知的、行動的变化」と定義している。「抑うつ・不安」、「不機嫌・怒り」、「無気力」の 3 因子、全 18 項目からなる。「あてはまる」～「あてはまらない」の 4 件法で回答を求める。

2. 因子分析

質問紙 A：自己志向的完全主義尺度（MSPS）の因子分析

本学学生の自己志向的完全主義について探索的に調べるため、因子分析を行った。自己志向的完全主義尺度 (MSPS) の 20 項目 (表 1) について、主因子法プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、40 未満の負荷量を示した 7 項目を除外し (表 2)、再度、主因子法プロマックス回転による因子分析を行ったところ、3 因子 13 項目の構造となった (表 3)。

固有値と解釈可能性を考え、得られた 3 因子 13 項目を採用し、本研究独自の因子の命名を行った。第 I 因子は、「高い目標の追求」因子と命名した。第 II 因子は、「完璧への過度なこだわり」因子と命名した。第 III 因子は、「やり残し・失敗への不安」因子と命名した。

また、各因子の信頼性を検討するために Cronbach の α 係数を算出した。その結果、第 I 因子 $\alpha = .805$ 、第 II 因子 $\alpha = .792$ 、第 III 因子 $\alpha = .592$ となった。第 III 因子の信頼性はやや低いものの、概ね信頼性は確認された。この新たに抽出された因子構造は先行研究とは異なるが、本研究の対象者の完全主義の傾向をより正確に反映している可能性があるため、分析の対象として採用することとした。

表 1. 先行研究の因子構造 MSPS (桜井・大谷, 1997)

完全欲求 (DP)
5. どんなことでも完璧にやり遂げるのが私のモットーである。 9. 物事は常にうまくできていないと気が済まない。 13. 中途半端な出来では我慢できない。 16. できる限り、完璧であろうとする。 20. やるべきことは完璧にやらなければならない。
高目標設定 (PS)
1. いつも、周りの人より高い目標を持つと思う。 4. 何事においても最高の水準を目指している。 7. 高い目標を持つ方が、自分のためになると思う。 11. 簡単な課題ばかり選んでは、だめな人間になる。 14. 自分の能力を最大限に引き出すような理想を持つべきである。
失敗過敏 (GM)
3. "失敗は成功のもと" などとは考えられない。 6. ささいな失敗でも、周りの人からの評価は下がるだろう。 10. 人前で失敗するなど、とんでもないことだ。 17. 少しでもミスがあれば、完全に失敗したのも同然である。 19. 完璧にできなければ、成功とはいわない。
行動疑念 (D)
2. 注意深くやった仕事でも、欠点があるような気がして心配になる。 8. 何かをやり残しているようで、不安になることがある。 12. 納得できる仕事をするには、人一倍時間がかかる。 15. 念には念を入れる方である。 18. 戸締りや火の始末などは、何回か確かめないと不安である。

表 2. 因子分析後の削除項目

3. "失敗は成功のもと" などとは考えられない。
6. ささいな失敗でも、周りの人からの評価は下がるだろう。
9. 物事は常にうまくできていないと気が済まない。
10. 人前で失敗するなど、とんでもないことだ。
11. 簡単な課題ばかり選んでは、だめな人間になる。
12. 納得できる仕事をするには、人一倍時間がかかる。
13. 中途半端な出来では我慢できない。

表 3. MSPS (本研究) の因子分析結果

	I	II	III
I 高い目標の追求 $\alpha = .805$			
4. 何事においても最高の水準を目指している。	.743	.125	-.102
7. 高い目標を持つ方が、自分のためになると思う。	.639	-.227	.067
1. いつも、周りの人よりも高い目標を持つと思う。	.630	.042	-.227
14. 自分の能力を最大限に引き出すような理想をもつべきである。	.586	-.195	.054
5. どんなことでも完璧にやり遂げることが私のモットーである。	.565	.268	.010
16. できる限り、完璧であろうとする。	.550	.231	.074
15. 念には念を入れる方である。	.458	-.118	.342
II 完璧への過度なこだわり $\alpha = .792$			
17. 少しでもミスがあれば、完全に失敗したのも同然である。	-.117	.812	.075
19. 完璧にできなければ、成功とはいわない。	-.184	.800	.042
20. やるべきことは完璧にやらなければならない。	.161	.655	-.025
III やり残し・失敗への不安 $\alpha = .592$			
2. 注意深くやった仕事でも、欠点があるような気がして心配になる。	-.022	.061	.676
8. 何かをやり残しているようで、不安になることがある。	.046	.026	.662
18. 戸締りや火の始末などは、何回か確かめないと不安である。	-.084	.065	.433

因子間相関	I	II	III
I	-	.508	.293
II	.508	-	.316
III	.293	.316	-

質問紙 C : SRS-18 (心理的ストレス反応尺度) の因子分析

本研究で用いた 18 項目に対して主因子法プロマックス回転による因子分析を行い、先行研究 (表 4) と比較した。その結果、因子負荷量.40 未満を示した 6 項目を除外し (表 5)、再度、主因子法プロマ

ックス回転を行ったところ、3 因子 12 項目の因子構造となった(表 6)。因子分析後の因子構造は、「13. よくないことを考える」の項目が先行研究(鈴木他,1997)とは異なる因子に分類されたが、その他の構造は先行研究と同様であったため、因子名については先行研究に従うこととした。

また、尺度の信頼性を検討するため Cronbach の α 係数を算出したところ、第 I 因子 $\alpha = .847$ 、第 II 因子 $\alpha = .662$ 、第 III 因子 $\alpha = .753$ となり、尺度の信頼性は概ね確かめられた。

表 4.先行研究の因子構造 SRS-18 (鈴木他,1997)

抑うつ・不安
2. 悲しい気分だ。
3. 何となく心配だ。
5. 泣きたい気持ちだ。
9. 気持ちが沈んでいる。
12. 何もかもいやだと思う。
15. なぐさめてほしい。
不機嫌・怒り
1. 怒りっぽくなる。
4. 怒りを感じる。
6. 感情を抑えられない。
7. くやしい思いがする。
8. 不愉快だ。
10. いらいらする。
無気力
11. いろいろなことに自信がない。
13. よくないことを考える。
14. 話や行動がまとまらない。
16. 根気がない。
17. ひとりでいたい気分だ。
18. 何かに集中できない。

表 5.因子分析の削除項目

6. 感情を抑えられない。
7. くやしい思いがする。
11. いろいろなことに自信がない。
12. 何もかもいやだと思う。
15. なぐさめてほしい。
17. ひとりでいたい気分だ。

表 6.SRS-18 (本研究) の因子分析結果

	I	II	III
I 不機嫌・怒り $\alpha = .847$			
4. 怒りを感じる。	.892	.013	-.092
1. 怒りっぽくなる。	.869	-.074	-.028
10. いらいらする。	.750	-.058	.148
8. 不愉快だ。	.484	.282	-.040
II 抑うつ・不安 $\alpha = .662$			
5. 泣きたい気持ちだ。	-.076	.833	-.131
2. 悲しい気分だ。	.030	.828	-.118
9. 気持ちが沈んでいる。	.002	.656	.221
3. 何となく心配だ。	.025	.536	.094
13. よくないことを考える	.053	.486	.295
III 無気力 $\alpha = .753$			
18. 何かに集中できない。	-.006	-.130	.832
14. 話や行動がまとまらない。	.000	-.002	.719
16. 根気がない。	-.024	.093	.612

因子間相関	I	II	III
I	-	.509	.325
II	.509	-	.566
III	.325	.566	-

3. 結果の考察

(1) 仮説1の検討

援助提供学生における MSPS の得点と SRS-18 の得点の関連を確認するために、ピアソンの積率相関係数を算出した。

表 7.MSPS と SRS-18 の得点の相関分析 (援助提供学生)

MSPS の項目	SRS-18 の項目			
	合計点	抑うつ・不安	不機嫌・怒り	無気力
高い目標の追求	-.032	.014	.010	-.135
完璧への過度なこだわり	.236**	.257**	.186*	.074
やり残し・失敗への不安	.220**	.256**	.011	.245**

* $p < .05$ ** $p < .01$

援助提供学は、「高い目標の追求」因子は SRS-18 の各得点と有意な関係は示されなかったが、「完璧への過度なこだわり」因子は「合計点」「抑うつ・不安」、「不機嫌・怒り」得点との有意な正の相関を示した。また、「やり残し・失敗への不安」因子においても、「合計点」「抑うつ・不安」「無気力」得点と有意な正の相関が示された。よって、援助提供学生における完全主義とストレスとの間に一定の関連が見られた。

続いて、非援助提供学生についても同様に MSPS と SRS-18 の得点についてピアソンの積率相関係数を算出し、援助提供学生と比較した。表 8 は、非援助提供学生における MSPS と SRS-18 の相関分析を行った結果である。

表 8.自己志向的完全主義と心理的ストレス反応の相関分析（非援助提供学生）

MSPS の項目	SRS-18 の項目			
	合計点	抑うつ・不安	不機嫌・怒り	無気力
高い目標の追求	-.036	-.020	.030	-.113
完璧への過度なこだわり	.071	.098	-.037	.113
やり残し・失敗への不安	.338**	.409**	.114	.244**

**p<.01

非援助提供学生については、「やり残し・失敗への不安」のみが「合計点」「抑うつ・不安」「無気力」と 1%水準で有意な正の相関を示した。

援助提供学生と非援助提供学生を比較してみると、2 つの特徴が見出せる。一つは、「完璧への過度なこだわり」因子が、援助提供学生においてのみ SRS-18 の項目と有意な正の相関を示していることである。もう一つは、「やり残し・失敗への不安」因子は、援助提供学生・非援助提供学生どちらにおいても SRS-18 との有意な正の相関を示しているが、相関係数の値は、非援助提供学生の方が若干高いということである。

(2) 仮説 2 の検討

まず、本学の援助提供学生の援助要請スタイルを分類したところ、表 9 のようになった。対象者の援助要請スタイルの分類は、永井（2013）に基づき、援助要請自立型、援助要請回避型、援助要請過剰型、の 3 つの下位尺度のうち、最も得点が高いものをその個人の援助要請スタイルとした（ただし、3 つの下位尺度全てが、下位尺度の最大得点である 28 点の半分を超えない場合、分類不可能となる）。分類不可能な 10 名を除き、多くの援助提供学生（116 名）が援助要請自立型であった。また、援助要請過剰型に分類される者は 37 名だった。援助要請回避型の者は 6 名と少なかった。

表 9.援助提供学生の援助要請スタイルの分類

援助要請自立型	援助要請回避型	援助要請過剰型	合計
116 名	6 名	37 名	159 名

続いて、援助要請スタイルの違いによって SRS-18 の平均得点に差があるのかどうかを検討するために、1 要因の分散分析を行った（表 10）。援助要請スタイル別の人数が偏ってしまったことの影響か、SRS-18 の項目についての有意差は示されなかった。よって、仮説 2 は否定された。

表 10.援助要請スタイルと SRS-18 の分散分析（援助提供学生）

SRS-18 の項目	援助要請スタイル			F 値 (df=2,156)
	自立型 (n=116)	回避型 (n=6)	過剰型 (n=37)	
合計点	15.06	16.17	16.11	.290(n.s)
抑うつ・不安	7.35	7.00	7.00	.115(n.s)
不機嫌・怒り	3.61	4.83	4.41	1.22(n.s)
無気力	4.09	4.33	4.70	.807(n.s)

(3) 仮説 3 の検討

まず、援助提供学生と非援助提供学生の SRS-18 の平均得点の違いについて調べるために t 検定を行ったところ、表 11 のような結果になった。SRS-18 の「合計点」の平均値は、援助提供学生 15.27、非援助提供学生 17.39 ($t=-2.276, p<.05$) であり、非援助提供学生の方が高いことが示された。

また、「抑うつ・不安」因子の平均得点は、援助提供学生で 7.24、非援助提供学生で 8.38($t=-2.367, p<.05$)であり、「合計点」同様に、非援助提供学生の方が高いことが示された。

表 11.援助提供学生と非援助提供学生の SRS-18 の t 検定

SRS-18 の項目	援助提供学生 (n=169)	非援助提供学生 (n=119)	t 値 df=(286)
合計点	15.27	17.39	-2.276*
抑うつ・不安	7.24	8.38	-2.367*
不機嫌・怒り	3.80	4.28	-1.219(n.s)
無気力	4.24	4.74	-1.612(n.s)

* $p<.05$

続いて、援助提供学生の活動時間の違いによって SRS-18 の平均得点に差があるのかを調べるために、1 要因の分散分析を行ったところ、表 12 のような結果となった。活動時間の違いによる SRS-18

の得点の有意差は示されなかった。

表 12.活動時間と SRS-18 の分散分析

SRS-18 の項目	1～2時間くらい (n=43)	3～4時間くらい (n=50)	5～6時間くらい (n=43)	それ以上 (n=33)	F 値 df=(3, 165)
合計点	16.67	14.50	13.72	16.64	1.602 (n. s)
抑うつ・不安	7.77	6.70	6.51	8.30	1.762 (n. s)
不機嫌・怒り	4.09	3.96	3.40	3.70	.429 (n. s)
無気力	4.81	3.84	3.81	4.64	1.189 (n. s)

(4) 仮説 4 の検討

援助提供学生が感じる充実感の違いによって、SRS-18 の得点に有意差が見られるのかどうか検討するために 1 要因の分散分析を行ったところ、表 13 のような結果となった。「合計点」および「抑うつ・不安」、「不機嫌・怒り」、「無気力」の各因子について、有意差は示されなかった。

表 13.充実感と SRS-18 の分散分析

SRS-18 の項目	非常に感じる (n=84)	ある程度感じ る (n=78)	あまり感じな い (n=7)	全く感じない (n=0)	F 値 df=(2, 166)
合計点	14.24	16.42	14.86	—	1.668 (n. s)
抑うつ・不安	6.90	7.71	6.00	—	1.118 (n. s)
不機嫌・怒り	3.37	4.27	3.71	—	1.742 (n. s)
無気力	3.96	4.45	5.14	—	1.232 (n. s)

Ⅲ. 研究Ⅱ：面接調査

1. 目的

援助提供学生が自身の援助活動にどのような大変さややりがいを感じているのか探り、また彼らに対する支援の方法について示唆を得ることを目的とする。

2. 方法

(1) 調査協力者

研究Ⅰに協力していただいた援助提供学生の中で、インタビュー調査の協力にも了承してくれた 9 名を対象に実施した。

後輩を援助する大学生のストレスについての研究

(2) 実施手続き

協力を了承してくれた学生に対して、ICレコーダーを用いて録音しながらインタビューを実施した。プライバシーに配慮し、心理教育相談室の個室で実施した。事前に用意したインタビュー項目を用いて半構造化面接を行った。面接時間は1人当たり30分～65分程度であった。

(3) 調査時期

2015年7月～8月

(4) 分析方法

KJ法(川喜多,1967)を使用した。本研究ではインタビューの録音の逐語録を作り、質問項目に関連する部分についてKJ法を行った。

3. 結果並びに考察

項目①：後輩の援助をする中で、大変さやストレスを感じたことはありますか。
それはどのような場面で感じ、どんな内容でしたか。

表 15.項目①の分類

大カテゴリー	小カテゴリー
【集団生活上の対人関係】	(1) 人間関係の仲介 (2) ミーティングでの意見のすり合わせ (3) 大人数の中で、普段合わない人と話したり、面倒を見ること (4) みんなで触れ合う時間の確保 (5) 集団の中でテンションを上げなければいけないこと (6) 仕事の後輩の都合に左右されること (7) 後輩のバックグラウンドを知ること (8) 常に人といること
【自分の内的なことに関する大変さ】	(1) タイムマネジメント (2) 理想と現実のギャップ (3) 未熟だけど責任を全うしなければいけないこと

項目①は大カテゴリーが2つに分けられた。【集団生活上の対人関係】は8つの小カテゴリーからなっている。(1)「人間関係の仲介」や(2)「ミーティングでの意見のすり合わせ」など、1対1の関

係ではなく、集団生活ゆえに生じる大変さが特徴的である。【自分の内的なことに関する大変さ】は3つの小カテゴリーからなっている。(1)「タイムマネジメント」に関する語りは4人の協力者が語っており、援助提供学生としてやらなければならないことと、自分のやりたいこととの間で苦勞している様子がかがえる語りが得られた。

項目②：そのようなストレスなどを感じた時、それを解消するためにどんなことを行っていますか。

表 16.項目②の分類

大カテゴリー	小カテゴリー
【人と話して発散】	(1) 友人や先輩と話す (2) 大学の施設に相談する
【趣味・嗜好品】	
【睡眠】	
【叫ぶ】	
【そもそもストレスを溜めない】	

項目②は5個の大カテゴリーに分かれた。【人と話して発散】は(1)「友人や先輩と話す」、(2)「大学の施設に相談する」という2つの小カテゴリーからなっている。全部で6人の協力者が【人と話して発散】に含まれる語りをしており、人と話したり相談したりすることが重要なストレス発散の手段であることがうかがえる。【趣味・嗜好品】、【睡眠】に関する内容も、複数人が語ってくれた。また、中には、【叫ぶ】というユニークな対処法を取る協力者もいた。【そもそもストレスを溜めない】ようにしていることを語る協力者もあり、それぞれ工夫して大変さやストレスと付き合っている様子であった。

項目③：そのような大変さやストレスを感じたとき、家族や友人などに相談しますか。

表 17.項目③の分類

大カテゴリー	小カテゴリー
【相談する】	(1) 母親に相談 (2) 父親に相談 (3) 同期・先輩に相談
【家族にはあまり相談しないが、友人や先輩なら相談する】	

項目③は2つの大カテゴリーに分かれた。さらに【相談する】は相談相手によって3つの小カテゴリー

後輩を援助する大学生のストレスについての研究

リーに分かれている。人に全く相談しないというような語りは聞かれず、皆、誰かしらの相談相手がいるという結果だった。

項目④：物事に取り組むときに完璧を目指すことを完全主義と言いますが、ご自分の傾向として、そのようなところはあると思いますか。それはどのようなときに感じますか。

表 18.項目④の分類

大カテゴリー	小カテゴリー
【完全主義だと自分で思う】	(1) しっかりした出来栄えのものを作りたい (2) 理想に近づけたい (3) 次々と目標を課すところ (4) 後輩の前で悪いところを見せたくない (5) 高すぎる目標の設定 (6) ミスが悔しい
【完全主義から変わってきている】	
【他の人から完全主義と言われる】	
【完全主義だとは思わない】	

項目④は 4 つの大カテゴリーに分かれた。【完全主義だと自分で思う】は、どういうときに自身の完全主義を感じるかを示す 6 つの小カテゴリーからなっている。(1)「しっかりした出来栄えのものを作りたい」は 3 人が該当する語りをしているものの、他の 5 つの小カテゴリーは 1 人の語りのみからなる。自分の完全主義を感じる部分は人それぞれのものである。また、昔は完全主義だったが今は変わってきていることが語られたり、自分では自覚がないものの他の人から完全主義だと言われた経験を語ってくれる協力者もあり、完全主義の感じ方にもさまざまある。【完全主義だとは思わない】ということ語ってくれた協力者は 2 人で、協力者の多くは自分に完全主義などところがあると感じていた。

項目⑤：後輩と関わることによって、自分自身について変わったなと思うことがあれば教えてください。

表 19,項目⑤の分類

大カテゴリー	小カテゴリー
【人間関係の広がり】	
【自分のこだわりが柔軟に】	
【自分の意見を言うようになった】	
【価値観の広がり】	
【欲求への対処】	
【人のために尽くせるようになった】	

項目⑤においては、6つの大カテゴリーに分かれた。【人間関係の広がり】は2人の協力者が語ってくれたが、その他の大カテゴリーは共通項を見つけるのは難しい。自身の変化については、協力者ごとに自覚する内容が違う傾向が強いのもかもしれない。

項目⑥：あなたが後輩の援助をする上で支え、モチベーション、やりがいがあれば教えてください。

表 20,項目⑥の分類

大カテゴリー	小カテゴリー
【後輩との関わり】	(1) 後輩の反応 (2) 後輩の成長 (3) 後輩と一緒にいること自体 (4) 後輩の頑張っている姿 (5) 後輩に勉強を教えること (6) 入寮から卒業までの過程に携わること (7) 演技をやりきった後輩を見ること
【周囲からの称賛】	
【創立者からの励まし】	
【使命を見つめ直す】	
【残寮生同士の関わり】	
【先輩からの恩を、後輩を通して返していく】	
【相談してもらえることで自分が満足感を得る】	

後輩を援助する大学生のストレスについての研究

項目⑥は 7 つの大カテゴリーにわかれた。【後輩との関わり】はさらに 7 つの小カテゴリーで構成されている。ここにおいて特徴的なのは回答の多さである。協力者 9 人から、18 個の回答が得られた。協力者たちは、多くのモチベーションややりがいを持っていることがうかがえる。特に【後輩との関わり】に多くの回答が分類されており、得られた回答の半数以上を占めた。後輩と関わる援助提供学生のモチベーションややりがいの多くは、後輩との関わりの中にあることが明らかになった。

項目⑦：大変さとやりがいの割合について教えてください。

表 21.項目⑦の分類

大カテゴリー	小カテゴリー
【やりがいを感じる上で大変さも必要】	(1) 大変さを超えた先にやりがいを感じる
	(2) 大変だからこそやりがいを感じる
【今はわからない】	

項目⑦では、2 つの大カテゴリーに分かれた。【やりがいを感じる上で大変さも必要】はさらに (1) 「大変さを超えた先にやりがいを感じる」と (2) 「大変だからやりがいを感じる」の 2 つの小カテゴリーからなっている。どちらの小カテゴリーも、それなり的大変さを感じつつも、その大変さがやりがいを感じる上で必要であるという点で共通している。協力者のほとんどの語りは、この【やりがいを感じる上で大変さも必要】に分類された。

項目⑧：後輩の援助をすることに関して、周囲に対してもっとこうしてほしい、こういうサポートがあればいいのと思うようなことは何かありますか。

表 22.項目⑧の分類

大カテゴリー	小カテゴリー
【仲間への要望】	(1) 卒寮したメンバーも寮のことを考えてほしい (2) クラブのメンバーは他の人のことも考えてほしい
【サポートに関する要望】	(1) もっと大人のサポートがほしい (2) 相談室はもっと行きやすくしてほしい
【特に要望はない】	

項目⑧は、3 つの大カテゴリーに分かれた。【仲間への要望】を構成する小カテゴリーのうち (1) 「卒寮したメンバーも寮のことを考えてほしい」は残寮生である C さんから見て、卒寮生が寮のこと

を考えなくなるのはさみしいという訴えであった。(2)「クラブのメンバーは他の人のことも考えてほしい」に分類される語りをした A さんはあるクラブのマネージャーである。自身はプレイはせず、仲間の健康面でのサポートが主な仕事とのことである。主にプレイをしている人もプレイだけではなく、もっと他の人のことを考えてほしいという話であった。【サポートに関する要望】を構成する(1)「もっと大人のサポートがほしい」は、残寮生である H さんによれば、残寮生は学生課と連携する機会があるそうだが、もっと学生課の人などの大人が、一人ひとりの残寮生をサポートしてほしいという話であった。【サポートに関する要望】のうち(2)「相談室はもっと行きやすくしてほしい」に属する語りは2人の協力者から得られた。2人とも、相談室の存在はなんとなく知ってはいた。しかしながら行きにくさを感じていたり、誰でも入れることをもっとアピールするべきという意見を、2人の協力者が出してくれた。

IV. 総合考察

1. 仮説1について

(1) 援助提供学生における完全主義

まず、MSPSを因子分析した結果、先行研究とは異なる3因子の構造になった。実際に援助提供学生を対象にMSPSとSRS-18の得点の関係を相関分析で確認したところ、両者の間には一定の関連が見られた(表7)。「完璧への過度なこだわり」と「やり残し・失敗への不安」という側面が高い援助提供学生は、心理的ストレス反応も高いということである。これまでの先行研究(桜井・大谷,1997など)で完全主義には適応的な側面と不適応的な側面があるとされているが、因子分析をして得られた自己志向的完全主義のこの2つの側面は、援助提供学生において不適応的な側面だといえるだろう。なお、「高い目標の設定」因子は、SRS-18の合計点・下位尺度との間に有意な相関は示さなかった。桜井・大谷(1997)が用いたMSPSにおける「完全欲求(DP)」因子同様、完全主義傾向全体に影響する因子であり、精神的健康とは関連が薄いことが考えられる。

(2) 援助提供学生と非援助提供学生の比較

援助提供学生の特徴をより明らかにするために、非援助提供学生についてもMSPSとSRS-18の得点で相関分析を行った。その結果、本研究で用いたMSPSの因子のうち、「高い目標の追求」と「やり残し・失敗への不安」因子は、援助提供学生と同様の傾向を示した。すなわち、「高い目標の追求」因子はSRS-18の合計点・下位尺度との間に有意な相関は示されず、「やり残し・失敗への不安」因子は有意な正の相関を示した。このことから、援助提供学生・非援助提供学生どちらにおいても、「高い目標の追求」因子は精神的健康とは関連が薄く、「やり残し・失敗への不安」因子が高いほど心理的ストレス反応が高まるということが示唆された。

援助提供学生においてはSRS-18の合計点・下位尺度と有意な正の相関を示した「完璧への過度な

こだわり」因子は、非援助提供学生においては有意な相関を示さなかった。このことは、「完璧への過度なこだわり」という傾向が、心理的ストレス反応に影響を与える要因の中でも、援助提供学生に特有のものである可能性を示唆する。なぜこのような結果になったのであろうか。研究Ⅱにおけるインタビュー調査の語りも踏まえて検討する。

表 18 は、インタビュー協力者が自分に完全主義的な傾向があると思うかどうか、また、どのようなときにそれを感じるかについて分類したものである。【完全主義だと自分で思う】の中でも、(4)「先輩の前で悪いところを見せたくない」の小カテゴリーに注目してみたい。筆者の推測の域を出ないが、「悪いところを見せられない相手」として先輩がいるということが、援助提供学生の「完璧への過度なこだわり」という傾向をストレスと関連づけているのではないだろうか。

また、援助提供学生・非援助提供学生どちらにおいても SRS-18 の合計点・下位尺度と有意な正の相関を示したのは「やり残し・失敗への不安」因子である。その相関係数を比べてみると、非援助提供学生の方が、わずかだが相関係数が高いという結果となった。仮説 1 では援助提供学生の方が非援助提供学生よりも完全主義の不適応的な側面とストレスの関連は強いだろうと予想したが、予想とは逆の結果になった。このことについては後の第 3 節のところで、さらに総合的に考察したい。

2. 仮説 2 について

まず、援助提供学生を対象に援助要請スタイル尺度(永井,2013)を用いて援助要請スタイルを分類したところ、援助要請自立型 116 名、援助要請回避型 6 名、援助要請過剰型 37 名という分類になった(分類不可能な 10 名を除き、合計 159 名)。援助要請自立型と援助要請過剰型を合わせると 153 名の援助提供学生が、何らかの形で援助を要請できるスタイルであった。続いて、援助提供学生の援助提供スタイルの違いによって、SRS-18 の平均得点に違いがあるのかを検討するために、1 要因の分散分析を行った。しかし、援助要請スタイルの違いによる SRS-18 の合計点・下位尺度得点の有意な差は示されなかった。

これには、援助要請スタイルを分類したときに、スタイル毎の人数に大きな偏りができていることが影響している可能性がある。援助要請スタイルの各人数がほぼ同数だったとしても同じ結果になる可能性があるが、今の時点では断定的なことを述べることはできない。あらかじめ予備調査ができていれば、援助要請スタイルの偏りに対して何らかの手を打っていたかもしれないが、時間の都合や対象の確保の難しさから予備調査ができず、このような結果になったことは反省点である。

3. 仮説 3 について

(1) 援助提供学生と非援助提供学生の比較

まず、援助提供学生と非援助提供学生で SRS-18 の平均得点に差はあるのかどうかを調べるために、t 検定を行った。その結果、合計点と「抑うつ・不安」因子において非援助提供学生の方が、有意に

得点が高いことが示された（表 11）。当初の仮説とは正反対の結果が出ることになる。また、仮説 1 の検討では、非援助提供学生における「やり残し・失敗への不安」因子と SRS-18 の得点との相関係数は、援助提供学生の場合よりも高い値を示すことが述べられた。仮説 1・仮説 3 において、なぜこのような予想に反する結果が出たのであろうか。インタビュー調査の結果も合わせて筆者なりに考察してみたい。

まず、非援助提供学生の方が援助提供学生よりも SRS-18 の得点が高いという結果になるには、援助提供学生の側に非援助提供学生よりもストレスを低くする要因がある場合と、非援助提供学生の側に援助提供学生よりもストレスが高くなる要因がある場合が考えられる。援助提供学生側については、まずソーシャルサポートの得やすさが考えられる。研究Ⅱにおける（表 16）は、協力者がストレスを感じた際に、どのようにしてそれを解消しているかをまとめたものである。そこには【人と話して発散】という項目がある。例を挙げた語りをしてくれたのはみな残寮生であり、同じ寮に住んでいる同じ残寮生同士、あるいは寮の先輩という、互いに相談や愚痴を言い合える相手がすぐ身近にいるということが考えられる。非援助提供学生の周りに、そのような相談相手がいないとは限らないが、同じ残寮生という役割を経験している仲間が身近にいるということは、残寮生にとってアクセスしやすいソーシャルサポートになりうるのではないだろうか。

もう一つ、援助提供学生側のストレスを低減させる要因として考えられるのが、援助提供学生のやりがいとモチベーションである。研究Ⅱにおいてモチベーションややりがいを尋ねた（表 20）では、多数の語りが得られている。また、フェイスシートにおける充実感の調査では、援助提供学生 169 名のうち 84 名が充実感を「非常に感じる」、78 名が充実感を「ある程度感じる」と回答しており、合わせると全体の 95.8%が充実感を感じているという結果であった。このように、多くのモチベーションや充実感を感じられるということが、援助提供学生が非援助提供学生よりも SRS-18 の得点が低くなるという結果に関連している可能性がある。

次に、非援助提供学生側に、ストレスを高くする要因があるのかについて考えてみる。

本研究では、非援助提供学生の多くを、1 年生が占めている。このことから、非援助提供学生の方が援助提供学生よりも SRS-18 の得点が有意に高いという結果には、1 年生の特徴が強く反映されているのではないかと考えた。鶴田（2001）は、大学 1 年生の頃を「大きな変化の時期」だと述べている。鶴田（2001）によると、この時期の変化として、学業・進路・学生生活・対人関係・親子関係といった領域で課題が生じるという。多様な面で変化が生じることから、そのストレスは大きいものであろうことは十分に考えられる。本研究において質問紙調査を実施したのは 5 月～7 月であり、まだまだ新しい大学生生活に慣れ始め、というタイミングであった。このことから、1 年生が多くの割合を占める非援助提供学生では、大学生生活に慣れているであろう 2～3 年生がメインの援助提供学生よりも SRS-18 の得点が有意に高いという結果につながったのではないだろうか。また、仮説 1 において非援助提供学生の方が援助提供学生よりも「やり残し・失敗への不安」因子と SRS-18 の得点の相関

後輩を援助する大学生のストレスについての研究

係数が高かった理由も、この辺にあるのではないかと筆者は考える。しかし、今回、非援助提供学生にインタビュー調査を行ってはおらず、考察を深めるのは難しい。今回インタビュー調査を行ったのは援助提供学生のみであったが、今後は非援助提供学生についても研究を深めていく必要がある。

(2) 援助提供学生と活動時間について

また、仮説 3 では援助提供学生の援助提供の活動時間によって SRS-18 の平均得点に差はあるのかを調べるために、1 要因の分散分析を行った。しかし、有意な差は示されなかった。その理由について考察する。研究Ⅱにおける表 21 は、大変さとやりがいの割合について尋ねたものである。【今はわからない】に属する語りをした 1 人を除いて、他の協力者から得られた語りは【やりがいを感じる上で大変さも必要】に属する語りであった。さらに詳しく見ていくと 2 つの小カテゴリーに分かれる。

(1)「大変さを超えた先にやりがいを感じる」と(2)「大変だからこそやりがいを感じる」の 2 つである。彼らにとっては、長時間の活動も単なるストレスの要因となるのではなく、やりがいにつながるものとなっている可能性が考えられる。そのために、今回の仮説 3 の結果のように、活動時間によっては SRS-18 の得点に有意な差がないという結果につながったのではないだろうか。

4. 仮説 4 について

仮説 4 では、活動に充実感を感じている援助提供学生は、そうでない援助提供学生よりもストレスが低いだろうという仮説を立て、1 要因の分散分析を行った。しかし、SRS-18 の得点における有意差は確認されなかった。表 13 で確認してみると、充実感を「非常に感じる」と回答した者が 84 名、「ある程度感じる」と回答した者が 78 名と、援助提供学生 169 名のうち 162 名が充実感を感じているという結果になった。「あまり感じない」が 7 名、「全く感じない」と回答したものは 0 名であった。このように、ほとんどが充実感を感じているという対象者であったために、充実感を多く感じている者とそうでない者を比較するという仮説 4 は、そもそも実態と合わない内容となったのかもしれない。

5. 援助提供学生への支援

(1) 相談室の利用推進

援助提供学生への支援として、どのようなものが考えられるだろうか。まず第一には、インタビューでも意見が出たように、相談室の利用を推進することである。伊藤(2011)の研究では、学生相談機関がガイダンスを行うことにより、学生の学生相談機関への周知度が高まること、そして周知度が高まると来談意思が高まることが示されている。また、足立・安住(2007)は、学生相談室の利用のきっかけを作る上で、学生が相談以外の場で直接カウンセラーに接する機会をもつことの重要性を指摘している。このことから、新入生のオリエンテーションの場などで、学生相談室のカウンセラーが相談室についてガイダンスを行うということが、学生相談室の利用を促すことにつながると考えられ

る。さらに、吉武（2012）は、学生相談室への抵抗感や不安を低減させる方法として、学生を実際に学生相談室を見学させるという方法の有効性を提唱している。しかし、本学の学生総数は7973名（2015年5月1日現在）と、全学生に学生相談室を見学させるのは現実的ではない。そのため、残寮生や各クラブ・サークル団体の代表の者を対象に、実際に学生相談室を訪れ見学する機会を設けることを提案したい。木村・水野（2010）によると、学生が学生相談機関について知ること、その学生の周囲にいる、相談へのニーズを抱えた学生を学生相談機関に紹介することにつながるという。このことから、残寮生や各クラブ・サークル団体の代表の者に学生相談室を見学させることは、その本人の学生相談室への抵抗感・不安感を低減させるだけでなく、その周囲にいる寮のメンバーやクラブ・サークル団体に所属する学生をも、学生相談室へつなげるよいきっかけとなりうるのではないだろうか。

（2）ピア・サポート

続いて第二に、ピア・サポート（peer support）について取り上げたい。日本ピア・サポート学会では、ピア・サポートプログラムを「学校教育活動の一環として、教師の指導・援助の下に、子どもたちが互いに思いやり、助け合い、支え合う人間関係を育むために行う学習活動であり、そのことがやがては思いやりのある学校風土の醸成につながることを目的とする」と定義している（中野他、2008）。ピア・サポートは小学校～高校までの児童・生徒が対象になることが多いが、それだけでなく、大学や地域の人々が支援の方法を学び、困っている仲間を支援する活動でもある（森川、2002）。ここでは元残寮生だった上級生や、1年生の頃に寮に住んでいたものの、残寮生にはならなかった学生から有志を募り、残寮生の相談に乗るピア・サポートを行ってもらうことを提案してみたい。インタビュー調査の結果から、本研究の対象になった援助提供学生は、大変さやストレスを感じたときに人に話して発散したり、相談したりすることが多いことが明らかになっている。このことから、先に挙げた学生たちがピア・サポーター養成プログラムを受けて残寮生の相談に乗るならば、残寮生にとってよき相談相手になるのではないだろうか。

謝辞

本研究論文を作成するに当たり、本学大学院園田雅代教授には多大なご尽力を賜りました。心より感謝申し上げます。授業において調査を実施させていただいた諸先生方、そして調査に協力してくださった学生のみなさんも、本当にありがとうございました。

引用文献

- 足立由美・安住伸子（2007）『学生相談室を利用するきっかけについて-利用者データベースと学生生活実態調査結果からの分析-』 学生相談研究,28,113 頁-121 頁
- Frost,R.O.,Marten,P.A.,Lahart,C.,&rosenblate,R. 1990 The dimintions of perfectionism. Cognitive therapy and Research,14,pp449-468
- 早川亮馬（2011）『大学のピア・サポート実践』 春日井敏之・西山久子・森川澄男・栗原慎二・高野利雄 やってみよう！ピア・サポート 66 頁-73 頁
- 伊藤直樹（2011）「学生相談機関のガイダンスの効果に関する研究-学生相談機関のガイダンスと周知度・来談意思・学生相談機関イメージの関係-」 学生相談研究,31,252 頁-264 頁
- 川喜田二郎（1967）『発想法:創造性開発のために』 中公新書
- 木村真人・水野治久（2010）「学生相談の利用を勧める意識に関連する要因の検討」 心理臨床学研究,28,2,238 頁-243 頁
- マイナビ 2013 年 3 月 31 日 ストレスは充実度にも影響？仕事のやりがいとストレスの関係性
<https://gakumado.mynavi.jp/freshers/articles/10992> (2015 年 12 月 27 日閲覧)
- 森川澄男（2002）『ピア・サポートとは』 中野武房・日野宣千・森川澄男（編） 学校でのピア・サポートのすべて ほんの森出版 21 頁-35 頁
- 中出佳操（2002）『大学でのピア・サポート活動』 中野武房・日野宣千・森川澄男（編） 学校でのピア・サポートのすべて ほんの森出版 108 頁-126 頁
- 永井智（2013）「援助要請スタイル尺度の作成 ?縦断調査による実際の援助要請行動との関連から-」 教育心理学研究,61,44 頁-55 頁
- 中村陽吉・高木修（1987）『「他者を助ける行動」の心理学』 光生館
- 中野敏子（2005）『ストレス・マネジメント入門』 金剛出版
- 中野武房・森川澄男・高野利雄・栗原慎二・菱田準子・春日井敏之（2008）『ピア・サポート実践ガイドブック』 ほんの森出版
- 大谷保和（2010）『自己に向けられた完全主義の心理学』 風間書房
- 桜井茂夫・大谷佳子（1997）「“自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係」 心理学研究,68,3,179 頁-186 頁
- セリエ,H. 杉靖三郎・田多井吉之助・藤井尚治・竹宮隆（訳） 1988 『現代社会とストレス』 法政大学出版局（Selye,H. 1956/1976 THE STRESS OF LIFE,revensed edition New York:McGraw-Hill）
- 嶋信宏（1992）『ストレスとコーピング』 氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕（共編）心理臨床大辞典 培風館 154 頁-156 頁
- 園田雅代・無藤清子（2011）『臨床心理学とは何だろうか』 新曜社
- 鈴木伸一・嶋田洋徳・三浦正江・片柳弘司・右馬埜力也・坂野雄二（1997）『新しい心理的ストレス反応尺度（SRS-18）の開発と信頼性・妥当性の検討』 行動医学研究 4,1, 22 頁-29 頁
- 田村修一・石隈利紀（2002）「中学校教師の被援助志向性と自尊感情の関連」 教育心理学研究,50,291 頁-300 頁
- 鶴田和美（2001）『学生のための心理相談』 培風館
- 與久田巖・太田仁・高木修（2011）「女子大学生の援助要請行動の領域、対象、頻度と大学生活不安および社会的スキルとの関連」 関西大学社会学部紀要,42,2,105 頁-116 頁
- 吉武久美子（2012）「学生相談室利用促進のための取り組みとその効果についての実証的検討」 学生相談研究,32,231 頁-240 頁

ゲーテの靈魂概念 —オルフェウス教の影響を中心に—

Goethe's Concept of the Soul – with Focus on the Influence of Orphism

文学研究科人文学専攻博士後期課程在学

ツグラッゲン・エヴェリン

Evelyn Zraggen

目次

はじめに

序 章 ゲーテのオルフェウス教についての記述・発言

第 1 章 ゲーテが探求したオルフェウス教などについて

第 2 章 ゲーテの「靈魂の概念 (Seelenbegriff)」

第 1 節 ゲーテの「モナド (Monade)」

第 2 節 ゲーテの「デーモン (Dämon)」と「中核 (Kern)」

第 3 節 ゲーテが見る「デーモン」・「中核」・「モナド」・「エンテレヒー (Entelechie)」・「靈魂 (Seele)」との関係性

第 3 章 「エンテレヒー的モナド (entelechische Monade)」・「太陽 (Sonne)」・「精神 (Geist)」

おわりに

引用文献及び参考文献

はじめに

ドイツでは 1780 年に輪廻思想について論争が起きた。そのきっかけと見られるのはゴットホルト・エフライム・レッシング (Gotthold Ephraim Lessing, 1729-1781) の著作『人類の教育』 (*Erziehung des Menschengeschlechts*, 1780) である。ゲーテ (Johann Wolfgang Goethe, 1749-1832) の義兄弟であるヨハン・ゲオルグ・シュロッサー (Johann Georg Schlosser, 1739-1799) は 1781 年と 1782 年に『輪廻に関する二つの対話』 (*Über die Seelenwanderung: Zwei Gespräche* 1781/82) を執筆し、ヘルダー (Johann Gottfried Herder, 1744-1803) はシュロッサーが 1781 年に書いた第 1 対話に対して同じ年に『輪廻に関する三つの対話』 (*Über die Seelenwanderung. Drei Gespräche*, 1781) を書いた。ゲーテ自身はこの輪廻に対する論争に直接参加しなかったが、ゲーテは既に若いころから

あらゆる作品を通して輪廻概念を探求し、輪廻について発言している。一生涯に輪廻への確信が変わらず、年を経ると共に様々な表現を使い、自身の生命観と輪廻観を表現しようとしている¹。ハンス・ヨアヒム・シム (Hans Joachim Simm) は『ゲーテと宗教』 (*Goethe und die Religion*) という著作の中で、ゲーテが常に自身の世界観と宗教観についての考察を自身の作品の中で表現しようとしていたと述べている²。ゲーテの考察の中に、靈魂不滅と生命の永遠についての記述があるので、本稿ではこの問題について論じる。

グロリア・コロomboは「ゲーテと輪廻」 (*Goethe und die Seelenwanderung*, 2013) という随筆の中で、ゲーテの『詩と真実』³の第8章の中の引用文に基づいて、ゲーテの輪廻観に影響を与えた作品をいくつか紹介している。それはプロティノスの『エンネアデス』、ポルピュリオスの『妖精の洞窟』、プルタルコス『モラリア』という新プラトン主義の作品、またジョルダノ・ブルーノなどの伝統的でヘルメス主義の作品、そして『ルリアのカバラ』とヒンドゥー教の伝統に基づいたインドの『バガヴァッド・ギーター』である。コロomboはさらにゲーテのいくつかの作品を輪廻の視点から解釈している⁴。

しかし現在、ゲーテの輪廻観についての研究やゲーテ作品の輪廻を基にした解釈はまだ十分にされていない状況があるといえる。ゲーテの輪廻観についての理解を深めるためには、ゲーテの靈魂概念を明らかにする必要がある。なぜなら輪廻は靈魂の輪廻だからである。本稿では、まずオルフェウス教の影響を中心にゲーテの靈魂概念について論じることにした。そして次に、ゲーテ自身の靈魂概念や輪廻概念と関連している重要な用語、すなわち「デーモン (Dämon)」・「モナド (Monade)」・「エンテレヒー (Entelechie)」・「靈魂 (Seele)」・「中核 (Kern)」・「エンテレヒー的モナド (entelechische Monade)」・「太陽 (Sonne)」・「精神 (Geist)」について論じていきたい。

本稿では、既に翻訳がある引用文はそのまま引用し、翻訳がない引用文の場合には筆者が訳し、必要に応じてドイツ語の原文も載せた。

序章 ゲーテのオルフェウス教についての記述・発言

ゲーテは彼の人生において主として二つの時期にオルフェウス教を探求したが、その第2期の方が集中的で、実りがあった。第1期は1774/75年であり、第2期は「始原の言葉・オルフェウス⁵の教え」 (*Urworte Orphisch*, 1820)を執筆した1817年であった。ヘルダーの紹介で、ゲーテは若い時に

¹ 参照 ツグラッゲン・エヴェリン「ゲーテの輪廻概念と靈魂不滅思想 (モナド、エンテレヒー) について——資料を中心に」 (『創価大学人文論集』第28号、2016年)。

² 参照 Simm (2000: 12)

³ ゲーテ (1980) 『ゲーテ全集 (9)』 「詩と真実」 311 ページ

⁴ 参照 Colombo, Gloria (2013): *Goethe und die Seelenwanderung*. In: *Goethe-Jahrbuch 2012*, Bd. 129, S. 39-41.

⁵ 筆者は「オルペウス」を「オルフェウス」に書き換えた。

オルフェウス賛歌の影響を受けた⁶。1774年6月8日にゲーテはオルフェウス教の教祖であるオルフェウス（Ὀρφεύς, Orpheus）が出てくるヘルダーの作品『人類最古の記録』（*Aelteste Urkunde des Menschengeschlechts*, 1774）について次のように述べている。

彼（オルフェウス）は彼の感情の深みへと降り、内面からすべての単純な自然の高い神聖な力を起こし、この力を今、うず暗がりの中で、幕電で、あちらこちらで朝やさしく微笑んでいるオルフェウスの歌へと導き、上昇することから広い世界へ導いている。あらかじめ最近の学者たち、神をすてた人々（Detheist）や無神論者、文献学者や原典編纂者や東洋学者という邪悪を火や硫黄や満ち潮で根絶してから。⁷

Er ist in die Tiefen seiner Empfindungen hinabgestiegen, hat drinne all die hohe heilige Krafft der simpeln Natur aufgewühlt und führt sie nun in dämmerndem, wetterleuchtendem hier und da morgendfreundlichlächelndem, Orphischem Gesang von Aufgang herauf über die Weite Welt, nachdem er vorher die Lasterbrut der neuern Geister, De – und Atheisten, Philologen, Textverbesserer, Orientalisten, mit Feuer und Schwefel und Fluthsturm ausgetilget.⁸

さらに1775年4月1日のヘルダー宛の手紙の中でもゲーテは、クリストフ・マイネルの書籍『最古の民族、特にエジプト人の宗教史についての試み』（*Versuch über die Religionsgeschichte der ältesten Völker, besonders der Aegypter*, 1775）に出てくるオルフェウスの名を取り上げている⁹。『詩と真実』の中でゲーテは古代作品との決定的な出会いについて次のように述べている。

古代のひとびとと学派において私にもっとも気に入ったのは、詩と宗教と哲学が完全に一つにとけあっているということであった。そして私にはヨブ記、ソロモンの雅歌や箴言、およびオルフェウスやヘシオドスの歌は、私のあの最初の意見にたいして適切な証明をあたえてくれるように思えたので、私はいっそう熱心に私の意見を主張した。¹⁰

当時の古典学におけるギリシャ神話と文学についての議論を通して、ゲーテは1817年に改めて古代ギリシャ神話とオルフェウス教の文学を探求することになった。まずは『ホメーロスとヘシオドスについての手紙、特に神統記について』（*Briefe über Homer und Hesiodus, vorzüglich über die*

⁶ 参照 Trevelyan (1981: 62 ff., 113ff.)

⁷ In einem Brief an Gottlob Friedrich Ernst Schönborn, in: FA 1, 375-376 筆者訳

⁸ In einem Brief an Gottlob Friedrich Ernst Schönborn, in: FA 1, 375-376

⁹ 参照 FA 1, 444 & 947

¹⁰ 『ゲーテ全集9』「詩と真実」（潮出版社、2003年）、196ページ

Theogonie, Heidelberg 1818) という作品を読んだが、その中ではゴットフリート・ヘルマン (Gottfried Hermann, 1772-1848) とフリドリッヒ・クロイツェル (Friedrich Creuzer, 1771-1858) が最古のギリシャ神話について意見を交換している。ゲーテは次にフリードリッヒ・ゴットリーブ・ウェルケル (Friedrich Gottlieb Welcker, 1784-1868) によって出版され、解釈されたゲオルグ・ゾエガ (Georg Zoega, 1755-1809) の『論文集』 (Abhandlungen, 1817) を読んだ¹¹。この読書によってゲーテは1817年10月8日に5つの詩句からなる「始原の言葉・オルフェウスの教え」を記した。

その後、1820年に「始原の言葉・オルフェウスの教え」が『形態学誌 I 2』 (*Zur Morphologie I 2*) という冊子の中で出版された。同じ年の5月2日から6月22日までに彼は自己のコメントを付した¹²。「始原の言葉・オルフェウスの教え」が「人間のメタモルフォーゼ (変容) (Metamorphose des Menschen)」として名づけられたこともある¹³。

クロイツェルとヘルマンの手紙を読むことで、ゲーテは「聖なる言葉 (Hieroi Logoi)」を知ることになり、このオルフェウス教文学の言葉をドイツ語で「始原の言葉 (Urworte)」と翻訳した。

また、ゾエガの『論文集』の中にマクロビウス (Macrobius) の『サトゥルナリア』 (*Saturnalien*) が引用されているが、『サトゥルナリア』の中ではエジプト人の教えが説明されており、この教えによれば人間の誕生の時に四人の神々が援助するのである。それは「ダイモン (ΔΑΙΜΩΝ: デーモン)」、「テュケー (ΤΥΧΗ: 偶然)」、「エロース (ΕΡΩΣ: 愛)」、「アナンケー (ΑΝΑΓΚΗ: 強制)」である。ゲーテはこれに基づいて「始原の言葉」を執筆し、さらに次のドイツ語の表現を書き加えた。

「ダイモン (デーモン)、Daimon (*Dämon, Individualität, Charakter*)」と「テュケー (偶然)、Tyche (*das Zufällige, Zufälliges*)」と「エロース (愛)、Eros (*Liebe, Leidenschaft*)」と「アナンケー (強制)、Ananke (*Nöthigung, Beschränkung, Pflicht*)」である¹⁴。その上に彼は「エルピス (ΕΛΠΙΣ: 希望)、Elpis (*Hoffnung*)¹⁵」という言葉を書き加えた。ゾエガが『論文集』の中で補訂をし「抑えがたい大胆に前進しようとする人間の心のことを私たちは別の言葉で希望と呼ぶ」¹⁶と述べ、これを人間の誕生の時にもう一つの働いている運命の力として捉えた。ゲーテはこのゾエガの補訂に基づき、「エルピス」を書き加えた¹⁷。

「始原の言葉・オルフェウスの教え」はオルフェウス教の要素だけでなく、様々な神話の要素から組み立てられている¹⁸。ゆえに「始原の言葉・オルフェウスの教え」はタイトルが示す如く、オルフ

¹¹ FA 20, 1350-51

¹² 参照 FA 20, 1349-50

¹³ 参照 Kloft (2001: 89)

¹⁴ 参照 FA I, 20, 1353 & G-Hb 1, 356

¹⁵ 参照 Wilpert (1998: 1102)

¹⁶ 筆者訳 „dem unbezähmten Erkühnen des menschlichen Geistes, das wir mit einem andern Ausdruck Hoffnung nennen“ Zoega (1817: 40)

¹⁷ 参照 G-Hb 1, 362

¹⁸ 参照 Dietze (1977: 11-37)

エウスのだけとはいえないだろう。

第1章 ゲーテが探求したオルフェウス教などについて

本章ではゲーテが読んだゾエガの『論文集』、およびヘルマンとクロイツェルの『ホメーロスとヘーシオドスについての手紙、特に神統記について』から、輪廻について述べられた個所を紹介する¹⁹。『ホメーロスとヘーシオドスについての手紙、特に神統記について』の中には次のような記述がある。

これは古いエジプトの祭司教義にある輪廻の形容である。このような教義が播種祭と密議のギリシャの祭司長によって倫理的に健全なものとして認められ、信条として受け止められたあと、いつの時にもかりそめにされなかったのみならず、常に本質的な内容に従い、常に絵（古代ギリシャの瓶が示すように）や教えや習慣や歌の中に生かされた。²⁰

So sind dies Modificationen von einem alten Aegyptischen Priesterdogma der Seelenwanderung. Nachdem dieses Dogma von den Griechischen Vorstehern der Saatfeste und Mysterien für sittlich heilsam erkannt und als Glaubensartikel aufgenommen worden war, so ward es auch zu keiner Zeit vernachlässigt, sondern immer und immer seinem wesentlichen Gehalt nach in Bildern (wie die altgriechischen Vasen zeigen) in Lehren, Gebräuchen und Liedern lebendig erhalten.²¹

この引用文では、「輪廻」はギリシャ人によって引き受けられたもともとエジプトの祭司教義であったと紹介されている。最近の研究、すなわちヘルムート・オブスト（Helmut Obst）の『輪廻』（*Reinkarnation*, 2009²²）という作品によれば、輪廻の思想がどのようにしてギリシャ人社会に入り込んだかという問いはなかなか解決することができない、という。オブストによるとエジプト社会において輪廻の教えが存在したかどうかは排除することもできないし、証明することもできない。そうではあるが、ギリシャ人の中で輪廻の概念が始めて現れたのはオルフェウス教の人々の場合であった。

オルフェウス教は密儀的な救済宗教であり、紀元前に6世紀にトラキアからギリシャおよび南イタリアで広がった。この宗教の教祖はギリシャ神話の詩人と預言者であるオルフェウスである。人間の霊魂は神的で不死のものとして見られ、生々流転している。このような霊魂は常に人間になったり、動物になったりしなければならない。霊魂を生々流転から解放することはオルフェウス教の目標であ

¹⁹ 参照 FA I, 20, 1351-52

²⁰ Hermann und Creuzer (1818: 108) 筆者訳

²¹ Hermann und Creuzer (1818: 108)

²² Obst (2009: 41ff.)

る²³。ゾエガの『論文集』においては、人間の輪廻と動物の輪廻について次のように論じられている。

ポルピュリオスはレオンティカ祭に神聖にされた人々はあらゆる動物の像に囲まれたので、一般的に黄道の動物への暗示として捉えたが、彼によると輪廻における人間の靈魂の運命を意味していたと述べている。この最終の説明（ポルピュリオス）は疑いなく新プラトン主義的で、昔の魔術師にとって未知の発想であった²⁴。

Porphyrius erzählt, dass wer in die Leontica eingeweiht wurde, sich mit mancherlei Thierfiguren umgab, was man insgemein für Anspielung auf die Thiere der Ekliptik hielt, was aber nach ihm die Schicksale der menschlichen Seele in den Seelenwanderungen bedeutete. Diese letzte Erklärung ist ohne Zweifel ein neuplatonischer, den alten Magiern unbekannter Einfall.²⁵

ゲーテは既に新プラトン主義派のポルピュリオス（Porphyrius, 234-304）の哲学を探求していた。ゲーテは1806年にポルピュリオスの『妖精の洞窟』をワイマールの図書館から数ヶ月借りている²⁶。ゾエガはポルピュリオスを通して「輪廻における人間の靈魂の運命」に言及している。ポルピュリオスの輪廻観は新プラトン主義的であり、昔の魔術師がまだ知らなかったことである。

オプストによれば、オルフェウス教の場合は人間の靈魂は常に人間あるいは動物として生まれ変わらなければならない。他方ポルピュリオスは、人間と動物の靈魂を区別し、人間の靈魂が動物に化身することを否定している²⁷。

ゾエガの『論文集』とヘルマンとクロイツェルの『ホメーロスとヘーシオドスについての手紙、特に神統記について』の論述が、ゲーテの靈魂概念と輪廻概念とどのように関係していることについてさらに詳しく調べる必要がある。

次章では、ゲーテの靈魂概念と関係している他の用語について論じる。

第2章 ゲーテの「靈魂の概念」

本章では、ゲーテの輪廻観を深く理解するために、彼が使用している「デーモン」・「中核」・「モ

²³ 参照 Obst (2009: 41ff.)

²⁴ Zoega (1817: 137-38) 筆者訳

²⁵ Zoega (1817: 137-38)

²⁶ von Keundel (1931: Nr. 454)

²⁷ 参照 Obst (2009: 41ff.)

ナド」・「エンテレヒー (Entelechie)」・「霊魂 (Seele)」という用語がどのように関係しているかということについて論じる。

第1節 ゲーテの「モノド」

ゲーテは1768/69年に重い病気にかかった時に様々な本を読む中、フリドリッヒ・クリストフ・エティンゲルス(Friedrich Christoph Oetingers, 1702-1783)の著作も読んで、ライプニッツのモノド論に注目している²⁸。

ゲーテは霊魂不滅²⁹と輪廻概念³⁰を描写するために「モノド」というライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716) の用語も使用している。1813年1月25日にヴィーラントの葬儀の日にはゲーテがファルクとの対話の中で「霊魂 (Seele)」と「モノド (Monade)」という概念を以下のように定義している。

私は全生物の最終的な根源構成要素の種々な階級や序列を仮定している。この根源構成要素は、いつてしまえば自然における全現象の出発点であって、この要素からすべてのものの霊化がはじまるので、これを私は霊魂 (*Seelen*)³¹とよびたい。あるいはむしろモノド³² (モナーデ) (*Monaden*)³³ともよぶことができよう——私たちはこのライプニッツの用語を手放さないようにしましょう。³⁴

同じ対話の中でゲーテは「私は、あなたが私をここにみているように、千度もここにいたことがあるにちがいないし、またこれからあと千度もここに帰ってきたいと望んでいる」³⁵と述べ、これは間断なき生々流転を意味している。この箇所ではゲーテは自身の数え切れない先在と、死後の存続を認めている。ゲーテにとっては「蟻のモノド、蟻の霊魂と同様、世界のモノド、世界の霊魂」³⁶が存在している。人間の霊魂が動物に入り込むことはゲーテは明確に述べていないが、ファルクとの対話の中でゲーテはヴィーラントの霊魂が将来に「世界のモノド (Weltmonade)³⁷」あるいは「星 (Stern)³⁸」として自分と出会えることについて論じている。したがってゲーテにとって、「霊魂」・

²⁸ 参照 Hilgers (2002: 205)

²⁹ 参照 Hilgers (2002: 205)

³⁰ Im Gespräch mit Falk über die Seelenwanderung (FA II, 7, 169 ff.)

³¹ FA II, 7, 171

³² 筆者はこの対話で使われる「モナーデ」という言葉を「モノド」に書き換えた。

³³ FA II, 7, 171

³⁴ ビーダーマン編 (1963) 『ゲーテ対話録 2』 207 ページ

³⁵ ビーダーマン編 (1963) 『ゲーテ対話録 2』 211 ページ

³⁶ ビーダーマン編 (1963) 『ゲーテ対話録 2』 207 ページ

³⁷ FA II, 7, 175

³⁸ FA II, 7, 175

「モナド」は同じであっても、その生まれ変わる形状は様々なのである。

第2節 ゲーテの「デーモン」と「中核」

ゲーテの輪廻概念を明らかにするために本節では「デーモン (Dämon)」の概念を解明する。ゲーテの靈魂概念は彼の「デーモン概念 (Dämon-Begriff)」とも比較することができる。ゲーテは『詩と真実』の中で「魔神的なもの (Dämonische)³⁹⁾」について次のように述べている。

あの魔神的なものは、あらゆる有形無形なものの中に現われうるばかりでなく、動物においてもきわめて顕著に表明されるものではあるが、とくに人間とはもっとも驚くべき関連をもち、道徳的世界秩序にたいして、それと対立するものではないにしても、それを縦に貫く一つの力を形成する。⁴⁰⁾

このような「魔神的なもの (Dämonische)」は人間にも動物にも体现することができる。「魔神的なもの (Dämonische)」は「デーモン (Dämon)」から由来している言葉であり、同じものを指している。ゲーテ自身が「始原の言葉・オルフェウスの教え」の中で「デーモン (Dämon)」と題する下記の第1句において行ったコメントの中でも輪廻概念が表れている。

お前がこの世に生を授けられたその日に、
太陽が遊星たちの挨拶を受けて立つと、
お前はすぐさま不断の成長をとげた、
出産時の法則に従って。
それがお前の運命 (さだめ) であり、お前は自己から逃れることはできないのだ。
すでに巫女や預言者もそう告げていた。
そして、時代 (とき) も権力 (ちから) も生きて発展する
刻印された形相を壊すことはできない。⁴¹⁾

Wie an dem Tag der Dich der Welt verliehen

Die Sonne stand zum Gruße der Planeten,

³⁹⁾ FA 14, 841

⁴⁰⁾ ゲーテ (2003) 『ゲーテ全集 10』 「詩と真実」 314 ページ

⁴¹⁾ ゲーテ (1980) 『ゲーテ全集 13』 67 ページ

Bist alsobald und fort und fort gediehen
Nach dem Gesetz wonach Du angetreten.
So muß Du seyn, Dir kannst Du nicht entfliehen,
So sagten schon Sybillen, so Propheten,
Und keine Zeit und keine Macht zerstückelt
Geprägte Form die lebend sich entwickelt.⁴²

第1句のゲーテ自身のコメントの中で「したがって、第1節は個性の不変性を繰り返しかえし確言しているのである。個は、たとえこのように決定されたにしても、ひとつの有限なものとして、たしかに破壊されることはありうるが、しかしその中核が厳として存在しているかぎり、幾世代を経ても粉碎されたり、寸断されたりすることはないのである⁴³」と述べている。筆者は、ゲーテがここで用いる「中核 (Kern)」という表現を「デーモン (Dämon)」と同じものと見なしたい。個性の中核が幾世代を経て存在し、発展し続けている「時代 (とき) も権力 (ちから) も」壊すことはできない。

「始原の言葉・オルフェウスの教え」の中で、「デーモン」とは「出生時にすぐ明確な形をとって現れる、人格の必然的な限定された個性⁴⁴」であるとされている。そして「ここからいまや、人間の将来の運命も出てくるものとされた」⁴⁵。この意味では人間の個性こそが人間を類まれな人間にする。このように人間の出生の時に将来の発展のための必要な種が持たせられる。言い換えれば、人間はこのように種の前世から持っていて、成長しながら思い出し、個性を発展させ続けるのである。「デーモン」は、個人的な宿命と内面的建設計画 (innerer Bauplan) である「神霊的なもの (Daimonion)」と類似している⁴⁶。

ゾエガの『論文集』で引用されたように、マクロビウスは、デーモンを太陽と精神の創始者と暖かさと同視している⁴⁷。ゲーテが使用している「中核」という言葉は、デーモンとも類比することができるし、霊魂とも例えることができる。

第3節 ゲーテが理解する「デーモン」・「中核」・「モナド」・「エンテレヒー」・「霊魂」と相互の関係性

「エンテレヒー」はもともとアリストテレスの概念であり、存在しているものに内在している能力と可能性を実現することを意味し、またゲーテはライプニッツが霊魂をモナドで描写するように、エ

⁴² FA 20, 492

⁴³ ゲーテ (1980) 『ゲーテ全集 13』 68 ページ

⁴⁴ ゲーテ (1980) 『ゲーテ全集 13』 67 ページ

⁴⁵ ゲーテ (1980) 『ゲーテ全集 13』 67-68 ページ

⁴⁶ 参照 Kloft (2001: 89)

⁴⁷ 参照 Zoega (1817: 39-40)

ンテレヒーを用いるようになる⁴⁸。クラウディア・ヒルゲルス (Klaudia Hilgers) は『エンテレヒー・モノド・メタモルフォーゼ (変身)』 (*Entelechie, Monade und Metamorphose*) という本の中でゲーテの「デーモン」が「モノド」の構造の原理と照応していると述べている。

また、デーモンは感応の原理のようにすべての個人の完成の目指しへ操縦している。その点においてデーモンの概念はエンテレヒーの概念と関連している。⁴⁹

Darüber hinaus steuert der Dämon im Sinne eines Wirkungsprinzips das auf Vervollkommnung hin orientierte Streben eines jeden Individuums. In dieser Hinsicht steht der Dämon-Begriff dem der Entelechie nahe.⁵⁰

ゲーテのデーモン概念は、彼のモノド概念とも、彼のエンテレヒー概念とも関連している。またアングス・ニコルス (Angus Nicholls) は、『ゲーテのデーモ的なものの概念』 (*Goethe's Concept of the Daemonic*, 2006) の中で、「始原の言葉・オルフェウスの教え」に書いてある「法則に従って」と「生きて発展する刻印された形相」というゲーテの表現では、ギリシャ・ローマの占星術の中にあるような神の予定に関連しているわけではなく、現世的アリストテレスのエンテレヒーとライブニッツのモノドに関連しているのであると述べている⁵¹。

さらにゲーテは1830年3月3日に行われたエッカーマンとの対話の中でモノドとエンテレヒーの概念について次のように述べている。

個性が決して譲歩しないこと、また人間が自分にふさわしくないものをはねつけることが（省略）そのようなものの存在している証拠になると思う。」（省略）「ライブニッツは（省略）こうした自立的な個性について同じような考えをもっていた。もっとも、われわれがエンテレヒーという言葉であらわしているものを、彼は単子（モノド）と名付けたがね。⁵²

第2章をまとめると、ゲーテは「デーモン」と「モノド」と「中核」と「エンテレヒー」という用語を用いて、自分なりに自身の靈魂概念さらに靈魂不滅の思想と輪廻概念を表現しているといえる。ゲーテはこれらの用語で、同じものを自分なりに叙述するために類似的に使用している。

例えば、1818年7月16日のスルピッツ・ボワッセレー (Sulpiz Boisserée, 1783-1854) 宛の手紙

⁴⁸ 参照 FA II, 12, 1231

⁴⁹ Hilgers (2002: 199) 筆者訳

⁵⁰ Hilgers (2002: 199)

⁵¹ 参照 Nicholls (2006: 241-242).

⁵² エッカーマン (2001) 『ゲーテとの対話 (中)』 174-175 ページ

の中でゲーテは「私のオルフィカ (meine Orphika) ⁵³」と呼ぶが、これはボワッセレーに送った自分の詩「始原の言葉・オルフェウスの教え」のことを意味している⁵⁴。ゲーテはオルフェウス教の思想を自分なりに解釈し、新しく作り直したともいえる。

第3章 「エンテレヒー的モノイド」・「太陽」・「精神」

1824年5月2日にゲーテとエッカーマンが沈んでいる太陽をみながら、生死観について話している。ゲーテは「古代人の言葉⁵⁵」である「沈みゆけど、日輪はつねにかわり⁵⁶」を引用してから次のように述べている。

「75歳にもなると」と彼は、たいへん朗かにかたりつづけた、「ときには、死について考えてみないわけにいかない。死を考えても、私は泰然自若としていられる。なぜなら、われわれの精神 (Geist ⁵⁷) は、絶対に滅びることのない存在であり、永遠から永遠にむかってたえず活動していくものだとかたく確信しているからだ。それは、太陽と似ており、太陽も、地上にいるわれわれの目には、沈んでいくように見えても、実は、けっして沈むことなく、いつも輝きつづけているのだからね。」⁵⁸

この箇所ではゲーテは霊魂不滅と輪廻を比喩的に叙述している。太陽は人間の霊魂と例えられている。ゲーテはここで「精神 (Geist) ⁵⁹」という言葉を使用しているが、「霊魂 (Seele)」と同じ意味で使っている。この比喩では、太陽が人間の霊魂である。それ相当に日の入りが死であり、日の出が霊魂の生まれ変わりあるいは肉体化である。太陽は沈んで見えなくなっても存在し続けている。すなわちゲーテは「地上にいるわれわれの目」には見えないが人間の霊魂が死後も存在し続けているということを主張している。次の人生の朝に霊魂が生まれ変わり、新しく肉体化しているが、それは同じ太陽が昇るように、同じ霊魂が生まれ変わるということである。このように、エッカーマンと対話したとき、ゲーテは日の入りを見ながら、太陽を人間の霊魂と例えた。さらにゲーテのデーモン概念との類似性を見ることができる。さきにも述べたように、ゾエガの『論文集』の中でマクロビウスの『サトルナリア』が引用され、デーモンが太陽と同一視されている⁶⁰。

ゲーテは1827年3月19日付ツェルター宛の手紙の中で「エンテレヒー的モノイド」という自分で作

⁵³ FA II, 8, 214

⁵⁴ FA II, 8, 592-93

⁵⁵ 参照 FA 12, 115

⁵⁶ エッカーマン (2001) 『ゲーテとの対話 (上)』145 ページ

⁵⁷ FA 12, 115

⁵⁸ エッカーマン (2001) 『ゲーテとの対話 (上)』145 ページ

⁵⁹ FA 12, 115

⁶⁰ 参照 Zoega (1817: 39-40)

った複合語を用いて、靈魂不滅と転生について次のように述べている。

先立つか後になるかはわかりませんが、世界靈に召されて上天に戻るまでは、活動を続けようではありませんか。その時がくれば、永遠に生きる神は、私たちがすでに自己の真価を示した活動に類する新しい活動を私たちに拒みはしないでしょう。もし父なる神がそのとき、私たちが地上ですすでに欲し、かつなしとげた正と善の追憶と余薫とを付与したまうならば、私たちはいよいよ迅速に世界機構の歯車にかみあうことになるに相違ありません。

エンテレヒ一的（完成にむかって努力する）⁶¹モノドは、休まない活動によってのみ自己を維持しなければなりません。この活動が第二の天性となるならば、エンテレヒ一的⁶²モノドは永遠に仕事に欠けることはありません。こんなわかりにくい言い方をしましたが悪しからず。しかし、理性では及ばず、しかも不条理を認めまいとすれば、人は昔からこうした領域にまぎれこんで、こうした言い方で考えを伝えようとしたものです。⁶³

「上天に戻る（in den Äther zurückkehren）⁶⁴」ということでゲーテは死のことを叙述し、来世の新しい「活動（Tätigkeit）⁶⁵」の可能性を希望している。さらに「追憶（Erinnerung）⁶⁶」という表現はゲーテが若い頃に研究していたプラトンの「アナムネーシス（ἀνάμνησις: 想起）」の概念⁶⁷と関連させることができる。したがってゲーテは来世にも前世のことを思い出せると考えている。

同じ手紙の中でゲーテは「エンテレヒ一的モノド」などの「こんなわかりにくい言い方⁶⁸」をしたことを謝っている。ゲーテは靈魂不滅と輪廻についての自分の考え方を他の人に伝えるために様々な表現を使用している。彼は言葉に表しがたいものを表現できるように常に努力している。さらに1829年9月1日にゲーテはエッカーマンとの対話の中で靈魂不滅と輪廻について次のように述べている。

私は、われわれの永生については、疑いをさしはさまない。自然は、エンテレヒーなくして活動できないからね。しかし、だからといって、われわれ誰もかれもが同じように不死というわけではないのだ。未来の自分が偉大なエンテレヒーとしてあらわれるためには、現在もまた偉大な（große⁶⁹）エンテレヒーでなければならない⁷⁰。

⁶¹ 筆者が「完成にむかって努力する」を「エンテレヒ一的」に書き換えた。

⁶² 筆者が「エンテレヒ一的」を書き加えた。

⁶³ ゲーテ（1981）『ゲーテ全集 15』231-232 ページ

⁶⁴ FA II, 10, 454-55

⁶⁵ FA II, 10, 454-55

⁶⁶ FA II, 10, 454-55

⁶⁷ 参照 FA 1, 737

⁶⁸ ゲーテ（1981）『ゲーテ全集 15』232 ページ

⁶⁹ große は和訳されていなかったため、筆者は「偉大な」という言葉を書き加えた（FA II, 12, 361）。

⁷⁰ エッカーマン（2001）『ゲーテとの対話（中）』137 ページ

言い換えれば、ゲーテは霊魂が常に生まれ変わると思っているので、来世に偉大なエンテレヒーとして生まれ変わるために、既に今世に偉大なエンテレヒーでもなければならぬと考えている。このエンテレヒーは霊魂と同一視することができる。

ゲーテは死の時の「霊魂」・「魂」・「精神」の偉大さによって、来世も偉大な「霊魂」・「魂」・「精神」として生まれ変わることができることを確信している。したがって、死後もエンテレヒーの偉大さは変わらず、来世に同じ偉大さであられる。すなわち、生きていた間にこそ「霊魂」の成長のために努力すべきである。

おわりに

本稿ではゲーテの人生と作品における霊魂不滅（あるいは生命の永遠）について論じた。ゲーテの輪廻観とゲーテの作品の輪廻を基にした解釈についての研究はまだ十分にされてない状況がある。そこで、ゲーテの輪廻概念を深く理解するために、ゲーテの霊魂概念を明らかにした。

ゲーテの霊魂概念についてオルフェウス教の影響を中心に論じた結果、彼が自身の霊魂概念と輪廻観を叙述するためにいくつかの哲学的用語と言葉を用いていることがわかった。すなわち「デーモン (Dämon)」・「モノド (Monade)」・「エンテレヒー (Entelechie)」・「霊魂 (Seele)」・「中核 (Kern)」・「エンテレヒー的モノド (entelechische Monade)」・「太陽 (Sonne)」・「精神 (Geist)」である。

霊魂はゲーテにとって「エンテレヒー的モノド」であり、すなわち常に完成にむかって努力しているものである。そして今世の努力によって人間の霊魂が偉大な霊魂に成長することができ、来世同じような偉大な霊魂として生まれ変わることができる。「常に完成にむかって努力する」—これはある意味でゲーテの哲学の核心ともいうべきものである。

ゲーテの霊魂概念と輪廻概念は緊密に関連し、彼の生命観と生命の永遠についての思想を理解するために不可欠なものだといえる。今後の研究課題としてはゲーテの作品を彼の霊魂概念と輪廻観を基に、さらに詳しく解釈する必要がある。

引用文献及び参考文献

(ドイツ語・英語文献)

Colombo, Gloria (2013): Goethe und die Seelenwanderung. In: *Goethe-Jahrbuch 2012*, Bd. 129, Wallstein Verlag, Göttingen, 2013, S. 39-47.

Dietze, Walter: *Urworte, nicht sonderlich orphisch*. — In: *Goethe-Jahrbuch*. Bd. 94. Weimar 1977.

Goethe Sämtliche Werke. Von Frankfurt nach Weimar. Hrsg. von Wilhelm Große. Bd. 1, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1997. (Zitiertitel: FA 1)

Goethe Sämtliche Werke. Das erste Weimarer Jahrzehnt. Hrsg. von Hartmund Reinhardt. Bd. 2. Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1997. (Zitiertitel: FA II, 2)

- Goethe Sämtliche Werke. Napoleonische Zeit.* Hrsg. von Rose Unterberger. Bd. 7. Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1994. (Zitiertitel: FA II, 7)
- Goethe Sämtliche Werke. Zwischen Weimar und Jena.* Hrsg. von Dorothea Schäfer-Weiss. Bd. 8. Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1999. (Zitiertitel: FA II, 8)
- FA II, 10,
- Goethe Sämtliche Werke. Johann Peter Eckermann Gespräche mit Goethe.* Hrsg. v. Christoph Michel, Bd. 12, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1999. (Zitiertitel: FA 12)
- Goethe Sämtliche Werke. Dichtung und Wahrheit.* Hrsg. von Dieter Borchmeyer et al. Bd. 14, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1986. (Zitiertitel: FA I, 14)
- Goethe, Johann Wolfgang: *Ästhetische Schriften 1816-1820. Über Kunst und Altertum I-II.* In: Sämtliche Werke. Bd. 20. Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag) 1999. (Zitiertitel: FA 20)
- Hermann, Gottfried und Creuzer, Friedrich: *Briefe über Homer und Hesiodus, vorzüglich über die Theogonie.* August Oswalds Universitätsbuchhandlung, Heidelberg, 1818.
- Hilgers, Klaudia: *Entelechie, Monade und Metamorphose: Formen der Vervollkommnung im Werk Goethes,* Wilhelm Fink Verlag, München, 2002.
- Kloft, Hans: *Metamorphose und Morphologie. Ovids Verwandlungen und Goethes Naturanschauung.* In: Abhandlungen der Braunschweigischen Wissenschaftlichen Gesellschaft. Bd. 64, J. Cramer Verlag, Braunschweig, S. 77-97.
- Nicholls, Angus: *Goethe's Concept of the Daemonic. After the Ancients.* Camden House, New York, 2006.
- Obst, Helmut: *Reinkarnation. Weltgeschichte einer Idee.* Verlag C.H. Beck, München, 2009.
- Simm, Hans-Joachim: *Goethe und die Religion.* Insel Verlag, Frankfurt am Main, 2000.
- Thorwart, Wolfgang: *Heinrich von Kleists Kritik der gesellschaftlichen Ordnungsprinzipien. Zu H. v. Kleists Leben und Werk unter besonderer Berücksichtigung der theologisch-rationalistischen Jugendschriften,* Königshausen & Neumann, Würzburg, 2004.
- Trevelyan, Humphrey: *Goethe and the Greeks,* Cambridge (Cambridge University Press) 1981.
- von Keundel, Elise: *Goethe als Benutzer der Weimarer Bibliothek.* Weimar 1931, Nr. 454.
- von Wilpert, Gero, *Urworte. Orphisch,* in: *Goethe-Lexikon,* Kröner-Verlag, Stuttgart, 1998.
- Zoega, Georg: *Ab handlungen.* Hrsg. von Friedrich Gottlieb Welcker. Dieterichschen Buchhandlung, Göttingen, 1817.

(日本語文献)

- ビーダーマン編 (1963) 『ゲーテ対話録2』 菊池栄一訳 白水社
- エッカーマン (2001) 『ゲーテとの対話(上)』 山下肇訳 岩波書店
- エッカーマン (2001) 『ゲーテとの対話(中)』 山下肇訳 岩波書店
- ゲーテ (2003) 『ゲーテ全集9』 「詩と真実」 山崎章甫・河原忠彦訳 潮出版社
- ゲーテ (2003) 『ゲーテ全集10』 「詩と真実」 河原忠彦・山崎章甫訳 潮出版社
- ゲーテ (1980) 『ゲーテ全集13』 小岸昭訳 潮出版社
- ゲーテ (1981) 『ゲーテ全集15』 「書簡」 小栗 浩訳 潮出版社
- ツグラッゲン・エヴェリン「ゲーテの輪廻概念と霊魂不滅思想(モナド、エンテレヒー)について——資料を中心に」(『創価大学人文論集』第28号、2016年)

ほめが失敗する要因とほめストラテジーについて

Reasons for Miscommunication with Japanese Praise and Effective Praising Strategies

文学研究科国際言語教育専攻修士課程修了

市川 真未

Mami Ichikawa

はじめに

本研究では「ほめ」が失敗する根本的な要因を山岡(2008)の発話機能論や Brown and Levinson(1987)(以下、B&L)のポライトネスストラテジー¹の観点から客観的に分析し²、有効な「ほめストラテジー」を提示することを目的とする。

I. 問題の所在と研究の目的

我々は日常、人間関係を良好に保つために様々な言語行動をとっているが、中でも相手の気持ちを良くすることのできる「ほめ」は対人コミュニケーション上、重要な役割を担っていると言える。

「ほめ」は「相手の気持ちを良くさせる」という性質上、会話のきっかけ作りや相手との連帯感・関係性の強化、依頼の前置きなど、ポジティブな機能があると考えられている。しかしその一方で、場合によっては「ほめ」が皮肉やお世辞、羨望となることも少なくない。さらに、返答の際には「ほめ」を受け入れるか、否定するかを選択を強いることから、「相手に好かれない」という受け手の欲求を脅かす一面も兼ね備えている。つまり「ほめ」は、使用する状況や対象によっては相手を不快にさせないような配慮が必要になる機能であると言える。

しかしながら、その機能の複雑さとは裏腹に、学校や家庭でほめ方を教わる機会は少ない。受け取り方には個人差がある、定式化されたほめ表現がないなどの理由から日本語教育の現場でも「ほめ」を教室内で取り上げず、学習者の自然習得にまかせる傾向が目立つ。実際に筆者が日本語学習者に対して「人をほめるときに何か気をつけていることはありますか」と質問したところ、「先生や目上の人には『かっこいい』、『かわいい』、『上手な』などの言葉を用いてはいけない」といったような語彙レベルの指導にとどまっており、授業内で具体的なほめ方を教わったこともないとのことだった。

¹ 詳細は第3章で述べる。

² 「根本的な要因」としたのは、「ほめ」が失敗する要因には表情や目線、声のトーンなどのパラ言語的な要素が関係していることが多く、詳細な分析をすると終わりが無いと考えたためである。

「ほめ」をプラスに機能させるためには、まず「ほめ」が失敗する要因を把握することが重要ではないだろうか。そのうえで、適した「ほめ」を用いることができれば、「ほめ」によって生じるディスコミュニケーションが回避できるのではないかと考えた。

II. 先行研究

本研究の目的に関連する研究を「ほめの機能」、「ほめがフェイス脅かし行為（face-threatening act: 以下、FTA³）になる要因」、「FTA 緩和ストラテジーとしてのほめ」の3つの視点から整理し、最後にそれぞれの問題点を指摘する。

1. 「ほめ」の機能について

熊取谷(1989)は「ほめ」を送り手主導型と受け手主導型に分類し、送り手主導型には、評価対象を認定し、聞き手の注意を評価対象に向けるという機能があり、受け手主導型には受け手が自ら評価対象物を談話に導入することにより、送り手がこれに言及することを期待する方策としての機能があると述べている。

<p>【送り手主導型の例】</p> <p>A: もう宿題やった？</p> <p>B: うん、だいたい。</p> <p>A: <u>すげー</u>な、Bは。いつもやっとうけーのー。</p>	<p>【受け手主導型の例】</p> <p>A: ねえ、これ。</p> <p>B: <u>すてき</u>っ。</p> <p>A: 貰ったの。</p>
---	---

(熊取谷(1989, P.105)から抜粋 下線は筆者による)

さらに「ほめ」には「連帯感を強める」、「後続する反論や批評などを和らげる」、「会話を開始する」、「皮肉」、「後続する依頼を成功させる、または後続する依頼を成功させるための『おだて』」などの機能もあるとしている。

小玉(1996)は対談インタビューにおける「ほめ」の機能について述べているものであるが、「ほめ」をトピックレベルから捉えると以下のような機能が見えてくるとしている。

³ Brown and Levinson(1987)の概念。詳細は次章で述べる。

新しいトピックの開始時にほめを使用したときの効果

1. 相手にいい印象を与えながら新しい話題を持ち出すきっかけを作り出す
2. FTA となりがちな質問を中和
3. 質問をせず、ホストが自分の知っているゲストの長所や肯定的な面をトピックのはじめに話すだけで、ゲストがそのことに関する話を始めてくれる場合がある

トピックの終結時にほめを使用したときの効果

1. ホストは聞き手として積極的に会話に従事していたことをアピールできる
2. インタビュー自体の FTA 補償のストラテジーになる
3. 「よき理解者である」とゲストに印象づけ、心地よい余韻を残しつつ次の話題に移りやすい環境を整える

インタビュー全体としての「ほめ」の機能には「会話の開始をスムーズにし、良好な雰囲気を作る」「二者間の心的な距離を縮め、連帯感を作り出す」「相手に質問をするというインタビュー全体の FTA を軽減する」「ゲストにターンを渡し、会話へ巻き込もうとする」などがあるとした。

2. 「ほめ」が FTA になる要因について

「ほめ」が FTA になる要因として、山路(2006)は肯定的評価を含む発話が攻撃的に作用している談話例を対象にして、「聞き手の優越性や自賛意識にあからさまに言及すること」と「聞き手が評価の対象とされたくないと思っているトピックに言及する」ことを挙げた。

また、古川(2010)は「ほめ」が相手の地位を下落させる皮肉や嫌味になるのには、①ほめの対象の不一致、②疎の関係においてのほめの基準の不一致(社会的基準/専門的基準)、③パラ言語表現による解釈とまとめている。さらに古川は「ほめ」は、相手に差し追った情報を伝達するものではないが、もし何かしら情報を伝達しているとしたら、それは「ほめ手の受け手への共感や好意」であると言及した。また、ほめ手の意図が皮肉や嫌味であった場合でも受け手には「ほめ」として受け取られ、結果的に気持ちよくさせる(相手の地位向上)ことや、逆に表現形式が肯定的であるのに関わらず「苦情」などに解釈される場合も多いとも述べている。

3. FTA 緩和ストラテジーとしての「ほめ」について

大野(2007)は表現主体が年齢、役割、立場などの点で相手よりも目上である場合には、評価語を使用していなくても「ほめ」として受け取られやすいが、そうでない場合には「ほめ」に近い性質を有している事実指摘、羨望、感情、感謝、ねぎらい、祝賀などの「言語行動 X」の表現を用いて、上下

関係の想起によって生じる FTA を回避することができる」と論じている。

4. 先行研究のまとめと問題点

「ほめ」のポジティブな機能については先行研究でほぼ明らかにされてきていると考えられるが、それらは「ほめ」の「受け手の気分を良くさせる」という性質から生み出されたものであるとまとめることができるであろう。しかしながら、先行研究では扱っている状況が限定的であり、どのような状況でどのような「ほめ」を行えば最も効果的に「ほめ」のポジティブな側面が機能するのかが解明されていない。

「ほめ」が FTA になる要因に関する研究は、その多くが集められたデータから見られた要因を述べているだけであり、網羅的、客観的とは言い難い。山路(2006)では「ほめ」が攻撃的に作用する要因の一つに「優越性や自賛意識にあからさまに言及したこと」があるとしていたが、ほめられた側が自身の能力に対して自信がないことが明確である状況であれば、どのような発話もマイナスに作用すると考えられる。

それぞれの観点からほめに関する先行研究を概観したが、それぞれ不足している部分や一部の状況にのみ当てはまる理論であったため、より多くの「ほめ」の事例をカバーできる客観的かつ実用的な枠組みを、ほめ手側と受け手側の両側から捉えた上で提示していくことが必要であると考えられる。

Ⅲ. 本研究での立場

先行研究での改善点を踏まえ、本研究では「ほめ」を形式面からだけではなく、語用論的な観点から捉えていき、「ほめ」の実態を探っていきたい。そこで本章ではまず、本研究で援用する 2 つの理論を概観し、本研究が捉える「ほめ」の範囲を明確にする。また、先行研究でのほめの定義を再検討した上で、「ほめになる条件」の枠組も提示する。

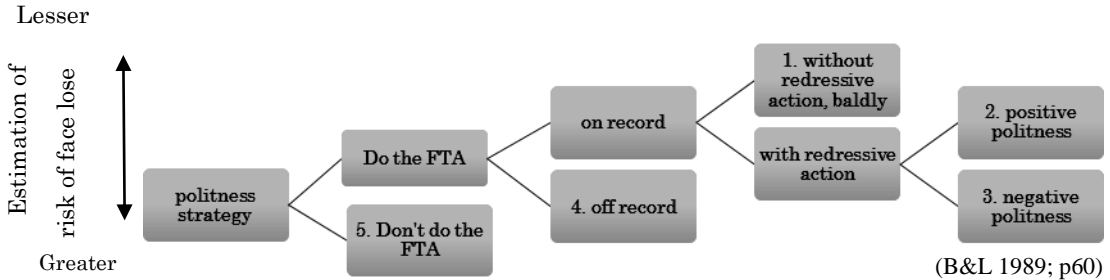
1. 援用する理論

本研究では B&L(1987)のポライトネスストラテジーと山岡(2008)の発話機能論の理論を援用し、「ほめ」が失敗する要因と語用論的な観点から捉えた、実用的な「ほめストラテジー」を提示していく。

B&L(1987)はフェイスやそれに対する FTA との関連性からポライトネスを理論付け、より普遍的なものにした。フェイスとは人間なら誰もが持っているものであり、これには「他者に理解されたい、認められたい、好かれたい、賞賛されたい」というプラス方向の欲求である「ポジティブフェイス」と「他者に邪魔されたくない、踏み込まれたくない」というマイナス方向の欲求である「ネガティブフェイス」という 2 つの側面があったとした。コミュニケーションをとる上で FTA になる行為は多いが、それらを避けて人とかかわっていくことはできない。そのため、人は FTA にならないように

ほめが失敗する要因とほめストラテジーについて

配慮した言語行動をとるのである。これを B&L は「ポライトネス」と呼び、状況に合わせ適切なポライトネスを選択する際の選択基準の体系を「ポライトネスストラテジー」と名付け、以下のような図にまとめている。



ポライトネスストラテジーには、1. without redressive action, baldly(あからさまに言う)、2. positive politeness (ポジティブフェイスに配慮した補償行為を行う)、3. negative politeness(ネガティブフェイスに配慮した補償行為を行う)、4. off record(ほのめかす)、5. Don't FTA (FTA を行わない) という 5 つの選択肢があり、FTA が大きい場合には数字の大きいストラテジーが選ばれ、小さいものは FTA の度合いが小さいものに用いられるとしている。また、FTA は相手との社会的距離、力関係、その行為が文化において課す負担の大きさからその度合いの強さが変わるとされている。

一方、山岡(2008) は「会話において話者と聴者はその役割を交替しながら、一連の会話を形成する」としたハリデーの発話機能と、語用論的な発話状況を「準備条件」として捉えたサールの発話行為の両理論の利点を組み合わせたものを「発話機能論」として提示している。その中で特に本研究と深く関係しているのは、「一つの目的を共有した緊密な一続きの会話の単位を『連』として捉える」という概念である。これは聴者から何かを得ようとする《要求》と話者が聴者に何かを与えようとする《付与》が複数の会話参加者による交換としての発話に必須であるという、ハリデーの理論を発展させたものであるが、山岡は会話に参加する二者が対等であり、会話の目的と語用論的条件を両者が共有するという考え方を新たに取り入れている。たとえば、《命令》と《服従》は「参加者 B がある行為を行うこと」を目的としており、発話という観点から見ると、この目的を参加者 A、B の両者が実現させようとしている。しかしながら語用論的条件が共有されておらず、参加者 B が《拒否》することもあり、その時はその《拒否》から新たな「連」が開始され、その《拒否》をした参加者 B は新たに《容認》を期待することになるとしている。「連」は常に《要求》から始まるわけでないとしつつ、「連」の基本型を《要求》《付与》《承認》という三発話にしている。

これらの理論を援用し、「ほめ」が失敗する根本的な要因と有効な「ほめストラテジー」を提示していく。

2. 「ほめ」条件

「ほめ」が失敗する要因を探るために、まず「ほめ」が「成功する」、「失敗する」とはどのようなことかを明確にしておく必要があるだろう。本研究では、「ほめ」が「ほめ」になるための3つの条件を以下のように定める。

第1条件：ほめ手がほめようと意図している。

第2条件：受け手や受け手の所有物・家族に対して肯定的な価値があると明示的／暗示的⁴に伝える

第3条件：ほめ手の発話を受け手が「肯定的な価値を付加された」として受け取る

第1条件はほめ手の意図の段階、第2条件は言語化の段階、第3条件は受け手側の解釈の段階である。第2条件は表現の仕方でも明示的と暗示的に分類されるとする。暗示的表現は、価値があることを受け手に伝えられる、「ほめに類似した機能」が用いられると考える。先行研究では、第3条件は考慮していないことが多かったが、本研究では第3条件を最も重要な条件として捉える。つまり、第1条件が満たされていない状態でも第2条件、第3条件が満たされていれば「ほめ」としてみなすことになる。これを「結果的ほめ」と呼ぶことにする。第1条件から第3条件まで満たされたものを「本来的ほめ」という標準的な「ほめ」として捉えつつ、第3条件を「ほめ」になるための必須条件とする。

第3条件が満たされているものはすべて受け手が「ほめ」として受け取っているということになるため、他の条件を満たしていなくても「ほめ成功」になると考える。第1条件が満たされているのにも関わらず、第3条件が満たされない場合を「ほめ失敗」とし、「ほめ成功」と同様、本研究で中心的に扱っていくカテゴリーとする。

もし、第1条件にほめ手の「受け手を非難、貶めるような意図」、つまり「嫌味や皮肉の意図」がある場合、それは「ほめようとする意図」が発話者にはないと考えられるため、「ほめ」と同質で扱うことはできない。たとえ受け手がその発話を「ほめ」として捉えていたとしても、話者の意図は「ほめ」と対極にある「嫌味や皮肉」であるため、そういった発話は「皮肉失敗」として別枠で捉え、本研究の対象からも外すことにした。さらに、「嫌味や皮肉」の意図を正確に受け取った場合は「皮肉成功」とし、これも本研究では扱わないことにした。最後に、第1条件から第3条件、すべてが満たされていないものは「他の機能」になることも確認しておく。これらのことを[表1]として以下にまとめる。

⁴ 「明示的ほめ」とは肯定的な意味を含む名詞、形容詞、副詞を使用し評価をしているもの。「暗示的ほめ」は具体的な事実への言及や変化への言及、自分の意思表明などを用いて間接的に相手に「ほめられた」と受け取らせるもの

ほめが失敗する要因とほめストラテジーについて

	ほめ						皮肉		他の機能
	○	○	×	×	○	○	— ⁵	—	×
第1条件	○	○	×	×	○	○	— ⁵	—	×
第2条件	明	暗	明	暗	明	暗	○	○	暗
第3条件	○	○	○	○	×	×	—	○	×
名称	本来的ほめ		結果的ほめ			ほめ失敗	皮肉成功	皮肉失敗	他の機能
	ほめ成功								

表1 「ほめ」になる条件

IV. 調査

本研究ではプレ調査①、②、③と本調査①、②、③の計6つの調査を行った。3つのプレ調査は「ほめ」が失敗する要因を絞るために必要な調査であったが、今回は紙面の関係上、概要のみとする。

1. 受け手が「ほめ」として受け取った発話を書き言葉コーパスから検索し、「ほめ」の対象と形式を収集する。(プレ調査①)
2. それぞれ集められた「対象」、「形式」に「ほめ手との関係性」を掛け合わせた条件を設定し、受け手の印象に関するインタビュー調査を行う。(プレ調査②)
3. インタビュー調査の結果から、「ほめ」が成功・失敗する要因に「受け手のほめ手への期待」と「受け手の対象への自信」が関係しているという仮説を立て、検証するためにプレアンケート調査を行う。(プレ調査③)

プレ調査での問題点を改善しつつ、本調査では受け手側とほめ手側の両側から「ほめ」を捉えることにした。本調査の手順は以下の通りである。①と②が「ほめが失敗する要因追及のための調査」、③~⑥が「有効なほめストラテジーの提示のための調査」である。

【調査手順】

- ① 8つのほめ対象×ほめ形式(明示・暗示)×ほめ手との関係性(専門性の上下)×ほめ手の受け手への期待の有無×ほめ手の対象への自信の有無を掛け合わせた状況でどのように受けとるか受け手側の印象を調査する。(本調査①)
- ② 全128の状況から「ほめ」が成功している確率と失敗している確率を算出し、「ほめ」が失敗する要因を統計学的な処理をした上で分析する。
- ③ 「ほめ」が特に失敗する状況を抽出し、それらの状況において、ほめ手としてどのようにほめているのかほめ手側のほめ方の調査をする。(本調査②)

⁵ 「相手を貶めよう」といったネガティブな感情が存在している

- ④ 調査結果から日本語母語話者が FTA になりやすい状況で使用するストラテジーの特徴を分析し、ほめ方の傾向性を把握する。
- ⑤ それらの特徴を発話機能の観点から捉えた上で4つの「ほめ型」を提示する。
- ⑥ 4つの「ほめ型」がどの状況で有効に機能するのか、受け手の印象を調査する。(本調査③)
- ⑦ これまでの調査で見られた「ほめストラテジー」をまとめ、B&L(1987)のポライトネスストラテジーの理論を援用した実用的な「ほめストラテジー」を提示する。

1. 「ほめ」が失敗する要因についての調査

まず、「ほめ」が失敗する要因を追求するため、2015年8月～11月の期間で、20代を中心とした日本語母語話者の男女60名にWebでのアンケートを実施した。

自信の有無×期待の有無×ほめ方(明示的・暗示的)×ほめ手と受け手の関係性(専門性や経験が自分よりも上か下か)という4つの軸から状況を設定し、8つの対象(①努力②作品③業績④性格⑤容姿・外見⑥家族⑦持ち物⑧所属)についての「ほめ」をどのように受けとるか調査した。全128の設問に17の選択肢から最大5つまで選べるようにした。⁶

【対象】性格
 【ほめてくれる人物】:あなたよりも上位(人生経豊富な先輩や性格が良いと評判の人など)
 【ほめ言葉】:「気が利く」、「優しい」、「聞き上手」など
 【期待】:あり(その人物にほめてもらえるだろうという期待がある)
 【自信】:あり(その努力に対して自分自身も自信、誇らしい気持ちがある。)

例電子機器の使い方がわからなそうな上司を手伝ってあげたら「気が利くね」と言われた。自分自身、よく気がつく性格だと思っている。また「この人もほめてくれるだろう」とも思っている。

- 純粹にうれしい
- 子供扱いされている気分
- 認められたと感じる、鼻高々になる
- まだまだです…もっと頑張らなければならぬと感じる
- うちやましがられていると感じる
- 何様のつもりだと思う、評価されたくない
- もっと褒めてほしい
- 何かを求めているのかと疑う
- 照れくさい、はずかしい
- 何とも思わない
- 自信がつか
- 悲しい気持ちになる
- 感謝の気持ちが出る
- 大げさだと思う、嘘っぽい
- ほめられるほどのことではないですが…と思う
- 良い意味か悪い意味か分からない、複雑
- こんなことでほめさせてしまって逆に申し訳ない

上と同じ状況で「ありがとう」や「助かったよ!」になると印象はどうなりますか。

例電子機器の使い方がわからなそうな上司を手伝ってあげたら「ありがとう」と言われた。自分自身、よく気がつく性格だと思っている。また「この人もほめてくれるだろう」とも思っている。

図1 本調査(アンケート)

⁶ プレ調査③のアンケートで設定した項目に対し、「選びたい選択肢がない」といった意見が上がったため、被験者への負担が多くなることが懸念されたが、データの質を向上させるためにもこのような形をとることにした。

(1) データの分析方法

今回のアンケートでは1人の調査対象者が複数の項目を選択しているため、単純に「うれしい」「悲しい」「複雑」などの明確な枠で区切れないという問題に直面した。そこで、具体的にどのような感情が生まれていることが「ほめ失敗」という状況なのか明確にするために、ほめ手が発話してから受け手が受け取り、返答するまでのプロセスから、それぞれの選択肢を分類していくことにした。このプロセスのことを「ほめプロセス」と呼ぶ。「ほめプロセス」は以下の3つの段階から成る。

ほめプロセス

第一段階：ほめ手の発話を認知し、判断する段階

第二段階：感情の決定をする段階

第三段階：相手や状況に合わせた返答をする段階

第一段階ではほめ手の発話を認知し、ほめ手との関係性や「ほめ」の度合い、受け手自身の対象への自信など、様々な条件を加味した上でほめ手の発話意図を探る段階である。第二段階は第一段階で判断したものを受け取り、感情表出する段階である。第三段階は相手や状況に合わせてどのような返答をすることが望ましいか判断し、返答をする段階である。第一段階と第二段階は人によって逆の順番になる可能性もあるが、ここでは便宜上この順序を踏むものとしておく。また、本研究では「ほめ」への返答段階で失敗したものは扱わないため、選択肢の分類も第一段階と第二段階に焦点を当てて行うことになることを述べておく。

「ほめ」が成功している状態というのは、第一段階と第二段階の両段階でポジティブな要因が存在している時であると言える。しかしながら、第一段階で複雑な感情であったとしても「うれしい」「認められた」など、第二段階で肯定的な感情が生まれたとすれば、結果的に「ほめ成功」になることもある。このような基準で、複数の選択肢を分類した。

(2) 調査結果

被験者が選択した選択肢を「ほめプロセス」に沿って分類し、「ほめ成功」、「ほめ失敗」、「判断不可」という3つに分類した。この段階ではほめの成功率を比較してほめが失敗する要因を探っていくことにした。

まず、「ほめ対象」「ほめ手との関係性」「受け手の期待」「受け手の自信」という4つの項目の中で最も「ほめ」の受け取り方に大きく影響を与えているものを探るべく、統計学のt検定⁷を施すことにした。その結果、ほめが成功・失敗する大きな要因は「受け手の自信の有無」の可能性が高いという

⁷ t検定というのは2つのグループが偶然誤差の範囲内にあるか、その確率を求めるものである。

ことが分かった。しかし、この検定で明らかにできるのは、2つの対立するグループ間の有意差だけであり、どの項目が大きな要因か断定はできない。そのため、すべての「ほめ」の成功率のデータから確認していくことにした。「ほめ」の成功率のデータをすべて見ていくと、すべての項目において、「自信なし」は「自信あり」より成功率が低くなっている。つまり、同じ状況下でも受け手に自信がない場合は「ほめ」が成功しにくくなるということが言える。また、「ほめ」の成功率が25パーセント以下の項目を抽出したところ、すべての項目において「自信なし」であった。

統計学的な観点からの処理と一つ一つのデータを見たときの傾向性から、「ほめ」の成功と失敗を分ける大きな要因は「自信の有無」であると結論付けることができた。

2. 「ほめストラテジー」の調査

前節では「ほめ」の成功率の低い項目から「ほめ」が失敗する要因を明確にした。次は「ほめ」の失敗率が高かったものと掛け合せて、「ほめが失敗しやすい状況」を抽出し、この、「特にほめが失敗しやすい状況」において日本語母語話者はどのようなほめ方で相手の気持ちを良くしようとするのか調査した。

調査対象者は20代から30代の男女60名でそれぞれの条件を絵とともに提示し、その状況に対してどのようにほめるか、記述してもらった。アンケートはより多くのデータを集めるため、紙のアンケートの他にWebアンケートも実施した。また、実際のコミュニケーションに近いデータを収集するために、「実際に会話をしているように」という指示を加え、気をつけた点があった場合には書き入れてもらうように指示した。

(1) 調査結果

まず、認められた「ほめ」の形式は、プレ調査①では「明示的ほめ」でほめるデータが多かったが、実際の対人コミュニケーションにおいては肯定的な評価語のみで終わらせることは少なく、評価語＋コメント(なぜその評価をしたかの理由や、自分のマイナスな状況との比較など)という形が圧倒的に多かった。

集められたデータを山岡(2008)の発話機能論の考え方を取り入れて新たな枠組みを構築した。以下にその4つの「ほめ型」を提示したい。⁸

4つのほめ型

付与型：ほめ手が受け手に肯定的な価値を付与する

要求型：ほめ手が受け手に情報や行為を要求する

提示型：ほめ手がほめ手自身の情報や感情を提示する

独話型：ほめ手が感情などを無意識に表出する

⁸ 「ほめストラテジー」の一部として提示する

【付与型】

付与型は文字通り、「肯定的な評価や情報を受け手に与えるほめ方」であり、本研究での「本質的ほめ」によく用いられる型である。聞き手メアテ性が強く、受け手に届くように発話されたものである。付与型は受け手に肯定的な価値があると伝えるほめ方であり、ほめ手の「ほめ意図」が明示的に伝わることから、「結果的ほめ」を期待して使用されることは少ないと考えられる。受け手がほめ手より下位であるという印象を与える危険性もあることが特徴として挙げられる。以下⁹のような例が付与型に分類される。

- (23) 「あなたは毎日頑張ってますよ。」
- (24) (料理が苦手な人に)「あなたはやればできる！」
- (25) (容姿の良い先輩に)「先輩かっこいいですね。」

付与型の特徴としては以下のようなことが挙げられる。

【付与型の特徴】

- ①ほめ手が肯定的な価値を付与する
- ②聞き手メアテ性が強い
- ③受け手に関することが命題になっている

【要求型】

要求型の「ほめ」は図 11 で{策動}に分類されていたものと、{宣言}の《譲渡要求》などが分類されるカテゴリーである。これは受け手に肯定的な評価は与えず、逆に相手からの《付与》を引き出す方法で、秘訣や理由を教えてほしいとほめ手が下手に出ることで受け手にその《付与》の権限があることを暗に伝え、ほめ手の気持ちを良くさせる方法である。実際には価値を<付与>しているが、形式上は<要求>の型をとり、「結果的ほめ」の誘起を意図している場合もある。以下のような例が要求型に分類される。

- (26) (受け手の勤務先に対して) OOさんの仕事の話、聞かせてほしいな。
- (27) (受け手の作った料理に対して)どうしたらこんなにおいしく作れるんすか？
- (28) (おしゃれな先輩に対して) 先輩のセンスがほしい(笑)

⁹ 注意書きがない例文は全て調査で得られたデータから抜粋している。

【要求型の特徴】

- ①受け手からの情報、行為を引き出す
- ②聞き手メアテ性が強い
- ③受け手に関することが命題になっている

ほめ手自身の情報の《主張》や他者の肯定的評価の《報告》、感情や願望の表出などがこの提示型に分類される。これは付与型のように評価や情報などを与え^るといった強さを持たず、間接的に受け手に肯定的な価値があることを伝えられるものである。付与型との違いとして「伝える命題の主語が受け手ではない」または、「聞き手メアテ性が弱い」といったことが挙げられる。例えば《主張》も「～さんは頑張っていると思うよ(頑張っているのは受け手)」は付与型に分類されるが、命題の主語をほめ手自身のことにして「私には絶対にできないことです(そう思っているのはほめ手)」としたものは提示型に分類する。また、「すごいね」は付与型になるが、「周りのみんながすごいって言ってたよ」といったような《報告》は聞き手への働きかけが低いため、提示型に分類される。以下の例がこのような基準で分類されたものである。

- (29) (友人の性格に対して) ○○さんがいてくれてとても助かっています。
- (30) (能力の高い先輩に対して) 先輩がうらやましいです!
- (31) (漫才師に対して) 客席みんな大爆笑やったで!(筆者の作例)

【提示型の特徴】

- ①価値があるということを間接的な方法で提示することにより、価値があることを受け手自身に認知させる
- ②聞き手メアテ性が弱い(強制力は少ない)
- ③受け手以外の人物が命題の主語になることが多い

【独話型】

独話型には、無意識的な感嘆表現などを分類する。つまり、無意識的に発した感情表現、肯定評価語などがここに含まれる。この型が他の型と大きく異なるのは聞き手メアテ性が限りなく低い点である。独話型の発話はほめ受け手から《要求》も《付与》も期待しない、いわば対人コミュニケーション上、何の影響力も持たないようにみえる発話である。山岡(2010)でサールの発話内行為では独話は考慮されていたが、発話機能論は会話を扱うため、独話は対象とされていなかった。しかし、この独話型は完全なる独話ではないため、発話機能論の観点から扱えられるものとする。つまり、独話と見

ほめが失敗する要因とほめストラテジーについて

せかけて「ほめ」を間接的にを行うためのストラテジーであり、聞き手への働きかけ性は少なからず存在するのである。このような考えから分類されたのが、例である。

(32) (先輩の家族に対して) 暖かい家庭・・・、うらやましいなあ・・・。

(33) (勉強を頑張っている先輩に対して) 毎日 6 時間勉強してるんですか？すげー。

(34) (1 日 6 時間勉強をする目上の人に対して) まじばねえ。

【独話型の特徴】

- ①感情や肯定的評価を滲みだすように表出することにより、間接的に受け手に価値があることを受け手自身に認知させる
- ②聞き手メアテ性が低い
- ③受け手に関することが命題の主語になる

これまでの調査で得られたほめの例と発話機能論の観点から分類したものを、大きく 4 つの型に分類した。それぞれの型にどのような使用制限があるか、どのような状況でなら有効的に用いることができるのかといったことは日本語母語話者の使用実態と捉え方の調査なしには決定できない。このようなことから、これらのそれぞれのほめ型にはどのような側面があるのかを把握するために、アンケート調査を行うことにした。

3. 有効なほめストラテジー選定調査

前節で提示したほめストラテジーの大枠が、有効なストラテジーとして実用価値があるのか、また、それぞれにどのような特徴があるのか判断するため、2015 年 12 月に 10 代から 30 代の男女 25 名(男性 8 名女性 17 名)に以下のような質問項目でアンケートを行った。

(1) 「〇〇さんはすごいね」「きれいだ／かっこいいね」「よく頑張ったね」「優しいね」「仕事が早いね」

1. これらの発話は、あなたがどのような心情(心的状態含め)の時、誰から言われたら嬉しいと感じますか。また、これらの発話にどのように返答しますか。
2. これらの発話はあなたがどのような心情(心的状態含め)の時、誰から言われたら不快だと感じますか。また、これらの発話にどのように返答しますか。
3. あなたはどのようなとき、だれに対してこれらのほめ方を使用しますか。

このアンケートでは「どのような状況のとき、だれから言われるとうれしい／不快か、その「ほめ」に対してどのように返答するか」という受け手側の実態と「だれに対して用いるか」というほめ手側の実態を把握することを目的とし、それぞれのストラテジーごとに質問を設けることにした。

調査対象者の選定は、過去に本研究で実施したアンケートやインタビューを受けていない者に限定した。これは本研究の過去のインタビュー調査やアンケート調査を受けている場合、その時の質問や提示された条件に左右され、正確なデータが取れないと考えたからである。

(1) 結果の分析と考察

調査の結果、付与型は受け手がポジティブな状況にある場合には成功しやすく、ネガティブな状況にある場合には社会的な関係性や相手との親疎は問わず失敗する傾向が見られた。これは付与型が評価を与える性質を持っているため、何か良い点がなければ評価を与えることが不自然になるからである。このことは「ほめ成功」の状況において「ほめ手下位」という回答が一つもなかったことから言える。付与型は受け手に自信や期待があり、「ほめ」に値する対象に、「ほめ」を与えることができる人物が使用できるストラテジーであるからだと結論づけられるであろう。その一方で、「どんな状況でもうれしい」、「ネガティブな状況であってもほめ手との関係性によっては『ほめ』が受け取れる」、「初対面でも成功する」といった回答も見られた。しかしながら、それらの回答数は少なく、失敗するメリットを考慮すればあえて付与型を選択する必要はないと言えるであろう。

要求型もポジティブな状況で成功しやすいという点は付与型と変わらないが、要求型は「ほめ手下位」のときに特に使用されるべきストラテジーであるといえる。しかしながら、「ほめ手上位」の場合には「ほめ」が失敗する危険性が一気に高まるという付与型とは反対の結果も見られた。付与型の場合は目上に使用すると、上から目線な印象を与えてしまうことになり失礼になるが、要求型をほめ手上位で使用した場合は、嫌味や皮肉として発動するという危険性が増す。これは丸山(1996)の「ある会話者間の地位が異なる場合、ほめはあまり発生しない」という調査結果や山路(2006)の「聞き手の優越性や自賛意識にあからさまに言及すること」につながる部分であるが、対等な立場でありながら自分よりも明らかにある点で優れている場合には、その人物からの「ほめ」はFTAになる可能性が高いということが言えるのではないだろうか。これはほめ手が上位であることは自明であるのにも関わらず、あえて要求するという行為が嫌味や皮肉として伝わってしまうからだと考えられる。大野(2007)では情報を引き出すことで、「ほめ意図」の発話が本心であることを伝える「ほめ固め」として機能すると述べていたが、これはほめ手上位の場合はFTAになる可能性があるため、付与型と併用する際にも注意が必要である。

提示型は大きな欠点がありませんように思える。ほめ手との関係性が親密でなくてもネガティブな状況であっても使用がある程度可能であることから、提示型にのみ当てはまる欠点というものはありません。

ほめが失敗する要因とほめストラテジーについて

独話型は他の型と同様、ポジティブな状況であれば、使用が可能である。独話型が他の型と異なるのは、知らない人からでも「ほめ」として受け取れる場合があるということである。これは独話型の聞き手メアテ性の低さが関係していると言える。これは返答の回答を確認すると見えてくることであるがほめ手と受け手の間にある程度の間人間関係がある場合、その関係性を良好に保つために会話を続ける必要がでてくる。しかし、独話型は独り言としてみなせばそこに返答をする必要は低くなり、相手に配慮したコミュニケーションを続ける必要がなくなる。つまり、「ほめ」を受け入れるか拒否するかという拮抗状態が回避されるのと同時に、返答の必要性がなくなるため、コミュニケーションをとる必要がない知らない人にも使用しても支障がないということになるのである。この独話型が知らない人にも使用でき、成功すれば良い人間関係が構築されるものだと考えれば、初対面の人との会話を開始させるための起爆剤として用いることができるかもしれない。また、相槌として使用することで、相手の気持ちを良くさせて会話を続けさせることも可能であろう。

これらのことを踏まえ、B&L(1987)のポライトネスストラテジー枠組みを援用した「ほめストラテジー」を提示する。

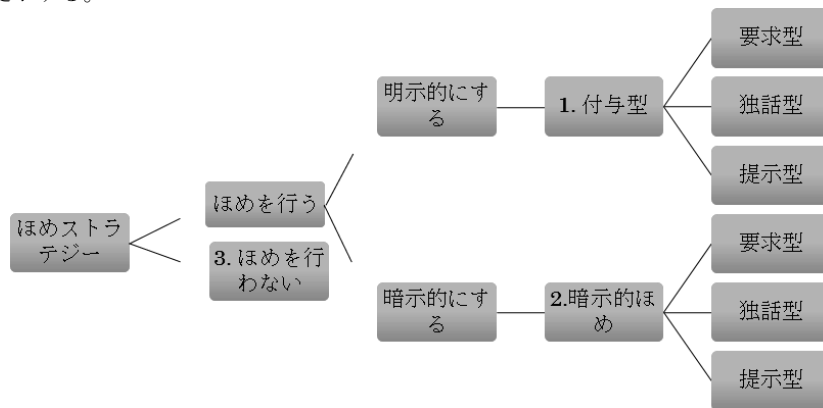


図2 「ほめストラテジー」

この「ほめストラテジー」は B&L のポライトネスストラテジーと同様、相手のフェイスを傷つけるリスクが高い時に数字の大きいものが選択されるというものにした。例えば、以下のような「ほめ失敗につながる要因」が存在する場合には、「ほめ」を行うこと自体を避けることが望ましい。

ほめ失敗につながる要因

- ・相手に自信がない場合
- ・タブーとされているトピックが話題になっている場合¹⁰
- ・相手との関係性が疎である場合

¹⁰ 金銭や性、年齢に関する事など

これらの要因が認められた場合にはどの「ほめストラテジー」を用いてもFTAになる可能性を軽減できないことが多いため、「ほめない」ストラテジーの選択を推奨したい。

「要求型」「提示型」「独話型」の3つの型は、下に行くほどFTAの度合いが高い場合に使用するストラテジーとして、その順番に並べた。「要求型」「独話型」「提示型」は「明示的ほめ」に使用される場合と「暗示的ほめ」に使用される場合の果たす機能が変わってくると考え、上記のようなグラフにした。「明示的ほめ」で3つの型が使用される場合は、付与した「ほめ」を強調する働きや「実質ほめ」だと判断してもらうための理由提示などの役割として機能する。その一方で、「暗示的ほめ」で使用された場合は「ほめ意図」を明示しないことが好ましいため、受け手との摩擦の緩和や相手の心的状態を把握する役割として機能すると考える。

V. 全体的まとめと考察

プレ調査と本調査から「ほめ」が失敗する要因を追求し、「ほめ成功」のためのストラテジーを提示した。まず「ほめ」が失敗する要因を①ほめ形式、②相手との関係性、③受け手のほめ手に対する期待、④受け手の対象への自信という4つの軸からとらえ、「ほめ」の成功率の推移からデータを分析し、統計学的な処理も施した。その結果、ある事柄に関して受け手に自信がない場合はどのような「ほめ」であっても失敗することが分かった。これは「ほめ」の対象となるものが常に「相手の良いと認めうる事柄」でなければならないという「ほめ」の性質によるものであると言える。たとえほめ手がある事柄に対して良いと認めていたとしても受け手に自信がなければ、ほめ手の意図が正確に伝わらない可能性が高くなるということである。もちろん、受け手に自信があったとしても文脈、受け手への感情、親疎関係、パラ言語要素、使用語彙の選択、「ほめ」の度合い、受け手の性格など、他の要因によって「ほめ」が失敗することはあり得るが、本研究では「受け手の自信」を根本的な「ほめ失敗」の要因として提示をした。

有効な「ほめストラテジー」の提示については、プレ調査や本調査で見られた「ほめ」の傾向性を確認した上で、「ほめ」が失敗しやすい状況において使用されている「ほめ」を中心に調査した。「ほめ」が暗示的に用いられる際に使用される他の機能は、山岡の発話機能論の枠組を使用し、選定した。山岡(2008)の「連」の考え方を取り入れた上で、4つのほめの型を提示し、その中でも「提示型」が最も汎用性の高い「ほめストラテジー」であることを述べた。他の3つのストラテジーもその使用される状況によっては有効な「ほめストラテジー」として機能することを、留意点とともに提示した。最終的な「ほめストラテジー」としてはB&L(1987)のポライトネスストラテジーを援用し、これまでのすべての調査で認められた「ほめ」の例から、実用的な「ほめストラテジー」を提示した。

最後にほめ手に「ほめようとする意図」があるにも関わらず「暗示的ほめ」が用いられる理由として、本研究では「ほめが失敗した時のリスクが少ないこと」を挙げる。これは「ほめになる条件」を考えると見えてくる。

ほめが失敗する要因とほめストラテジーについて

	ほめ手のほめ意図	受け手	
1	○	○	=ほめ成功(本来的ほめ)
2	×	○	=ほめ成功(結果的ほめ)

表2 ほめが成功する場合

「ほめ」が成功するためには受け手がほめ手の発話を肯定的に受けることが条件¹¹であることは先述しているが、その「ほめ成功」の条件を「受け手がほめ手の発話を正しく受け取らなかった場合」の条件と比較をしてみる。

	ほめ手のほめ意図	受け手	
3	○	×	=本来的ほめ失敗
4	×	×	=他の機能

表3 受け手が「ほめられた」と受け取らなかった場合

これらの図を「ほめになる条件」と照らし合わせて考えると、3は○→×となっているため「ほめ失敗」になるが、4は×→×という構造になり、「他の機能」と同じ構造になることが分かる。つまり、ほめ手は「結果的ほめ」を装い、「ほめ意図」がないように見せかけることで、そのほめが失敗したとしても他の機能として受け取られるため、その発話がFTAになるリスクは「ほめ失敗」の時よりは低くなる。ほめ手が「結果的ほめ」を期待して「暗示的ほめ」用いている理由はこのようなことからだと言えるであろう。

おわりに

本研究では「ほめ」が失敗する根本的な要因を客観的に分析し、有効な「ほめストラテジー」を提示することを目的とし、調査で得られたデータをポライトネス理論や発話機能論の観点から分類、分析した。先行研究での「ほめ」の捉え方を拡大し、受け手の意図を重視することで、ほめ手が発話したものがどのように受け手に届くかという過程から「ほめ」が失敗する要因を突き止めた。これまでの調査で得られたほめ方の傾向性も含めて、B&L(1987)のポライトネスストラテジーを援用した「ほめストラテジー」を提示し、「ほめストラテジー」として提示したそれぞれのストラテジーが、どのような条件で使用されるのか調査、分析したうえで、使用する際の留意点なども提示することができた。

今後の課題としては、今回の調査は日本語母語話者を対象としたが学習者の使用する「ほめ」の実

¹¹ 本研究の「本来的ほめ」と「結果的ほめ」にあたるもの

態も把握し、レベルごとに使用されるほめ形式を調査した上で具体的な「ほめ」の指導を提案することを考えている。さらに、本研究では「ほめ」の対象を20代~30代に絞り、性別の差は考慮しなかったため、これらの要素も含めたより詳細な研究を進めていきたいとも考えている。

また、「ほめ」を成功させるために用いる「ほめストラテジー」を談話で捉えたときにそれぞれがもつ機能や特徴がより明確になってくると考えるため、「ほめストラテジー」をより実用的なものにするためにも更なる調査、分析をする必要がある。「ほめ」が失敗する要因も、自信がないために「ほめ」を受け取れないという場合から嫌味や皮肉として受け取る場合まで幅広い。そのためこのような受け取り方の差異はどういった点にあるのかも詳細に調査、分析していきたい。

謝辞

この論文の完成から振り返り、研究当初からご指導していただいた山岡政紀先生をはじめとする創価大学の諸先生方に、心からの感謝を申し上げたい。また、コミュニケーション研究会で発表した際に、毎回有益なご指摘を下された筑波大学の小野正樹先生、群馬大学の牧原功先生、オーストラリアのインターンシップの際に論文の軌道修正をしてくださった田中リディア先生をはじめとするラトロブ大学の先生方にも感謝の意を表したい。

また何より、アンケート調査に協力してくれた100名以上の友人・知人と創価大学の学生さんたちにも心からの感謝を伝えたい。本研究中でプレ調査と本調査、合わせて4つのアンケート調査と1つのインタビュー調査があり、特に本調査では128もある質問に一つ一つ丁寧に回答してくれたことはいくら感謝しても足りない。複雑な条件設定でWeb上でのアンケートということもあり、労力があまりにも大きいことから全回答してくれる人は多くないと予測していたが、結果、分析に十分な数のデータを得ることができた。

本研究は多くの方々の協力なしには完成しなかった。すべての人に謝辞を述べ、本研究を締めくくりにする。

参考文献

- 大野敬代(2007)「『ほめ意図表現』の枠組みと機能」 早稲田大学日本語学会 16号 pp.109-120
川口義一・蒲谷宏・坂本恵 (1996)「待遇表現としてのほめ」『日本語学』 15-5 pp.13-22 明治書院
金庚芬 (2005)「会話に見られる「ほめ」の対象に関する日韓対照研究」『日本語教育』 124 pp.13-22
金庚芬(2012)『日本語と韓国語のほめに関する対照研究』ひつじ書房
熊取谷哲夫(1989)「日本語における誉めの表現「形式」と談話構造」『言語習得および異文化適応の理論的・実践的研究(2)』広島大学教育学部日本語教育学科 PP.97-108
小玉安恵 (1997)「対談インタビューにおけるほめの機能(2)—会話者の役割とほめの談話における位置という観点から—」 日本語学 15-6 pp.84-92 明治書院
小玉安恵 (1996)「対談インタビューにおけるほめの機能(1)—会話者の役割とほめの談話における位置という観点から—」 日本語学 15-5 pp.59-67 明治書院

ほめが失敗する要因とほめストラテジーについて

- 関崎博紀(2013) 「日本人大学生同士の雑談に見られる否定的評価の言語的表現方法に関する一考察」 日本語教育 155 PP.111-125 日本語教育学会
- 古川由理子(2003) 「書き言葉データにおける<対者ほめ>の特徴—対人関係から見た「ほめ」の分析—」 日本語教育 117 PP.33-42 日本語教育学会
- 古川由理子(2010) 「ほめが皮肉や嫌みになる場合」 日本語・日本文化 36 PP.45-57 大阪大学 日本語日本文化教育センター
- 山路奈保子(2006) 「日本言語のほめについての一考察—「ほめ」を攻撃的に作用させる要因の分析—」 日本語教育 130号 PP.100-109
- Brown, P. and S. Levinson (1987) *Politeness: Some universals in language usage*, Cambridge University Press.
- Searle, J. R. (1969) *speech acts*. Cambridge: Cambridge University Press. (邦訳:坂本百大・土屋俊訳 (1986) 『言語行為』 勁草書房)

外国人生活者に対する日本語支援のあり方 —理論と実践から—

A study of Japanese Support for Foreign Residents — Theory and Practice —

文学研究科国際言語教育専攻修士課程修了

三 好 香 里

Kaori Miyoshi

I. はじめに

日本語教育は 1980 年代に入ってから、それまでの留学生を中心とするものだけでなく、中国帰国者やインドシナ難民への対応を求められるようになった。さらに 1990 年の入管法改正以降に急増した日系人労働者とその配偶者や子どもたち、また国際結婚の広がりによって増加した外国人配偶者などさまざまな事情を持った外国人を対象とする日本語教育が必要となる中で多様化が進んできた。それは一言でいえば、大学や日本語学校で学習言語能力習得を目指して集中的に行われる積み上げ式の日本語教育では十分に対応できない、「生活日本語」の習得支援という目標が新たに加わったことを意味する。生活環境も学習目的も異なるこうした人々は、経済的にも時間的にも大きな制約を抱えている。無償で学べる公的機関としては、夜間中学が受け皿としてある程度機能した地域もあったが、それは東京など一部の地域に限られていた。

日本語ができないために孤立したり、生活に困窮したりする外国人住民を支援するために各地に誕生したのが、地域住民によって作られた、いわゆる「地域日本語教室」である。その運営に携わっている地域住民ボランティアの中には大学生や会社員もいるが、大半は定年退職者や主婦層が占めている。地域日本語教室の多くは公民館などの公共施設等に開設されており、学習者側は基本的に入会料やコピー代などの実費を負担する程度で、授業料は発生しない。そこに通う外国人の中には留学生もいるが、その大半は日本での生活を行う上で必要な「生活日本語」の習得を目指す外国人生活者である。

こうした地域日本語教室を開設している各団体は、それぞれ設立趣旨や活動の目的を掲げた規約などを持っている。その理念の中心となるのは、多文化共生社会や、国際親善、世界平和等などであるが、主たる事業は日本語支援となっても、その内容や方法について具体的な指針まで示していることはほとんどない。そのため、現場でどのような日本語支援をしていくかとなると、それぞれのボランティアが自身の経験や考え方にもとづいて支援することになってしまう。それが地域日本語教室

における支援の質にばらつきをもたらしていると考えられる。本稿では、ボランティアと呼ばれる日本人を日本語支援ボランティア、地域日本語教室に通う外国人の中でも「生活日本語」の習得を目指す外国人を外国人生活者と呼ぶこととする。

II. 研究意義

本稿における研究の意義とは、日本語支援ボランティアと外国人生活者の双方の立場から日本語支援のあり方を考察することであり、つまり、支援者側には充実感を、学習者側には達成感を得られるような日本語支援を提案することである。特に、日本語習得を目指す外国人生活者には、社会参加を果たすための日本語運用能力の向上を目指した支援方法が求められる。本稿では先行研究で明らかにされていない理念と実践の橋渡しとなる日本語支援の方法を、日本語支援ボランティアの支援技術、また具体的な支援内容の両面から考えていくことで現状の改善を試みる。

上記を踏まえ本稿では、地域日本語教室において行われる日本語入門期レベルの外国人生活者への支援のあり方をボランティアの意識改革を踏まえ、具体的なシラバスの提案を通して明らかにする。

III. 地域日本語教室とは

1. 生活日本語の定義

ここでは「生活日本語」の定義について確認する。金子（2009）では、「生活のための日本語」を以下の7点の方向性から捉えたとしている。

- ①在在外国人が社会の一員として地域に根づき、十全な生活を送ることを可能にするもの
- ②人間関係構築、生活場面拡大のための日本語
- ③「準備教育的内容」ではなく、「日本語使用は来日時から始まり、日本語学習は長期にわたること」を意識したもの
- ④社会参加や自身の多面的な成長の「段階（度合い）」に応じたもの
- ⑤学習意欲及び習得を促すよう、段階化されているもの
- ⑥学習者自身も学習者に関わる人も共有できる、学習過程の見取り図の元となるもの
- ⑦リソースやストラテジーの利用も能力として意識したもの

②に関しては、具体的にどのような言語能力が必要か考える必要がある。「人間関係構築」について考えてみると、「人間関係」とは自己と相手との関係性であり、その関係性は相手によって常に変わる。その際に必要なのは、相手に応じた言語運用、また自己を主語にさまざまな場面に応じた表現ができることである。したがって、話し相手とのインターアクションとともに、ある程度自身の言葉で自己表現力を伸ばす言語運用も必要となる。

本稿では、概ね上記の方向性に順ずるが、③について「生活日本語」の習得を短期的な学習と捉え

たい。金子 (2009) が示した定義では外国人生活者は一定期間日本に定住することを前提としている。しかし、地域日本語教室に通う外国人生活者の中には、定住を予定していても何らかの理由で突然教室に来なくなる場合もある。また、一人の外国人生活者が毎週教室に通えるわけではないことを考慮すると、長期的な学習では学習の内容に過不足が起ると予想される。確かに、短期的な学習では、日常生活の全ての言語使用場面を網羅することはできない。しかし、外国人生活者にとって生活上優先度が高い場面は、それほど多くないはずであり、また生活場面においても一つの言語機能を習得し、それを必要な生活場面で運用できる力を身につけることが重要ではないだろうか。したがって、本稿では「生活日本語」のうち生活上必要な場面をさらに抽出し、短期間のシラバスの考察を試みる。

2. 学校型日本語教育と地域型日本語教育

地域日本語教室における日本語支援のあり方の枠組みを示したのは尾崎 (2004) である。尾崎 (2004) は日本語学校等で行われる日本語教育を「学校型日本語教育」、地域日本語教室で行われる日本語教育を「地域型日本語教育」と呼び、それぞれの特徴を挙げている。以下はそれをまとめたものである。

「学校型日本語教育」	<ul style="list-style-type: none"> ① 教師は一定の資格要件を満たしていることが条件であり、教師と学習者は明確に区別され、義務と責任が生まれる契約関係にある ② 学習年数は数か月から 2 年程度 ③ 入門期に教科書を使った文法重視、文型積み上げ式の授業が行われる
「地域型日本語教育」	<ul style="list-style-type: none"> ① 教授者に資格制限がない ② 週 1 回 90 分から 120 分程度 ③ 学習者が多様であるため、日本語支援ボランティアと外国人生活者に合った教育方法を見つける

尾崎 (2004) から筆者が作成

尾崎 (2004) は両者の違いを明確にした上で、従来の「学校型」日本語教育で採用されている文型積み上げ式教育と直接法は「地域型」日本語教育には有効ではないと述べている。その理由として 3 つの点を挙げている。まず、「学校型」日本語教育の学習者と「地域型」日本語教育の学習者ではニーズが異なっていること、次に「学校型」を指向する限り日本語支援ボランティアの日本語教師としての技術を磨き続けなければならないこと、最後に日本語支援ボランティアと外国人生活者の関係が固定化する「学校型」では共同学習の場が起りにくいということである。

以上の点を考慮した上で、尾崎は基本方針として活動の 3 原則、また 8 つの留意点から「地域型日本語教室」における入門、初級クラスでの教育方針を提案している。

活動の3原則	<p>I 日本語習得の原則</p> <p>II 相互学習の原則</p> <p>III 無条件参加の原則</p>
8つの留意点	<p>i 教授者は自分の話し方を工夫すること</p> <p>ii 文法・文型より内容（話題）を重視すること</p> <p>iii ボランティアの語りからはじめること</p> <p>iv 使えるものは何でも使うこと</p> <p>v 正確さより理解を重視すること</p> <p>vi 共同作業を考えること</p> <p>vii 教室外の活動と結びつけること</p> <p>viii 日本語学習モードの時間を設定すること</p>

尾崎（2004）より筆者が作成

本稿でも尾崎（2004）の示す地域日本語教室の枠組みに関しては賛同する。特に、8つの留意点のうちのiiiは重要な観点である。尾崎（2004）は、まず絵などを使いながら日本語支援ボランティアがある話題について易しい日本語で話し、それを外国人生活者が大意を理解できたところで、今度は外国人生活者自身のことについて話してもらうという流れを提案している。また、1つの話題を何度も取り上げることで、週に一度の学習でも少しずつ定着が図れるとしている。尾崎（2004）が示した「地域型」日本語教育の枠組みは地域日本語教室における日本語支援を考える上で、基盤となるものである。しかし、理想的な日本語支援を行うためには、どのようなシラバスに基づけばよいかを示されていないため、理想論にとどまっているといえる。また、「地域型」日本語教育のあり方について理解している日本語支援ボランティアがどれだけいるのかは疑問であり、また「地域型」日本語教育の意識を持っていながら、実際の日本語支援で「学校型」の支援を行っている日本語支援ボランティアにどのような働きかけをしていくかも不明である。したがって、尾崎（2008）の示した枠組みに関しては賛同する立場をとるが、その運用に関してまだ考慮の余地があると捉える。

3. サバイバルジャパニーズとの共通点と相違点

次に、「生活日本語」と似た概念として「サバイバルジャパニーズ」の定義を確認し、相違点と共通点を挙げる。鹿嶋は、「サバイバルジャパニーズ」の定義を「日本で生活する際にコミュニケーションのために最低限必要な知識および言語として、短期的に教えられたり、使用されたりする日本語」（鹿嶋 2005:37）であるとした。また、林・佐藤（2011）は日本語学習が主目的ではない留学生の中で、研究の合間に必要最低限の日本語を習得することを希望している場合があることを受け、短期間で必

要性の高い語彙や文法項目を習得するためのサバイバルジャパニーズ用教材を開発した。また、丸山は「サバイバルジャパニーズ」について、「不十分ながらも何とかその場を切り抜けること・その方法を言う」（2005:23）と述べている。つまり、「サバイバルジャパニーズ」とは、日本語の学習が主目的でない者が、その場を乗り切るために短期間で習得した日本語であるといえる。

前述した「生活日本語」との相違点をまとめると、まず日本語の学習は「サバイバルジャパニーズ」では「主目的ではない」とあったが、「生活日本語」では「十全な生活を送るために必要不可欠」であること、また、「サバイバルジャパニーズ」ではその場を乗り切るための日本語であったが、「生活日本語」では「人間関係構築と生活場面拡大」のための日本語であることである。

一方で、共通点としては、学習の期間が短期間であるという点である。したがって、初級用教材の文型の限定ないし絞り込みを行う必要もあるという点も共通である。また、教材の内容についても具体的な場面や話題、言語機能を教材の中に明示していくことで、学習効果を高める（鹿島 2005）という点も共通するといえる。

IV. ボランティアの意識調査

本稿では、地域日本語教室の現状を把握するために、アンケート調査、フォローアップインタビュー、また承諾が得られた日本語支援ボランティアの日本語支援の内容を記録した。対象者は、都内の地域日本語教室で活動する日本語支援ボランティア、そして、生活日本語の習得を目指す外国人生活者とした。外国人生活者の多くは日本語の読み書きが困難であるため、英語版と中国語版を用意し、日本語版にもルビを振り対応した。都内で活動する全 5 団体の地域日本語教室において調査を行い、日本語支援ボランティア 62 名、外国人生活者 44 名に対してアンケートを実施した。日本語支援ボランティアは、初級を担当している方のみを対象とはせず、中級以降の外国人を担当している方も対象とした。これは、日本語支援のビリーフに関する質問項目も含まれていること、また長年日本語支援ボランティアをしている方は、これまでにさまざまなレベルの外国人を担当され、初級のレベルの外国人生活者を担当した経験があるためである。一方で、外国人生活者は、地域日本語教室で日本語を学ぶ目的が生活日本語習得の者のみを対象とした。したがって、留学生やビジネスマンであっても日常生活で日本語を使用する機会がなく、日本語で最低限の生活ができることを目指す者は対象に含めている。本稿では日本語支援ボランティアの意識に関する結果のみ考察する¹。

本稿の調査では、日本語支援ボランティアと外国人生活者との関係性が地域日本語教室の掲げる理想に近いと言える結果となった。つまり、日本語支援ボランティアは日本語教師ではないということであり、隣人、もしくは相互学習の関係性であるということである。しかし、一方で日本語支援の中では、日本語を教える方法や日本語の知識理解に困難さを感じていることが確認でき、理想とする意識と実践の溝が見えた。また、『みんなの日本語』が決して外国人生活者の生活日本語を支えるもので

¹ アンケート、フォローアップインタビュー、日本語支援の内容の記録に関する詳細は修士論文参照

ないとしながらも、その使用率が高いことも明確となった。さらに媒介語を使用した方が効率がいいとの意見が多数を占めていたため、地域日本語教室では直接法のみを使った日本語支援をしている日本語支援ボランティアは少数であることも分かった。そこには自身が受けてきた外国語教育が「説明する」、また「教える」という形態であったという大きな要因があると考えられる。

この調査結果から、日本語支援ボランティアが関係性として「相互理解・学習の当事者同士」との意識を持ちつつも、言語を「説明する」、また「教える」という固定観念を持っているために、意識と実践の間に大きな溝があることが分かった。

V. 先行研究の問題点

ここでは、先行研究の問題点について述べる。まず尾崎（2004）が示した「地域型」日本語教育の枠組みは地域日本語教室における日本語支援を考える上で、基盤となるものである。しかし、外国人生活者の日本語習得について「入門段階から文法的に正しい文が言えるわけではないので、単語の羅列であっても言いたいことが分かればよい」（2004:306）としていること、また日本語支援ボランティアに対しても一語文を多用することはかまわないと述べていることについては本稿では賛同しない。本稿では、外国人生活者にとって必要とされる言語運用は、自己表現であり、またその自己表現は易しい文法項目であったとしても、文レベル、または短文のつながりまで意識したものであるべきだと考えるからである。

また、理想的な日本語支援を行うためには、どのようなシラバスに基づけばよいか、さらには「地域型」日本語教育の意識を持っていながら、実際の日本語支援で「学校型」の支援を行っている日本語支援ボランティアにどのような働きかけをしていくか尾崎（2004）の定義をもとに改めて考察する必要がある。特に、実際の地域日本語教室における日本語支援の問題は、それだけではなく日本語を正しく説明しようとする意識があるという点である。したがって、日本語を説明しようとしてしまう意識はどこから生まれるのか、すなわち知識伝授型の日本語支援の問題点についても明らかにしなければならない。

次に、地域日本語教室における支援のあり方を調査、研究した先行研究を見ていく。まず、日本語支援ボランティアが抱く意識がもたらす弊害について行われた調査を検討する。

新庄（2008）は日本語支援ボランティアの「役に立ちたい」という意識が生む「教える－教えられる」関係の定着を指摘している。しかし、一概に「役に立ちたい」という意識を排除したからといって、「学校型」また知識伝授型の支援が解消できるとは限らない。「役に立ちたい」という意識を持ちつつも、外国人生活者の日本語運用力を伸ばす支援は可能だからである。日本語支援ボランティアだけではなく、一般のボランティア活動の従事者が「社会や相手の役に立ちたい」という気持ちからボランティアを始めていることは言うまでもない（内海・中村 2014;海野 2014）。問題は、各日本語支援ボランティアが抱く言語教育観がどのようなものであるかである。新庄（2008）はこの問題について

て、日本語支援ボランティアに頼りきっている日本社会に問題があると指摘しており、日本語支援ボランティアの言語教育観や日本語支援技術の向上には触れていない。しかし現状を変えるには、言語は説明ではないということを各日本語支援ボランティアが意識として持たなければならない。

次に、多くの先行研究が理想と現実をつなぐ具体的な支援を示しておらず、また支援方法に触れているものについても中級以降の外国人生活者への支援や、運用ではなく理解の段階にしか達していないものが多いことを示す。

横田 (2014) は、地域日本語教室における交流型日本語活動を提唱し、主な活動内容として、文型の積み上げではなく場面にあった語彙や表現を音として聞かせ、声に出させるとしている。しかし、外国人生活者のレベルはおしゃべりがある程度できることが多く、ゼロから学ぶレベルとは限らない。小島 (2014) は、地域日本語教室に通う動機を日本語支援ボランティア自身の「自己成長性」であると結論付けている。これは、日本語支援ボランティアと外国人生活者双方の相互学習を前提とする「地域型」(尾崎 2004) の支援に当てはまるが、自身の「自己成長性」のみに焦点が当てられており、言語支援の点については触れていない。地域日本語教室について述べる時、関係性のみを問題として捉えるのでは不十分である。日本語支援ボランティアも外国人生活者も双方が成長していける関係は好ましいが、実際の活動は日本語支援を通して行われるものであり、意識と実際の活動の橋渡しとなるものが示されていないからである。したがって本稿では、現実的な問題として、日本語支援ボランティアの意識の変革、その上での日本語支援のあり方の変革が地域日本語教室の現状を大きく変える筋道であると捉え、その意識を具現化できるシラバスの考察を試みる。

VI. 理想的な日本語支援

1. 言語運用力を促す日本語支援

ここまで、地域日本語教室における日本語支援の理念は精神論中心のものが多く、具体的な支援が示されていないことを指摘し、先行研究の中に地域日本語教室における言語教育を論じているものがなかったことを明らかにした。ここからは理想的な日本語支援を、創価教育学を踏まえた表現教育の観点から明らかにする。

地域日本語教室における日本語支援とは、日本語の言語運用能力の向上を促すことによって生活の質も向上させ、最終的には生活者が日本において幸福な生活を送ることができるようにするものである。創価教育学の創始者である牧口常三郎は教育について「被教育者をして幸福なる生活を遂げしめる様に指導するのが教育である」(1972:149) と述べている。その上で、「創価教育学」については「人生の目的たる価値を創造し得る人材を養成する方法の知識体系」(1972:19) であるとし、生徒に価値を創造する力を持たせるための方法論を示している。牧口は幸福とは価値を創造することであり、幸福な生活は生徒自身の力で達成することができる考えたのである。牧口は、教師の仕事の変遷を 4 期に分け、教師の仕事が教科書にある知識を生徒に伝授する時代から、教科書を研究手引きとして用

いる時代に移り変わるべきであると主張している。この区分は教育一般に関することであるが、言語教育の変遷にも当てはめることができる。つまり、文法訳読法から、コミュニケーション・アプローチへの言語教育的アプローチの変遷である。牧口は知識伝授についても伝授された事柄について「自らその概念を再構築し得る事が出来なければ、絶対に伝達したとは云い得ない」(1979:146)として批判し、教育とは「本人の活動あってこそ初めてその効果を顕す」(1979:66)と考えている。この考えは1970年代に登場したコミュニケーション・アプローチにも通じるものであり、当時の教育観として極めて斬新な考えであったことを示す。牧口が重視したのは、「幫助者」としての教師の役目である。「幫助者」とはサポートする者と言い換えることができ、生徒の活動を支える存在であると言える。

牧口は教育の目的を「生徒の幸福なる生活」とした。地域日本語教室に通う外国人生活者に対する日本語支援も幸福な生活を目指したものであることは言うまでもない。また、日本語学校等の教育と違い、地域日本語教室における日本語支援は生活に直結したものであり、その支援も外国人生活者の生活に密着し、何が彼らにとって必要なかを把握しなければならない。そのとき、牧口の示す「幫助者」としての姿勢において、外国人生活者を主体とし、彼らに幸福な生活を獲得させる力を持たせようとするサポートの中で果たすことができるのである。

2. モノログ形式

地域日本語教室における日本語支援を考える上で、モノログ形式の言語運用能力は必要不可欠な能力である。西口(2010)は第二言語学習の理論としてMarton(1988)の再構成ストラテジーを基盤に自己表現活動中心のカリキュラムを開発した。その理論は「接したさまざまなディスコースから要素と要素の組み合わせ方を流用してきて自らのディスコースを再構成していく力を伸ばしていく」(西口2010)ということであると述べている。さらに、文型・文法中心の授業とは違い、自己表現中心の授業では、既習内容維持の活動を即興的に挿入することができるため、第二言語習得の効果が高いという。外国人生活者の「生活日本語」を考えた場合でも既習文型をさまざまな形でモジュール的に導入することは必要であり、自身を主語にさまざまな表現をある程度のかたまりとして言えるようになることが重要であると言える。

また、自己表現活動中心のカリキュラムは、学習者の動機や達成感に大きな影響を与える点において、ARCS動機付けモデルにも共通していると考えられる。ARCS動機付けモデルとは、注意(Attention)、関連性(Relevance)、自信(Confidence)、満足度(Satisfaction)の4つの側面から学習意欲を捉えることを指す(鈴木1995)。西口(2010)の示した自己表現活動中心のカリキュラムは、日本語支援ボランティアの話している日本語を理解するだけにとどまらず、学習者に既習の文型知識を使って自己表現をさせるというレベルまでを考慮しているため、外国人生活者の自信や満足度につながるであろう。したがって、本稿でも問答と、その問答の中で使用した文法項目を使ってモノログで自己表現ができる活動も取り入れる。

3. 問題提起型活動

モノログ形式を用いた日本語表現活動と同じく地域日本語支援における重要な活動として、生活者の抱える課題に焦点を当てその解決能力を引き出す問題提起型活動も重要である。野元(2000)は、地域日本語教室で行われる相互学習の機会が抽象的な議論のままになっていることを挙げ、課題提起型日本語教育の試みがその限界を突破できると示唆している。課題提起型日本語教育とは、パウロ・フレイレが提唱した課題提起型教育を言語教育に応用した課題解決型 ESL (English as a Second Language) を参考にしたものである。課題提起型日本語教育では、①意識化②日本語運用能力の習得③生活情報・基礎知識の習得④学習支援者の学習の4つが目標として掲げられている。各回で話し合われるテーマは外国人生活者の抱えている生活上の困難さを基に決定され、それを基に仮テキストが作成される。

地域に住む外国人生活者にとって、「生徒が『熟考』することによって」(フレイレ 2011:104)「世界(地域)としっかりかかわる自分が認識」(2011:105)されることは、自立への大きな一歩である。その点において、野元の提案は外国人生活者が自らの生活を能動的に考え、生活の質を向上させていくために必要な観点であるといえる。ただ、野元(2000)では、野元自身が対象となる外国人生活者の母語を理解できていたこと、また、外国人生活者の日本語のレベルが初級とはいえども入門期ではなかったということを踏まえ、日本語支援ボランティアと外国人生活者の関係性の中で、必要があれば取り入れるという程度で考える。また、活動としても、日本語支援ボランティアとあるテーマについて母語を介して話し合い、周囲の環境で改善したいと思う事柄について発表できるような取り組みにとどめる。

VII. 教材分析

本稿では、生活者用教材また、初級入門期用教材5種に関するシラバスの分析を行った²。外国人生活者は日本語学習を目的に来日していない場合が多いため、日本語学習に十分な時間を割くことが困難である。そのため、多種多様な文型を使いこなせるようになるよりも限られた文型を使ってさまざまな生活場面で日本語を運用し、コミュニケーションを取れるようになることが必要である。ここでは、各教材の文法項目別のうち特に生活上必要度の高い項目と思われる機能を取り上げ、導入の方法を考察し、本稿でどのように提示するかを考える。

² テキストはそれぞれ『にほんごこれだけ! 1』(以下、『これだけ1』とする)、『こんにちは、にほんご!』(以下、『こんにちは』とする)、『NEJ —テーマで学ぶ基礎日本語— vol.1』(以下、『NEJ1』とする)、『Nihongo Fun & Easy』(以下、『FUN & EASY』とする)、『Japanese for Busy People1』(以下、『JBP1』とする)であるが、各教材の比較考察に関しては修士論文参照とする。

1. 「～ます」(習慣・予定・一般的事実)

習慣や予定をあらわす「～ます」は緊急性が低いものの、コミュニケーションを行うにあたって必要な要素である。したがって、各教材における「～ます」の機能別の提示の有無を示す。

まず予定を述べる用法は『これだけ1』と『JBP1』に見られた。『これだけ1』では「らいねんどここにいますか?」という問いに対する「たぶんにほんにいます」という返答で提示されている(『にほんごこれだけ1』第6課37)。習慣の用法は『こんにちは』以外の教材に提示が見られた。また、交通機関における発話で「これは、～に行きますか?」、「～はありますか?」等の一般的事実を述べる用法が見られた。

外国人生活者にとって、予定を表す「～ます」を使用する緊急性は低い。しかし、日本人とのコミュニケーションの場面では今日の予定や週末の予定を聞かれることは十分に考えられる。したがって、優先度は比較的高くないが本稿のシラバスにも導入することとする。

また、習慣を表す「～ます」についても『これだけ1』のように時間や日時、頻度とともに導入することが可能であるため、緊急性は高くないものの日本人との交流の場面で提示することとする。

2. 「～てください」(依頼)

「～てください」については、「ちょっと待ってください」のような「話し手の利益のために何らかの行為をすることを聞き手に頼む表現」(松岡 2000:148)と「どうぞ座ってください」のような「純粋な依頼ではない聞き手自身の利益になる行為を進める場合」(松岡 2000:150)の2種類の分類が見られた。前者は、各教材に提示されていたが、後者については『FUN&EASY』と『JBP1』にのみ見られた。また、課に入る前の「教室の言葉」や「便利なフレーズ」などで提示され、具体的な学習内容に含めない教材もあった。

本稿では、時間の制約上外国人生活者にとって必要最低限の文型を抽出する必要がある。したがって、「～てください」については、他の文型で言い換えることができないものを除き、定型文として提示することとする。例えば、「教えてください」が言えなくても「これは～ですか?」と直接的に聞くことができる。定型文として提示するものは、「ちょっと待ってください」「もう一度話してください」である。

3. 「～たいです」(願望)

「～たい」の用法は各教材に提示されており、最も使用頻度の高い動詞は「行く」であった。

また、『NEJ』は留学生、また成人学習者を想定しているため「～たい」だけではなく、「～たいと思っている」という表現のレベルが割合高いものも同時に提示されている(西口 2012:128)。『FUN & EASY』では、第2課で同様に場所を尋ねる場面で提示されている。また、その提示方法としては相手に行きたい場所を伝える場面で「～に行きたいんですが」と「んです」とともに導入されている。

各教材外国人生活者の日本での生活を考えた場合、願望を伝える「～たい」は優先的に導入されるべきである。また、『これだけ1』に見られるように、過去の経験を踏まえて次に何をしたいかという場面における「～たい」も重要である。生活上優先度が高い「～たい」は、現在の願望を伝える場面であるが、未来に関する願望を述べる場面は自己表現の幅を広げられると思われる。

4. 「～ています」(進行・状態)

「～ています」については、「～に住んでいます」「疲れています」などの状態を表すものと、「あたらしいしょうひんのせつめいをしています」(『JBP1』第22課.205)などの進行形を表すものがあった。状態を表す用法は全教材に見られ、進行形の「～ています」は『NEJ1』と『JBP1』のみに見られた。

本稿が考えるシラバスでは、初級教科書の文型の限定ないし絞り込みが必要であると考え、言い換えが可能な文型は極力使用しないこととする。しかし、言い換えが困難な「疲れています」に関してのみかたまりとして導入することとする。

VIII. 地域日本語教室用シラバス案

ここで地域日本語教室用に考案したシラバス(付録参照)について解説する。本シラバスを考案するにあたって、これまで論じたことを踏まえて、以下の原則を立てた。

- (1) 原則的に直接法を採用する。
- (2) 発話場面は生活上必要な情報を得るための場面と人間関係構築のための場面を組み合わせる。
- (3) 外国人生活者の自己表現力の向上を目指した活動を取り入れる(モノログ・課題解決型活動)
- (4) 文法項目は難易度と優先度をもとに配列するが、欠席に考慮してスパイラル的に繰り返し、モジュール型の学習ができるようにする。

(1) についてであるが、日本語支援ボランティアに対するアンケート調査の結果、直接法について肯定的な意見と否定的な意見が出たことは前述の通りである。しかし、地域日本語教室では、多国籍の外国人生活者が通うため、媒介語を話せる日本語支援ボランティアと必ずしもペアを組むことができるわけではない。また、媒介語に堪能な支援者は媒介語による説明にばかり力が入りがちであり、学習者もなかなか日本語で話そうとしなくなることがある。そういう意味で、言語学習の面から考えても、日本語に触れ日本語で運用力を伸ばすことができる直接法は有効である。日本語支援ボランティアが直接法の指導を身に付け、どんな母語を持つ外国人生活者にも対応できるようにする方が効率的だと考える。

(2) については、国立国語研究所が外国人生活者を対象に行った全国調査（以下：全国調査）³と文化庁の「標準的なカリキュラム案で扱う生活上の事例（詳細版）」（以下：カリキュラム案）を基に該当する地域の外国人生活者へのアンケートを実施し、その結果を検討した。

シラバスの場面・機能は本調査で行った外国人生活者にとって優先度が高いものを抽出した。しかし、各課が完全に独立させるのではなく、前の課で学習した内容を次の課でさらに運用できる場면을提示した。例えば、「日本人とのコミュニケーション①」は、同じ地域に住む日本語支援ボランティアが外国人生活者に生活上のアドバイスや町の情報などを教えられる内容となっている。ここでは、近所のスーパーや地域にあるものについて話しても良い。しかし、その際に必要な表現形式を提示し、さまざまな場면을想定して練習をさせることが重要である。そして、その次の第3課では実際の生活場面である「買い物・町で」で実際に使用できる表現に結びつける。ロールプレイをしながら、町で道を聞いたり、お店の店員と客になって商品の場所を聞いたりする練習をすることができる。「日本人とのコミュニケーション」については①～⑥の機能を設け、それぞれの機能は、日本人との人間関係を構築することをねらいとしている。本稿のシラバスの場面機能の一覧は以下の通りである。

課	場面・機能
0	あいさつ
1	自己紹介
2	日本人とのコミュニケーション①生活の情報について(ゴミ出し・町の情報)
3	買い物・町で
4	乗り物
5	日本人とのコミュニケーション②飲食の習慣に関すること
6	レストラン
7	日本人とのコミュニケーション③体調について話す
8	病院・薬局・緊急事態
9	郵便局・役所・銀行
10	日本人とのコミュニケーション④世間話をする
11	日本人とのコミュニケーション⑤過去の経験について話す
12	日本人とのコミュニケーション⑥家族について話す

³ 全国調査のうち「言語によらず頻度の高い行動」のみを抽出し、そのうち外国人生活者が日常生活でどのような行動をしているのかをアンケート調査で調べた。結果の詳細は修士論文参照とする。

(3) については、次節で詳しく論じる。

(4) については、名詞文、形容詞文、動詞文を抽出し、全 12 課を通して最低でも 2 回は触れられるようなダイアログ、モノログ形式を考案した。

1. 導入文型

導入文型には、その課のダイアログ形式の発話に必要な文型を提示している。各導入文型は、それぞれ一つの機能に対応しており、日本語支援ボランティアは外国人生活者に語りかけながら各導入文型を提示する。例えば、出身地を述べるときの文型「～から来ました」については、世界地図の国を指しながら「Aさんは、インドから来ました」「Bさんは、中国から来ました」と日本語支援ボランティアが語りかければ、外国人生活者は自然と「～から来ました」は出身を表す表現であると察することができるであろう。その後、「～さんは？」と質問すれば、先ほどの文型に自分の国名を当てはめ、自己表現することができる。導入文型は各課で 2～6 つ提示し、それらをもとにダイアログ形式のモデルを示しているが、目的はダイアログ形式を覚えることではない。文型をもとに「語彙・表現」で提示されているものを使いながら、外国人生活者自身のことを語ることを目的としている。

2. ダイアログ形式

外国人生活者が導入文型を使用できるようになれば、次に必要なのは人とのやり取りの中でどのように運用するかである。ダイアログ形式では、外国人生活者が日常的に遭遇する機会の多い場面を想定し、特に外国人生活者が必要な情報を収集するためのやり取りを提示している。やり取りを行う際には疑問文に対する返答の組み合わせが必要となるため、返答を聞きとる練習も必要となる。本稿では「これはどうやって使いますか？」や「(目的地に) どうやって行きますか？」などの疑問文に対する返答は理解することが難しいと考えているため、基本的には平易な返答が出来る疑問文、もしくは「はいいいえ」で答えられるクローズクエスションのみを提示している。

また、ダイアログ形式には実際のコミュニケーション場面を意識するため、質問の前置きとなる「すみません」や最後の「ありがとうございます」、または、相手の日本語が分からなかった際に使う「すみません、もう一度言ってください」等のコミュニケーションを円滑に行うための表現を追加している。

さらに、導入文型と同様ダイアログ形式での場面に固執するのではなく、「語彙・表現」に提示しているその他の動詞や名詞を入れ替えてやり取りをすることも念頭に置いている。

3. モノログ形式

ダイアログ形式では、その場面に応じて単文でも相手とのやり取りができることを目標としていた。言い換えれば、問答形式で質問に対応する返答ができさえすればいいということである。しかし、外

国人生活者は成人であり、言語習得の目的が社会参加であることを考慮すれば、単文のやり取りだけでは不十分である。言語運用が単文レベルにとどまってしまうと、外国人生活者の中には単文でしか日本語が使えないことに不満を抱え、自信を無くしてしまうことや、言いたい事を文章として伝える際に、文と文を繋ぐ接続詞や配列が分からず、上手く相手に気持ちを伝えることができないともどかしさを感じることもあるかもしれないからである。ここに、従来の日本語支援の問題点がある。

本稿では、この問題を乗り越えるため、ダイアログ形式の発話から自分のことについて述べるディスコースを構築し、自己表現に結びつけるところまでを「生活日本語」習得であるとする。日本語をディスコースで使えるようになれば、その分達成感が得られ、さらなる学習意欲も湧くであろう。ディスコースの長さについては、一つの場面について3～5⁴程度の文で自己表現することを目指す。あまり長くなりすぎると日本語入門期の外国人生活者の負担になり、優先度が低い要素も入ってしまうと思われるためである。さらに、単文をただ羅列しただけでは、意味を成さないため、文と文のつながりは一貫性と結束性を意識している。また、結束性のある文章を組み立てるために、必要最低限の接続詞を選択している。

このシラバスにおける日本語使用場面はあくまでも調査結果から選択したものであるため、全ての外国人生活者の日本語使用場面に対応しているものではない。このシラバスはあくまでも活動内容の目安を示したに過ぎない。したがって、実際の日本語支援の場では外国人生活者の生活場面にあった語彙や表現を日本語支援ボランティアが適宜選択する必要がある。その際に必要なのは、外国人生活者の生活場面を予想し、語彙や表現を導入する日本語支援ボランティアの想像力である。日本語を説明することは必要とはならない。

本稿が示すシラバスは、日本語支援ボランティアの「教えたい」という気持ちを乗り越え、「サポートする」すなわち「補助者」としての意識をもたらすことを念頭に考察している。このシラバスを実際に使用し、日本語支援ボランティアが「教えること」ととらわれず、外国人生活者の日本語運用を「サポートする」との意識に立てば、日本語支援ボランティアには充実感を、また外国人生活者にとっては達成感を得られることが期待される。

IX. おわりに

本稿では、まず、日本語支援ボランティアと外国人生活者の双方にアンケート調査、フォローアップインタビュー、また承諾をいただいた方にのみではあったが活動内容を記録し、分析を行った。その結果、日本語支援ボランティアは意識として「地域型」の支援を行っているつもりでも、依然として日本語をいかに上手に説明できるかという点について困難さを感じていたことが分かった。その原因は、自身の外国語学習観、さらに、外国人生活者のニーズが多様化し、本来の地域日本語教室での

⁴ 本稿のシラバスのモノログ形式の欄には、10程度の文のつながりを持つ場面もあるが、外国人生活者の日本語の学習の進捗度によって適宜増減してもいいと考えている。

支援ではないレベルまで求められていることであった。また、どのような支援をすべきかと公表している公的機関の掲げる理念は、抽象論に過ぎず具体的な活動が不明確であったことを批判した。そういったことを受け、日本語支援ボランティアの姿勢として牧口が示す「幫助者」の意識の重要性を示し、その意識がコミュニケーション・アプローチにも通じていることを述べた。最後に、具体的な支援内容として「生活日本語」習得のためのシラバスを考察し、日本語支援ボランティアにとっても外国人生活者にとっても有効だと考えられる支援内容を提示した。外国人生活者の日本語習得の目的は、日本人とのコミュニケーションを通して自己実現、また社会参入を果たすことである。本稿では、日本語入門期にある外国人生活者が、日本社会で孤立することなく幸せな生活を送ることができるのに十分な日本語能力を向上させるためのシラバスの考案を試みた。しかし、本稿が考案したシラバスは実際の地域日本語教室において検証するまでには至らなかった。したがってシラバスの実施、検討については今後の課題としたい。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、ご指導ご鞭撻を頂いた本学山本忠行教授に心より感謝申し上げます。また、お忙しい中アンケート、フォローアップインタビュー、活動記録にご協力いただいた地域日本語教室の方々に深謝致します。項目の数も膨大で、選択項目だけでなく、記述の項目もある中、予想を遥かに超える方々にアンケートを返却頂きました。地域日本語教室で活動される日本語支援ボランティアの方々は、目の前の外国人生活者のために活動され、日々試行錯誤を繰り返しながら日本語支援にあたっておられます。その工夫の中で生まれた皆さまのご経験やご意見が、本研究の基盤となっていることは間違いありません。皆さまのお陰で、一つのモデルとしてではございますが、「生活日本語」習得のためのシラバスを考案することができました。この場をお借りして重ねて感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

参考文献

<教科書>

- てくてく日本語教師会 (2009) 『こんにちは、にほんご!』 ジャパンタイムズ
庵功雄監修 (2010) 『にほんごこれだけ 1』 ココ出版
国際日本語普及協会 (2006) 『コミュニケーションのための日本語第 1 巻かな版テキスト JAPANESE FOR BUSY PEOPLE』
緒方由希子・角谷佳奈・左弥寿子・渡部由紀子 (2009) 『NIHONGO FUN & EASY』 アスク出版
西口光一 (2012) 『NEJ:A New Approach to eElementary Japanese—テーマで学ぶ基礎日本語』 くらしお出版

<参考文献>

- 海野和之 (2014) 『社会参加とボランティア』 八千代出版
内海成治・中村安秀 (2014) 『新ボランティア学のすすめ：支援する／されるフィールドで何を学ぶか』 昭和堂
尾崎明人 (2004) 『地域型日本語教育の方法論試案』 小山悟・大友可能子・野原美和子編 『言語と教育—日本語を

対象として一』くろしお出版

- 鹿島恵 (2005) 「初級準備段階としてのサバイバル：ジャパニーズのシラバス検討」三重大学留学生センター紀要 2005,7,p.35-48
- 金子智子 (2009) 『『日本語教育における学習項目一覧と段階的目標基準の開発』の概要—『生活のための日本語』開発に向けて—』『日本語教育における学習項目一覧と段階的目標基準の開発—報告書—』1-10 国立国語研究所
- 小島佳子 (2014) 「日本語母語話者が地域日本語教室に参加する意義—日本語ボランティアの活動参加動機につながる動機付け—」『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』(3):101-110
- 新庄あいみ (2008) 「地域日本語活動の現場から—ボランティアの意識における、「やりがい」の循環と「教えること」の固定化—」『大阪大学留学生センター研究論集多文化社会と留学生支援』第12号 87-97
- 鈴木克明 (1995) 『『魅力ある教材』設計・開発の枠組みについて—ARCS 動機付けモデルを中心に—』『教育メディア研究』Vol.1.No.1:50-61
- 西口光一 (2010) 「自己表現活動中心の基礎日本語教育—カリキュラム、教材、授業—」『多文化社会と留学生交流：大阪大学留学生センター研究論集』14 p.7-20
- 野元弘幸 (2000) 「課題提起型日本語教育の試み：課題提起型日本語学習教材の作成を中心に」『人文学報.教育学』35:31-54 首都大学東京
- パウロ・フレイレ (2011) 『新訳被抑圧者の教育学』亜紀書房
- 牧口常三郎 (1972) 『創価教育学体系Ⅰ』聖教新聞社
- 牧口常三郎 (1979) 『創価教育学体系Ⅲ』聖教新聞社
- 林里香・佐藤尚子 (2011) 「サバイバル日本語の教材開発と授業実践」『国際教育』(4) 22-42
- 横田隆志 (2014) 「地域日本語教室における交流型日本語活動についての評価—白山市国際交流サロンでの活動から—」北陸大学紀要 2014.3

<資料>

- 文化審議会国語分科会 (2010) 「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案について」
- 国立国語研究所 (2009) 『「生活者のための日本語：全国調査」結果報告<速報版>』
- http://www.ninjal.ac.jp/archives/nihongo-syllabus/research/pdf/seika_sokuhou.pdf

外国人生活者に対する日本語支援のあり方—理論と実践から—

頁	場面・機能	導入文型	発話モデル	語彙・表現	課題解決型学習	接続詞
0	あいさつ	おはようございます こんにちは はじめまして～です よろしくおねがいします ～に会えます ありがとうございます さようなら すみません ～がわかりません				
1	自己紹介	～(名前/仕事)です ～がです ～(国)から来ました	ダイアログ形式 A～(名前)です。～(国)から来ました。 B仕事は何ですか？ A英語の先生/エンジニア/大工です。 B仕事は忙しいですか？ Aはい、少し忙しいです。 B～さんは、日本の料理で何が好きですか？ A私は、天ぷらが好きです。 モノログ形式 私は、(名前)です。(国)から来ました。(職業)です。趣味は読書です(読書が好きなです)日本は、自然がたくさんあります。そしてごはんもおいしいです。みなさん、日本に来てください。	自己紹介のあいさつ 日本の料理の名称	○自国の紹介	でも
2	日本人とのコミュニケーション ①生活の情報について(出張し、町の情報)	～はどこですか？ V1:はいです ～はここで買いますか？ ～はい/いいえですか？ ～はい/いいえですか？ ～はい/いいえですか？	ダイアログ形式 Aすみません、スーパーはどこですか？ Bスーパーは駅の近くです。 スーパーまで歩いて10分です Aありがとうございます。 Aどこはいつですか？ B懇話る日は月曜日、悪くない日は水曜日です。 Aどのくらいで買いますか/いくらですか？ Bスーパーで買います、800円くらいです。 Aありがとうございます。 モノログ形式 私は先月日本に来ました。スーパーに行きたいです。でも、道がわかりません。そして、～さんに聞きました。スーパーは、家から歩いて10分くらいでした。とても便利/近いです。	公共の場所(レストラン・銀行・病院・市役所・スーパー・コンビニ) 値段(1-10000円) 高い/安い 曜日(月～日)	○日本と自国の習慣の違い	でも それで
3	買い物・町で	V1:はいです ～は何時間ですか ～はどこですか？ ～まで何分ですか？	ダイアログ形式 ①(ショッピングビルにて) Aすみません、～は何時間ですか？ B～は構いません。 Aありがとうございます。 ② Aすみません、～に行きたいです。どこですか？ B～は、～の近くです。ここから歩いて5分くらいです。 Aありがとうございます。 モノログ形式 日本の冬はとても寒いですが、でも、私は暖かいコートが大好きです。それで昨日、新しく暖かい物に行きました。新しい物で初めて行きました。たくさんお店がありました。私は、かわいいコートを買いました。	間、時間(一分) 本屋さん、靴屋さん、 商品(かばん、靴、本、	○日本と自国の製品の違い	でも
4	乗り物	V1:はいです ～までいくらですか？ ～まで何分ですか？	ダイアログ形式 Aすみません、～(目的地)に行きますか？ Bはい、行きますよ。 A～(目的地)までいくらですか？ B〇〇円です。 Aありがとうございます。 モノログ形式 私は今日、初めてスカイツリーに行きました。でも駅が分かりませんでした。それで、駅員さんに聞きました。スカイツリーは駅から歩いて15分くらいでした。スカイツリーはとても良かったです、そしてきれいでした。もう一度行きたいです。		○日本と自国の交通機関の違い	でも
5	日本人とのコミュニケーション ②飲食の習慣に関すること	～をV1しました 毎日V1ます ～何分V1ます V1ません おです	ダイアログ形式 ① A～さん、朝ご飯を食べましたか？ Bはい。 A何を食べてましたか？ B～を食べました。 Aいつも食べてますか？ Bはい、毎日食べます。好きです。 ② A～さん、～を食べますか/飲みますか？ Bはい、～を食べます/飲みません。 Aはい、～は食べますか？ Bはい、食べます。とても好きです。 モノログ形式 私はいつもシリアルを食べます。朝はとても忙しいです。時間がありません。シリアルは、とても便利です。おいしいです。そして時間がかりません。	テレビを見ます・お酒を飲みます・お風呂に入ります・仕事をします・掃除をします・家事をします・洗濯をします 朝・昼・夜・時間(一時) 頻度を表す(とどき・たまに・いつも・毎日) 食べ物(牛肉、豚肉、米、野菜、 飲み物(コーヒー、紅茶、お茶、牛乳、ジュース、ビール) 好きです・嫌いです	○日本の食べ物の不安な点について話す (宗教・習慣の違いによる問題)	でも
6	レストラン	～を食べたいです ～が分かりません これは～ですか？ ～をお願いします	ダイアログ形式 (料理について質問する) Aこれは豚肉/牛肉/お酒ですか？ Bはい、辛い/塩辛い/すっぱい/甘い/辛い/多い/少ないですか？ (注文する) Aすみません Bはい、ご注文ですか？ Aはい、～を〇つお願いします。 Bはい、かしこまりました。 モノログ形式 私は、今日友達とレストランに行きました。そのお店はとても有名です。私はお肉を食べました。友達はおデザートを食べました。おいしかったです。今度は、ショートケーキを食べたいです。	値段(1-10000円) 辛い/甘い/すっぱい/塩辛い 多い/少ない ～個(1-10個)	○自国の料理紹介	そして それで
7	日本人とのコミュニケーション ③休日に話す	おです ～時から～時までV1ます	ダイアログ形式 A～さん、元気ですか？ Bはい、元気です。 A働いていますか？ Bはい、とど働いています。 Aお休みの日はですか？ B仕事で忙しいです。 A何時から何時まで働きますか？ B朝8時から夜7時までです。 モノログ形式 昨日、夜10時まで仕事をしました。それで今日は朝から寝ています。でも、今日も仕事です。それで病院に行きました。そのあと会社に行きました。	忙しいです・働いています・大変です (体の部位)が痛いです 働きます・勉強します・子どもと遊びます	○仕事で困ったこと	

頁	場面・機能	導入文型	発話モデル	語彙・表現	課題解決型学習	接続詞
8	病院・薬局・緊急事態	Vました ～がいます sdです/たです/でした ～からです ～はどこですか？ ～回です	①(近く)病院があるか聞く A～さん、どうしましたか？ Bかぞをひきました 病院に行きたいです。病院はどこですか？ A駅の近くです。 B名前は何ですか？ A〇〇です。 Bありがとうございます ②(診察で) Aどうしましたか？ Bのどが痛い？ Aいつからですか？ B昨日から A薬を出しますね。 B何回飲みますか？ A一日3回です。 ③ Aすみません。 Bどうしましたか？ A火事です	熱があります。(体の部位)が痛いです ～度 ～曜日からです/～日からです 事故です・財布を無くしました。	○病気になることとの対処法	それで
9	郵便局・役所・銀行	～をたいです/～たいです すみません、～が分かりません もう一度話して欲しい ～でいいですか？ ～をお願いします	① Aすみません、～の手続きをしたいです。 Bそれで、こちらにお名前と印鑑をお願いします Aすみません、もう一度話してください/名前とはどこですか？ ② Aすみません、～に荷物を送りたいです。 Bでは、こちらに記入をお願いします。 Aはい、英語でいいですか？ Bはい、大丈夫ですよ。 A送りたいをお願いします Bはい、わかりました。 Aあと、切手を枚数お願いします	～枚(1-10枚) はがき・切手・荷物・航空便	○家族に送る日本の製品	それで
10	日本人とのコミュニケーション ④世間話をする	sdです sdたです/でした Vます	ダイアログ形式 A～さん、こんにちは、今日は寒いですね。 Bそうです。 A～さん、今日は家で何をしますか？ B今日は、掃除をします/料理を作ります/子どもと遊びます /勉強します/テレビを見ます モノローグ形式 最近忙しかったです。でも今日は仕事がありません(休みです)。今日は友達と買い物します。渋谷に行きます。午後3時から映画館で映画を見ます。とても楽しみです。	晴れ・雨・曇り・雪です 暑い・寒い・涼しい・暖かい 曇かった・寒かった・涼しかった・暖かった 掃除をします/料理を作ります/子どもと遊びます/テレビ/映画を見ます	○日本の生活で大変なこと	そして
11	日本人とのコミュニケーション ⑤過去の経験について話す	Vました ～月～日にVました sdたです/でした またVたいです	ダイアログ形式 A～さん、京都に行きましたか？ Bはい、2005年2月に行きました。 Aどうでしたか？ Bとてもきれいで/とても寒かったです。 A来年、どこに行きたいですか？ B沖縄に行きたいです。 A沖縄で何がしたいですか？ B海を見たいです。 モノローグ形式 私は、2010年に京都に行きました。京都の料理はとてもおいしかったです。そして、町もきれいな街でした。祇園で舞妓さんを見ました。一輪車に乗りました。とてもかわいかったです。京都は少し寒かったです。今度は沖縄に行きたいです。	～に行きました/～を見ました/～を食べました/～を買いました/～に会いました/～と遊びました/園に降りました 楽しかった/おもしろかった/面白かった/きれいでした/安かった/高かった/かわいかった ～に行きたいです/園に降りたいです/～を見たいです/～を食べたいです/～を買いたいです/～に会いたいです/～と遊びたいです	○将来の夢・目標	
12	日本人とのコミュニケーション ⑤家族について話す	これは私の～です ～歳です ～にいます sdです	ダイアログ形式 A(写真を見ながら)これは誰ですか？ Bお兄さんです。 Aかっこいいですね。仕事は何ですか？ Bエンジニアです。 Aどこにいますか？ B国にいます。 A～さんの家族は何人ですか？ B4人です。お父さんとお兄さんと私です。 モノローグ形式 私の家族は4人です。母と父と兄と私です。私の母は優しいです。そしてきれいです。私の父は料理が上手です。そしてかっこいいです。兄は髪が短いです。妹は目が大きいです。私は家族が大好きです。	かわいいかっこいいきれい (目が)大きい/小さい、(髪が)長い/短い、(背が)低い/高い 家族・関心のある名称 ～人(1-20人) 仲がいいです	○家族紹介	そして

算数科と数学科における日本語表現の比較

Comparison between arithmetic department and Japanese expression in the course in mathematics

文学研究科国際言語教育専攻修士課程修了

青木 美寿華

Mizuka Aoki

I. はじめに

昨今の教育現場では、日本語を母語としない児童生徒や、日本国籍を持っていても日本語指導が必要な児童生徒が全国的に増加している。このような児童生徒のことを、通称 JSL 児童生徒¹と呼ぶ。彼らは、1990 年に「出入国管理及び難民認定法」の改正が施行されたことで、滞日外国人とともに増加したと言われている。しかし、JSL 児童生徒数が増加傾向にありながら、わが国では JSL 児童生徒への日本語指導で使多くの課題を抱えている。それでは、JSL を対象とした指導において、一体何が課題となっているのだろうか。本研究では、様々な教科の中でも数学科と算数科を例に挙げ、数学科の教材と算数科の教材で使用される日本語の表現の相違を明らかにする。そして、数学科と算数科の教材で使用される日本語の観点から、JSL 生徒を対象とした指導の問題点について考察する。

II. 日本語指導が必要な JSL 児童生徒数

ここでは、日本語指導が必要な JSL 児童生徒数を概観していく。文部科学省は、公立学校を対象とした「日本語指導が必要な児童生徒の受入れ状況等に関する調査」を毎年行っている。この調査は、1990 年に「出入国管理及び難民認定法」の改正が施行されたことで滞日外国人が増加し、それに伴う子どもたちの増加を契機に 1991 年より開始されたものである。なお、この調査における「日本語指導が必要な児童生徒」とは、「日本語で日常会話が十分にできない児童生徒」や「日常会話ができて、学年相当の学習言語が不足し、学習活動への参加に支障が生じており、日本語指導が必要な児童生徒」のことをいう。では、日本語指導が必要な児童生徒数は一体どれほどの数になるのだろうか。文部科学省(2015)によると、日本語指導が必要な児童生徒数の全都道府県の合計は 33184 人となる。そのうち、日本国籍を持たない児童生徒数は 27013 人で、日本国籍を持つ児童生徒数は 6171 人である。これらの数字は、前回調査よりも増加しており、教育現場では JSL 生徒たちへの日本語指

¹ JSL は Japanese as a second language の略である。

導の充実が急務であるということがわかる²。

Ⅲ. 先行研究

ここでは、学校教育で使用されている教科書の、日本語分析に関する研究を紹介する。一点目は、志村(2008)の中学校の国語科の教科書中で使用されている副詞に関する研究である。同研究では、志村(2007)が国語科の教科書や初級日本語教材から選定した副詞の基礎語の有効性を検証している。検証の結果、JSL 生徒の副詞学習において、基礎語でない副詞を基礎語に言い換えなくて説明した JSL 生徒の方が、学習効率がよいということが示唆された。

二点目は、宮部(2008)の小学校の社会科の教科書における他動詞に関する研究である。同研究では、連語論の観点から小学校社会科教科書の他動詞について分析している。小学校の社会科と理科で使用されている教科書の他動詞を比較し、社会科特有の他動詞の使われ方について述べている。分析の結果、社会の教科書は理科の教科書と比べ、抽象度が高いことや複雑な連語が使用されていることが明らかとなった。

三点目は、宮部(2015)の、小学校の社会科と理科の教科書で使用されている条件文に関する研究である。同研究では、小学校の理科の教科書 12 冊と、小学校の社会科の教科書 12 冊を調査対象とし、条件文がどのように使用されているか調査している。結果として、小学校の社会科と理科の教科書では、ト条件文が最も使用されていることが判明した。一方で、バ条件文に関しては、両教科書ではほぼ使用されていないことも報告されている。以上のように、JSL 生徒に関連して、教科で使用されている日本語の分析等は行われている。しかし、小学校で使用されている教科書と中学校や高等学校で使用されている教科書の日本語の比較や、日本語の文型に焦点を当てた研究は、管見の限りないと言える。

Ⅳ. JSL 生徒を対象とした教材

本章では、JSL 生徒を対象とした教材について紹介する。最近では、JSL 児童生徒を対象とした教材が開発されつつある。各都道府県においても、NPO 法人や市の教育委員会が中心となって、教材開発に取り組んでいるところがある。ここでは、神奈川県内で作成された JSL 児童生徒向けの教材について取り上げていく。まず、横浜の NPO 法人を中心に作成された『教科につなげる学習語彙・漢字ドリル』は、JSL 生徒の母語で教科の語彙がわかるようになるという観点で作成された教材である。語彙にはスペイン語やポルトガル語、中国語といった対訳がついており、学校生活の中で使用される語彙について説明と用例が二言語でまとめられている。

また、JSL 生徒を対象とした教材に関して言えば、文部科学省が運営するホームページに、「かすたねっと」という JSL 児童生徒のための情報検索ページがある。これは、ウェブ上で公開されている

² 文部科学省(2013)は、全都道府県で日本語指導が必要な児童生徒数が 270013 人であると発表している。

JSL 児童生徒を対象とした教材を検索できるサイトである。このサイトでは、言語や教科、地域ごとに教材を検索することができる。同サイトは小学生を対象とした教材が最も多く、科目数も多い。しかし、高等学校になると教科用の教材は見当たらず、学校生活へ適応するための学習や、日本語指導に特化したものが取り上げられている。以上のように、JSL 児童生徒の増加に伴い、彼らを対象とした日本語学習用の教材や、教科学習用の教材が作成されていることがわかる。

V. 問題提起

これまで、JSL 児童生徒を対象とした教材について確認してきた。ここでは、これまでの内容を受け、JSL 児童生徒を対象とした教材における問題を提起したい。まず、これまでの JSL 児童生徒を対象とした教材における問題としては、JSL 児童生徒たちがその教材を使って学習した結果、何ができるようになるのか不明確であるということが挙げられる。わが国では、JSL 児童生徒に対する指導方法やその内容に関して、様々な実践が報告され、教材の活用方法についても紹介されている。しかし、指導の結果 JSL 児童生徒たちが何かを身につけ、何かができるようになったという報告は、管見の限り見当たらない。また、語彙に重点を置いている教材が多く、JSL 生徒がどのようにして日本語を表現すればよいかということに関して述べられているものはない。JSL 生徒たちにとって何ができなくて何ができるということが不明確であれば、指導や教材の改善を行うことは困難である。

また、JSL 生徒を対象とした指導におけるもう一つの問題点は、教師が翻訳に依存しているという点である。翻訳をすることで、JSL 生徒の母語を尊重するということや、学習負担を軽減させるという配慮は確かに大切なことである。しかし、JSL 児童生徒が教科学習を日本語で行うならば、翻訳に頼ってはいつまでたっても教科学習に必要な日本語が身につかない。現に、教科学習で JSL 児童生徒が初めて学ぶ内容を翻訳している教師もいる。しかし、JSL 児童生徒が母語で学習したことの無いものを翻訳しても、生徒の日本語能力は伸びないであろう。以上のように、JSL 児童生徒を対象とした教材における問題点としては、生徒にとって何ができるようになるか不明確であること、また教師が指導の際に教材の翻訳に依存していることが挙げられる。

VI. 研究概要

前述の問題提起を受け、本研究では、様々な教科の中でも数学科を例に挙げ、数学科の教材と算数科の教材で使用される日本語の表現の相違を明らかにする。そして、数学科と算数科の教材で使用される日本語の観点から、JSL 児童生徒を対象とした指導の際に何が問題となるのかについて考察する。

VII. 研究対象

本研究の対象は、中学校と高等学校で使用されている数学科の教材と、小学校の算数科で使用されている教材である。教材は、中学校 1 年生から 3 年生、高等学校の数学 I の教科書を分析対象とした。

また、算数科に関しては、小学校4年生から6年生を対象とした教科書と、小学校1年生から3年生を対象とした文章題の教材を今回の研究対象としている。教材の種類については、以下の表1にまとめた。

対象	教材名
小学校1年生	『ずけいと文しょうだい小学1年』（大創出版）
小学校2年生	『図形と文しょうだい小学2年』（大創出版）
小学校3年生	『図形と文章題小学3年』（大創出版）
小学校4年生	『わくわく算数4上』（啓林館）
小学校5年生	『わくわく算数5』（啓林館）
小学校6年生	『わくわく算数6』（啓林館）
中学校1年生	『新しい数学1』（東京書籍）
中学校2年生	『新しい数学2』（東京書籍）
中学校1年生	『新しい数学3』（東京書籍）
高等学校1年生	『数学I』（数研出版）

表1 本研究で調査した数学科並びに算数科の教材一覧

VIII. 研究方法

本章では、前述で紹介した数学科と算数科の教材で使用されている日本語の表現を分析するべく、以下の手法をとった。詳細は各節で説明するが、最初に何をもちいて日本語の表現とするのか、本研究における日本語の表現の定義づけを行った。次に、先ほどの手法を踏まえ、数学科と算数科の日本語の表現の抽出を行った。最後に、数学科と算数科独自の表現を考慮し、どのような機能・概念を持つか整理した。

1. 本研究での日本語の表現の定義づけ

本研究では、数学科と算数科の日本語の表現を抽出するにあたり、寺村(1983)の『日本語表現文型中級I・II』と、小柳(2002)の『ニューアプローチ 中上級日本語』を参考にした。両書は、中級レベルの日本語学習者を対象とした教材で、機能・概念ごとに文型が配置されている³。これは、寺村自身

³ 『日本語表現文型中級I・II』と『ニューアプローチ 中上級日本語』は機能・概念シラバスの教材である。機能・概念シラバスののはじまりは、1970年代に遡る。この時代に、D. A. Willkinsらによってコミュニカティブ・アプローチに基づく教材開発や授業設計が行われた。コミュニカティブ・アプローチとは、機能言語学と社会言語学の理論に基づき、学習者の伝達能力の習得に重点を置いている教授法のことである。機能・概念シラバスは、このコミュニカティブ・アプローチに基づいたシラバスで、学習者のニーズや目的、伝達能力の育成を重視して作成される。現在一般的に使用されている日本語教材では、中級以上の日本語学習者を対象として機能・概念シラバスを取り入れている。

算数科と数学科における日本語表現の比較

が「『構造文型⁴』に対するもの」と述べているように、一般に日本の大学で要求される日本語表現の文型⁵を抽出し、作成された教材である。今回扱った教材の対象者は中級レベル以上であるが、導入されている文型の中には、初級日本語教材で導入されている文型も多く、初級と中級、あるいは話し言葉と書き言葉を対比しているので参考になる。また、各機能を見るとわかるように、文型の配列も難易度および必要度に考慮して配列されている。したがって、数学科並びに算数科で使用されている日本語の機能・概念の考え方としては、『日本語表現文型中級Ⅰ・Ⅱ』と『ニューアプローチ 中上級日本語』を参考に分類を行う。

2. 数学科並びに算数科で使用されている日本語の表現の抽出

研究方法の二番目は、数学科と算数科に実際に登場する日本語の表現を抽出することである。本研究では、教材内で示されている文章題において、数学科並びに算数科ではどのような日本語の表現が使用されているのか着目した。本研究では、あくまでも日本語の表現に焦点を当てているため、単語などの語彙は今回の抽出対象とはしていない。

3. 数学科並びに算数科で使用されている日本語の表現を機能ごとに整理

研究方法の三番目は、前述で抽出した数学科の文型を機能ごとに整理することである。本研究では、寺村(1983)や小柳(2002)が示している文型を参考にしているため、数学科並びに算数科の教科書から抽出した日本語の表現を、機能ごとに整理する必要がある。しかし、ここで注意しなければならないのは、数学科並びに算数科に特化した機能・概念を新たに作成しなければならないということである。機能・概念シラバスで作成された一般的な日本語教材は、日常的なコミュニケーションや読み書きの中で使用される機能・概念の枠組みで整理されている。そのため、数学科や算数科の授業で使用される日本語の基本的な機能・概念を新たに考える必要がある。

IX. 研究結果

前述の研究方法で、数学科並びに算数科で使用されている日本語の表現を調査・分析した結果、両教科では同じ性質を持つ教科でありながら、日本語の表現の特徴に違いがみられた。また、同じ数学科でも、中学校で使用されている教材と、高等学校で使用されている教材では、日本語の表現が異なることも分かった。筆者はこれから、数学科で使用されている日本語表現の特徴と、算数科で使用されている日本語の表現の特徴を述べる。そして、両者の特徴を踏まえながら、数学科並びに算数科で使用されている日本語の表現の違いについて比較していく。

⁴ 構造文型とは、『新・はじめての日本語教育基本用語事典』によると「文法的な観点を基本にして、品詞、活用、助詞や助動詞の種類といったことをてがかりに整理された文型」(p.110)のことである。

⁵ 表現文型は、『新・はじめての日本語教育基本用語事典』によると「文法という観点よりは、表現内容、発話の意図・機能、談話の場面という観点から、それぞれに適当な文を類型化した」(p.110)文型のことを指す。

X. 数学科と算数科との日本語の表現の違い

ここでは、数学科並びに算数科で使用されている日本語と、算数科で使用されている日本語との違いについて述べる。小学生を対象とした算数科と、中学生以上を対象とした数学科の大きな違いは文体である。これは、それぞれの教科書の説明を見るとわかるように、算数科ではデス・マス体が使用され、数学科ではデアル体が使用されている。しかし、算数科と数学科との違いはこれだけではない。算数科と数学科では、文体以外にも日本語の表現が異なるのである。

1. 四則計算

算数科と数学科における日本語の違いの一つは、四則計算の表現である。中学生以上を対象とした数学科では、正負の数より「プラス」と「マイナス」を使った表現が登場する。また、加法に関しては、「～に～を加える」という文型も登場する。数学科の四則計算の表現は表 2 にまとめた。

加法	～プラス～は～である
	～と～の和は～である
	～に～を加えると～になる
	～と～をあわせて～
	～と～の合計は～
減法	～マイナス～は～である
	～と～の差は～である
	～から～をひくと～になる
乗法	～と～の積は～である
	～に～をかけると～になる
除法	～の商は～である
	～から～をわると～になる

表 2 数学科の四則計算で使用されている日本語の表現

しかし、算数科における四則計算の表現は、数学科と異なる。以下は、四則が初めて登場する小学校 1 年生から 3 年生を対象とした算数科における問題文である。

- (1) りんごが 10 こ あります。5 こ もらいました。りんごは ぜんぶで なんこになりましたか
- (2) おりがみが 10 まい あります。3 まい つかいました。のこりは なんまいですか。

算数科と数学科における日本語表現の比較

(3) 1さらに りんごが 2こずつ のって います。3さら分では、 りんごは ぜんぶで 何こに なりますか。

(4) 27 この消しゴムを同じ数ずつ 3人で分けると、1人分は何こになりますか。

以上の問題文は、昇順に足し算、引き算、かけ算、わり算となっている。足し算と引き算は小学校1年生、かけ算は小学校2年生、わり算は小学校3年生で初めて導入される。ここで注目したいのは、小学校1年生から3年生の算数科は、「足す」「引く」「かける」「割る」という表現が最初から登場しないということである。つまり、算数科の四則計算は、帰納的に導入されていることがわかる。中学生以上は、「足す」「引く」「かける」「割る」という概念が前提にある。しかし、小学生に四則を導入するには、それぞれがどのような現象を表すのか実例を示しながら指導しなければならない。したがって、算数科における四則計算の文型では、「足す」「引く」「かける」「割る」以外の表現がいくつか登場する。算数科の四則計算の文型をまとめると、以下の表ようになる。

機能・概念	文型
足し算	～と～で～です ～は全部で～です ～と～を合わせて～になります ～たす～は～です ～に～をたすと～になります ～と～の合計は～です ～と～の和は～です
引き算	～の残りは～です ～と～のちがいは～です ～ひく～は～です ～と～の差は～です
かけ算	～は全部で～です ～かける～は～です ～と～の積は～です
わり算	～を～に分けると～になります ～わる～は～です ～と～の商は～です

表3 算数科における四則計算の表現

算数科においては、小学校 5 年生程度を対象にした教科書であれば、「和」「差」「積」「商」を使った表現が登場する。しかし、加法における「加える」というような表現や、「プラス」「マイナス」を使用した表現は中学以上にならなければ登場しない。このように、四則計算の文型を見ても、算数科と数学科では表現が異なるということがわかる。

以上のような文型の違いについて、現在 JSL 生徒を対象に作成された教材には何も配慮がなされていない。すなわち、JSL 生徒を対象に作成された教材は、四則計算に関する言葉を翻訳したものか、易しい言葉に書き換えたものがほとんどである。易しい言葉に書き換えることは、生徒の理解を促すうえで必要なことではある。しかし、易しい言葉だけでは数学科を学習するうえで不十分である。したがって、教師は算数科で使用される表現と数学科で使用される表現の違いを理解したうえで、言い換えさせる活動を取り入れなければならない。

2. 条件文

算数科と数学科における文型の違いの二つ目は、条件文の表現である。まずは、数学科で使用されている条件文の種類について確認する。

～ば
～と
～ならば
～を～とする
～を～とおく
V ことにする
～を～にする
ただし～
V たところ

表 4 数学科で使用されている条件文

このうち、「～ば」「～と」「～ならば」「ただし～」「V たところ」は、一般の日本語教材でも学習するような条件文の表現である。一方、「～を～とする」「～を～とおく」「V ことにする」「～を～にする」の 4 点に関しては、数学科独自の表現で、証明問題などで使用されている表現である。

次に、算数科で使用されている条件文について確認する。算数科で使用されている条件文については、表 5 にまとめた。

算数科と数学科における日本語表現の比較

～と
～たら

表 5 算数科で使用されている条件文

表 5 から分かるように、算数科で使用されている条件文の種類は、数学科に比べ極めて少ない。以下は、算数科で実際に使用されている条件文の例である。

(5) テープを 6m 買うと 270 円でした。1m のねだんは何円ですか。

(6) 油を 3/4L 買ったら、600 円でした。この油 1L の値段は何円ですか。

「～たら」については、数学科で登場する「～たところ」との比較で詳細を述べる。ここではまず、「～と」の意味を確認する。『日本語文型辞典』によると、「～と」には以下の用法・意味があるという。

特定の個人やものではなく、人やものごと一般についての条件関係を述べる表現で、「X が成立する場合に必ず Y が成立する」という意味を表す。(中略)

前のことがらが起こると、それに引き続き自動的・自発的発生的に後のことがらが起こるというような関係を表すことが多く、自然界の法則を述べる場合によく使われる。

(『日本語文型辞典』 pp.287-288)

この「～と」の用法から、今回例として挙げた(5)の問題文を考察すると、テープを 6m 買うというできごとに引き続いて、その値段が 270 円であったということがわかったというように解釈できる。この問題文では、1m のテープの値段がいくらかを問うているが、実際に計算すればわかるように、1m のテープが 45 円だということがわれば、6m のテープが 270 円になるのは必然的である。つまりこのことから、「X が成立する場合に必ず Y が成立する」という『日本語文型辞典』の解説も理解できる。

それでは、「～たら」の用法はいったいどのようなものなのであろうか。数学科で使用されている「V たところ」との比較を交えながら、それぞれの用法について考察したい。以下の二つの文はそれぞれ、算数科と数学科の教科書で出題されている問題である。問題文の内容としては、両者ともにある動作を行い、その結果について問いが挙げられているものである。条件文の表現に該当する箇所には下線を引いた。

(7) 1.4 l のすなの重さをはかったら、2.6.kg ありました。このすなの 1l の重さは何kgですか。

(8) ある町の世帯人員別の世帯数を調べたところ、次の表のようになった。最頻値を求めよ。

(5) は算数科の教科書中の問題文で、「Vたら～た」という文型が使用されている。一方、(6) は数学科の教科書中の問題文で、「Vたところ～た」という文型が使用されている。文の形式としては、両者ともに前件も後件も過去形である。両者は似ているが、「Vたら～た」と「Vたところ～た」には何か違いがあるのだろうか。ここで、両者がどのように説明されているのか、『日本語文型辞典』（くろしお出版）でそれぞれの用法を確認したい。まず、「Vたら～た」についての説明を確認しよう。「Vたら～た」は、『日本語文型辞典』で以下のように説明されている。

「Xたら Yた」という形で前後ともすでに実現していることがらを表す。Xが成立した場面でYを話し手が新たに認識したり、それをきっかけに新しいことがらが起こったりするようなことをいう場合に使う。Yには、話し手の意志が及ばないようなことがらの出現や、それが新たに見つかった、分かったといった意味の表現が続く。

この説明から(5)の内容を考察すると、Xは1.40の砂の重さを量るということであり、Yはそれがkgでは2.6kgであったということである。つまり、(6)は砂の重さを量った結果、それが2.6kgであるということが認識されたということがわかる。それでは「Vたら～た」の用法がわかったところで、次に「Vたところ～た」を確認しよう。「Vたところ～た」は、『日本語文型辞典』で以下のように説明されている。

動作を表す動詞のタ形に付いて、後に続くことがらの成立や、発見のきっかけを表す。前後にくることがらには直接的な因果関係はなく「…したら、たまたま／偶然そうであった」という関係である。後に続くことがらは前の動作をきっかけに話し手が発見した事態で、すでに成立している事実の表現が用いられる。

この説明に(6)の問題文をあてはめると、動作とはすなわち世帯数を調べるということであり、後に続くことがらとは調べた世帯数が教科書中の表のようになったということである。つまり、世帯数を調べた結果、その世帯数は教科書中の表のようになったことが認識されたということである。以上のことから、前の動作を行った結果、後のことがらがわかったという点で、「Vたら～た」と「Vたところ～た」は、基本的にはほぼ同じ用法であるということがいえる。

しかし、同じような用法でありながら、実際に算数科では「Vたら～た」が使用され、数学科では「Vたところ～た」が使用されている。小学生対象の教科書は、個人的な体験を語るような口語的な文章で書かれるのに対して、中学生以上になると客観的な視点による書き言葉的な文章が多用される

算数科と数学科における日本語表現の比較

ようになる。もし、高等学校に在籍する JSL 生徒を対象とした日本語指導において、生徒にこの条件文で何か表現をさせる場合は、「V たところ～た」を使用できるように導入しなければならない。このような違いは、JSL 生徒を対象とした日本語指導や教材において、区別されていない点であるがゆえに、明確にしておきたい。

3. 命令文

数学科や算数科で問題を解くときに、必ずと言ってよいほど問題文の最後に書かれているのが命令文である。命令文が示されることで、数学科や算数科を学習する児童生徒は、その問題を解かなければならないと認識する。しかし、この命令文の表現も数学科と算数科では異なる。また、同じ数学科でも、中学校と高等学校では表現が異なるということをこれから述べていく。

まずは、数学科で使用されている命令文の表現を確認する。数学科で使用されている命令文については、表 6 にまとめた。

V よう
V ましょう
V なさい
V せよ/Ve よ
～Ve

表 6 数学科で使用されている命令文

表 6 のうち、中学校の数学科で使用されている命令文は「V よう」「V ましょう」「V なさい」であり、高等学校で使用されている命令文は「V せよ/Ve よ」「～Ve」である。実際に教科書で使用されている、以下の例を確認したい。

- (9) 次の x 、 y の関係を式に表しなさい。
- (10) 次の 2 次方程式を解け。
- (11) 2 次関数のグラフが、3 点(-1,0)、(2,3)、(3,-4)を通るとき、その 2 次関数を求めよ。

(9) は中学校の数学科で、(10) と(11)は高等学校の数学科である。これらはどれも学習者に問題を解かせるよう指示している文であるが、同じ数学科でもなぜこのような違いが出ているのだろうか。「V よう」「V ましょう」については、算数科の命令文で後述するとして、まずは「V せよ/Ve よ」「～Ve」について考察していきたい。

「V なさい」「V せよ/Ve よ」「～Ve」はそれぞれ、命令の意味を持つ表現である。では、それぞれの

用法は、どのようになっているのであろうか。以下は、「Vなさい」「Vせよ/Veよ」「～Ve」に関する説明である。

「Vなさい」

動詞「なさる」の命令形。〔本来は、動詞「なさる」の連用形の音便の形「なさい」に助動詞「ます」の命令形「ませ」（または「まし）の付いた「なさいませ」（または「なさいまし）の省略形〕

（『大辞林』三省堂）

「～Ve」

用言・助動詞の活用形の一。六活用形のうち、第六番目に置かれる。他に命令することを表す形。形容詞・形容動詞の命令形は文語だけにあり、可能動詞と一部の助動詞には命令形がない。

（『大辞林』三省堂）

「Vせよ/Veよ」

サ変動詞「す」の命令形。

（『学研全訳古語辞典』）

以上の説明を踏まえると、中学校と高等学校の数学科で使用されている命令文の違いは、二点あるのではないかと筆者は考える。一点目は、それぞれの命令形の動詞の原形の違いである。「Vなさい」は動詞「なさる」の命令形で、「～Ve」動詞の活用形、「Vせよ/Veよ」はサ変動詞「す」の活用形である。この中で、性質が異なるものは「Vなさい」である。なぜならば、「Vなさい」の原形である「なさる」は、動詞「する」の尊敬語⁶であるゆえに、単純に動詞の命令形となっている「～Ve」「Vせよ/Veよ」とは、丁寧度が違うと考えられるからである。また、「Vせよ/Veよ」は古風な言い表し方で、本格的に古典を学習する高等学校においては、問題文に使用されていても違和感がない。このように、同じ命令形でも、それぞれの命令形の動詞の原形の違いによって、丁寧度が変わるのではないかと筆者は考える。

二点目は、一点目と関連して、中学校の数学科は高等学校の数学科よりも、全体的に文体の丁寧度が高いということが挙げられる。中学校の数学科は、高等学校の数学科よりデス・マス体が使用されていることから、命令文にもその違いが現れているのではないかと筆者は考える。前述のように、小学校の算数科では、完全にデス・マス体が使用されていた。しかし、算数科の次のステップである中学校の数学科では、デス・マス体とデアル体が混合して使用されている。中学校の数学では、多くの場合

⁶ 三省堂『大辞林』参照。

算数科と数学科における日本語表現の比較

説明文や導入の文でデス・マス体が使用され、問題文でデアル体で使用されている。一方で、高等学校の数学では、デス・マス体がほとんど見られず、説明や問題はデアル体で書かれている。高等学校では、中学校と比べると教科の内容が複雑化し、日本語の表現のレベルも上がる。中学校で学習する数学は、ちょうど小学校と高等学校の架け橋にあたる。中学校の数学科では、丁寧な表現を用いながらも、高等学校でより複雑な日本語の表現を使って学習できるよう、随所にデアル体が使用されている。以上のように、中学校と高等学校の数学科で使用されている命令文の違いは、動詞の原形の違いと文体の丁寧度の違いだということがわかる。

それでは、残りの「Vよう」「Vましょう」についてはどうであろうか。まず、今回筆者が調査した算数科の教材は、問題文の指示が「Vましょう」で記されていた。また、中学校の数学科では、「Vましょう」に加え、「Vよう」も使用されている。しかし、高等学校の数学科の問題文では「Vよう」「Vましょう」は登場しない。そもそも、「Vよう」「Vましょう」にはどのような用法があるのだろうか。「Vよう」「Vましょう」の一般的な用法について『日本語文型事典』を確認したい。

「Vよう」「Vましょう」

<意向>

意志的な動詞を用いて、話しての行動の意志を表す。また、使用される状況によって、<申し出>、<誘いかけ>、<間接的要求>など、異なる用法を持つ。

<意志>

意志的な行為を表す動詞に用いて、その行為を行おうとする話し手の意志をあらわす。

<誘いかけ>

聞き手もいっしょに行動するように誘いかけるのに用いる。

<呼びかけ>

複数の人々に「…する／しないようにしよう」とある行動をとる（とらない）ように呼びかけるのに用いる。

以上のように、「Vよう」「Vましょう」のそもそもの使い方には、4種類あることがわかる。ここで改めて、数学科や算数科で実際に使用されている問題文を例に挙げ、考察していく。

(12) 式をかいて答えを求めましょう。

(13) かっこをふくむ方程式や、係数が整数でない方程式を解いてみよう。

以上の例を見ると、『日本語文型事典』で解説されている<意向>や<意志>や<誘いかけ>、<呼びかけ>は該当しないということがわかる。一つずつ確認すると、まず<意向>や<意志>は、教科書の問題文自身が答えを求めたり、式を解いたりするわけではないため、該当しない。次に<誘いかけ>は、一見該当するよう見えるが、<意向>や<意志>同様に問題文自身が答えを求めたり、式を解いたりするわけではないため、該当しない。最後に<呼びかけ>は、これも該当するよう見えるが、あくまでも問題文を読んだ相手、すなわち学習者に問題を解くよう促す働きしかもたないため、これも該当しない。以上のように、算数科や数学科で使用される「Vよう」「Vましょう」は、一般的な日本語の意味とは違うことがわかる。

「Vよう」「Vましょう」が、命令文あることを理解するためには、「Vよう」「Vましょう」が使用されている問題文に、前述の「Vなさい」や「Vせよ/Veよ」、「～Ve」を置き換える必要がある。先ほどの(12)と(13)に「Vなさい」や「～Ve」を置き換えたのが、以下の(14)と(15)である。

(14) 式をかいて答えを求めなさい。

(15) かっこをふくむ方程式や、係数が整数でない方程式を解け。

以上の例を見ても、問題文としては違和感がないといえるであろう。つまり、「Vよう」「Vましょう」には、命令と同じ機能があることがわかる。ではなぜ、算数科において、直接的な命令の形を用いずに、一般的に<意志>や<誘いかけ>としての意味を持つ「Vよう」「Vましょう」が使用されているのだろうか。それは、小学校の教育において、直接的な命令形を使う場面が非常に少ないためであるからであると考えられる。教師が自児童に対し何か指示を出すとき、おそらく多くの場合は「Vよう」「Vましょう」という表現を用いて指示するであろう。仮に高等学校の教材で登場するような「Vせよ/Veよ」や「～Ve」を教師が児童に対して用いるならば、児童にとっては教師の指示が語感的に強く、強制力の強いものになってしまうであろう。以上のように、数学科と算数科の命令文には様々な違いがあることがわかる。

XI. JSL 児童生徒を対象とした指導の問題点

以上のように、数学科並びに算数科で使用されている日本語の表現には様々な違いがあることがわかった。では、この結果を踏まえたうえで考えられる JSL 児童生徒を対象とした指導の問題点として、一体何が言えるのであろうか。筆者は、以下のように考える。前述でも触れたが、現在作成されている JSL 児童生徒を対象とした教材の多くは、対訳付きのものか、語彙を習得するためのものである。これらの教材は、単語や言葉の意味の理解に重点を置くあまり、本研究で示したような日本語の表現については意識されていない。つまりこのことは、従来の JSL 児童生徒を対象とした教材は、JSL 児童生徒が在籍する学年にふさわしい日本語の表現が使用されていないということである。例えば、高

算数科と数学科における日本語表現の比較

等学校の数学科で使用されている日本語の表現は、古典的な日本語も登場する。しかし、高等学校に在籍するような JSL 生徒が使用している教材の多くは、初級日本語教材で学習するような簡単な日本語である。確かに、JSL 児童生徒の日本語の理解という点では、初めは易しい日本語を用いなければならない。しかし、JSL 児童生徒が日本語で教科を理解していくためには、対訳や易しい日本語では教科学習についていけなくなってしまう。数学科や算数科は、学年が上がるにつれ、より複雑な思考が求められる教科である。特に、中学校から導入される証明問題などでは、論理的に物事を考えなければならない。生徒自身が論理的に物事を考え、表現しなければならない場面で、果たして語彙の暗記が役に立つであろうか。

XII. おわりに

本研究では、数学科と算数科で使用されている日本語の表現を比較した。比較した結果、数学科と算数科では様々な表現の違いがみられた。また、同じ数学科であっても、中学校の数学科と高等学校の数学科では若干表現が異なることもわかった。数学科と算数科は、学年が上がるにつれ、学習内容が複雑になるだけでなく、日本語の表現も変化していくということが本研究で明らかになった。

今後の課題としては、この比較した結果を踏まえてうえで、各学年に合った具体的な指導方法や、練習問題をどのように扱うかである。また、本研究では、数学科と算数科を対象に日本語の表現を調査したが、他の教科で使用されている日本語についてもさらに研究する必要がある。

参考文献

- グループ・ジャマシイ(1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
関正昭(1997)『日本語教育史研究序説』スリーエーネットワーク
高見澤孟ほか(2004)『新・はじめての日本語教育基本用語事典』アスク出版
中学・高校生の日本語支援を考える会(2010)『JSL 中学高校生のための教科につなげる学習語彙・漢字ドリル 中国語版』ココ出版
中学・高校生の日本語支援を考える会(2011)『進学を目指す人のための教科につなげる学習語彙 6000 語 日中対訳』ココ出版
中学・高校生の日本語支援を考える会(2012)『JSL 中学高校生のための教科につなげる学習語彙・漢字ドリル スペイン語版』
日本語・教科学習支援ネット(2015)『JSL 中学高校生のための教科につなげる学習語彙・漢字ドリル 英語版』ココ出版
樋口万喜子編(2008)『用例付学習語彙 5000 語日・スペイン語対訳』向晶子ほか訳、自費出版
文部科学省「かすたねっと」文部科学省ホームページ <http://www.casta-net.jp/>
文部科学省(2009)「学校教育における JSL カリキュラム (中学校編) -数学科-」
文部科学省(2012)「外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント DLA」
文部科学省(2013)「『日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査 (平成 24 年度)』の結果について」
文部科学省ホームページ
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/04/1332660.htm (2015 年 4 月 3 日更新)
文部科学省(2015)「『日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査 (平成 26 年度)』の結果について」
文部科学省ホームページ
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/1357044.htm (2015 年 4 月 24 日更新)

分析した教材

【算数科】

大創出版編(2014)『ずけいと文しょうだい小学1年』大創出版

大創出版編(2014)『図形と文しょうだい小学2年』大創出版

大創出版編(2014)『図形と文章題小学3年』大創出版

清水静海ほか(2015)『わくわく算数4上』啓林館

清水静海ほか(2015)『わくわく算数5』啓林館

清水静海ほか(2015)『わくわく算数6』啓林館

【数学科】

大島利雄ほか(2012)『数学I』数研出版

藤井齊亮ほか(2014)『新しい数学1~3』東京書籍

【日本語教材】

小柳昇(2002)『ニューアプローチ 中上級日本語〔完成編〕』語文研究社

寺村秀夫(1983)『日本語表現文型 中級I・中級II』凡人社

テ形節による前触れの用法に関する考察 —学習者の発話の分析を通して—

Observations on the forerunner usage of the TE-clause : Through the analysis of dialogue transcript by learners

文学研究科国際言語教育専攻修士課程修了

橋本加代

Kayo Hashimoto

はじめに

日本語の複文には、従属節の述語がテ形となり、節を形成しているものがある。このような従属節は「テ形節」¹と呼ばれ、日本語教育では初級の早い段階で導入されている。しかしながら、このテ形節が持つ用法は、「付帯状況」「継起」「原因・理由」「並列」など多岐にわたっている。また、各用法が文法的に正しい文として成り立つためには、従属節・主節間の主体の異同や述語の性質に関して、様々な制約を守っている必要がある。そのため、テ形の複文は、「継起」や「理由」を表せる接続形式として初級で導入されるにもかかわらず、文法的に正しい文を作って使いこなすには長い時間を要する。本研究では、いくつかあるテ形節の用法の中で「前触れ」と呼ばれる用法に着目し、学習者の誤用の原因と訂正方法について考えていく。

I. 先行研究

1. テ形節の誤用に関する先行研究

ここでは、テ形節の誤用を扱った先行研究を見る。テ形節の誤用に対する分析は、これまでもいくつかの先行研究で行われ、また、それらの誤用の訂正方法が示されてきた。たとえば、吉田(1994)は学習者のテ形に関する誤用をその原因ごとに分類したうえで、それぞれの訂正方法を示している。ただし、吉田(1994)の誤用分析は「原因・理由」の用法に関するものが主で、それ以外の用法に関しては深く言及されていない。また、吉永(2006)もテ形節の誤用分析を行なった研究であるが、分析対象は「継起用法」と「因果用法」に関するものにとどまっている。さらに、塩入(2012)も学習者のテ形節の誤用を訂正方法ごとに分類した研究であるが、それらの誤用の理由は学習者の母語である中国

¹ 本研究では、「動詞」「形容詞」「判定詞(だ・である・です)」「助動詞」「補助動詞」のテ形によって複文の従属節を形成しているものを「テ形の複文」、その従属節を「テ形節」と呼ぶ。ただし、これらのうち複合辞または複合述語として機能しているテ形は扱わない。

語からの干渉という観点で分析されている。

2. 先行研究の問題点

前節で述べた通り、これまでもテ形節の誤用を扱った研究はいくつかあった。しかしこれらの研究には、「話し言葉」という観点が不足しているだけでなく、「前触れ」という用法に着目していないために、十分な分析が行われていないという難点がある。以下では、この2つの問題点に関して述べる。

(1) 話し言葉という観点の不足

先行研究の問題点の1つ目として、「話し言葉」への着目という観点が不十分であるということがある。すなわち、母語話者がテ形の複文を、書き言葉よりも話し言葉で頻繁に使用しているという事実が考慮されていないということである。この事実は他の先行研究でも指摘されている。たとえば、CSJとBCCWJ²を使って数量的な研究を行なった丸山(2014)は、それぞれのコーパスに含まれる5つのレジスターごとに「節境界解析」を実施し、各レジスター20万語あたりに現れた節境界の出現数を集計している。このデータを参照すると、「テ節」「デ節」は、書き言葉のレジスター(書籍・雑誌・新聞)よりも、話し言葉のレジスター(学会講演・模擬講演)に多く出現していることがわかる³。また、母語話者が話し言葉で使用した接続助詞の数を集計した深川(2007)でも、「～て」は82回使用されており、最も多く使用された「けど・が」(85回)とほぼ同数であることが明らかになっている⁴。話し言葉でのテ形節の使用頻度の高さは、このような先行研究からだけでなく、母語話者の発話を観察することによっても明らかである。たとえば、以下の母語話者の発話には、テ形による節がいくつも連なるものが頻繁に観察できる⁵。なお、「I」はインタビュアーの発話、「NNS」は学習者の発話、「NS」は日本人の被験者の発話であることを表す。

(1) [自分の研究テーマを説明する場面]

NS: 黒人女性一の、あの、詩人で、マヤ・アンジェロさんっていう方、あの、クリントン大統領の就任式で詩を読んだ方なんですけれども、彼女にとっても興味を持っていて、今一彼女の本に出会って一すごく一まあ、彼女についてやっていきたいなあっていうふうにすごく思って、【後略】(Araki-20) (インタビュー形式による日本語会話データベース)

また、テ形節の分析に「話し言葉」という観点が不可欠であるということは、このような話し言葉での使用頻度の高さからだけでなく、その訂正方法の違いからも言える。たとえば、前掲の吉永(2006)は、(2)のような学習者の誤用を紹介したうえで、(3)のような修正例を示している。

² CSJは「日本語話し言葉コーパス」、BCCWJは「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を指す。

³ 丸山(2014)表3を参照。「テ節」の出現数は、学会-347、模擬-769、書籍-448、雑誌-408、新聞-408。「デ節」の出現数は、学会-2884、模擬-3903、書籍-2122、雑誌-1625、新聞-1080。

⁴ 深川(2007)の分析対象は、独自に収集した5人分のインタビューにおける発話である。

⁵ このように節がいくつも連なる文は岩崎・大野(2007)によって「非即時文」と名付けられている。また、非即時文は途中の節は「て形」や「たら形」で繋がるが多いと指摘されている(140頁)。

テ形節による前触れの用法に関する考察

(2) ?お金を落としてレストランに行きませんでした。(吉永 2006)

(3) お金を落としてレストランに行きませんでした。(同)

吉永は、(2)の文に関して「因果解釈の読みが弱くなっている」と指摘し、(3)のように不可能の結果を表す成分を付加することで因果関係を強化する必要があるとしている。しかし、(2)の文が(4)のように発話されたとすれば、不自然ではない。

(4) お金を落としてしまって、それで結局レストランに行きませんでした。

すなわち、テ形を使った複文を、書き言葉のように整った文として扱う場合と、話し言葉のように様々な要素を加えて調整しながら作り上げていく文として扱う場合では、その訂正方法に違いが出てくるということである。しかし、いずれの先行研究でも書き言葉と話し言葉の違いは意識されておらず、主に作文の誤用を扱っていることから、誤用の訂正も書き言葉であることを前提として行われていると考えられる⁶。ここに先行研究の1つ目の問題点がある。

(2) 「前触れ」の用法への着目の欠如

先行研究の2つ目の問題点は、「前触れ」という用法に着目していないために、十分な分析が行われていない箇所があるという点である。この「前触れ」の用法とは、「主節で述べる内容を従属節で前触れる的に述べる」(日本語記述文法研究会編 279 頁)というもので、たとえば以下のようなテ形節の用法を指す。

(5) 問題が1つあって、父は英語が話せないのである(日本語記述文法研究会編 2008: 279 頁)

日本語記述文法研究会編によると、この用法はテ形節の用法の中で最も従属度が低く、文の切れ目に近い独立度の高い用法であると言われている。しかし、吉田(1994)および塩入(2012)は、文の切れ目に近い箇所でのテ形節の誤用を指摘しているものの、その誤用の原因に関しては詳しく記述していない。たとえば、次の(6)~(8)のような誤用例を示し、それに対して、独立度の高い「が」「けれども」かまたは終止形に置き換えるべきであるという訂正方法を述べているだけである。

(6) 皆はわかったはずだと思って、学生には一番大切なのは、知識を習うということだ。(吉田 1994:97 頁)

(7) 夢の中のほかのことを忘れて、多分夏休みの一日だね。(塩入 2012: 8 頁)

(8) それは僕の夏休みの一日で、普通に楽しかったです。(同)

これはすなわち、このような文の切れ目に近い独立度の高い箇所に現れるテ形節および「が」「けれども」の使い分けが明確になっていないということである。

本研究では、これらの先行研究の問題点を踏まえ、テ形節の「前触れ」の用法を認定することの重要性を述べたうえで、話し言葉での「前触れ」の用法の誤用を観察し、その誤用の原因を探りたい。

⁶ 吉田(1994)では、一部、対話資料も扱っている。しかし、継起用法の定着の度合いに、書き言葉と話し言葉で違いがないという点に言及しているのみである。

II. 「前触れ」の用法の位置づけ

1. 「前触れ」の用法に関する先行研究

ここでは、前述した「前触れ」の用法について詳しく紹介するが、この用法を提示している先行研究は少なく、管見の限りでは日本語記述文法研究会編(2008)のみである。同書では、「テ形・連用形⁷による接続」を以下の8つの用法に分類し、その一つとして(11)「前触れ」の用法を定めている。

- (9) 日曜日、父は釣りに行き、母は買い物に出かけた。(並列)
- (10) 盆地の気候は、冬は寒く、夏は暑い。(対比)
- (11) 問題が1つあって、父は英語が話せないのである。(前触れ) (=5)
- (12) デパートに行って、くつを買った。(継起)
- (13) 風邪をひいて、仕事を休んだ。(原因・理由)
- (14) わかっている言わないなんて、ひどい。(逆接)
- (15) 参加者は、幹事を入れて8人だ。(順接条件)
- (16) 胸を張って、堂々と行進した。(付帯状況) (日本語記述文法研究会編 2008:279 頁)

この分類は、従属節と主節との間にある意味関係に着目したもので、その意味関係の捉え方は他の先行研究に比べて詳細である⁸。たとえば、(10)の「対比」や(11)の「前触れ」は、他の研究では言及されていないか、または「並列」の用法に集約されていることが多い。同書では、「前触れ」の特徴を(17)のように説明し、(18)~(21)のような例を挙げている。

- (17) 主節で述べる内容の趣旨を前触れ的にテ形・連用形で述べることがある。従属節で抽象的・概括的・結論的に述べた内容を、主節で具体的・詳細に述べ直すという関係になっている。
- (18) 問題が1つあって、父は英語が話せないのである。(=5)
- (19) 田中さんの経歴がまたユニークで、大学院に入る前はコンビニの店長だったという。
- (20) 前の晩あまり寝られなかったらしく、眠そうな顔をしている。
- (21) 何度かけても通じないはずで、携帯の電源を切っていたらしい。

(日本語記述文法研究会編 2008: 282~283 頁)

このように、「前触れ」の用法は従属節および主節で述べられている内容の関係性に特徴があるのだが、前述したように、「前触れ」は一般的に「並列」の用法に含まれていることが多い。たとえば、日本語記述文法研究会編の分類に基づいて判断すると、加藤(1995)が「並列」の例として挙げている次の(22)(23)は、それぞれ「並列」「前触れ」、というように別の用法として分類されることになる。し

⁷ 同書では、「テ形と連用形は多くの場合、置き換えられる」という前提に立っている。ただし、逆接や順接条件の場合にはテ形のみが用いられ、原因・理由の場合にもテ形のほうが用いられやすいとしている。(日本語記述文法研究会編 287~288 頁)

⁸ テ形節の用法を分類した研究には、南(1993)、加藤(1995)、仁田(1997)、吉田(2012)などがある。

かし、加藤(1995)では、これらは共に「テ4」(並列)の例として提示されているのである⁹。

(22) 買い物先でメモを忘れたことに気づいて、朝、電気がまのふたを開ければまだ米のまま、ふろに入ろうとすれば、浴槽の栓を忘れて湯気だらけ、などなど、わが家の日常のほんの一例
(以下略) (加藤 1995: 212 頁)

(23) さいわい間借りしていたところのおかみさんが親切で赤ん坊に湯も使わせてくれたりしたらいいのですがね (加藤 1995: 218 頁)

このように「前触れ」が「並列」の用法に含まれていることが多いのは、「前触れ」と「並列」は、従属節と主節で述べられている内容に時間的前後関係が見られないという点で共通しているからであると考えられる。また、テ形の複文は本来、節間の意味関係を積極的に示すものではないため、各節で叙述されている内容によって節間の意味関係に変化が生じ、研究者によっては別の用法であると判断されることがあるのである。

次節では、これら「前触れ」と「並列」の用法の関係性を明確にするため、日本語における並列表現について詳しい分析を行なっている中俣(2015)を紹介する。

2. 並列表現における「前触れ」の位置づけ

中俣(2015)は、日本語における並列表現を包括的かつ体系的に記述した研究である。中俣は其中で、並列表現を分析する際の手法の一つとして、並列表現に対して形式および意味に着目した 11 種類のタグ付けの作業を行っている¹⁰。たとえば、テ形節に多く付けられたタグの中には、「同評価」「対比」「例示」「精緻化」「付加」「代替」などがあり、これらは従属節と主節の意味関係に着目して付加されている。以下に、テ形節への付与が多く観察された 6 種類のタグに対する中俣の定義とそれぞれの例を示す。例文の下線は中俣による。

(24) 〈同評価〉：並列される要素に対する評価的意味、あるいは要素から推論される意味が共通であるもの。

(例) とにかく安くて自分で自由に色んなところ行きたいというのがずっと自分の旅のスタイルだったものですから。

(25) 〈対比〉：反対の意味ないし反対の評価的意味をもつもの。

(例) 同い年の大卒の同僚は現場監督で、自分は下っ端の 1 人。

(26) 〈例示〉：後の要素が前の要素の例になっているもの。

(例) うちの母は結構最近食事に関して無頓着なところがあるって、例えば食塩じゃなくて味塩

⁹ 加藤は「文構造の違い」および「節同士の関係の意味」に着目してテ形節をテ1~テ5に分類している。また、テ1から順に、「付帯状況」「継起的動作」「原因・理由」「並列」「発言のモダリティ成分」という意味ラベルがあるとしている。

¹⁰ 中俣(2015)では、「同形式」「同構造」「同評価」「理由」「対比」「例示」「一般化」「精緻化」「付加」「細分化」「代替」のタグを付加している。中俣(2015)147~151 頁を参照。

置いているんですよ。

- (27) 〈精緻化〉：後の要素が前の要素と同じ指示対象をもっているもの。普通、後者の方が詳しい描写になっている。

(例) 加えて常任理事国には拒否権が与えられておりまして、五か国のうち一か国でも反対すると決議としてはこれ採択されないんですね。

- (28) 〈付加〉：前の要素の成立が後の要素の成立の前提条件になっているもの。

(例) 以上のような状態で話を始めてもらいましてそれを採録してった経緯があります。

- (29) 〈代替¹¹⁾〉：実際には1つの事態を肯定形と否定形の2つの述語を使って表した。「前件ではなくて後件」あるいは「前件であって後件ではない」という関係。

(例) 白い鳥じゃなくてちょっと赤く赤いニワトリとか歩いているんですよ。

また、中俣はこの他に、どのタグも付かない「無」として以下の例を示している。

- (30) この人はですね、少林寺拳法か何かをやっている人で、どっか会社に勤めていたらしいんですが、退職して、知床に来ました。(中俣 2015: 185 頁)

このようにタグが「無」とされる例では、述べられている内容を結び付けているのは「2つの内容が『この人』の説明であるという点だけ」(185頁)である。しかし、テ形節による並列では、このような「無」に属するものが他のどのタグよりも多かったため、テ形節による並列表現を考えるうえで無視することはできない。

このように、中俣の分析によって、従来テ形節の「並列」の用法として大まかに分類されてきたものを細かく分類することが可能になった。ここで、中俣のタグと日本語記述文法研究会編の「前触れ」がどのように対応しているかを考える。まず、日本語記述文法研究会編が「前触れ」として提示していた例が、中俣のどのタグに当てはまるかを見てみると、「前触れ」の例である(18)および(19)は「精緻化」の特徴に一致していることがわかる。以下の2例は(18)(19)の再掲である。

(18) 問題が1つあって、父は英語が話せないのである。

(19) 田中さんの経歴がまたユニークで、大学院に入る前はコンビニの店長だったという。

一方、中俣のタグを、日本語記述文法研究会編が「前触れ」の特徴として挙げている(17)の記述に照らし合わせてみると、「例示」「精緻化」がこれに該当する特徴を有していることが分かる。以下は(26)「例示」および(27)「精緻化」の例の再掲である。

(26) 〈例示〉うちの母は結構最近食事に関して無頓着なところがあって、例えば食塩じゃなくて味塩置いているんですよ。

(27) 〈精緻化〉加えて常任理事国には拒否権が与えられておりまして、五か国のうち一か国でも反対すると決議としてはこれ採択されないんですね。

¹¹ 中俣(2015)は、「代替」も1つの事態を別の側面から述べているため、「代替」を「精緻化」の特別の場合として考えるとしている。(中俣 2015:151 頁)

テ形節による前触れの用法に関する考察

以上のことから、「前触れ」の用法の下位類型として、中俣の「例示」「精緻化」をここに位置づけることが可能である。

ただし、日本語記述文法研究会編が「前触れ」であるとしていた(20)(21)のような文に関して、中俣は言及していないという点に注意する必要がある。つまり、(20)(21)のような文は、並列表現でありながら、中俣の研究では扱われていないということである。このような文は、テ形節および連用形節に特有であるため、タグの付かない「無」に分類されているか、研究から除外されている可能性がある。このような文の各研究での扱いに関しては今後も目を向けていく必要があるが、いずれにしても、中俣の研究を参照すると、並列表現の中の「前触れ」の位置づけをいっそう明示的なものに行うことができる。以上、紹介してきた先行研究の並列の用法の対応を表にまとめると、以下のようになる。

表 1 先行研究における並列用法の対応

加藤 1995	日本語記述文法研究会編 2008	中俣の並列のタグとの対応		
テ 4 (並列)	並列	同評価	理由	付加
		一般化		細分化
	対比	対比		
	前触れ	精緻化 (代替)	例示	
	前触れ(20)(21)	※扱いなし		

3. 「前触れ」と「前置き」の関連性

ここでは、これまで紹介してきた「前触れ」の用法と、それと類似する「前置き」の用法との関連性を明らかにする。「前置き」とは、接続助詞「が」「けど」などによって述べられることの多い、以下のような従属節の用法である。

(31) あそこに大きいビルがありますが、あれは何ですか。(日本語記述文法研究会編 2008: 261 頁)

(32) 休みに行ったんだけど、熱海はいいところだね。(同)

(33) 母に聞いたんだけど、あの人、最近結婚したらしいよ。(同)

「前置き」および「前触れ」には、共通する点が 2 つある。1 点目は、「前置き」と「前触れ」がどちらも「等位節」であるという点である。「等位節」とは、従属節の中でも主節からの独立性が高く、主節と対等な関係にある節のことで、「前置き」および「前触れ」はどちらもこれに該当している。2 点目の共通点は、主節に先立って従属節で前置きをするという機能そのものである。たとえば、会話における前置き表現の分類を行なった陳(2007)が示している前置き表現の定義を見ると、これらの定義は「前触れ」にも一致していることがわかる。陳が示した「前置き」の仮定義は以下の 4 つである。

- (34) 1) 前置き表現は何らかの配慮によって用いられ、主要な言語内容に先立つ。
2) ディスコースにおいて、その次にくる主要な言語内容を導入するという機能が基本的な機能である。
3) 前置き表現には、次にくる主要な言語内容に対する判断（態度）や認識といった、話し手の主観が含まれている。
4) 前置き表現の有無によって、次にくる主要な言語内容の命題・事柄の成り立ちに支障が起きることはない。

一方、これら2つの用法には、明確な違いも認められる。すなわち、ケド節・ガ節による「前置き」は主節の内容の命題外のことを述べているのに対し、テ形節・連用形節による「前触れ」は、主節で述べる内容の別側面を前置的に表現しているということである。たとえば、「前置き」である(35)(36)の従属節は、それぞれ「休みに行った」「母に聞いた」という主節の内容とは異なる内容を提示しているが、「前触れ」である(37)(38)の従属節は、主節の内容を抽象的・概括的に述べたものになっている。

(35) 休みに行ったんだけど、熱海はいいところだね。(=(32))

(36) 母に聞いたんだけど、あの人、最近結婚したらしいよ。(=(33))

(37) 問題が1つあって、父は英語が話せないのである。(=(18))

(38) 田中さんの経歴がまたユニークで、大学院に入る前はコンビニの店長だったという。(=(19))

このように、「前置き」と「前触れ」には、前置きをする方法に明確な違いがある。これらのことから、「前置き」および「前触れ」は、どちらも「前置き表現」のうちの一類型であるが、両者には明確な違いがあることがわかる。

ただし、陳および日本語記述文法研究会編が「前置き表現」として扱っているのは主に、「が」や「けど」などによって述べられる「前置き」であって、テ形節の持つ「前触れ」のような用法は含まれていないことに注意する必要がある。このようにテ形節が「前置き表現」として扱われることが少ないのは、「前触れ」の用法が前置き表現の中でも特殊であるからだと考えられる。この特殊性とは、すなわち、「前触れ」は陳が提示した「前置き表現」の特徴を持っていることに加え、さらに「従属節で抽象的・概括的・結論的に述べた内容を、主節で具体的・詳細に述べ直す」という、他の「前置き表現」には無い、「前触れ」独自の特徴を有しているという点である。このような特殊性により「前触れ」が「前置き表現」として扱われることは少なかったが、本研究では「前触れ」も「前置き表現」のひとつであると位置づけることで、「前置き」との相違点を明らかにすることができた。また、次章で見るとおり、「前置き」と「前触れ」の相違に注目することは、テ形節の誤用を説明する際に不可欠である。次章では、ここで明らかにした点をもとに、学習者の誤用の分析を行う。

Ⅲ. 学習者の誤用の分析

ここでは、Ⅱ章で明らかになったことをもとに、学習者の誤用について分析し、誤用の原因を明らかにする。冒頭で述べたとおり、本研究ではテ形節が話し言葉で頻繁に用いられていることを踏まえ、話し言葉のデータに見られた誤用を扱う。発話のデータは、「インタビュー形式による日本語会話データベース」（通称：上村コーパス）を使用する。このデータベースには、54人の母語話者および49人の学習者に対して行った20分程度のインタビューでの発話が音声および文字化されたデータで収録されている。このデータベースに収録されている学習者の日本語の学習歴や母語、学習環境はさまざま、レベル分けはされていない。本研究では、この中から学習者が使用したテ形節のうち、誤用であると判断できるものを取り上げ、その中でも従属節部分が「前触れ」の内容であるが不自然な表現となっているものを前触れの用法の誤用であると認定し、それに関して考察する。以下では、その誤用の原因を明らかにしたうえで、適切な訂正方法を提示する。以下では、1. 「前置き」との混同による誤用、2. 従属節に動作性の述語を使用したことによる誤用、の2つのケースに分け、分析を行う。

1. 「前置き」との混同による誤用

Ⅱ-3で述べた通り、「前触れ」と「前置き」は類似している。前触れの誤用の中には、その類似性が原因で誤用となっているものがあつた。たとえば、以下のようなものである。

(39) I: ディーディーさんは、暇な時はどんなことをしていますか？日本で。

NNS: あ、私は、今一、うん、ホームステイに暮らし始めて、あーん、夜帰ってから一、あー、日本語話したり聞いたり機会が多いです、から、あー、うちのー母とー一 一緒にテレビを見たり一、御飯食べたり、する、してる、うん。(Didi-224)

(40) [大きな事件よりも新聞の社会欄にあるような記事が面白いという話の中で]¹²

I: どういう意味でおもしろいんですか。

NNS: えー、まあ、例えば、あの、これは、たまたま昨日、し、あの、朝日新聞読ん、でいて、えー、大正時代、或いは昭和初期の、家庭料理の、本が、なんかこのほど、えー、出た、そうです。で、その記事を読んで、すごくおもしろいと思ったんです。(Howell-37)

(41) [学習者が前年まで勤めていた貿易会社に関する話題で]

I: その貿易会社でどんなお仕事をしてたんですか？

NNS: あー、この貿易会社はね、実は台湾人が、うん、設立して、そして、日本から、えっと一、え、かまぼことか、そういう食品を台湾に輸入して、そして販売する。そして、台湾の木とか、かんようぶつ、あ、あ、観葉植物、あ、そういうものを一日本へ輸出していま

¹² [] は文脈上の補足、() は聞き手による相槌を示す。また、学習者の語彙に誤用があつた場合、必要に応じて【 】内に訂正を示す。

す。(Chin-40)

これらの誤用では、従属節と主節の間に時間的前後関係が見られない¹³。また、叙述内容から判断して、従属節によって主節の発話の前置きをしようとしていることがわかる。しかし、「前置き」はテ形節によって述べることができないため、誤用になっている。すなわち、各節の叙述内容が、「従属節で抽象的・概括的・結論的に述べた内容を、主節で具体的・詳細に述べ直す」という「前触れ」の用法の関係にないのである。

ここで、これらの誤用に対する訂正方法を考えると、(39)~(41)の従属節の内容は、「前置き」であるため、「前置き」の用法をもつ「が」「のだが」¹⁴等に置き換えることが必要であることがわかる。この2つの形式の使い分けに関しては、野田(1997)が詳細な研究を行っている。ここでは本研究の主旨から外れるため、詳しい紹介は行わないが、主節に依頼や質問の表現が来ない場合の使い分けの規則として¹⁵、野田(1997)は(42)を示している。また、野田(1995)は「が」「のだが」の使い分けを考察するうえで、(43)(44)のような例を示している。

(42) 話し手が、聞き手も従属節の事態を知っているとみなせば「が」を、知らないとみなせば「のだが」を用いる。(野田 1997:171 頁)

(43) 「北沢くんでしたね。きみとはゆっくり話す機会も {ありませんでしたが/*ナカッタンデスガ}、直美に、いい思い出をもたせてやっていただきました。感謝しています。(後略)」(野田 1995:568 頁)

(44) 長嶋茂雄さんに { ? 聞イタガ/聞いたのだが}、キューバの野球には面白い特徴があるそうだ。(野田 1995:569 頁)

野田(1997)が示している(42)のような考えに従うと、(39)~(41)の誤用例においては、従属節で述べられている内容はどちらも聞き手が知らない情報を示しているため、「のだが」を使うべきであることがわかる。このことから、(39)~(41)は次のように訂正可能である。

(39) NNS : 【前略】 あ、私は、今一、うん、ホームステイに [暮らし始めて→暮らし始めたんですけど] ¹⁶、あーん、夜帰ってから一、あー、日本語話したり聞いたり機会が多いです、から、あー、うちの一母と一一緒にテレビを見たり一、御飯食べたり、する、してる、うん。(Didi-224)

(40) NNS : 【前略】 これは、たまたま昨日、し、あの、朝日新聞 [読む、でいて→読んでいたんですけど]、えー、大正時代、或いは昭和初期の、家庭料理の、本が、なんかこのほど、えー、

¹³ それぞれの主節は「機会が多いです」「出たそうです」となっており、どちらも動作動詞ではないため、従属節との時間的前後関係が見出せない。

¹⁴ この他にも、文体によるバリエーションに「けど」「のだけど」「のですが」「のですけど」等がある。また、話し言葉では「の」は「ん」と発音される。

¹⁵ ここで問題となっている「前触れ」のテ形では、主節に依頼や質問などの表現は現れないため、ここではそれ以外の場合の規則のみを示す。

¹⁶ 学習者のテ形節に関する誤用を訂正する場合、矢印の左側にもとの形式、矢印の右側に訂正後の形式を示す。

出た、そうです。で、その記事を読んで、すごくおもしろいと思ったんです。(Howell-37)

(41) [学習者が前年まで勤めていた貿易会社に関する話題で]

I: その貿易会社でどんなお仕事をしてたんですか?

NNS: あー、この貿易会社はね、実は台湾人が、うん、[設立して→設立したんですけど]、そして、日本から、えっとー、え、かまぼことか、そういう食品を台湾に輸入して、そして販売する。そして、台湾の木とか、かんようぶつ、あ、あ、観葉植物、あ、そういうものを一日本へ輸出しています。(Chin-40)

2. 従属節に動作性の述語を使用したことによる誤用

前節では、「前置き」と「前触れ」の類似性によって生じる誤用を紹介したが、「前触れ」の用法の誤用には、それ以外の理由で誤用となっているものがある。例えば、以下のようなものである。

(45) [学習者の来日経験について話す場面で]

NNS: そうですけど、あー、実は、あー、2年前、あー、も、来ました。あー、日米学生会議に、参加、する為に、あー、日本に、来ました。いろいろな、所を見、行って【=見に行つて】、東京ー、あー、九州の、北九州、と長崎に行つてからー、あー、船で、あー、関西、に、行ってー、からー、会議は、終わった。(Greg-82)

この誤用では、従属節および主節の関係性は「精緻化」ないしは「例示」の用法に該当しているが、従属節の述語が動作性であるために、継起の用法に誤解されやすいのだと考えられる。この誤用のように継起の用法であると誤解される原因は、従属節の「見に行つて」という動作性の動詞が単独の動詞のテ形のまま使用されているからであると考えられる。すなわち、テ形節が「前触れ」の用法となる場合には、原則として動作性の動詞のテ形がそのまま使われることはなく、「テイテ」の形で使用されるということである。実際に、本研究で「前触れ」として示してきた例や、日本語記述文法研究会編が「前触れ」として示していた例を見てみると、従属節の述語は「問題があつて」「ユニークで」「あいまいで」「アルバイトをしてて」のようなもので、述語に動作性の単独の動詞のテ形が来ることはなかった。すなわち、「前触れ」の用法では、テ形節の述語部分に「ユニークだ」「あいまいだ」のような形容詞のテ形や、「問題がある」のような動作を表さない動詞が現れることが多く、動作性の動詞の場合には、単独の動詞のテ形ではなく「ている」のようなアスペクトの表現を加えることによって、動作ではなく状態を表す表現にする必要があるのである。このことは、以下のような前触れの例で使用されている「テイテ」を、単独の動詞のテ形に変えることができないことから確認できる。

(46) 加えて常任理事国には拒否権が与えられておりまして [×与えられて]、五か国のうち一か国でも反対すると決議としてはこれ採択されないんですね¹⁷。(中俣 188 頁)

(47) [自分の経歴を語る場面で]

¹⁷ 中俣(2015) 188 頁「精緻化」の例を一部変更した。

NNS:【前略】あの一日本語をせっかく今までやってきたからもう少し続けてみようと思って、
えーパリ大学の、えー日本語科に入って、でーそれをやりながら、えー日本交通公社の
下請け会社、えーでアルバイトをして [×アルバイトをして]、あの一日本の観光客が
パリい来ると、まあ空港までの送り迎えとかそういう仕事をやってました。

(Ambaras-26)

そのため、(45)の誤用のように動作性の動詞が単独の動詞のテ形で使用された場合には、本来時間
的関係を表さない「前触れ」の用法であるにもかかわらず、主節の内容との間に時間的前後関係
があると解釈されてしまうため、誤用となるのである。このようなことから、(45)の誤用においても、
次のように「テイテ」の形に変更すると自然になる。

(45) NNS:【前略】いろいろな、所を [見、行って一【=見に行つて】→見に行つていて]、東京
一、あ一、九州の、北九州、と長崎に行つてから一、あ一、船で、あ一、関西、に、
行つて一、から一、会議は、終つた。(Greg-82)

3. 「前触れ」用法の誤用のまとめ

本章では、テ形節の「前触れ」の用法の誤用を考察してきた。誤用には大きく分けて2つの傾向が
あった。1つ目は、「前触れ」をするという叙述内容に関するもので、「が」「けど」などが持つ「前置
き」の用法との類似性が誤用を招いていた。2つ目は、テ形節の述語が動作性の動詞である場合、単
独の動詞のテ形のままでは時間的前後関係があると解釈されてしまうことが原因となっていた。これ
らの誤用の原因は、どちらもテ形節を初めて導入する初級レベルの指導だけでは解決しにくいもので
ある。しかしながら、現在の日本語教育では、中級レベル以降で改めてテ形の複文を取り上げること
は少なく、読解教材などに現れた文型を通して、その意味を把握する程度の学習で終えるのが一般的
である。これがテ形節の誤用を生む原因の一つであると考えられる。

おわりに

これまでの誤用に関する先行研究では、話し言葉の誤用を扱った研究が十分に行われていなかった
だけでなく、「前触れ」の用法は並列節の誤用の一部としてしか扱われず、詳しい分析が行われていな
かった。本研究では、「前触れ」と「前置き」の類似性と相違点に着目することで、「前触れ」の誤用
の原因を明らかにすることができた。また、研究の対象を話し言葉にしたことで、これまで指摘され
てこなかった、テ形節の述語の動詞を「テイテ」に変更するという訂正方法が存在することを明らか
にすることができた。この「テイテ」という形式は、書き言葉では、連用形「～ており」で代用され
ることが多いため、これまでの書き言葉を中心としたテ形節の研究では取り上げられることが少な
かったのだと考えられる。また、本研究ではテ形節を用いた並列節の中の「前触れ」の用法のみに着目
したが、「テイテ」への置き換えという訂正方法は、テ形節を用いた並列節全般に適用できるものであ

る。そのため、「テイテ」という形への置き換えは、本研究で扱った範囲以外にも適用可能な汎用性のある訂正方法であると言える。

しかしながら、本研究では、「前触れ」の用法の誤用であると判断できるものが少なく、学習者の「前触れ」の誤用の全体的な傾向をつかむことはできなかった。誤用が少なかった理由としては、初級レベルでは前置きと主要な叙述内容をそれぞれ独立した単文で述べるため複文が現れなかったことが考えられる。また、中級レベルでは、前置きを「が」「けど」等で述べることが多く、それらが誤用であったとしてもテ形節の誤用としては現れることが少なかったのだと考えられる。上級レベルでは、本研究で扱ったような「前触れ」と「前置き」の混同による誤用がいくつか見られたものの、「テイテ」の形は使いこなせるようになってきているため、全体的に誤用が少ないのだと考えられる。今後は、調査対象とするデータ数を増やすとともに、前置きの「が」「けど」節の誤用との関連や「テイテ」の形の習得時期および、その習得過程に着目した研究を行っていきたい。

参考文献

- 岩崎勝一・大野剛(2007)『即時文』・『非即時文』—言語学の方法論と既成概念— 串田秀也・定延利之・伝康晴(編)『シリーズ文と発話3』135~157頁、ひつじ書房
- 加藤陽子(1995)「テ形節分類の一試案 従属度を基準として」『世界の日本語教育 日本語教育論集』(5)209~224頁 独立行政法人国際交流基金
- 塩入すみ(2012)「日本語の従属節選択について —『て』節を中心に—」『熊本学園大学 文学・言語学論集』19(1)59~80頁、熊本学園大学
- 陳臻渝(2007)「日本語会話における前置き表現」『言語文化学研究. 言語情報編』(2)99~115頁 大阪府立大学
- 中俣尚己 (2015)『日本語並列表現の体系』ひつじ書房
- 仁田義雄(1997)「シテ形接続をめぐって」仁田義雄『複文の研究(上)』87~126頁 くろしお出版
- 日本語記述文法研究会(編)(2008)『現代日本語文法6 第11部 複文』くろしお出版
- 野田春美(1995)「ガとノダガ —前置きの表現—」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法(下)』565~572頁 くろしお出版
- 野田春美(1997)『「の(だ)」の機能』くろしお出版
- 深川美帆 (2007)「接続表現から見た上級日本語学習者の談話の特徴 —日本語母語話者と比較して—」『言葉と文化』(8)253~268頁、名古屋大学大学院 国際言語文化研究科 日本語文化専攻
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法 —改訂版—』くろしお出版
- 丸山岳彦(2014)「現代日本語の多重的な節連鎖構造について —CSJとBCCWJを用いた分析—」石黒圭・橋本行洋(編)『話し言葉と書き言葉の接点』93~114頁 ひつじ書房
- 森田良行・松木正恵(1989)『NAFL選書5 日本語表現文型 用例中心・複合辞の意味と用法』アルク
- 吉田妙子(1994)「台湾人学習者における『て』形接続の誤用分析—『原因・理由』の用法の誤用を焦点として—」『日本語教育』(84)92~103頁、日本語教育学会
- 吉田妙子(2012)『日本語動詞テ形のアスペクト』晃洋書房

[使用したコーパス]

CD-ROM「インタビュー形式による日本語会話データベース」(1998)『じんもんこん DATABASE Vol.1』、重点領域「人文科学とコンピュータ」総括班 上村隆一(編集責任者)

Investigating the Implicit Language Learning of Japanese Adult EFL Learners

文学研究科国際言語教育専攻修士課程修了

堀 登起子

Tokiko Hori

I. Introduction

In the field of language teaching methods and approaches, we are currently in what is known as the post-methodology era. In other words, all the methodologies were established, and teachers and learners should choose various theories or methodologies in order to fit the needs and purposes of the stakeholders (Brown, 2007; Richards & Rodgers, 2014). Briefly looking at the history of language teaching, the grammar-translation method was the first method appeared in school. Although the grammar-translation method cannot be considered an evidence-based theory (Richards & Rodgers, 2014), it is still a standard method of English classroom teaching in Japan. Subsequently, many approaches and methods have been developed based on the theories of second language acquisition (Brown, 2007). Second language acquisition (SLA) theories, which constitute the base of approaches and methods, can be categorized as models of cognitive, structural, functional, interactional, sociocultural, genre and lexical (Richards & Rodgers, 2014). At the level of approach, teachers and learners may couple those language theories and language learning theories in many ways to fit the purpose or context of learning. Kramsch (2002), offers yet another way to describe language learning theories by using the metaphors of 'learner-as-computer' and 'learner-as-apprentice' in that information processing and sociocultural phenomena are different in research traditions. Another metaphor had arisen earlier that offers greater potential for understanding language learning. The 'ecological' metaphor of 'complex dynamic system (CDS)', which appeared in the natural sciences in the 1960s (N. C. Ellis, 2007; N. C. Ellis & Larsen-Freeman, 2006; Kramsch, 2002; Larsen-Freeman, 1997; The "Five Graces Group" et al., 2009).

II. Theoretical framework and background of the study

1. Complex dynamic theory

Scientists, traditionally, have divided phenomenon into pieces and investigated relationships

of components mainly based on the framework of cause and effect. In 1997, Larsen-Freeman (1997) introduced ‘chaos/complexity theory’, as an explanatory framework of second language acquisition. Features of CDS are “dynamic, complex, nonlinear, chaotic, unpredictable, sensitive to initial conditions, open, self-organizing, feedback sensitive, and adaptive” (Larsen-Freeman, 1997) and these are applicable for investigating language acquisition (N. C. Ellis, 2007; N. C. Ellis & Larsen-Freeman, 2006; Larsen-Freeman & Cameron, 2008; The “Five Graces Group” et al., 2009). To investigate a complex dynamic system, standardized research methods have not established yet. However, some researchers have attempted to develop methods suitable for this task. Social Network Analysis (SNA) is one suggestion from Mercer (2015) that looks at the relationships and dynamics among people and/or variables. Retrospective Qualitative Modeling (RQM), which coined by Dörnyei, is another research method utilized by some researchers (Chan, Dörnyei, & Henry, 2015). Simply state, SNA is more suitable to focus on group dynamics, whereas, RQM focuses more on the trajectory of variables.

2. Implicit and explicit language learning

Rebuschat (2015) argued that human behaviors, for instance, language comprehension and production, music cognition, intuitive decision making, and social interaction are considered to be dependent on implicit knowledge. The process of unconscious acquisition of implicit knowledge is called implicit learning. In contrast, acquiring conscious (explicit) knowledge is refer to explicit learning. In the field of language education, a language teacher would teach students vocabulary, grammar, and how to write in the target language, or how to adjust student’s speech according to the context. Students learn those knowledge consciously, thus, L2 learning is usually conducted by explicit language teaching. On the contrary, L1 is acquired through implicit learning (Segalowitz, 2010). Learners learn language while they are using their L2 knowledge to do something what s/he wants to do. Here learners’ intension is not learning language but doing something using L2. Many teachers recommend to do both explicit and implicit learning, however, implicit learning seems like degraded especially in Japanese classrooms.

3. Extensive reading

Extensive reading is regarded as the one of the fluency developing activity and known as effective to developing vocabulary (Nation, 2008; Nation, I. S. P., 2009). The first teacher who applied extensive reading approach to the second language learning was Palmer (Day & Bamford, 2007). Intensive reading was also another invention by Palmer, and he argued that extensive and

intensive reading are equally important for language learning and teaching. Krashen's input hypothesis, well known as "i + 1", is also theoretical foundation for selecting suitable book for the learner (Krashen, S., 1985). The number of research investigating the effects of extensive reading are revealing positive gain from ER (Mason & Krashen, 1997; Nishizawa, Yoshioka, & Fukada, 2010; Yamashita, 2008).

In Japan, Sakai argued to read easy books extensively (Sakai, 1996), and advocated the Three Principles of Tadoku (多読=reading extensively). Later, Sakai proposed to read one million words as a milestone (Sakai, 2002). This approach was supported by the SSS (Start with Simple Stories) English Study Group and the Japan Extensive Reading Association (JERA) (Furukawa, 2010). Ito (2003) also published a book advocating extensive reading and listening to easy materials like junior high school textbook. These books targeted mainly adult learners, who were struggling with English after years of learning. Thus, ER spread mainly among adult learners in Japan. Extensive reading as a strategy to improve students' proficiency level at schools first appeared in 1989 by Kanatani et al. at high school (Kanatani, Osada, Kimura, & Minai, 1991). Nevertheless, ER has not infiltrated into Japanese school system wide enough to become an ordinary strategy for learning English until now. However, increasing number of schools provide ER programs in Japan (Tanaka & Stapleton, 2007). Those programs also include extensive listening in many cases (Nishizawa et al., 2010; Atsuko Takase, 2007; Tanaka & Stapleton, 2007). According to the flexibility of the curriculum, ER increased across colleges and universities as supplemental courses or experimental application (Takase, 2012).

4. Implicit Language Learners (ILLs)

Among learners who are practicing ER, those who include extensive listening, casual conversation and writing, gradually appeared. Since those strategies are considered as implicit language learning, therefore the researcher named those learners as implicit language learners (ILLs).

IV. Research Questions

The advocators of implicit language learning claim that even adult ILL's can acquire second language through implicit learning, which means that by extensive input and output in a relaxing manner like children learn their own language (L1). Furthermore, applying implicit language learning changes perspectives of learners on English as the tools to 'utilize' from the subject of 'learning'. With the purpose of respond to the lack of current knowledge about implicit language

learning in the literature review, the following research questions were formulated:

1. How have the strategies and the study materials changed (or not), over time, until an ILL reached the attractor state?
2. How has the self-evaluated proficiency of an ILL changed, before and after, he or she applied implicit language learning?
3. Is there any change in ILL's perspectives on learning English?

V. Research Purpose

Implicit learning seems to be degraded or ignored in language education in Japan, while L2 is taught and learned explicitly in the most cases. In addition, the effect of implicit learning has been considered difficult to recognize because the learning or acquisition occur unconsciously by implicit learning. In this study, the researcher expected to reveal some aspects of implicit language learning within the framework of complex dynamic system by focusing on the trajectories of language learning, changes of perspectives on learning language and self-evaluated proficiency of learners' who are engaged in implicit language learning intensively and longitudinally. Adult implicit language learners (ILLs) who have avoided to utilize explicit learning strategies while conducting implicit language learning seem like salient subjects to explore implicit language learning, because the affect from explicit language learning can be expected to be smaller than other learners. Thus, this research investigated and collected data from adult ILLs who can avoid explicit language learning as much as possible.

VI. Significance of the Study

Many articles investigating explicit learning such as grammar teaching (Azar, 2007; R. Ellis, 1998; Klapper & Rees, 2003; VanPatten, 1993) or vocabulary (Chanel, 1981; Charteris-Black, 2000; Jianzhong, 2003; Johns, 1994; Richards, 1976) exist, whereas studies about implicit language learning are still limited in number and variety (Hulstijn, 2005; Kittleson, Aguilar, Tokerud, Plante, & Asbjornsen, 2010; Yamashita, 2008). Some studies are exploring explicit and implicit language learning by comparing or contrasting (N. C. Ellis, 2005; Hulstijn, 2005; Leow & Sanz, 2010; Scott, 1990). While, qualitative studies that explores implicit language learners are minimum in number. Papers on extensive reading (some also including extensive listening) exist large in volume. On the other hand, research on implicit language learning as a whole is still limited in number and variety. Some researchers investigated on English learners utilizing implicit learning, however, those surveys are investigating limited aspects of implicit learning.

Investigating the Implicit Language Learning of Japanese Adult EFL Learners

For example, the research on acquisition of explicit and implicit grammatical knowledge of the English plural morpheme were conducted by Japanese researchers (Kusanagi & Yamashita, 2013). Moreover, the framework of complex dynamic system theory is relatively new in the field of language acquisition study. Thus, revealing some aspects of implicit language learning by utilizing CDS framework might contribute to add unique insight of second language acquisition from different point of view.

VII. Methodology

This research applied the method Chan developed based on the Retrospective qualitative modelling that was created by Dörnyei (Hiver, 2015)(Chan, Dörnyei, & Henry, 2015). In order to investigate complex system like language acquisition, the researcher should examine the change rather than predict the result (Larsen-Freeman & Cameron, 2008). Thus, the procedures are reversed from traditional research; this study started from identifying the attractor state, which is regarded as an extreme pattern of a system. According to Hiver (2015), “all categorical patterns that L2 learners can settle into (when casing one or more L2 learner as the dynamic system), they can be considered as attractor states”.

The expected attractor states include ILLs with some specific characteristics which are common among language learners (e.g., motivation, learning style or learning strategies) (Dörnyei, 2009). The researcher identified the attractor state of Japanese adult ILLs as those learners, who became comfortable with English, and who are using English as their own language; regardless of specific language proficiency levels or abilities, but rather without help from L1.

To secure the validity, the researcher triangulated the data by collecting learners' interviews, learning records, and can-do list questionnaires. To answer the research questions, the investigation was focused on the changes in learning strategies and materials, self-evaluated proficiency and perspective on learning English. To exploring the trajectories of ILLs, the semi-structured interviews were conducted and analyzed, together with their learning records. In order to collect interview data, three sessions were planned and conducted.

1. Participants

The researcher approached five candidates who seemed like presenting the attractor state for this study, and four of them agreed to participate. All four participants are longitudinal implicit language learners (ILLs). Participants are personal acquaintances of the researcher who is also can be categorized as an ILL herself. The researcher met them in online community of ‘tadoku’

practitioners, and has known each other for several years. Participants are one male and three females, aged 30s to 50s. All of the participants are connected through multiple sources of social media like Twitter, Facebook, and/or online Forum. To protect participants' privacy, synonymous names were chosen randomly by the researcher.

Table 1

Participants' gender, years of practicing extensive reading and listening, word count of reading

	Masaru	Yoko	Junko	Tomomi
gender	male	female	female	female
ER history	4 years	13 years	10 years	12 years
Word count	1.5 million~	20 million~	8 million~	20 million~

Note. Word count indicates that how many words each participant had read until they handed the researcher their learning records. Numbers are presented above are consisting of word counts of reading materials and some are very roughly counted. In addition, for Masaru and Junko, they already stopped keeping reading records with word count lately. Words included in the videos and listening materials were ignored because of the difficulty of collecting the data.

VII. Results

1. Trajectories of language learning of adult ILLs and theoretical findings

In a storyline produced by SCAT analysis contains all data of three interviews. The researcher weaved themes and constructs emerged from the excerpts from transcribed interviews and background information. As Otani (2008) suggested, theoretical findings were also generated from a storyline.

(1) Storyline of Masaru.

In his school days, Masaru had a neutral impression about English. All the teachers had similar teaching styles and gave no impact on him. Only scores and grades had meaning for him. Masaru believed reading passages aloud was an effective strategy for learning English, so he used this strategy to prepare for tests. At the same time, he had covert admiration to being active globally. The covert passion to learn English encouraged him to gather information about learning strategies or materials. Even though Masaru had tried to study by himself, the effort had never been successful. He was seeking for advice and place to get materials, and using the

Investigating the Implicit Language Learning of Japanese Adult EFL Learners

Internet to gain information from online communities such as online bulletin board systems and forum for 'tadoku' learners. Unlike ordinary Japanese language learners, he used to ignore dictionaries most of the times when he learn foreign language.

In the novice phase, Masaru was seriously seeking the results of the method of extensive reading and joined the extensive reading course of the NPO Tadoku Supporters. At same time, the place provided him suitable and enjoyable materials. He was following instructions by the supporters seriously. Moreover, he was keeping precise learning record, and assessing the method. He read easy and controlled materials. Especially, he read the Oxford Reading Tree series books (stage 1 to 8) repeatedly using the strategy of reading while listening (RWL). Phase transfer occurred when he watched TV serial drama without subtitles. After watching children's shows 20-30 hours, Masaru had already been used to be immersed in English. He noticed that prosody was conveying messages as same as words and phrases. Regardless of the level of English, he could enjoy what he really wanted to watch, and involved in the world of the show. Scaffolding by audio could make Masaru free from the concept of level of English. This experience changed his standard of 'difficult'. According to Masaru, selecting materials based on curiosity and intuitive was much important than considering the level of materials. His improvement of English proficiency seemed very rapid, looking from other learners' point of view, but he believes that everybody can acquire English like him.

Practice of speaking English was started from answering simple and/or closed questions and casual conversation. Chitchat group using Skype created the opportunity to practice speaking. Speaking in English required courage, and when he spoke, he noticed the gap between Japanese and English. As for his personal characteristics, Masaru has good non-verbal communication skill, a sense of responsibility, and contextual guessing from visual, aural, and/or situational cues. These characteristics had the effect of lowering affective filters when he experienced authentic English and casual peer-to-peer conversation during travel abroad. The role as a leader in chitchat group, as well as peer-to-peer conversation, encouraged him to speak. He also used Twitter to practice writing. Masaru believed that internalized input transfers to output, so he used shadowing to change his English into British accent. Encountering with a Japanese student with British accent stimulated his intrinsic motivation to change his accent.

After reading 1.5 million words and two years of practice, phase transition occurred. When he became confident in the method and strategies, reasons for keeping learning record for assessment became useless. Masaru started to follow his own preferences and stopped keeping it. Moreover, gained enough confidence to be free from affective filters and extrinsic motivation,

Masaru started following his curiosity, became free from learning strategies and English proficiency level of materials.

In user phase, Masaru admitted that his 'tadoku' became not for ER; ER did not for learning English anymore. Mobile digital devices and the Internet allowed him to use English daily and casually. Watching YouTube or other videos on mobile devices became one of the most preferable way to enjoy English. Masaru found his specific objectives of learning English when he found the Massive Open Online Courses (MOOCs) that provide educational contents for free. This raised his intrinsic motivation greatly. He followed curiosity and started to participate in the MOOCs. Masaru chose feasible courses like elementary school level at the beginning. As a learner and a user of English, Masaru chose to utilize the preferred strategy of watching videos. Masaru started from doing by feasible amount of materials and comfortable level courses. Finally he completed a course provided by the edX related to his profession.

Now Masaru is using English daily. He ordinarily interacts with friends using Twitter or other SNS platforms where learners exchange information and feelings casually and in real time. Since English became almost same as Japanese in his mind, his perception on English proficiency changed accordingly. That encouraged him to challenge something that seemed difficult before.

(2) Storyline of Yurie.

Her impression of English was good and fascinating. Basic grammar was understandable, and her test scores were good accordingly. During her junior high school days Yurie joined a club that studied foreign languages. However, entering a high school with a reputation for entrance exam preparation, English classes turned into an unsatisfying, and English became a difficult subject for her. To prepare for entrance exams, she entered a cram school. The teacher of cram school forced her to study unsuitable materials for her English proficiency level. However, the scores were very important, she should study very hard. She felt strong sense of failure at that time. Even though her grades and test scores of tests were not good, Yurie kept admiration to read original books written in English someday.

Her job required her to obtain some knowledge of English vocabulary, Yurie was motivated to learn English. Since having enough free time, she started to study English by herself. Yurie kept a covert passion for reading English books. Unconsciously, Yurie recycled learning strategies in school days even though it was unsuccessful. She started from studying basic grammar for junior high school students. However, this attempt turned out to be unsuccessful because explicit knowledge of English learned by grammar drills did not transfer to comprehension skill of texts. Nevertheless, her passion for reading original books did not vanish. Next, she tried to read a short

Investigating the Implicit Language Learning of Japanese Adult EFL Learners

story written for adult readers with dictionary. Again, her explicit knowledge of English from dictionary did not transfer to comprehension, and she could not finish the book. One day, Yurie found the book that introduced tadoku (extensive reading). She peeked into it and read an easy short story included in the book. Yurie could finish reading whole story in English, and could experience the pleasure of reading and started ER by herself.

In the novice phase, Yurie tried hard to follow instructions of ER guidebooks and keeping record of reading. She carefully chose reading materials from easy books, however, obtaining very easy English books from ordinary bookstores was difficult. She bought many books from online bookstores or borrowed from the library nearby. Picture books in the library were difficult to read through sometimes; instead, she preferred levelled readers (LR).

In addition to reading, Yurie tried to practice shadowing sometimes because audio CD was attached to picture books. In the novice phase, she mainly read easy books extensively. However, at a certain point, she recognized improvement of listening skill. The experience changed her perspective on reading and learning in English. ER was a time consuming activity, but keeping a record of books was fun for her. Thus, Yurie has been keeping the reading record for satisfaction. The online community was an important place to get information about books. Bookstores also played an important role as a place of getting information about books.

Yurie would read thin books or short stories to obtain a sense of satisfaction and increase motivation when reading stamina was not enough to read thick, difficult books. She started RWL with books including different languages like French and Swedish. Without scaffolding by audio, she would stop reading where a word or names from foreign languages other than English. From long time experience of ER, reading English became a daily habit for her. Yurie had a belief that output must happen by a large amount of input. After reading one million words, she gained the confidence to try new skill?speaking and writing. Unfortunately, lack of opportunity at that time, she could not try to practice speaking. Three years of ER, the anniversary of 8 million words, she posted her resolution to the bulletin board system of the tadoku learners that she would try to speak and write in English.

Curiosity-driven actions emerged especially from implicit language learner phase. After some more years past, development of the information and communication technology created the opportunity to communicate in English. She joined a periodic practice of chitchat group in English using Skype. Her curiosity and passion to speak in English exceeded fear of making mistakes. Peer-to-peer conversation in the community of ILLs that allowed participants to use both Japanese and English lowered affective filter when speaking in English. Still feeling lack of

confidence in grammar, Yurie overcame the fear of making mistakes and started speaking in English.

When watching enjoyable TV program, poor comprehension of language did not affect her pleasure of watching it in English. Images helped her to understand the story. Yurie reported that if she had not experienced ER, she could not enjoy watching videos without subtitles. Realized that real conversation could be messy both in Japanese and English in many cases, and might not be always grammatically correct like what she'd studied at school as a subject. She noticed her own improvement in English when she tried to express herself in English, because she could speak spontaneously without interference of Japanese. Yurie started to post some essays on her book review blog to express herself in English. This activity was purely from her intrinsic motivation.

Sometimes implicit knowledge emerged in her mind when she spoke in English. She felt that implicit knowledge of language grows gradually, so without the opportunity to assess, accumulating implicit knowledge was difficult to notice. Output like speaking and writing could be an opportunity to assess one's own improvement, she thinks. Sharing information and community are important to accelerate motivation as well.

Judging from speaking spontaneously without interference of Japanese, and success of communication in English during a recent trip to Europe, Yurie reported that her English was acquired not learned. She could fulfil her goal and objective of learning English?reading original books written in English. By reading extensively, she became to understand language and culture deep enough to make friend with English and English speaking people in the end.

(3) Storyline of Junko.

Junko had no specific memory of teaching and learning at junior high school. However, she remembered explicit grammar teaching with difficult grammar terms in high school. Junko had weak extrinsic motivation like social expectation as an office worker, but had intrinsic motivation at her work place. A regrettable experience during a business trip stimulated her intrinsic motivation. She expressed that she does not feel any necessity to communicate better with her cousins, who are more fluent in English rather than Japanese, but it seems that shedding some influence on her. Curiosity became intrinsic motivation, so she started a regimen of self-study which unfortunately turned out to be unsuccessful.

In the novice phase, Junko joined a book club to get materials and information. She reported that she has the personal characteristics of being good at contextual guessing. She preferred scaffolding by audio when reading. Junko was seeking advice to overcome obstacles to progress,

Investigating the Implicit Language Learning of Japanese Adult EFL Learners

and joined some places where supporters might be, but could not get sufficient support from anywhere. She enjoyed reading but limited range of the books were available for her. However, while reading extensively, she could not enjoy material beyond her level. Junko also claimed that contextual guessing was difficult when the story was too short, in her opinion, under 3000 to 5000 words. Reading while listening (RWL) changed her perspective on English because the performance of narrator enhanced her comprehension of written texts. She also reported that RWL led her to conduct extensive watching (EW). Likewise, she regarded ER is foundation of EW.

Rewarding experiences happened sometimes, and those experiences stimulated her intrinsic motivation. For example, Junko could enjoy watching English films without subtitles. It was an animated film for children but her excitement was enormous. She also noticed her improvement of English when she was reading while listening. At first, it was difficult to find the passage where the narrator was reading, and once she put the book down, she could not find where to start again. However, from a certain point, she was able to find where she should start reading again quickly.

After five million words of reading, Junko stopped keeping her records on notebook, instead she continues to keep tracking her learning by reporting on twitter in Japanese, where she can get some comments from other learners and discuss the materials and strategies. Junko reported that, after interval of several months, she noticed improvement of reading comprehension. She felt that this phenomenon was similar to the acquisition of technical skills at her job. She also argued that input by ER did not transfer into output.

Cultural knowledge by reading children's books extensively enhanced her listening comprehension. Online video services such as streaming digital video services and YouTube enabled her to conduct extensive watching.

At the third interview, Junko reported that she is ignoring proficiency level when she reads or watches in English. Following curiosity is more important than considering proficiency level of materials these days. In her mind, distinction between Japanese and English does not exist. Recently, she finally convinced her own preference to audio and image than texts, so she is engaging EW mainly. She also reported that in her mind, the borderlines among reading, listening and watching are vague; so is the borderline between Japanese and English. Junko is good at using digital devices, and she adjusts listening speed when she uses IC recorder, switching multiple dictionaries or other features of devices such as Kindle.

(4) Storylines of Tomomi.

Tomomi's encounter with English started back in her elementary school days. First, she joined an English classroom in her neighborhood and learned English for entertainment. This might have stimulated her curiosity, but when she tried to join another English class, she was refused to join because she had not mastered phonemic symbols. In junior high school, her English grades were an average. English teachers used the typical teaching style, so she did not have any particular memory of learning English. Extrinsic motivation came from her mother when she encouraged Tomomi to try a correspondence English course, but this self-study attempt was unsuccessful. In high school days, her private tutor who was very oppressive and strict forced her to study English. This experience made her a reluctant student. As a college student, she had had covert passion to study English and experience abroad but was not interested in English as a subject. She entered an English conversation school to prepare to study abroad. Tomomi experienced studying abroad and authentic English for two months in Canada where she engaged in peer-to-peer conversation and English classes in a language school. After that, she assumed that she was satisfied with this brief experience. Since she was in an environment without English, she totally forgot about English. After several years, the boom of Harry Potter came to Japan and reading Harry Potter became her new objective to learn English. This was strong intrinsic motivation for self-study, and she bought some volumes and finished reading them using dictionary. However, lacking confidence in reading comprehension, searched some ways to improve her reading comprehension skill and met tadoku (extensive reading).

In novice phase, Tomomi kept high intrinsic motivation, while setting her goal of reading one million words, which was the milestone for tadoku at that time. She set Harry Potter, her favorite book, as a reward for reading one million words. Now she reported that she feels like looking at other person's record, she read books after books as though assessing own proficiency level. She was following most of the instructions and the three principles of tadoku. She was so engaged in materials, unconsciously using silent reading, skipping and scanning to read faster, and reached the first milestone of one million words as soon as possible.

One day, after reading three million words, Tomomi peeked into a book for young adult readers. She noticed that she could enjoy the book. The story was fascinating, moreover, she was fascinated by the fact that she could read paperback. Tomomi engaged in reading the series of seven books (280,000 words in total) in one month. In these days, she was very good at skipping and ignoring unfamiliar words. According to her report, she was using different reading strategies from now. Tomomi also commented that the longer the material, she could use skimming and

contextual guessing, and it became easier to comprehend.

When she started reading while listening (RWL), Tomomi could not understand the contents of what she was listening and reading. At that time, without comprehension, she just followed the sound and texts, aurally and visually. Nevertheless, compared to the extensive listening (EL) without written text, which she tried for a while, she noticed improvement of listening skill during RWL. Gradually, her listening comprehension improved. Improved listening skills changed her learning strategy from RWL to EL, free from the scaffolding of texts, and she was happy with that because she can enjoy books very easily.

These days, Tomomi watches videos casually without subtitles, because, her listening skill has improved enough to be free from scaffolding by texts. Tomomi follows her own feeling or curiosity when choosing materials or strategies, by eliminating extrinsic motivation such as three principles of *tadoku* or other learners' strategies. Thus, she went back to what she really wanted to do: reading enjoyable books. Recently, she is unsatisfied with the term '*tadoku*', because, for her, reading English books is not ER but just reading books in English.

After longitudinal ER and RWL, and experiencing watching without subtitles, she obtained different perspectives on learning English. Her perspectives on proficiency level and ability changed. Her attitude toward English also changed. Being brave enough to challenge on her way, curiosity is the first factor when she choose something to do in English. For instance, when gathering information, she goes back and forth in Japanese and English whichever the information she could obtain. There is no distinction between English and Japanese. However, these changes made her difficult to solve problems of tests. The flexibility of her English knowledge impedes to choose one right answer. Tomomi reported that Japanese interferences do not exist when she is speaking in English spontaneously. Rather, English seemed to have grown as her own language, because she noticed that she understood English automatically.

Recently Tomomi started teaching at cram school as a part-time job that requires her to teach English explicitly to prepare students for entrance exams. She became sensitive to grammatical errors, then fears of making mistakes emerged. Unfortunately, explicit grammar knowledge is hindering her ability to engage in and to enjoy the peer-to-peer English communication in which she once passionately participated. According to her opinion about implicit learning, it seems better to start from EW or EL. Moreover, to lower the affective filter of learners, starting from an enjoyable, small amount and comprehensible materials are important. Revealing her happiness to meet this approach and what she had gained from these experiences, Tomomi emphasized that she wants everybody to experience this easiness of ILLs are enjoying, the way they acquire

English and use it. She also mentioned that implicit language learning would be accepted widely if there were a way to assess the effect of implicit learning by numbers.

2. Comparing reading materials and strategies of ILLs

From learners' reading record, the researcher will present the type of books, word count and period to achieve one million words. This is simply because of the time constrain. However, a CDS is sensitive to initial conditions, thus investigating reading materials of their initial condition might valuable. Both Yurie and Tomomi, who are recognized as avid readers, reached one million words within very short period of time (Table 2). Yurie took only four months and Tomomi took six months until they finished reading one million words.

Table 2.

Reading materials until one million words of reading.

	PicB	PicB(L)	LR	LR(L)	CHLD	CHLD(L)	YA(L)	GR	GR(L)	y.
Masaru	00.98	00.00	11.08	18.47	08.79	16.42	06.66	19.01	18.59	0.9
Yurie	06.02	00.00	14.86	00.00	24.71	00.00	00.00	54.41	00.00	0.3
Junko	05.62	00.10	16.07	00.74	15.89	00.56	00.00	49.75	11.28	4.0*
Tomomi	00.00	00.00	04.18	00.00	03.49	00.00	00.00	92.32	00.00	0.5
SUM	12.62	00.10	46.19	19.21	52.88	16.98	06.66	212.49	29.87	

Note. PicB = picture book, LR = levelled reader, CHLD = children's chapter book, YA = young adult book, GR = graded reader. (L) = reading while listening. y = year; indicating the total period which the learners reached to the milestone of one million words. Numbers were figured; $f(x) = \text{word count}/\text{total} (\%)$. Total word counts for each participants are slightly different because those numbers are actual word count by each participant when their reading records surpassed the milestone of one million words. *including three years of blank period.

Looking at the types of materials, GR were the most extensively read by ILLs in novice phase. However, if you look at the number of books read by the ILLs, LR surpass GR. The researcher calculated the percentage of words read by each ILL by using learning strategy of reading-while-listening (RWL). When Yurie and Tomomi started extensive reading, ER wasn't expanded to include extensive listening. Moreover, listening materials like CDs, mp3 and podcast were difficult to obtain for the learners at that time. Nevertheless, Junko and Masaru, regarded as avid listener, was using RWL from the novice phase (Table 3). In addition, during her four years of interval, she watched movies sometimes.

Table 3.**Learning strategies and ILLs.**

	Reading	Listening	Watching	Speaking	Writing	Dictionary
Masaru	YA/CHLD/Pic Bk/LR/GR	RWL	w/o subtitles	◎	Twitter, blog	
Yurie	Novels/YA/CHL D/Pic Bk/LR/GR	RWL/EL	w/o subtitles	◎	Twitter, blog	
Junko	YA/Pic Bk/ CHLD/LR/GR	RWL	w/o subtitles L1 subtitles			△ (L1)
Tomomi	Novels/YA/CHL D/Pic Bk/LR/GR	EL	w/o subtitles	△	Twitter	△

Note. Table shows that the learner's usage of leaning strategies and reading materials. Dictionary is indicating the usage of dictionary. ◎=Frequently/regularly, ○=Ordinary, △=Sometimes

Only Junko had not had any opportunity to speak and writing in English. Masaru and Yurie do not use dictionary, Junko and Tomomi use dictionaries. Only Junko reported that watching television programs or movies with Japanese subtitles when she watches them via streaming service provided by Japanese company (Table 3).

3. Self-evaluated proficiency

The researcher utilized the questionnaires developed from Japanese version of CERF (Tono, 2012), as a tool to elicited learners self-evaluation and perspectives about their English proficiency level as much as possible during interviews. The questions included in the both two questionnaires are the same so that the result can be compared .

According to the results, all the participants had improved English proficiency to some extent (Table 4). Comparing scores among participants might have not much meaning; however, significant increase in numbers can be seen when looking at intra-personal differences, before and after of experiencing implicit language learning. For example, Masaru and Yurie doubled the scores of the first results.

Table 4.**Results of self-evaluated English proficiency questionnaires**

Name	Before	After
Masaru	198	382
Yurie	168	374
Junko	172	312
Tomomi	278	367

Note. The number indicate accumulated scores of each participant's result of the can-do list Questionnaires; before and after applying implicit language learning.

However, Masaru admitted his opinion about the results as follows: "...I think the standard for the answers has been changed from the first time and the second time. Indeed, my perspectives on English have changed already. Maybe...if the actual capability was same, and I might not check four at that time, I can say 'yes' now. Before starting ER, I would answer 'yes' when I was sure 100%, but now only 60%, then I can say that I can do it. 「(中略) …こことこで判断の基準が、こっち(第一回)とこっち(第二回)で、違ってるような気がするな。やっぱりな。自分の物差しが変わっちゃってるからね。なんとなく。この頃の基準でいけば4にはならないかもしれないことも、今なら4で言えちゃうもんね。100点じゃないとできる、って言えないけど、こちらは60点ぐらいでもできるって言えちゃうたりね。」 One of the unique point is that his scores of before implicit learning of Q101 that asks about understanding of unstructured speech. Apparently, the score of this question is higher than other participants.

Yurie was the learner whose score increased more than double. At the first time, her total score was the lowest of 168; however, she scored 374 points for the second time. According to the result, she is capable to speak, listen, write and communicate around intermediate level. She also scored four for the Q101, and her highest mark were Q106 and Q107, there she checked three. Q106 is asking whether enable to understand any type of fast native speed conversation, and Q107 is asking whether enable to comprehend any type of complex written texts. Junko also scored relatively high at Q101, Q106, and Q107. All of them can be categorized as receptive ability, which related to comprehension. However, her scores related to output are all relatively lower than other learners.

Tomomi marked the highest scores for the 'before implicit learning' questionnaire. These scores might not be reflecting their actual proficiency, however, Tomomi could be regarded as the highest in proficiency before starting implicit language learning. Although increased number of

scores is relatively small, her perspectives on what she can do with English had changed according to her storyline.

IX. Discussion

This survey is reflecting my own experiences as a language learner, especially, as an implicit language learner. Before starting this approach, I had been a freelance translator in the field of business and education. I was always consulting with multiple volumes of dictionaries and other resources. Translating English into Japanese was almost like a habit for me; every time I heard English, I automatically translated passages. However, when I had to speak or write on my own, I became uncomfortable and almost panicked because I could not translate my thoughts into 'right' English. In those days, English was always existed with Japanese mental lexicon in a sense, or existed as explicit knowledge about English language in my mind. Moreover, I always felt some sort of anxiety and difficulty when I faced authentic English. There were many sentences I could not understand the meaning, even though I know all the words and grammar.

About five years ago, I was searching for an easy and enjoyable way to learn English that enable learners start from zero; for my twin daughters who could not attend school. I met '多聴多読(EL/ER)' and thought that it must be easier if I tried this approach first and had some insights before let my children start. As books piled-up, I read aloud some very easy books to them. I was watching American TV shows and movies in English with Japanese subtitles on the TV set in the living room. Naturally, children were involved in the ER and EW. The researcher witnessed daughters' improvement; singing an English song in perfect pronunciation without looking at lyrics, asking me meaning of passages (which was not translated in the subtitles) while watching shows together. My progress seemed very slow compared to my daughters, however, now I am writing this article in English on my own.

1. Theoretical findings from learning trajectory of ILLs

The first research question was to examine the changes in strategies and materials of ILLs reached the attractor state. By exploring the trajectories of four participants, some common features and theoretical findings related to learning strategies and materials were identified by the researcher.

(1) Three phases and phase transition.

First of all, three phases were identified over the course of ILLs reach to the attractor state. I would like to call them as ‘novice phase’, ‘implicit language learner phase’ and ‘user phase’. Basically, these three phases are continuum if the learner did not stop learning. Along with these three phases, phase transition and learning circle were identified.

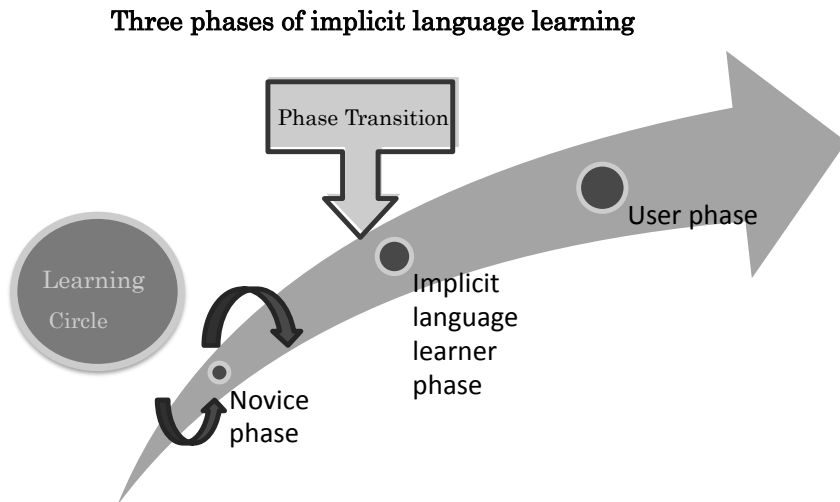


Fig. 1

In novice phase, learners try hard to follow instructions despite of their preference of strategies different in some cases. For instance, Masaru and Junko read GR and LR extensively, but, they do not usually read storybooks or novels even in their L1. Comparing interview data of ILLs, the reason why the ILLs in the novice phase have such characteristics is that the ILLs are assessing the approach by following the principles and instructions as much as possible, and keeping learning record enthusiastically, to predict or to examine the results of the approach by themselves. In other words, this phase can be said as trial phase, because ILLs are still holding some uncertainty about this approach and results of their effort. In novice phase, the learner is training themselves to receive L2 as it is and react L2 stimuli without interferences of L1. Successful ILLs experience phase transition and move on to the next stage.

Phase transition is one of the significant features of CDS and this is the critical point of L2 development and acquisition by using the approach of implicit language learning. Phase transition occurs gradually under the surface but it emerges on the surface unpredictable in timing. This is also the moment of emergence of new perspective on learning English in the learner and will affect to the transformation of whole system to the next stage. In the trajectory of

Investigating the Implicit Language Learning of Japanese Adult EFL Learners

ILLs, phase transition occurs between novice phase and implicit language learner phase and one possible identifier is ‘watching without subtitles’. I think this interpretation of transition phase might be controversial, because enjoying authentic (or nearly authentic) English videos or television programs without subtitles is considered as an activity for advanced learners.

In the implicit learner phase, ILLs become free from assessing the approach or seeking results from what they were doing by using English. Rather they simply enjoy the activity and materials that they choose based on their own curiosity or preferences. Proficiency level of materials will be gradually ignored. Theoretically, or scientifically, teachers and academics think it is important to provide learners materials equal to their proficiency level or slightly difficult one. However, in the light of CDS, language acquisition must be a non-linear. At the same time, the experience of watching difficult and authentic English video without scaffolding by subtitles can give the learner some sort of confidence and lead them to be free from any type of extrinsic motivation or ‘learning’.

Finally, ILLs reach to the user phase. As the name indicates, ILLs in this phase can be said as a ‘user’ of English rather than a ‘learner’ of English. Since the implicit language learner phase and the user phase are continuum, ILLs sometimes would not notice their improvement or changes by themselves. Masaru reported that “I don’t think that I would never dispose of my Japanese, so does the English language. [日本語を使わなくなるようなことはないし、それが英語もそうやってきたってだけのことであって。]”. And Junko admitted that “(I) don’t care either I can understand or not, but use English to get some information if necessary … [わかるわからないは別として、日本語と区別なく情報を仕入れるために英語を使うとか…]”.

(2) Learning circle.

Investigating the trajectories of ILLs from the CDS point of view, circular dynamics of learning was identified (Figure 2). These four steps of self-organizing circular dynamics starting from intuitive stage, and moving on to mental stage, physical stage, and intellectual stage.

Learning Circle: from the Trajectories of ILLs

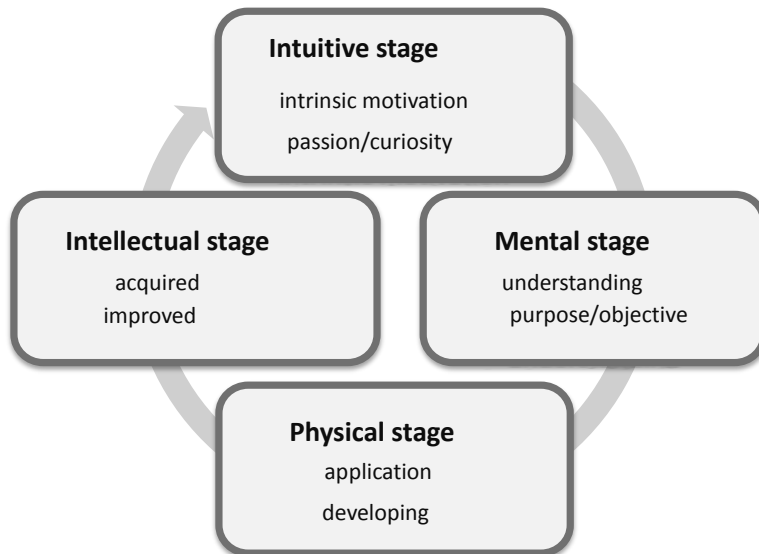


Fig. 2

For the intuitive stage, learner should have intrinsic motivation. In other words, passion, curiosity or some other intuitive sense of eagerness. Next stage is the mental stage, where the learner understand what is her/his purpose or objective drawn from the intuitive stage. Here the learner would have clear understanding or objective of learning; and how to achieve. The third step is the physical stage. This is the application or developing stage, where the learner conduct activities physically. The last step is the intellectual stage that the learner improved or acquired new skill set or ability. This stage affect to the next step, the intuitive stage 2.0. Likewise, learning circle moves round and round, changing its direction toward the attractor state of the system.

Interdependence of now and future, based on the perspectives of CDS framework, this is subtle but significant findings from those trajectories. The learning circle looks similar to cause and effect, however, this interdependence of now and future, or in this case, goal and starting point, occurs simultaneously. In other words, the successful system is always coherent from the beginning to the end. This feature of the CDS approach reminds me of the Buddhist concept of dependent origination; the point of view that sees all life forms influencing one another and inseparably connected. Buddhism also teaches the oneness of life and environment. A living being and environment exist in a relationship of “two (in phenomena) but not two (in essence) (Garrison, Hickman, & Ikeda, 2014).” If you look at the storylines of four learners, with this learning circle

in your mind, you can see more clearly about the self-organizational feature of the system of implicit language learning.

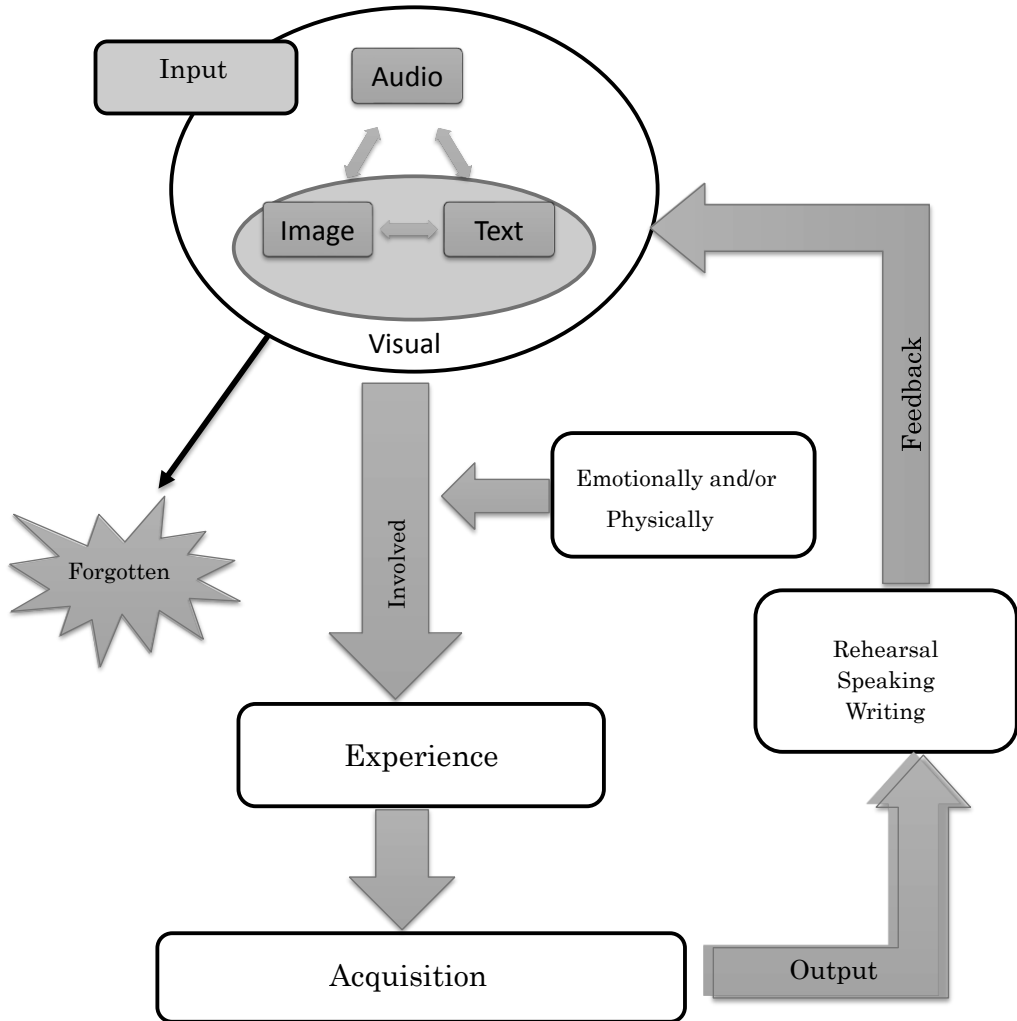
2. Self-evaluated proficiency

The second research question was asking ILLs how the self-evaluated proficiency has changed, before and after the application of implicit language learning. Since the researcher could not conduct pre- and post- tests for the participants, self-evaluated proficiency questionnaire was the only option for the researcher to obtain the participants' information related to their proficiency. Self-assessment and peer-assessment, both are regarded as quite subjective, however, from the view point of autonomy, self-assessment is the primary foundation (Brown & Abeywickrama, 2010). According to the result of questionnaire survey, question number 101 of the can-do list is asking "(I can) understand extended speech even when it is not clearly structured and when relationships are only implied and not signaled explicitly. I can understand television programs and films without too much effort." For this question, Masaru and Yurie checked full mark, but other two participants also checked high marks even though other questions were scored the lowest around this area. This seems that because of EWL without subtitles, all of them are quite capable of listening and contextual guessing.

The participants noticed their improvement after conducting the questionnaires twice, so comparing the results were interesting and fascinating moment for the researcher. Most of the participants admitted that they were bad at English at the first time survey and some of them kept saying that they were still no good at English, after the longitudinal implicit language learning. Comparing the results of two surveys, all the participants were surprised to see their improvement. What they concluded was that for the implicit language learning, language develops unconsciously and slowly, so it might be difficult to notice own improvement. Moreover, the largest differences were their perspectives on language proficiency and ability of English. "The biggest difference is that I think I can do if I really have to do it". Furthermore, the survey resulted to develop the Language Acquisition Model from the Language Learning Trajectories of ILLs (Fig.3). This model illustrates the simplified pattern of language acquisition by implicit language learning by analyzing the trajectories of ILLs as a whole. Input from materials will turn into an experience if it's attached to emotional and/or physical factor of the learner. This experience goes into brain and will be acquired by the learner. Acquired input will be tested by output (rehearsing, speaking and writing), especially, output which received feedback from others reinforce this particular lexical item by turning into input and repeat the path to the acquisition

again. Fig.3 is the model for acquiring L2 without using L1.

Language Acquisition Model from Language Learning Trajectories of ILLs



Note. Arrows indicate agents which reinforce, accelerate, and inter-related variables.

Fig.3

IX. Conclusion

This survey was conducted to investigate adult learners who have longitudinal experiences of extensive reading and other learning strategies referred to implicit language learning. The researcher called those learners, who are calling themselves as 'tadokist', as implicit language

Investigating the Implicit Language Learning of Japanese Adult EFL Learners

learners (ILLs) more holistically. The survey investigated trajectories of individual language learning of ILLs, focusing on strategies and materials. Self-evaluated English proficiency questionnaires were also conducted to elicit ILLs' perspectives on English and language learning. This can-do list type questionnaires were also tools to illustrate specific images of ILLs before they applied the implicit language learning approach, since pre- and post-test of the participants were unavailable for the research. Three semi-structured interviews were conducted to explore ILLs' trajectories together with their learning records. Transcribed interviews were analyzed by utilizing the framework of SCAT, which generated storylines and theoretical findings of implicit language learning. Materials that the learners had read by the time of the first milestone of one million words were compared and closely analyzed. As a result, the researcher identified three phases, which were considered as novice phase, implicit language learner phase and user phase along with learning circle and language acquisition model of ILLs.

Implicit language leaning is difficult to identify what is going on in the learners, however, language learning is regarded as one of the CDS and according to the findings of this study, it is sensitive to the initial condition of the learning circle. If the learner eliminates L1 from L2 learning as these ILLs of this study, the system self-organizes to the attractor state of 'user of English independent to L1'. These findings are still imperfect in many ways and future study will be needed. Especially, investigating participants under empirical environment might be necessary to establish more generalized theoretical findings for implicit language learning. Furthermore, the researcher would like to conduct more cross-disciplinary study including cognitive linguistics, psychology and neurology.

Reference

- Azar, B. (2007). Grammar-based teaching: A practitioner's perspective. *TESL-EJ*, 11(2).
- Brown, H. D. (2007). *Teaching by principles, an interactive approach to language pedagogy* (3rd ed.). White Plains, NY: Pearson Education, Inc.
- Brown, H. D., & Abeywickrama, P. (2010). *Language assessment, principles and classroompractices* (2nd ed.). White Plains, NY: Pearson Education, Inc.
- Chan, L., Dornyei, Z., & Henry, A. (2015). Learner archetype and signature dynamics in the language classroom: a retrospective qualitative modelling approach to study l2 motivation. In *Motivational dynamics in language learning*. Bristol: Multilingual Matters.
- Channel, J. (1981). Applying Semantic Theory to Vocabulary Teaching. *English Language Teaching Journal*, 35(2), 115–22.

- Charteris-Black, J. (2000). Metaphor and vocabulary teaching in ESP economics. *English for Specific Purposes, 19*(2), 149–165.
- Day, R. R., & Bamford, J. (2007). *Extensive reading in the second language classroom* (7th ed.). New York: Cambridge University Press.
- Dörnyei, Z. (2009). Individual differences: Interplay of learner characteristics and learning environment. *Language Learning, 59*(s1), 230–248.
- Ellis, N. C. (2005). AT THE INTERFACE: DYNAMIC INTERACTIONS OF EXPLICIT AND IMPLICIT LANGUAGE KNOWLEDGE. *Studies in Second Language Acquisition, 27*(2), 305–352. <http://doi.org/10.1017/S027226310505014X>
- Ellis, N. C. (2007). Dynamic systems and SLA: The wood and the trees. *Bilingualism: Language & Cognition, 10*(1), 23–25.
- Ellis, N. C., & Larsen-Freeman, D. (2006). Language emergence: Implications for applied linguistics—Introduction to the special issue. *Applied Linguistics, 27*(4), 558–589.
- Ellis, R. (1998). Teaching and Research: Options in Grammar Teaching. *TESOL Quarterly, 32*(1), 39–60. <http://doi.org/10.2307/3587901>
- Furukawa, A. (2010). *Eigo tadoku hou [English: extensive reading method]*. Shogakukan Inc.
- Garrison, J., Hickman, L., & Ikeda, D. (2014). *Living as learning: John Dewey in the 21st century*. Cambridge: Dialogue Path Press.
- Hiver, P. (2015). Attractor States. In *Motivational dynamics in language learning*. Bristol: Multilingual Matters.
- Hulstijn, J. H. (2005). Theoretical and empirical issues in the study of implicit and explicit second language learning: Introduction. *Studies in Second Language Acquisition, 27*(02), 129–140. <http://doi.org/10.1017/S0272263105050084>
- Ito, S. (2003). *Eigo ha “yasashiku, takusan”—chugaku level kara hajimeru “eigo-nou” no sodate kata [Learn English with easy materials extensively—how to develop “English-brain” starting from junior high school level materials]*. Tokyo: Kodansha International.
- Jianzhong, P. (2003). Colligation, collocation, and chunk in ESL vocabulary teaching and learning [J]. *Foreign Language Teaching and Research, 6*, 438–45.
- Johns, T. (1994). 19 From printout to handout: Grammar and vocabulary teaching in the context of Data-driven Learning. *Perspectives on Pedagogical Grammar, 293*.
- Kanatani, K., Osada, M., Kimura, T., & Minai, Y. (1991). Koukouni okeru tadoku puroguramu, sono seika to kanousei [Extensive reading program in high school: The results and possibility in the future]. *The Bulletin of the Kanto-Koshin-Etsu English Language Education Society,*

Investigating the Implicit Language Learning of Japanese Adult EFL Learners

(5), 19–26.

- Kittleson, M. M., Aguilar, J. M., Tokerud, G. L., Plante, E., & Asbjornsen, A. E. (2010). Implicit Language Learning: Adults' Ability to Segment Words in Norwegian. *Bilingualism: Language and Cognition*, *13*(4), 513–523. <http://doi.org/10.1017/S1366728910000039>
- Klapper, J., & Rees, J. (2003). Reviewing the case for explicit grammar instruction in the university foreign language learning context. *Language Teaching Research*, *7*(3), 285–314. <http://doi.org/10.1191/1362168803lr128oa>
- Kramsch, C. (2002). *Language acquisition and language socialization: Ecological perspectives*. London: Continuum.
- Krashen, S. (1985). *The Input Hypothesis: Issues and Implications*. London: Longman.
- Kusanagi, K., & Yamashita, J. (2013). Influences of linguistic factors on the acquisition of explicit and implicit knowledge: focusing on agreement type and morphosyntactic regularity in english plural morpheme. *ARELE: Annual Review of English Language Education in Japan*, *24*, 205–220.
- Larsen-Freeman, D. (1997). Chaos/complexity science and second language acquisition. *Applied Linguistics*, *18*(2), 141–165. <http://doi.org/10.1093/applin/18.2.141>
- Larsen-Freeman, D., & Cameron, L. (2008). *Complex systems and applied linguistics*. Oxford: Oxford University Press.
- Leow, R. P., & Sanz, C. (2010). *Implicit and Explicit Language Learning : Conditions, Processes, and Knowledge in SLA and Bilingualism*. Washington, DC: Georgetown University Press. Retrieved from <http://search.ebscohost.com/login.aspx?direct=true&db=e000xww&AN=362556&lang=ja&site=ehost-live>
- Mason, B., & Krashen, S. (1997). Extensive reading in English as a foreign language. *System*, *25*(1), 91–102. [http://doi.org/10.1016/S0346-251X\(96\)00063-2](http://doi.org/10.1016/S0346-251X(96)00063-2)
- Mercer, S. (2015). Social network analysis and complex dynamic system. In *Motivational dynamics in language learning*. Bristol: Multilingual Matters.
- Nation, I. S. P. (2008). *Teaching vocabulary: strategies and techniques*. Boston, MA: Heinle, Cengage Learning.
- Nation, I. S. P. (2009). *Teaching esl/efl reading and writing*. New York: Routledge.
- Nishizawa, H., Yoshioka, T., & Fukada, M. (2010). The impact of a 4-year extensive reading program. In A. M. Stoke (Ed.), *JALT2009 Conference Proceedings* (pp. 632–640). Tokyo.
- Otani T. (2008, March). “SCAT” A Qualitative Data Analysis Method by Four-Step Coding?: Easy Startable and Small Scale Data-Applicable Process of Theorization [Bulletin]. Retrieved

- November 30, 2015, from <http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/jspui/handle/2237/9652>
- Rebuschat, P. (Ed.). (2015). *Implicit and explicit learning of languages*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Richards, J. C. (1976). The role of vocabulary teaching. *TESOL Quarterly*, 77–89.
- Richards, J. C., & Rodgers, T. S. (2014). *Approaches and methods in language teaching* (3rd ed.). Cambridge: Cambridge University Press.
- Sakai, K. (1996). *Doushite eigo ga tsukaenai? --'gakkou eigo' ni tsukeru kusuri [Why cannot use English? —Medicine to cure "English-taught-in-school."]* Tokyo: Chikuma Shobo Publishers.
- Sakai, K. (2002). *Kaidoku hyakumango [Toward one million words and beyond]*. Tokyo: Chikuma Shobo Publishers.
- Scott, V. M. (1990). Explicit and Implicit Grammar Teaching Strategies: New Empirical Data. *The French Review*, 63(5), 779–789.
- Segalowitz, N. (2010). *Cognitive bases of second language fluency*. New York: Routledge.
- Takase, A. (2007). Japanese High School Students' Motivation for Extensive L2 Reading. *Reading in a Foreign Language*, 19(1), 1–18.
- Takase, A. (2012). The impact of extensive reading on reluctant Japanese EFL learners. *The European Journal of Applied Linguistics and TEFL*, (1), 97–113.
- Tanaka, H., & Stapleton, P. (2007). Increasing reading input in Japanese high school EFL classrooms: An empirical study exploring the efficacy of extensive reading. *The Reading Matrix*, 7(1). Retrieved from http://www.readingmatrix.com/articles/tanaka_stapleton/article.pdf
- The “Five Graces Group,” Beckner, C., Blythe, R., Bybee, J., Christiansen, M. H., Croft, W., ... Schoenemann, T. (2009). Language Is a Complex Adaptive System: Position Paper. *Language Learning*, 59, 1–26. <http://doi.org/10.1111/j.1467-9922.2009.00533.x>
- Tono, Y. (2012, August 29). CEFR-J (Japanese) ver. 1.1. CEFR-J Development Team. Retrieved from <http://www.cefr-j.org/download.html>
- VanPatten, B. (1993). Grammar Teaching for the Acquisition-Rich Classroom. *Foreign Language Annals*, 26(4), 435–450. <http://doi.org/10.1111/j.1944-9720.1993.tb01179.x>
- Yamashita, J. (2008). Extensive reading and development of different aspects of L2 proficiency. *System*, 36(4), 661–672.